

一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う

木造赤坂遺跡・  
池新田遺跡・井手ノ上遺跡  
発掘調査報告

《第1分冊》

2012（平成24）年3月

三重県埋蔵文化財センター





遺跡全景（北から）



遺跡全景（南から）





陶質土器（3401）



## 序

三重県の北東部に位置している伊勢平野は、西側に布引山地があり東側には伊勢湾が広がる随所に豊かな自然が残された地域です。この伊勢平野の中央部を流れる雲出川の流域は、肥沃な土壤に恵まれ古くから人々の生活が連続と営まれてきました。

今回報告する木造赤坂遺跡をはじめとする3遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に伴い遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査が実施されました。

調査の結果、縄文時代や弥生時代、古墳時代の集落や、古代・中世の屋敷地、道路などの痕跡が確認されました。特に古墳時代では、数多くの堅穴住居が重なり合って見つかり、朝鮮半島との交流が窺える土器も出土しました。また、平安時代後期では、二重の溝で囲われた屋敷地と饗宴で使われたとみられる大量の食器が確認されました。伊勢平氏ゆかりの荘園「木造庄」の一端を垣間見ることができたようです。

しかし残念ながら、昔の人々の生活の跡はすでに消滅しました。開発が進み私たちの生活が便利になることは喜ばしいことではありますが、古くからこの地に生活していた人々が遺した「証し」を保存していくことも大切なことです。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていただき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を願うばかりです。

末筆となりましたが、調査にあたりましては、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 河北 秀実

## 例　言

1. 本書は、三重県津市（旧久居市）木造町に所在する木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局長より委託を受けて、平成16～19年度に一般国道23号中勢道路建設に伴って実施した。また、整理・報告書作成業務を平成16～23年度に実施した。  
調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。
3. 調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当し、以下の体制により実施した。
- | 年　度    | 調　査         | 調　査　担　当　者                                  | 現　場　作　業　機　関                 |
|--------|-------------|--|-----------------------------|
| 平成16年度 | 範囲確認調査      | 上村安生・船越重伸・山中由紀子                            | 社団法人中部建設協会                  |
| 平成17年度 | 木造赤坂遺跡第6次調査 | 中川 明・大塚匡基・福島伸孝・才木 薫                        | 社団法人中部建設協会                  |
| 平成18年度 | 木造赤坂遺跡第7次調査 | 大塚匡基・淺尾 太・石井康晴・水谷 豊<br>岡田 真・角正浩恭・才木 薫・豊田祥三 | 7-1：安西工業株式会社<br>7-2：株式会社島田組 |
|        | 井手ノ上遺跡第2次調査 | 淺尾 太・水谷 豊・豊田祥三                             | 株式会社島田組                     |
| 平成19年度 | 木造赤坂遺跡第8次調査 | 蘭部英幸・淺尾 太・原田恵理子・角正浩恭<br>野鳥美沙子・才木 薫・小林俊之    | 有限会社中浦土木                    |
|        | 池新田遺跡第2次調査  | 原田恵理子・水谷 豊                                 | 有限会社中浦土木                    |
4. 本書の執筆は小林（野鳥）美、原田、淺尾、才木、水橋公恵、西口剛司、松葉和也が分担し、全体の編集は小林美・水橋が行った。執筆分担は、目次および文中に記した。また、遺構写真撮影は現地調査担当者が行い、遺物写真撮影は現地調査担当者および西口が担当した。
5. 自然科学分析のうち、木造赤坂遺跡・池新田遺跡の土壤分析や各種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に、木造赤坂遺跡出土鉄滓の分析を(財)元興寺文化財研究所に、鍛冶関連遺物の金属学的調査（木造赤坂遺跡）を株式会社九州テクノリサーチに委託し、提出された報告書を掲載した。
6. 本書で用いた座標値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高である。
7. 上層図の色調は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1967年初版）を用いた。
8. 遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、通番の数字の組合せにより表記する。  
S A (檜・塙)、S B (掘立柱建物)、S D (溝)、S F (カマドなど)、S H (堅穴住居)、  
S K (土坑)、S X (墓・古墳)、S Z (不明遺構など)
9. 発掘調査においては、周辺在住の方々や津市（旧久居市）教育委員会にご協力いただいた。  
また、下記に示す諸氏からは、調査・報告書作成にあたって、様々なご教示・ご助言を頂戴した。記して感謝いたします。（順不同・敬称省略）  
定森秀夫 佐藤隆 城ヶ谷和広 大道和人 高橋昌明 角田徳幸 寺井誠 八賀晋 山耕雅美
10. 本書に関連した調査成果については、『中勢道路調査ニュース』No.44～49（三重県埋蔵文化財センター 2005～2008年）、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』17～20（三重県埋蔵文化財センター 2006～2008年）等で随時報告してきたが、本報告書をもって正式報告とする。
11. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

# 本文目次

## 《第1分冊》

I	前言	(水橋)	1
1	調査の契機		1
2	調査の体制		1
3	調査の経過		4
4	調査の方法		5
5	整理・保管の方法		5
6	文化財保護法等にかかる諸通知		6
7	木造赤坂遺跡の報告用地区割り		6
II	位置と環境	(水橋)	7
1	地理的環境		7
2	歴史的環境		7
III	基本層序	(小林美)	10
IV	池新田遺跡の遺構と遺物	(原田・水橋)	25
1	遺構		25
2	遺物		30
V	木造赤坂遺跡 a 地区の遺構と遺物	(淺尾・水橋・原田)	37
1	遺構		37
2	遺物		42
VI	木造赤坂遺跡 b 地区の遺構と遺物	(淺尾)	49
1	遺構		49
2	遺物		64
VII	木造赤坂遺跡 c 地区の遺構と遺物	(才木・小林美)	71
1	遺構		71
2	遺物		128
VIII	木造赤坂遺跡 d 地区の遺構と遺物	(小林美)	167
1	遺構		167
2	遺物		195

## 《第2分冊》

IX	木造赤坂遺跡 e 地区の遺構と遺物
X	井手ノ上遺跡の遺構と遺物
XI	自然科学分析
XII	調査のまとめ～時代別の変遷～
付論 1	縄文時代の木造赤坂遺跡
付論 2	木造赤坂遺跡の区画地と道路の変遷～c・d 地区を中心～
付論 3	木造赤坂遺跡と伊勢平氏・平正度

# 挿 図 目 次

## 《第1分冊》

第1図 中勢道路(11~14工区)内遺跡位置図	2
第2図 調査区位置図	4
第3図 調査時と報告用の地区割り	6
第4図 遺跡位置図	8
<b>基本層序</b>	
第5図 池新田遺跡東壁土層図	11
第6図 木造赤坂遺跡a地区西壁土層図	12
第7図 木造赤坂遺跡b地区西壁土層図	13
第8図 木造赤坂遺跡c地区西壁土層図	14
第9図 木造赤坂遺跡d地区土層図	15
第10図 木造赤坂遺跡e地区東壁土層図	16
第11図 井手ノ上遺跡東壁土層図	17
第12図 木造赤坂遺跡c地区南部北壁土層図	18
第13図 木造赤坂遺跡d地区北壁土層図	19
第14図 調査区壁面上層実測位置図	20
<b>池新田遺跡</b>	
第15図 池新田遺跡遺構図	26
第16図 SK39・SD8・10遺構図・土層図	27
第17図 SD22遺構図・土層図、 SX6遺物出土状況図	28
第18図 SZ38遺構図	29
第19図 SD34・36遺構図・土層図	30
第20図 出土遺物実測図1(1~22)	31
第21図 出土遺物実測図2(23~55)	32
第22図 出土遺物実測図3(56~113)	34
第23図 出土遺物実測図4(114~119)	35
<b>木造赤坂遺跡a地区</b>	
第24図 a地区主要遺構平面略図	38
第25図 SD383・802・804・805・ SK803土層図	39
第26図 SE361・362・367遺構図	40
第27図 SB807遺構図	41
第28図 出土遺物実測図1(1~33)	44
第29図 出土遺物実測図2(34~74)	45
第30図 出土遺物実測図3(75~127)	46
第31図 出土遺物実測図4(128~132)	47
<b>木造赤坂遺跡b地区</b>	
第32図 b地区主要遺構平面略図	50

第33図 SH316遺構図・ カマド周辺遺物出土状況図	51
第34図 SB329・SK310遺構図	52
第35図 SB342遺構図	53
第36図 SB343・344遺構図	54
第37図 SB345遺構図	55
第38図 SB346・SK312遺構図	56
第39図 SK254・326・SE255・256遺構図	57
第40図 SE259・261遺構図	58
第41図 SR267遺構図、SD257土層図	60
第42図 SD241・244・301・306・307・309・311・ SD314・315土層図	61
第43図 SD319・321・322・325土層図	61
第44図 SB347遺構図	62
第45図 SK248・317遺構図	63
第46図 出土遺物実測図1(133~159)	65
第47図 出土遺物実測図2(160~191)	66
第48図 出土遺物実測図3(192~254)	67
第49図 出土遺物実測図4(255~306)	68
<b>木造赤坂遺跡c地区</b>	
第50図 c地区主要遺構平面略図	72
第51図 南部第1面遺構図	73
第52図 SH62・72遺構図	74
第53図 SH57・SB60遺構図	75
第54図 SK69・SD36遺構図	76
第55図 SH111・126遺構図、 SH126貯蔵穴土層図	77
第56図 SH125遺構図	78
第57図 SH131・140遺構図	79
第58図 SH132・133遺構図	81
第59図 SH136・202遺構図	82
第60図 SH138・139遺構図	83
第61図 SH143遺構図	84
第62図 SH144・153遺構図	85
第63図 SH155・156・157遺構図	86
第64図 SH161・164遺構図	87
第65図 SH208・210遺構図	89
第66図 SB147・181・183遺構図	90

第67図	SB175・SK141遺構図、 DL18pit 1 遺物出土状況図	92
第68図	SB68・237・SA167遺構図	93
第69図	SB75・180遺構図	94
第70図	SB166遺構図	95
第71図	SK41・45・47・49・50・52・53・SD48 遺構図	96
第72図	SK54・115・116・201遺構図、 SF76遺物出土状況図	97
第73図	SD42・109・236土層図・断面図	98
第74図	SH58・130遺構図	100
第75図	SB169・173・SK163遺構図	101
第76図	SB174・177・SK159遺構図	102
第77図	SB179遺構図	103
第78図	SB182遺構図	104
第79図	SR215遺構図	105
第80図	SK77遺物出土状況図、SK205遺構図、 SK120遺物出土状況図	106
第81図	SK129・165遺構図	107
第82図	SE162・212・SK211・213遺構図	108
第83図	SE25遺構図、SE206遺物出土状況図	109
第84図	SD149・214・217土層図、SD158・220 SD230・232・233・234断面図	110
第85図	DQ12pit 3・ED14pit 1・EH14pit 4 遺物出土状況図	111
第86図	SB84・SA85・SK63遺構図	112
第87図	SA83遺構図、SA86・87断面図	113
第88図	SK 1・2・3・4・5・6 遺構図	114
第89図	SK26・65・66・67遺構図	115
第90図	c・d 地区 区画溝遺構図	116
第91図	中世後期区画溝土層図①	117
第92図	中世後期区画溝土層図②	119
第93図	区画溝土層図	120
第94図	道路状遺構 遺構図①	121
第95図	道路状遺構土層図・断面図①	122
第96図	道路状遺構 遺構図②	123
第97図	道路状遺構土層図・断面図②	124
第98図	SR108・波板A～D検出状況、 波板A・C・D土層図・波板B断面図	125
第99図	波板状凹凸遺構 遺構図	126
第100図	SB176遺構図	127
第101図	出土遺物実測図 1 (307～340)	129
第102図	出土遺物実測図 2 (341～366)	131
第103図	出土遺物実測図 3 (367～398)	132
第104図	出土遺物実測図 4 (399～465)	134
第105図	出土遺物実測図 5 (466～513)	135
第106図	出土遺物実測図 6 (514～574)	137
第107図	出土遺物実測図 7 (575～640)	139
第108図	出土遺物実測図 8 (641～685)	141
第109図	出土遺物実測図 9 (686～732)	143
第110図	出土遺物実測図10 (733～800)	144
第111図	出土遺物実測図11 (801～843)	146
第112図	出土遺物実測図12 (844～911)	147
第113図	出土遺物実測図13 (912～946)	148
第114図	出土遺物実測図14 (947～1001)	150
第115図	出土遺物実測図15 (1002～1047)	152
第116図	出土遺物実測図16 (1048～1105)	154
第117図	出土遺物実測図17 (1106～1171)	156
第118図	出土遺物実測図18 (1172～1217)	157
第119図	出土遺物実測図19 (1218～1251)	158
第120図	出土遺物実測図20 (1252～1308)	160
第121図	出土遺物実測図21 (1309～1351)	161
第122図	出土遺物実測図22 (1352～1362)	163
第123図	出土遺物実測図23 (1363～1399)	164
第124図	出土遺物実測図24 (1400～1447)	165
木造赤坂跡d 地区		
第125図	d 地区主要遺構平面略図	168
第126図	SK526・SH902遺構図	169
第127図	SH1000・SK1028遺構図、 SH1000遺物出土状況図	170
第128図	SK521遺構図	171
第129図	SH917・921・926遺構図	172
第130図	SH937・938遺構図	173
第131図	SK920・923・928・936・1017遺構図	174
第132図	SK1060・1073・1074遺構図	175
第133図	SD501土層図、SD1081遺構図・土層図	176
第134図	SB1088・1090・SA1089遺構図	177
第135図	SK965・976・981・1035遺構図	179
第136図	SE906・918・931・1067遺構図	180
第137図	SE1102・1106・1107遺構図	181
第138図	SD912遺構図・土層図・断面図、 SD964遺構図・断面図	182

第139図	SK1045・1050遺構図	184
第140図	SK1054・1079遺構図	185
第141図	SE909・979遺構図	187
第142図	SE1030・1114遺構図	188
第143図	北部溝遺構図	189
第144図	北部溝土層図①	190
第145図	北部溝土層図②	191
第146図	北東部溝遺構図	192
第147図	北東部溝土層図・断面図	193
第148図	SD947・1032・1038断面図、 SZ942土層図	194
第149図	出土遺物実測図1 (1448~1485)	195
第150図	出土遺物実測図2 (1486~1526)	197
第151図	出土遺物実測図3 (1527~1602)	199
第152図	出土遺物実測図4 (1603~1687)	201
第153図	出土遺物実測図5 (1688~1742)	202
第154図	出土遺物実測図6 (1743~1786)	203
第155図	出土遺物実測図7 (1787~1843)	204
第156図	出土遺物実測図8 (1844~1874)	205
第157図	出土遺物実測図9 (1875~1927)	206
第158図	出土遺物実測図10 (1928~1939)	207
第159図	出土遺物実測図11 (1940~1949)	208
第160図	出土遺物実測図12 (1950~1986)	209
第161図	出土遺物実測図13 (1987~2053)	211
第162図	出土遺物実測図14 (2054~2122)	214
第163図	出土遺物実測図15 (2123~2180)	216
第164図	出土遺物実測図16 (2181~2196)	217
第165図	出土遺物実測図17 (2197~2243)	218
第166図	出土遺物実測図18 (2244~2271)	219
第167図	出土遺物実測図19 (2272~2327)	221
第168図	出土遺物実測図20 (2328~2354)	222
第169図	出土遺物実測図21 (2355~2421)	223
第170図	出土遺物実測図22 (2422~2486)	225
第171図	出土遺物実測図23 (2487~2519)	226
第172図	出土遺物実測図24 (2520~2561)	228
第173図	出土遺物実測図25 (2562~2579)	229
第174図	出土遺物実測図26 (2580~2604)	231
第175図	出土遺物実測図27 (2605~2624)	232
第176図	出土遺物実測図28 (2625~2652)	233
第177図	出土遺物実測図29 (2653~2725)	234
第178図	出土遺物実測図30 (2726~2773)	235
第179図	出土遺物実測図31 (2774~2814)	236
第180図	出土遺物実測図32 (2815~2818)	237
《第2分冊》		
第181~277図	木造赤坂遺跡e地区	
第278~294図	井手ノ上遺跡	
第295~297図	自然科学分析	

## 表 目 次

### 《第1分冊》

第1表	中勢道路(11~14工区)内遺跡 発掘調査経過一覧	3
第2~7表	木造赤坂遺跡a~e地区土層註記	20

### 《第3分冊》

第8・9・11表	遺構一覧
第10表	掘立柱建物・柵一覧
第12~21表	遺物観察表

## 写 真 図 版 目 次

### 《第1分冊》

卷頭図版	
図版1	遺跡全景
図版2	陶質土器

### 《第3分冊》

遺構図版	
遺物図版	

# I 前 言

## 1 調査の契機

昭和58年4月、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和と周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するため、一般国道23号のバイパスとなる中勢道路（鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町）が都市計画道路として決定された。

この計画地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和58年に三重県教育委員会が行った分布調査の結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時、以下同）と三重県教育委員会が協議を行い、現状保存が困難な場合には事前に発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

事業の実施にあたっては、昭和63年度から平成17年度までは、建設省中部地方建設局（国土交通省中部地方整備局）・三重県・社団法人中部建設協会の三者で協定書を締結し、事業を進めてきたが、平成18年度以降は、現地作業を含めた委託契約書を国土交通省中部地方整備局と三重県で締結し、事業を推進している。

## 2 調査の体制

中勢道路の発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センター調査研究II課（平成17年度以前は調査研究IIグループ）が担当している。本書で報告する3遺跡の調査・整理年度の体制は以下のとおりである。

### 〔平成16年度〕調査研究IIグループ

主幹兼グループリーダー 泉 雄二

中勢道路担当

主 査 辻本泰宏・上村安生

主 事 船越重伸・福島伸孝

技 師 山中由紀子

臨時技術補助員 川崎志乃・坂 佳彦

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

蒔田やよい・宇河由起子・山口香代

中西千鶴・浜崎佳代・堀 さや子

### 〔平成17年度〕調査研究IIグループ

主幹兼グループリーダー 河北秀実

中勢道路担当

主 査 上村安生・中川 明・大塚匡基

主 事 福島伸孝・淺尾 太

技 師 原田恵理子・水谷 豊

臨時技術補助員 才木 薫・川崎志乃

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

北岡佳代子・山口香代・西山実公子

野田摩耶・中西千鶴・浜崎佳代・堀 さや子

### 〔平成18年度〕調査研究II課

課 長 田村陽一

中勢道路担当

主 査 上村安生・大塚匡基

主 事 淺尾 太・石井康晴

技 師 岡田 実・原田恵理子

水谷 豊・角正芳浩

臨時技術補助員 才木 薫・豊田祥三

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

北岡佳代子・山口香代・西山実公子

野田摩耶・中西千鶴・浜崎佳代・堀 さや子

### 〔平成19年度〕調査研究II課

課 長 田村陽一

中勢道路担当

主 幹 上村安生

主 査 菅部英幸

主 事 淺尾 太・石井康晴

技 師 原田恵理子・水谷 豊

角正芳浩・野嶋美沙子

臨時技術補助員 才木 薫・小林俊之

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

北岡佳代子・山口香代・西山実公子

中西千鶴・浜崎佳代・中村敬子・小倉靖子

### 〔平成20年度〕調査研究II課

課 長 田村陽一

中勢道路担当

主 幹 上村安生

主 査 菅部英幸

主 事 淺尾 太・前野謙一



第1図 中勢道路（11～14工区）内遺跡位置図（1：50,000）

第1表 中勢道路(11~14工区)内遺跡 発掘調査経過一覧

工区	遺跡名	所在地	対象面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22
11工区	44 大瀬南古墳	津市神戸	2,500														
	45 鳥羽兄城跡	津市神戸 <sup>②</sup>	6,000	410													410
	46 上はんの木古墳	津市神戸 <sup>③</sup>	島百賀郷 に在む	190													190
	47 藤谷墓群跡	津市平田	—														
昭和50年 榎原調査(津市教育委員会)																	
小計				8,500	600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	600
12工区	48 棚川西方遺跡	津市 久居相川町	18,000	1,940													1,000
	49 丸石遺跡	津市垂水	7,100	560													560
	50 城ノ越遺跡	津市 久居小野辺町	16,300	1,310													240
	51 東山遺跡	津市 久居小野辺町	13,300	1,030													1,030
昭和51年 榎原調査(津市教育委員会)																	
13工区	52 本宮遺跡	津市 久居野村町	11,300	1,600													1,200
	53 向山遺跡	津市 高茶屋小森町 <sup>④</sup>	28,000	1,780													940
	54 池新田遺跡	津市木造町	16,300	554													3,472
	55 木造赤坂遺跡	津市木造町	17,500	1,192													3,000
14工区	56 井手ノ上遺跡	津市木造町	800	—													1,961
	57 舞出北遺跡	松阪市舞出町	9,600	960	810	150											800
	58 舞出南遺跡	松阪市舞出町	16,300	1,200	1,200	—											3,700
	59 赤部遺跡	松阪市	16,800	1,190	—	1,190											6,570
昭和52年 榎原調査(津市教育委員会)																	
15工区	60 菊池遺跡	松阪市新屋庄町	37,000	3,680	—	1,640											6,300
	61 桜木遺跡	松阪市	13,280	—	—	2,900											7,900
	62 中林・中道遺跡	松阪市中道町	18,600	1,010	—	1,010											3,920
	63 小津遺跡	松阪市小津町	23,000	1,424	—	1,190											2,440
昭和53年 榎原調査(津市教育委員会)																	
小計				94,100	5,814	0	0	5,580	0	84	150	0	0	0	0	0	0
昭和54年 榎原調査(津市教育委員会)																	

半調査面積の上段は第1次調査、下段は本調査

アミカタは、松阪市(越野町)教育委員会による調査

技師 原田恵理子・木橋公恵・野嶋美沙子

技師 水橋公恵・野嶋美沙子

臨時技術補助員 才木 薫

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川綱代

北岡佳代子・平井治代・山口香代

北岡佳代子・山口香代・西山実公子

【平成22年度】調査研究Ⅱ課

中西千鶴・浜崎佳代・中村敬子・小倉靖子

課長 田村陽一

〔平成21年度〕調査研究Ⅱ課

中勢道路担当

課長 田村陽一

主査 松葉和也・森田啓司・淺尾 太

中勢道路担当

西口剛司

主査 松葉和也・菌部英幸

主事 星野浩行

主事 淺尾 太・西口剛司

技師 水橋公恵

業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川絹代  
 北岡佳代子・平井治代・山口香代

〔平成23年度〕調査研究Ⅱ課  
 課長 田村陽一  
 中勢道路担当  
 主幹 竹内和昭  
 主査 松葉和也・西口剛司・星野浩行  
 水橋公恵

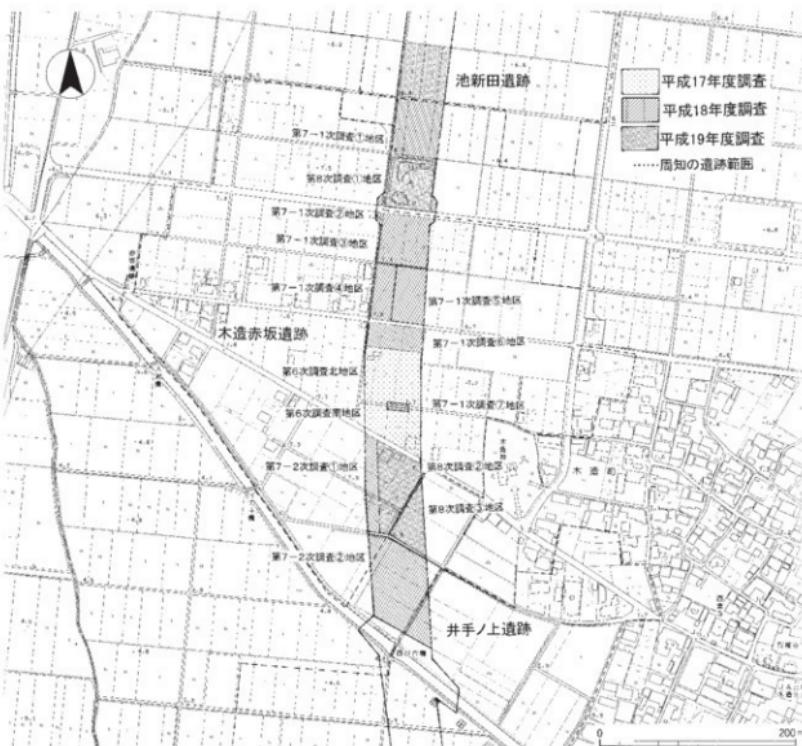
業務補助員 黒川敬子・太田浩子・森川絹代  
 北岡佳代子・平井治代・山口香代

### 3 調査の経過

平成16年度に池新田遺跡・木造赤坂遺跡・井手ノ

上遺跡の範囲確認調査を行い、幅2mを基本とした調査区を池新田遺跡で8箇所、木造赤坂遺跡で12箇所、井手ノ上遺跡で11箇所設定した。その結果、木造赤坂遺跡ではすべての調査区で、池新田遺跡・井手ノ上遺跡では木造赤坂遺跡に近接した調査区で遺構・遺物が確認されたため、平成17年度から19年度まで本調査を実施した。

木造赤坂遺跡については、過去に4度の調査が行われていたため<sup>1)</sup>、平成16年度を第5次、平成17年度を第6次、平成18年度を第7次、平成19年度を第8次とした。池新田遺跡・井手ノ上遺跡については、平成16年度の範囲確認調査を第1次、その後の本調査を第2次とした。



第2図 調査区位置図（1:5,000）

平成17年度には、木造赤坂遺跡の中央部分の調査（第6次）を行った。当初予定面積は3,500m<sup>2</sup>であったが、南部で二面調査を行ったため、延べ調査面積は合計6,570m<sup>2</sup>となった。コンテナケースに76箱の遺物が出土した。12月4日に現地説明会を行ったところ、100名の参加者を得た。

平成18年度には、木造赤坂遺跡第7次調査と井手ノ上遺跡第2次調査を行った。木造赤坂遺跡第7次調査では、第6次調査区の北方を第7-1次（①～⑥地区）、南方を第7-2次（①・②地区）として8地区に分割して実施した。また、第6次調査で調査の対象外とした農道部分について、南北方向の溝S D117の状況を確認するため、第7-1次⑦地区として追加調査を行った。調査面積は延べ11,500m<sup>2</sup>で、コンテナケースに639箱の遺物が出土した。井手ノ上遺跡では、木造赤坂遺跡の近接地370m<sup>2</sup>を対象に第2次調査を行った。古墳時代の堅穴住居が多数重複して検出され、コンテナケースに57箱の遺物が出土した。12月16日、両遺跡を対象に現地説明会を行ったところ、130名の参加者を得た。

平成19年度には、木造赤坂遺跡第8次調査と池新田遺跡第2次調査を行った。木造赤坂遺跡では、第7-1次①と③の間を①地区、7-2次①の東方を②③地区（北西側：②、南東側：③）と呼称することとした。調査面積は延べ6,300m<sup>2</sup>で、コンテナケース332箱の遺物が出土した。池新田遺跡では木造赤坂遺跡に近接する1,961m<sup>2</sup>を対象に第2次調査を行い、コンテナケース33箱の遺物が出土した。11月17日、同時に調査が行われていた向山遺跡をあわせ、3遺跡を対象に現地説明会を行ったところ、130名の参加者を得た。

## 4 調査の方法

本調査は、以下の手順で進めた。

①表土及び旧耕作土を重機で除去した。

②遺構・遺物の位置情報の基準となる地区杭を設定した。

池新田遺跡・木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡の3遺跡の調査区全体を、世界測地系の座標に沿った100m四方の方眼（大地区）で区切り、その中を4m四方の方眼（小地区）に細分して、グリッドを設定し

た。大地区は、北からA～G、小地区は南北方向にローマ字（A～Y）、東西方向に算用数字（1～25）を当て、その組み合わせにより、個別のグリッド名稱（例：AN18など）とした。

③包含層掘削および排水対策用のトレッチを人力で掘削した。

④遺構検出を人力で行い、検出された遺構の重複状況をグリッドごとのカード（遺構カード：縮尺1/40）に記録した。

⑤遺構を人力掘削し、遺物を取り上げた。

溝・土坑・建物などの遺構には、遺跡ごとに通し番号を付与し、ピットについては小地区（グリッド）ごとに通し番号を付けた。木造赤坂遺跡では、複数の調査が同時に進行したため、下記のように調査の次数や調査班ごとに遺構番号を分けた。第6次調査の南地区で001～、北地区で101～、第7-1次調査④～⑥で201～、①～③地区で301～、第7-2次調査で501～、第8次調査の①地区で801～、②・③地区で901～という番号を付与した。

⑥調査担当者の判断により、調査区壁面・遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。

図面の縮尺は1/20または1/10、写真是4×5inch判・プロニー判・35mm判で、モノクロネガとカラーリバーサルのフィルムを使用した。

⑦空中写真測量を委託し、調査後の遺構平面図・等高線図等の作成、全体写真的撮影を行った。地区によっては手書き実測、高所作業車を用いての写真撮影も行った。

⑧調査担当者の判断により、小規模な遺構は人力で、井戸については重機で断ち割り、記録をとった。

## 5 整理・保管の方法

整理作業は、以下の手順で進めた。

### 遺物

①調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合を行った。

②報告書に掲載する遺物を選別し、実測図作成・写真撮影（4×5inch判又は6×9cm判）を行った。

③木製品・金属製品については必要に応じた保存処理を行った。

④報告書掲載遺物については報告書番号順に並べ、遺物実測を行わなかったものは、出土遺構・グリッド毎に、遺物整理箱に収納し、台帳を作成して保管した。

#### 図面・写真類

現場で作成した図面（平面図・土層断面図・航測図面など）、遺構カード（縮尺1/40）、調査日誌、写真類などと、整理段階で作成した遺物実測図、遺物写真について、適切な順序に並べ、所定の番号を付け、台帳を作成して保管した。また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管した。

## 6 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）などにかかる諸通知は、以下のとおりである。

- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

<池新田遺跡>

平成19年9月5日付教理第201号

<木造赤坂遺跡>

平成17年5月23日付教理第54号

平成18年6月16日付教理第133号

平成19年5月11日付教理第56号

<井手ノ上遺跡>

平成18年6月16日付教理第134号

- ・遺失物にかかる文化財発見・認定通知（津警察署長宛教育長通知）

<池新田遺跡>

平成20年2月1日付教委第12-4-19号

<木造赤坂遺跡>

平成18年3月31日付教委第12-4-43号

平成19年3月16日付教委第12-4-40号

平成20年1月30日付教委第12-4-18号

<井手ノ上遺跡>

平成19年3月14日付教委第12-4-39号

## 7 木造赤坂遺跡の報告用地区割り

木造赤坂遺跡の3年間に及ぶ本調査では、諸事情により多数の調査区が複雑に入り組むこととなった。調査した地区ごとの報告では非常に煩雑になるため、本書では、道路や水路などにより分かれていた現地

の状況にあわせて、便宜的に北からa～e地区と区分し、報告することとした（第3図）。（水橋）

#### 【註】

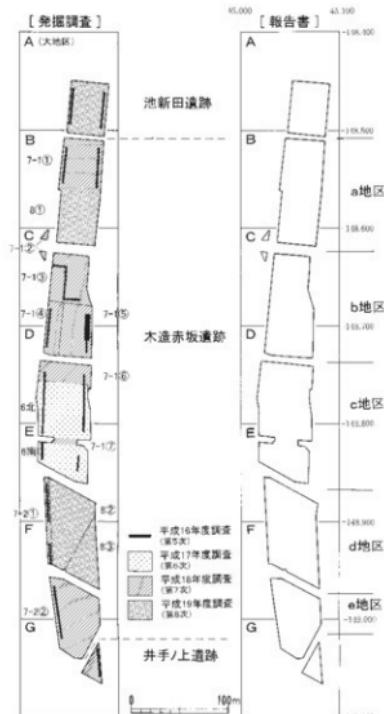
1) 過去に行われていた調査は以下のとおりである。

第1次調査（昭和38年度）：耕地整理中の不時発見に伴う三重大学と久居中学校郷土研究クラブによる調査

第2次調査（平成3年度）：県一般農道改良工事に伴う久居市教育委員会による調査（『平成3年度三重県埋蔵文化財センター年報3』1992）

第3次調査（平成4年度）：県一般農道整備工事に伴う久居市教育委員会による調査（『平成4年度三重県埋蔵文化財センター年報3』1993）

第4次調査（平成9年度）：一般農道整備事業に伴う久居市教育委員会による調査（『平成9年度三重県埋蔵文化財年報』1998）



第3図 調査時と報告用の地区割り（1:5,000）

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡の3遺跡は、三重県中部に位置する津市（旧久居市）木造町に所在し、雲出川下流左岸の低位段丘上から沖積低地に立地している。現況は畑地・水田である。

津市の地勢は、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が連なり、東は伊勢平野・伊勢湾が広がる。全体に西高東低の様相であり、雲出川・岩田川・安濃川などの河川が、東流して伊勢湾に注いでいる。

津市の土地基盤は、布引山地にあたる柳原町西部の第三紀層（6500万年前から170万年前まで）がのびている。その東部には第四紀古層（170万年前から1万年前まで）が伊勢湾方面へのびており、戸木町・新家町・高茶屋小森町にかけて台地を形成している。その南方の雲出川流域の低地部には、第四紀新層（1万年前から現代まで）の沖積地が広がっている。

雲出川は、三重県西部と奈良県東部の境をなす高見山地の三峰山に源を発し、津市白山町・一志町を通って、津市香良洲町付近から伊勢湾に注いでいる。延長距離は約55kmであり、概して西から東へ流れている。遺跡付近は、高茶屋台地と雲出川との間の沖積地が幅約1kmに広がり、耕作地帯となっている<sup>1)</sup>。

### 2 歴史的環境

木造赤坂遺跡（1）・池新田遺跡（2）・井手ノ上遺跡（3）周辺には注目すべき遺跡が密集している。以下、時代ごとに簡単に述べる。

#### （1）旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺構は確認されていないが、四ツ野B遺跡<sup>2)</sup>（23）でナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺構としては、四ツ野B遺跡や雲出島貴遺跡<sup>3)</sup>（26）で検出された晩期の土器棺墓がある。

#### （2）弥生時代

伊勢平野のなかでも弥生文化の伝播が早い地域として知られている。代表的な遺跡として中ノ庄遺跡<sup>4)</sup>（49）があり、亜流連賀式土器が出土した。また、

前期の畠と水田跡が検出された筋道遺跡<sup>5)</sup>（39）は、当時の雲出川流域の生業の様相を示すものとして注目されている。

中期以降は、質量ともに充実し、高茶屋台地上や雲出川・中村川流域などで、方形周溝墓や集落の確認例が多い。

弥生時代後期から古墳時代中期の堅穴住居が87棟も検出された四ツ野B遺跡では、銅鐸も出土した<sup>6)</sup>。小谷赤坂遺跡<sup>7)</sup>（32）では後期の環濠集落が検出され、鹿と船が線刻された壺が出土した。

#### （3）古墳時代

古墳時代前期の雲出川・中村川流域は、前方後方墳が集中している。「老師君塚」とも伝えられる簡野1号墳（33）や、西山1号墳（40）・向山古墳（45）・鈴山古墳（44）は有力者の墓と想定されている。また、木造の地にも、碧玉製合子が出土した前期の円墳、大塚山古墳（25）が存在していた<sup>8)</sup>。

中期から後期には、台地上だけでなく、舞出北遺跡<sup>9)</sup>（34）や小野江甚目遺跡<sup>10)</sup>（35）のような沖積地でも古墳が築かれるようになる。

高茶屋台地から垂水・半田の丘陵部では、土師器・須恵器・埴輪などの生産遺跡が存在する。久居窯跡群<sup>11)</sup>（5）は、県内では最も古い須恵器窯の一つと位置付けられており、埴輪を焼成した法ヶ広古窯跡（7）や藤谷窯跡群<sup>12)</sup>（4）もある。

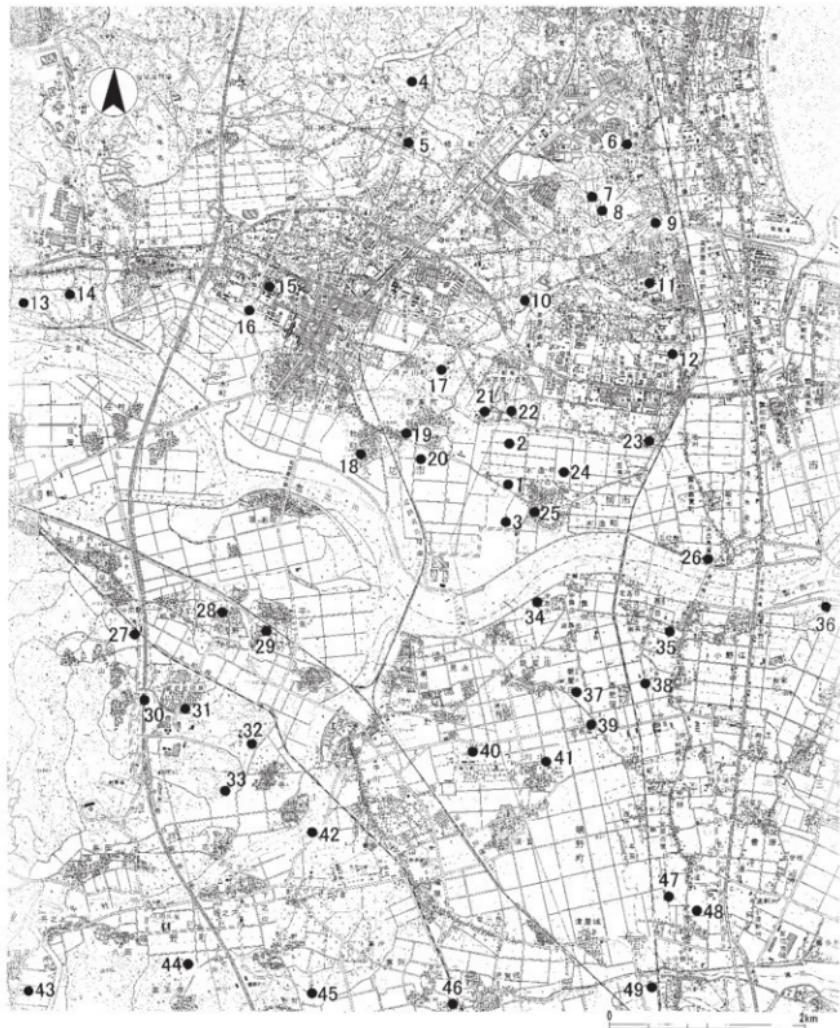
高茶屋大垣内遺跡<sup>13)</sup>（11）や四ツ野B遺跡、片野遺跡<sup>14)</sup>（28）などで集落が確認されている。特に、高茶屋大垣内遺跡では大型の独立棟柱掘立柱建物とそれを囲う区画や多数の堅穴住居が検出された。

#### （4）古代

古代律令制下において、この地域は伊勢国一志郡島抜郷に属していた。高茶屋大垣内遺跡では、堅穴住居・掘立柱建物・土師器焼成坑が検出され、「美濃」の刻印をもつ須恵器や土馬が出土した。片野遺跡（28）では、暗文土師器が大量に出土し、生産遺跡の可能性が指摘されている。

#### （5）古代末期から中世

雲出島貴遺跡では、11世紀後半から13世紀前半頃



1 木造赤板遺跡	8 猪水A遺跡	15 久居城下町遺跡	23 四ツ野日遺跡	29 平生遺跡	36 菊田町Ⅱ遺跡	44 雄山古墳
2 池跡遺跡	9 小森上野城	16 畿ヶ丘遺跡	24 四ツ野吉沼	30 西野遺跡	37 美部遺跡	45 向山古墳
3 井手ノ上遺跡	10 本宮遺跡	17 大口北遺跡	高茶屋銅鋸出土地	31 西野古墳群	38 西肥留遺跡	46 田村西瀬古遺跡
4 郡谷家跡群	11 高茶屋大垣内遺跡	18 徒道跡	25 大津山古墳	32 小谷赤坂遺跡	39 施連遺跡	47 中林市道遺跡
5 久保家跡群	12 小森城	19 新家遺跡	26 萩津島貞遺跡	33 亂野1号墳	40 西山1号墳	48 小浦遺跡
6 池の谷古墳	13 菖花牛山1号墳	20 長持元屋敷遺跡	27 鳥森道跡	41 庄ノ門1号墳	49 中庄遺跡	
7 法ヶ広古窯群	14 上野古窯跡	21 小森山古墳群	28 片野遺跡	34 舞出北遺跡	42 下之庄東方遺跡	
		22 向山遺跡	35 小野江甚目寺跡	43 天白遺跡		

第4図 遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院発行2万5千分の1地形図『津東部』津西部『松阪港前大仰』より）

の「居館」が確認され、大量の土器類や貿易陶磁器が出土した。伊勢平氏との関連が考察されている。雲出川右岸の平生遺跡<sup>10)</sup>(29) や舞出北遺跡では、同じ頃の屋敷地や集落、区画が確認されている。

中世後期の遺構としては、上野遺跡<sup>11)</sup>(14) で、室町時代の方形区画溝をもつ屋敷群や、戦国時代の大溝、土塁などが確認された。雲出川右岸の中林・中道遺跡<sup>12)</sup>(47) や小津遺跡<sup>13)</sup>(48) では、鎌倉時代と室町時代の区画地が確認された。

また、伊勢国北畠氏の一族、木造氏の居城と伝えられる「木造城址」の石碑が、木造赤坂遺跡調査地の東約500mのところにある。木造城は、正平21(1366) 年に北畠顕能の子・顕俊によって築かれたが、七代俊茂が享禄元(1528) 年から三年がかりで古城の北300mに新城を築き、古城は興正院という寺院にされたと伝える。その後の木造氏は、永禄12(1569) 年の織田信長の伊勢攻略に際して信長方に与したため、本家である北畠氏に攻撃されるが、これを撃退。北畠氏滅亡後に属していた織田信雄が、豊臣秀吉と対立すると、天正12(1584) 年に秀吉側の蒲生氏郷の攻撃を受け、木造城を捨てて戸木城へ退却。放棄された木造城は、津城築城の時に潰されたという<sup>14)</sup>。

(水橋)

## 【註】

- 1) 久居市教育委員会1972『久居市史』上巻
- 2) 津市教育委員会2001『四ツ野B遺跡（第2次）・四ツ野古墳発掘調査報告』
- 3) 三重県埋蔵文化財センター1998『嶋抜第1次調査』、同2000『嶋抜II』、同2001『嶋抜III』
- 4) 三重県教育委員会1972『中ノ庄遺跡発掘調査報告』
- 5) 三重県埋蔵文化財センター2004『筋違遺跡発掘調査報告－第1分冊－』
- 6) 中村光司2000「高茶屋銅鐸觀察ノート」『津市埋蔵文化財センターワーク』4 津市教育委員会
- 7) 三重県埋蔵文化財センター2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告III－1 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第4次）～中世以前編～』
- 8) 伊勢野久好1991「旧一志郡内の首長墓」『天寿山』一志町・嬉野町遺跡調査会
- 9) 三重県埋蔵文化財センター2010『舞出北遺跡発掘調査報告2』

- 10) 三重県埋蔵文化財センター1999『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告』
- 11) 村木一秀2005「久居古窯跡群」『三重県史資料編考古I』三重県
- 12) 津市埋蔵文化財センター2000「藤谷窯跡群発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センターワーク報4』
- 13) 三重県埋蔵文化財センター1997『高茶屋大垣内遺跡（第2次）発掘調査報告』、同2000『高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）発掘調査報告』
- 14) 一志町教育委員会2004『片野遺跡V』
- 15) 森川常厚2008『平生遺跡』『三重県史資料編考古II』三重県
- 16) 田中喜久雄2008『上野遺跡』『三重県史資料編考古II』三重県
- 17) 三重県埋蔵文化財センター2009『中林・中道遺跡発掘調査報告』
- 18) 三重県埋蔵文化財センター2007『小津遺跡発掘調査報告』
- 19) 三重県教育委員会1977『三重の中世城館』、平松令三監修1983『日本歴史地名大系第24巻 三重県の地名』株式会社平凡社、竹内理三編1991『角川日本地名大事典24三重県』株式会社角川書店

### III 基本層序

今回の調査範囲は、池新田遺跡から井手ノ上遺跡にかけて南北約610m、東西約50mにもおよぶ。このため、立地にも差がある。木造赤坂遺跡と井手ノ上遺跡の大部分が雲出川下流左岸にある低位段丘上に立地するが、池新田遺跡から木造赤坂遺跡a地区にかけては、この低位段丘と高茶屋台地にはさまれた谷底平野に立地している。また、木造赤坂遺跡e地区の南部と井手ノ上遺跡は氾濫平野となっており、沖積層が堆積している。このため、現況では木造赤坂遺跡c地区周辺の標高が最も高く、約7.4mである。池新田遺跡では約6.4m、井手ノ上遺跡では約5.9mである。

池新田遺跡から木造赤坂遺跡a地区の基本層序は、上層から第I層：表土（耕作土）、第II層：黒褐色～褐灰色粘質土層（包含層）、第III層：黒色～黒褐色粘質土層（いわゆる黒ボク）、第IV層：にぶい黄褐色粘質土～暗灰黄色細砂（地山）である。池新田遺跡の遺構はすべて第III層より掘りこまれており、基本的には第III層上面で遺構検出を行っているが、一部第IV層上面でも遺構検出を行っている。木造赤坂遺跡a地区では、遺構検出を第IV層上面で行っている。

木造赤坂遺跡b地区の基本層序は、上層から第I層：表土（耕作土）、第II層：灰黃褐色砂質土層、第III層：黒褐色粘質土、第IV層：黒色シルト～黒褐色土（いわゆる黒ボク）、第V層：淡黄色～にぶい黄褐色粘質シルト（地山）である。多くの遺構は第III層か第IV層より掘りこまれているが、遺構検出は第V層上面で行っている。

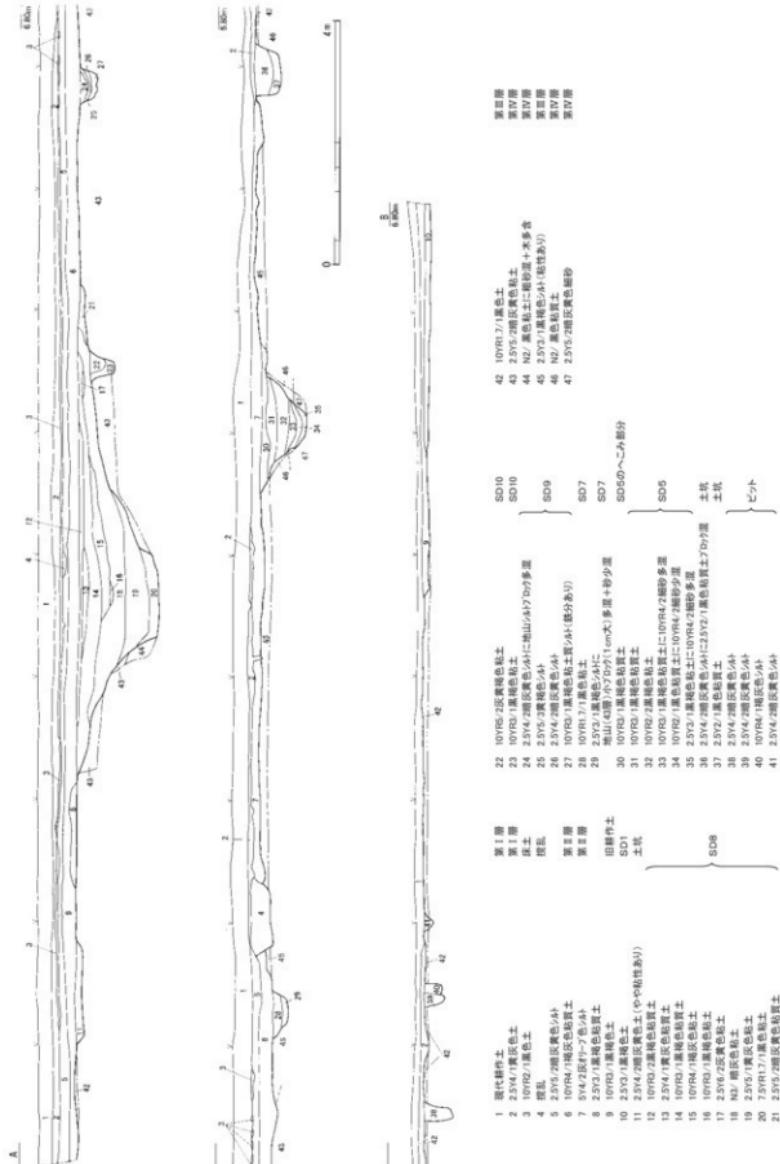
木造赤坂遺跡c地区の基本層序は、上層から第I層：表土、第II層：灰黃褐色砂質土、第III層：黒～黒褐色粘質土～シルト（第I面検出面）、第IV層：褐色～黒褐色シルト～粘質シルト（いわゆる黒ボク）、第V層：黄褐色粘質土（地山）である。第IV層、第V層が南へ傾斜しているため、この低いところに第III層が比較的厚く堆積している部分があり、大きく2層に分層できる（第8図59～65層＝第III層上層と79～81層＝第III層下層）。c地区南部ではそのうち

の第III層下層上面を第I面として遺構検出を行った。検出した遺構の大部分は中世後期以降のものである。なお、土層観察により第III層上層上面から掘りこまれた遺構も複数確認できた。そして、第V層上面を第II面（古墳時代から中世前期）として調査を行った（第14図参照）。平安時代末～中世前期の遺構は、本来第III層下層上面から掘りこまれているが、第II面で検出を行った。第III層が安定的に存在していないc地区北部では、第V層上面ですべての遺構を検出している。また、第12図43層は自然科学分析の結果、始良Tn火山灰層であることが分かっている。

木造赤坂遺跡d地区の基本層序は上層から第I層表土（耕作土）、第II層：褐色～にぶい黄褐色土層（包含層）、第III層：黒褐色粘質土層（いわゆる黒ボク、調査区北西部のみ）、第IV層：褐色～黄褐色粘質土層（地山）である。ただし、d地区東側（第8次③地区）は土地改良事業によって大きく削平されているため、第IV層の直上に第I層が堆積している。遺構は第III層が堆積しているところは第III層上面から掘りこまれているが、それ以外のところは第IV層上面から掘りこまれている。遺構検出は第IV層上面で行った。

木造赤坂遺跡e地区の北部ではd地区の第III層、第IV層が南へ急激に落ち込み、その上に沖積層が厚く堆積している。この沖積層は井手ノ上遺跡にも同様に堆積している。e地区と井手ノ上遺跡の基本層序は、上層から第I層：表土・床土、第II層：褐色～黄褐色砂質シルト、第III層：褐色～褐灰色砂質シルト、第IV層：灰黃褐色～にぶい黄褐色シルト、第V層：にぶい褐色～明黃褐色シルト（地山）である。本来遺構面は複数面存在すると考えられるが、今回の調査では全ての遺構検出を第V層上面で行っている。なお、井手ノ上遺跡の南側では1回目の遺構検出が不明瞭であったため、さらに検出面を下げて再度検出を行っている。

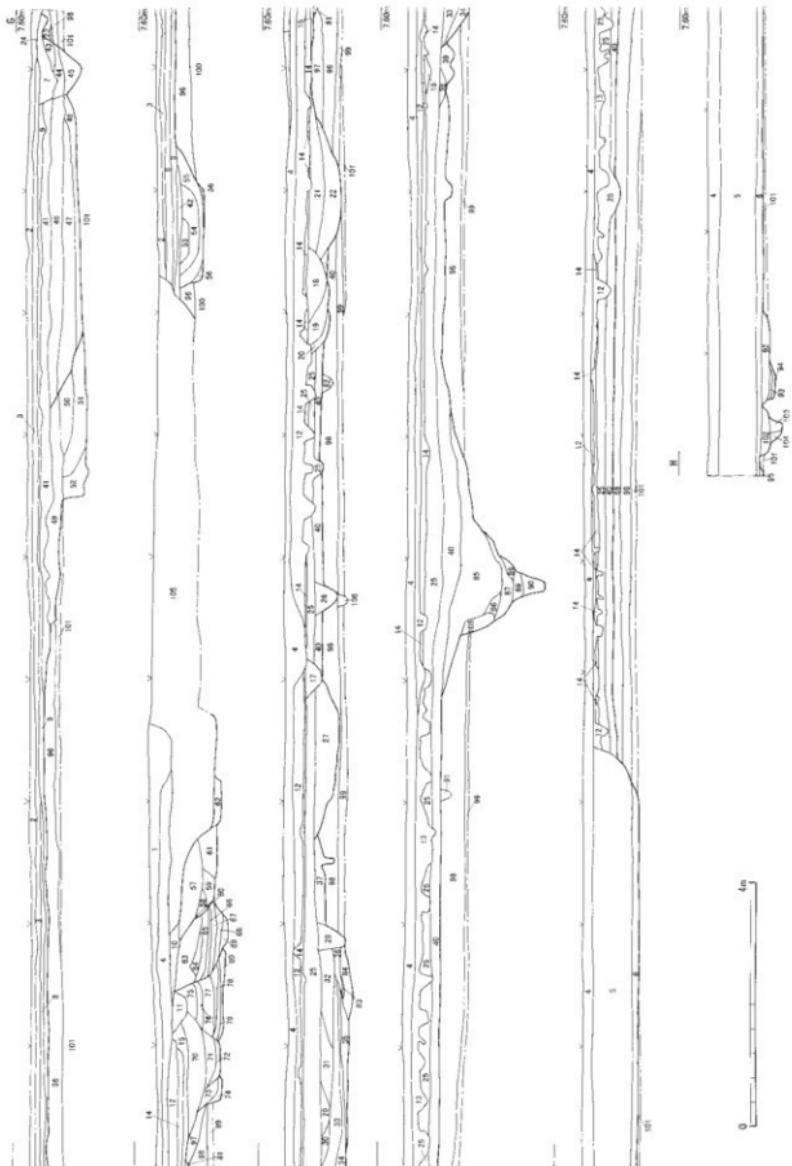
（小林美一）



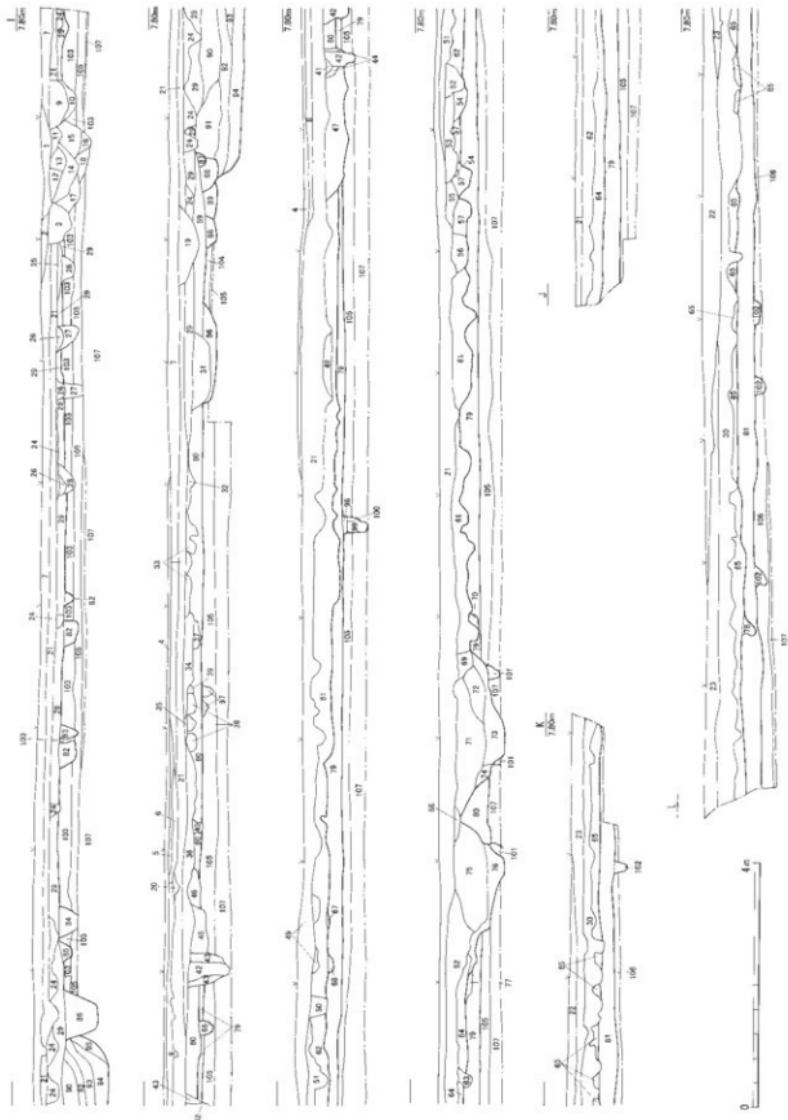
第5図 池新田遺跡東壁土層図（1:80）



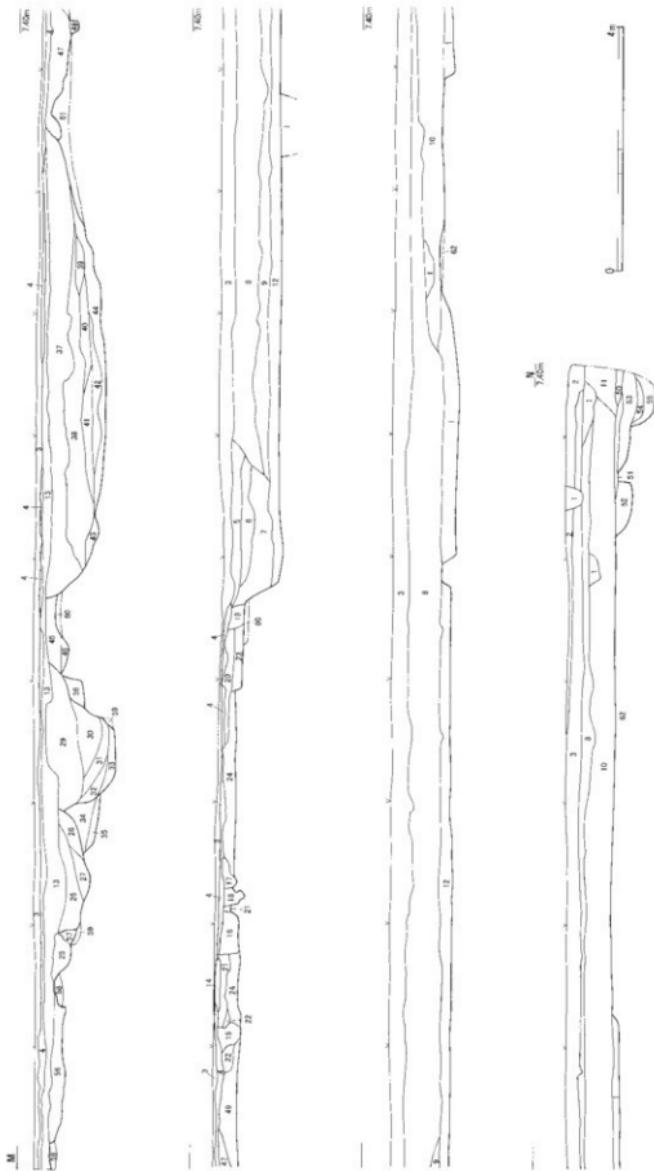
第6図 木造赤坂遺跡a地区西壁土層図 (1:80)



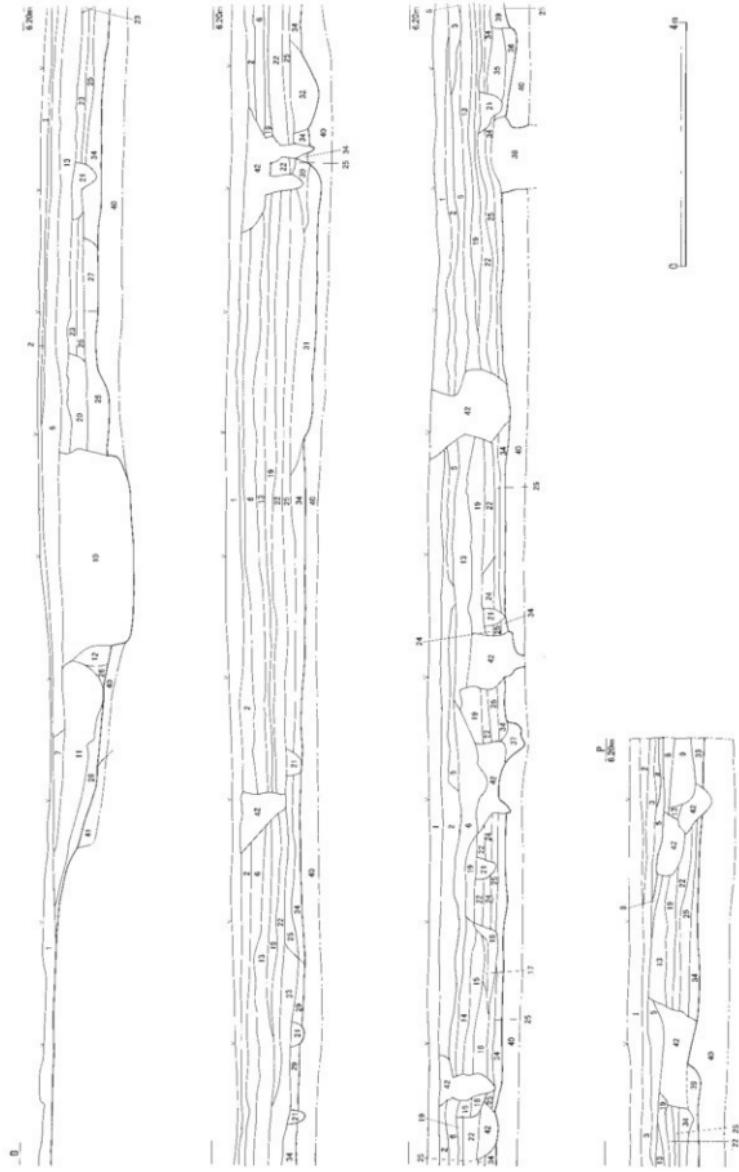
第7図 木造赤坂遺跡b地区西壁土層図 (1:80)



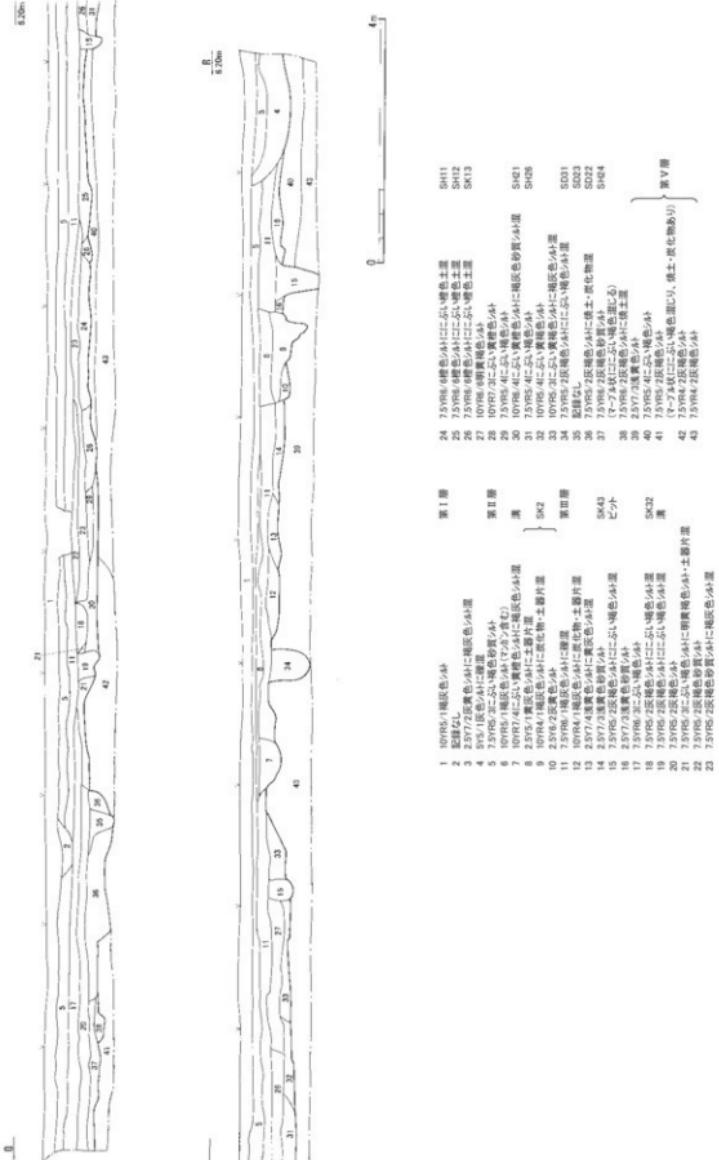
第8図 木造赤坂遺跡c地区西壁土層図 (1 : 80)

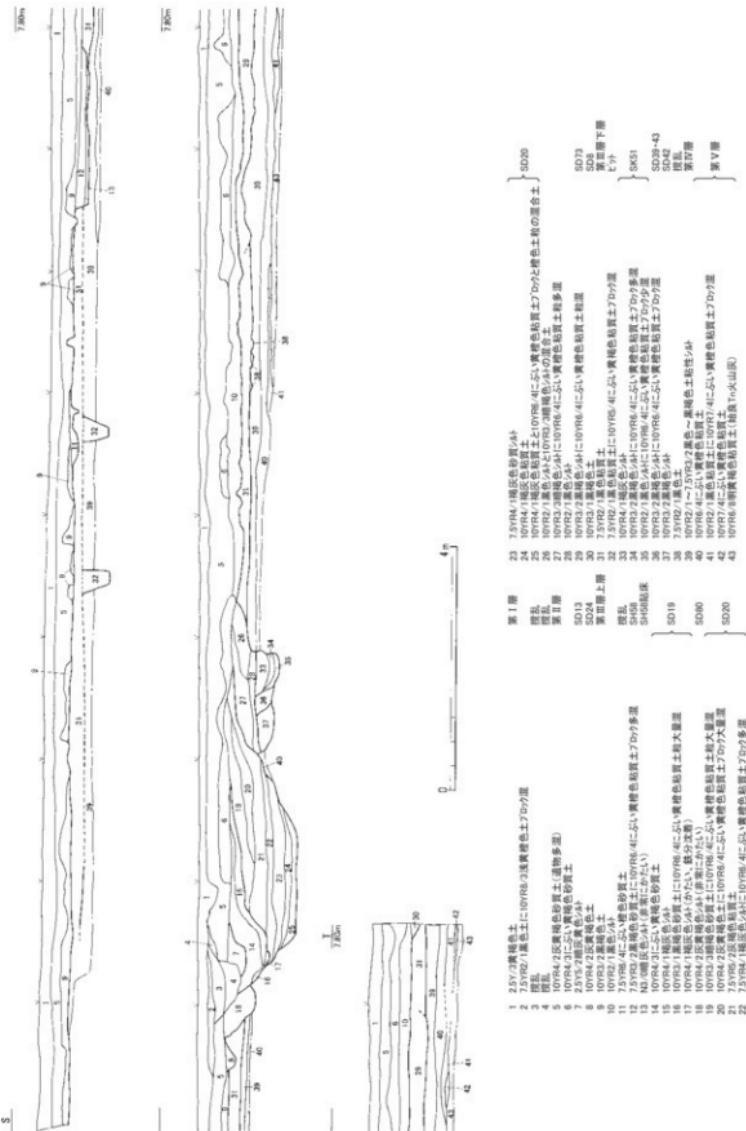


第9図 木造赤坂遺跡d地区土層図（第8次②東壁 1 : 80）

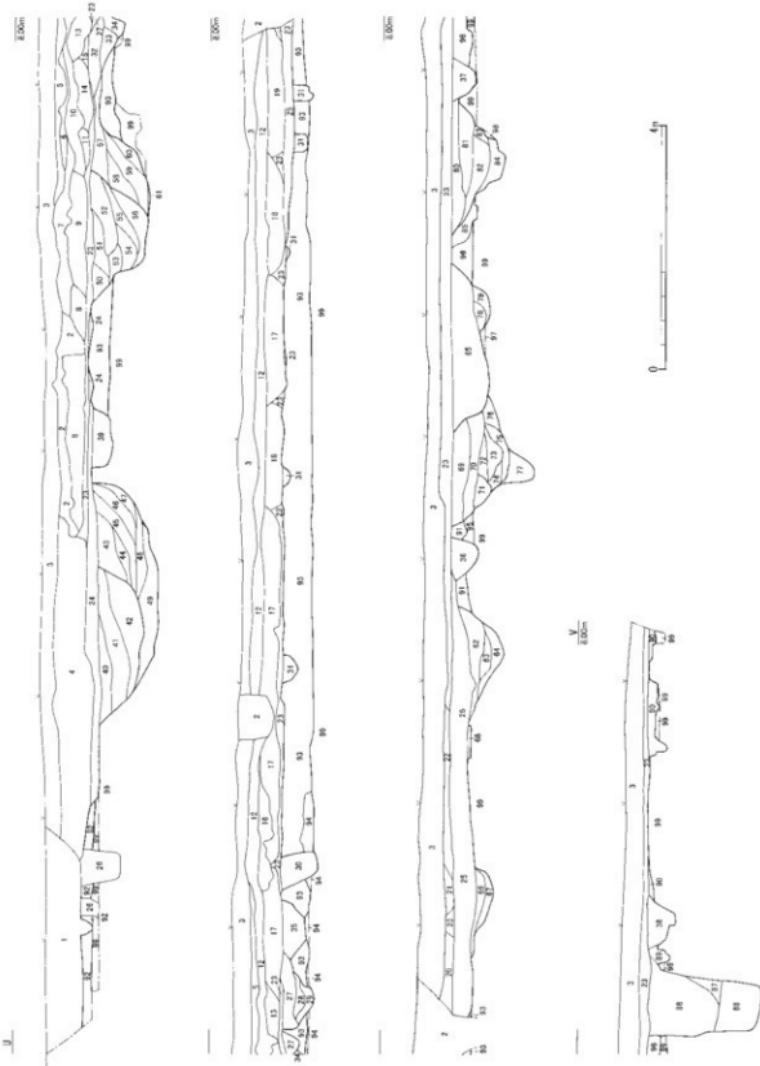


第10図 木造赤坂遺跡 e 地区東壁土層図 (1 : 80)

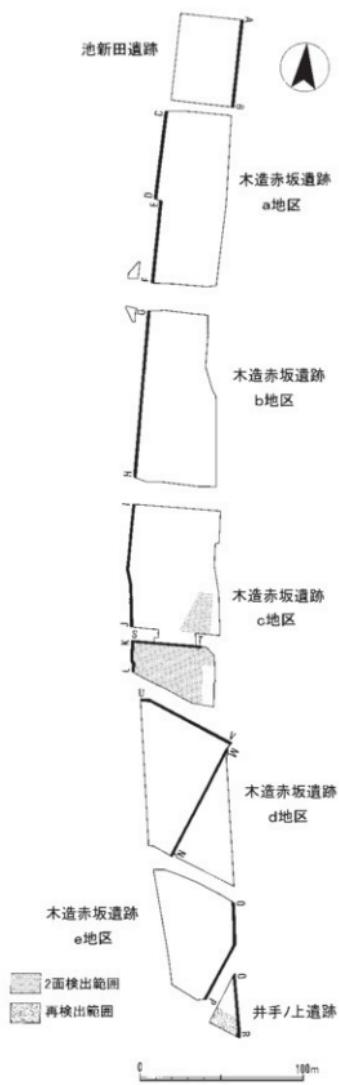




第12図 木造赤坂遺跡c地区南部北壁土層図 (1 : 80)



第13図 木造赤坂遺跡d地区北壁土層図 (1 : 80)



第14図 調査区壁面土層実測位置図 (1 : 3,000)

第2表 木造赤坂遺跡 a 地区西壁土層註記

1	2.5Y8/2灰白色砂礫	盛土
2	10YR2/2黒褐色粘質土	第Ⅰ層
3	2.5Y2/1黒色粘質土	
4	2.5YR1.7/1赤褐色粘質土	
5	塊状	擾乱
6	2.5Y3/1黒褐色粘質土	第Ⅱ層
7	5Y2/2黒褐色粘質土	
8	7.5YR3/2黒褐色粘質土	SD358
9	2.5YR3/1暗赤灰色粘質土	SD358
10	5YR3/2暗赤褐色粘質土	
11	10YR2/3黒褐色粘質土	
12	7.5YR2/2黒褐色粘質土	SD363
13	7.5YR2/2黒褐色粘質土に橙色土少混	
14	10YR2/3黒褐色粘質土	SD368
15	2.5Y2/1黒色粘質土	SD368
16	5Y2/2付-7黒褐色粘質土	SD368
17	7.5YR3/1黒褐色粘質土	SD368
18	5YR2/1黒褐色粘質土	SD368
19	10YR2/2黒褐色粘質土	SD368
20	5YR3/1黒褐色粘質土	SD368
21	10YR2/3黒色砂	SD368
22	2.5YR1.7/1赤褐色粘質土に橙色土少混	SD368
23	5YR3/2暗赤褐色粘質土	
24	2.5Y2/1黒色粘質土	ビット
25	2.5YR2/2標準赤褐色粘質土	溝
26	5YR2/1黒褐色粘質土	
27	2.5Y4/2暗灰黃褐色粘質土	
28	10YR4/3にぶい黄褐色粘質土	第Ⅳ層
29	2.5Y8/6黄色粘質土	第Ⅳ層
30	7.5YR2/1黒色粘質土	
31	10YR5/4にぶい黄褐色粘質土	
32	2.5Y5/2暗反黃褐色粘質土に黒褐色土混	
33	砂石	盛土
34	埋戻土	埋戻土
35	砂礫・産業廃棄物	盛土
36	2.5Y3/1黒褐色粘質土	
37	10YR4/1褐色皮灰土	
38	N2/0黒色土	旧耕作土?
39	2.5Y6/3にぶい黄色粘性シルト	第Ⅳ層

第3表 木造赤坂遺跡 b 地区西壁土層註記(1/3)

1	砂礫	
2	2.5Y3/3暗オリーブ褐色土	
3	5Y2/2付-7黒色土	
4	10YR6/2灰黃褐色砂質土	第Ⅰ層
5	盛土	盛土
6	10YR5/1褐色シルト	現代耕作土
7	10YR5/1黒色土	
8	2.5Y8/4淡黃色シルトブロック(地山)混	
9	10YR4/2灰黃褐色砂質土	
10	2.5Y6/6明黃褐色砂質土	
11	10YR7/3にぶい黄褐色砂質土	
12	10YR5/2灰黃褐色砂質土	
13	7.5YR3/1黒褐色土	
14	2.5Y7/4浅黃色砂質土	
15	10YR5/2灰黃褐色砂質土	第Ⅲ層
16	2.5Y6/3にぶい黄色砂質土	
17	10YR5/3にぶい黄褐色土	
18	10YR5/4にぶい黄褐色土	
19	10YR5/4にぶい黄褐色土	
20	10YR3/2黒褐色土ブロック混	
21	10YR4/2灰黃褐色土	
22	10YR4/3にぶい黄褐色土	
23	2.5Y5/1黃灰色砂質土	
24	2.5Y5/6明黃褐色砂質土	
25	10YR4/2灰黃褐色砂質土	第Ⅱ層
26	記録なし	
27	10YR4/3にぶい黄褐色土	

第3表 木造赤坂遺跡b地区西壁土層註記(2/3)

28	10YR4/2灰黄褐色土	
29	10YR4/2灰黄褐色砂質土	
	10YR3/1黒褐色土ブロック少混	
30	10YR4/2灰黄褐色砂質土	
	10YR6/4にぶい黄橙色土ブロック混	
31	10YR4/2灰黄褐色砂質土	
	10YR3/1黒褐色土ブロック多混	
32	10YR4/2灰黄褐色砂質土	
	10YR3/1黒褐色土ブロック・疊多混	
33	10YR4/3にぶい黄褐色砂質土	
34	10YR5/3にぶい黄褐色砂質土	
35	10YR3/1黒褐色土	
36	10YR2/2黒褐色土	
37	10YR5/3にぶい黄褐色土	
38	10YR4/2灰黄褐色砂質土	
39	10YR4/3にぶい黄褐色土	
40	10YR3/1黒褐色粘質土	第III層
41	7.5YR4/2灰褐色土	
42	2.5Y/3/1黒褐色土	
43	5Y/2-2オーバー黒褐色土	SD340
44	5Y/2-1黒褐色土	SD340
45	2.5Y/3/3オーバー黒褐色土	SD340
46	黄褐色土少混	
47	10YR3/2黒褐色土	満
48	10YR2/1黒褐色土	満
49	2.5Y/4/3淡黄色シルトブロック混	満
50	2.5Y/2/1黒褐色土	SD303
51	5Y/2-2オーバー黒褐色土に黄褐色土少混	SD303
52	記録なし	SD303
53	7.5YR2/1黒褐色粘質土	SD309
54	10YR1/7/1黒褐色粘質土	SD309
55	2.5Y/2/1黒褐色粘質土	SD309
56	10YR1/7/1黒褐色粘質土	SD309
57	10YR6/3にぶい黄橙色砂質土	SD322
58	10YR5/2灰黄褐色砂質土	SD322
59	2.5Y/8/4淡黄色シルトブロック混	SD322
60	10YR5/2灰黄褐色砂質土	SD322
61	2.5Y/8/3淡黄色シルトブロック混	SD322
62	10YR2/1黒褐色土	SD322
63	2.5Y/8/1淡黄色シルトブロック混	SD325
64	10YR6/2灰黄褐色砂質土	SD325
65	2.5Y/5/2暗灰黄色砂質土	SD325
66	10YR6/2暗灰黄色砂質土ブロック混	SD325
67	65層に2.5Y/8/3淡黄色粒多混	SD325
68	10YR7/1褐色灰黄色砂質土	SD325
69	10YR4/1褐色灰黄色シルト	SD325
70	10YR3/2黒褐色シルト	SD325
71	10YR5/3にぶい黄褐色砂質土	満
72	10YR3/2黒褐色シルトに地山ブロック混	満
73	10YR4/3にぶい黄褐色砂質土	満
74	10YR4/1褐色灰黄色シルト	満
75	10YR6/2灰黄褐色砂質土	満
76	10YR6/3にぶい黄橙色砂質土	満
77	10YR5/2灰黄褐色シルト	満
78	10YR5/1褐色灰黄色シルト	満
79	10YR4/2灰黄褐色シルト	満
80	10YR3/2黒褐色シルト	満
81	記録なし	
82	10YR3/2黒褐色土	
83	10YR7/6明黄色粘質土	ピット
84	10YR3/2黒褐色土	ピット
85	10YR3/2黒褐色土	SD233
86	記録なし	SD233
87	10YR4/2灰黄褐色土	SD233

第3表 木造赤坂遺跡b地区西壁土層註記(3/3)

88	10YR4/2灰黄褐色土	
89	10YR6/4にぶい黄橙色土ブロック混	SD233
90	10YR2/1黒褐色土	SD233
91	10YR5/2灰黄褐色土	
92	10YR4/3にぶい黄褐色土	SD263の凹
93	10YR5/1褐色灰色土	SD263
94	10YR7/8黄橙色粒大量混	SD263
95	10YR4/3にぶい黄褐色土	
96	7.5Y/2/1黒色ルート	第IV層
97	10YR3/2黒褐色土	第IV層
98	10YR3/1黒褐色土ブロック混	
99	5YR3/1黒褐色粘質シルト	第IV層
100	2.5Y/8/4淡黄色シルト	第V層
101	10YR6/4にぶい黄橙色粘質シルト	第V層
102	10YR4/3にぶい黄褐色土	搅乱
103	10YR2/1黒褐色土	搅乱
104	10YR5/1褐色灰色土	搅乱
105	10YR7/8黄橙色粒多混	搅乱
	埋乱	搅乱

第4表 木造赤坂遺跡c地区西壁土層註記(1/3)

1	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	
	10YR3/2黒褐色土粒混	
2	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	
3	2.5Y/6/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
4	7.5YR3/4暗褐色土に小礫混	礫土
5	7.5YR6/8褐色土	
6	7.5YR1/7/1黒褐色土と7.5YR3/3暗褐色土	
7	7.5YR2/2黒褐色土	
8	7.5YR3/2黒褐色土	第I層
9	2.5Y/4/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
10	10YR4/1褐色灰色土	
11	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
12	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土ブロック大量混	搅乱
13	2.5Y/6/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
14	10YR4/1褐色灰黄色シルト	搅乱
15	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
16	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	搅乱
17	10YR4/2灰黄褐色土	
18	2.5Y/6/2灰黄褐色土	搅乱
19	2.5Y/5/2暗反灰黄色砂質土	
20	2.5Y/6/2灰黄褐色砂質土ブロック大量混	
21	7.5YR3/3暗褐色土	
22	10YR4/3/4暗褐色土(南側)～ 2.5Y/6/2灰黄褐色砂質土(北側)	第I層
23	砂礫土	礫土
24	2.5Y/5/3褐色土	
25	2.5Y/6/3にぶい黄色砂質土	
26	10YR3/1黒褐色粘質土ブロック多混	
27	10YR5/2灰黄褐色砂質土	
28	2.5Y/6/2暗反灰黄色砂質土	
	10YR3/2黒褐色土	

第4表 木造赤坂遺跡c地区西壁土層註記(2/3)

29	10YR4/2灰黄褐色土(遺物多混)	第Ⅱ層
30	10YR4/2灰黄褐色砂質土(遺物多混)	第Ⅱ層
31	10YR3/2黒褐色土	
32	10YR5/4にぶい黄褐色土粒混	
33	10YR2/2黒褐色土	
34	10YR6/6明黄褐色土粒微量混	
35	10YR3/3暗褐色土	
36	10YR3/3暗褐色土粒混	
37	10YR3/2黒褐色土	
38	10YR2/2黒褐色土	
39	10YR3/3暗褐色土	
40	10YR4/3にぶい黄褐色土	
41	10YR3/4暗褐色土	
42	10YR2/2黒褐色土	
43	10YR3/4暗褐色土	
44	10YR3/2黒褐色土	
45	10YR5/6黄褐色土粒混	
46	7.5YR2/2黒褐色土	
47	10YR3/3暗褐色土	
48	10YR2/2黒褐色土	
49	7.5YR3/3暗褐色土	
50	7.5YR3/2黒褐色土にオーリー色土粒混	
51	7.5YR2/2黒褐色土	
52	7.5YR4/4褐色土(粘性弱)	
53	10YR4/4褐色土に灰色土粒混	
54	10YR3/3暗褐色土	
55	10YR4/3にぶい黄褐色土	
56	7.5YR3/4暗褐色土(粘性強)	
57	7.5YR3/2黒褐色土	
58	10YR4/3にぶい黄褐色土に小砾混	擾乱
59	10YR2/1黒色土	第Ⅲ層上層
60	10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック混	第Ⅲ層上層
61	記録なし	第Ⅲ層上層
62	7.5YR2/2黒褐色土	第Ⅲ層上層
63	10YR2/2黒褐色土	第Ⅲ層上層
64	10YR5/4にぶい黄褐色土混	第Ⅲ層上層
65	10YR3/2黒褐色土	第Ⅲ層上層
66	10YR3/4暗褐色土に小砾混	ビット
67	7.5YR3/4暗褐色土	擾乱
68	7.5YR1/7/1黒色土	ビット
69	7.5YR3/4暗褐色土	
70	7.5YR6/4にぶい橙色土	
71	黄褐色土粒混	
72	7.5YR6/2オーリー色土	SD101
73	10YR3/3暗褐色土	SD101
74	7.5YR6/2灰黄褐色土粒混	SD101
75	2.5YR/2オーリー色土に砾混	SD102
76	7.5YR3/3暗褐色土に黄褐色土粒混	SD102
77	7.5YR6/4にぶい橙色土	
78	10YR3/2黒褐色土	ビット
79	7.5YR2/1~10YR3/1黒色~ 黒褐色土に10YR5/2~	第Ⅲ層下層
80	7.5YR4/6灰黄褐色~褐色土粒混	
81	7.5YR2/2黒褐色土	第Ⅲ層下層
82	7.5YR2/1黒色粘質土	第Ⅲ層下層
83	10YR3/2黒褐色土	ビット
84	10YR8/6黄褐色土ブロック混	ビット
	10YR7/6明黄褐色土ブロック混	ビット

第4表 木造赤坂遺跡c地区西壁土層註記(3/3)

85	10YR4/2灰黄褐色土	
86	10YR2/1黒色土に黄色土粒・燒土混	溝
87	2.5Y/4/4浅黄色砂質土	ビット
88	10YR2/1黒色土に黄色土粒大量混	ビット
89	10YR3/1黒褐色土	ビット
90	10YR6/8明黄褐色土粒混	
91	10YR3/1黒褐色砂質土に燒土大量混	SH125
92	10YR3/1黒褐色シルト	SH125
93	10YR2/2黒褐色砂質土	
94	10YR2/1黒色シルトに黄色土・燒土混	SH125
95	10YR1/7/1黒色シルトに黄色土混	SH125
96	10YR2/1黒色土	
97	10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック混	SK209
98	10YR2/2黒褐色土	
99	7.5YR4/4褐色土	ビット
100	7.5YR1/7/1黒色土にオーリー色土粒混	ビット
101	7.5YR2/2黒褐色土	ビット
102	7.5YR2/1黒色粘質土	ビット
103	10YR3/2黒褐色シルト	第Ⅳ層
104	10YR2/1黒色土	
105	10YR5/4にぶい黄褐色土粒大量混	第Ⅳ層
106	10YR2/2~2.5Y/4/3~2.5Y/5/2黒褐色土~ オーリー褐色~暗灰黄色シルト	第Ⅳ層
107	10YR2/1~7.5Y/3/2黒色~ 黒褐色粘性シルト	第Ⅳ層
108	10YR5/4~2.5Y/4/2にぶい黄褐色~ 暗灰黄色土粘性シルト	第Ⅴ層

第5表 木造赤坂遺跡d地区土層註記(1/2)

1	擾乱	擾乱
2	10YR5/1褐色土	第Ⅰ層
3	10YR4/3にぶい黄褐色土	第Ⅰ層
4	10YR3/3暗褐色土	
5	2.5Y/4/オーリー褐色粘土ブロック多混	
6	10YR2/1黒色土	
7	10YR4/6褐色粘土ブロック混	盛土
8	10YR7/3にぶい黄褐色粘土ブロック混	盛土
9	10YR7/3にぶい黄褐色粘土ブロック少混	盛土
10	10YR2/1黒色土	
11	10YR7/3にぶい黄褐色粘土ブロック少混	盛土
12	10YR2/1黒褐色粘土ブロック少混	盛土
13	10YR2/1黒色土	
14	10YR4/6褐色土	旧耕作土
15	10YR2/3黒褐色粘土	
16	10YR2/3黒褐色粘土少混	
17	10YR2/3黒褐色粘土	
18	10YR4/6褐色粘土多混	ビット
19	10YR2/3黒褐色粘土少混	ビット
20	10YR5/6褐色粘土少混	ビット
21	10YR2/3黒褐色粘土	
22	10YR7/6明黄褐色土混	
23	10YR2/3黒褐色粘土	
	10YR7/6明黄褐色粘土ブロック多混	ビット

第5表 木造赤坂遺跡d地区土層註記(2/2)

24	10YR2/2黒褐色土	
25	10YR3/3暗黒褐色土	ピット
26	10YR3/3暗褐色土	
26	10YR7/8黄褐色粘質土ブロック・炭化物混	SD929
27	10YR3/3暗褐色土	
27	10YR7/8黄褐色粘質土ブロック混	SD929
28	10YR2/3黒褐色土	
28	7.5YR6/8橙色土ブロック混	SD929
29	10YR3/2黒褐色土	
29	7.5YR7/8黄褐色土少混	SD940
30	7.5YR3/2黒褐色土	
30	10YR7/6明黃褐色粘質土ブロック多混	SD940
31	10YR3/2黒褐色土	
31	2.5YR5/8明赤褐色土少混	SD940
32	10YR3/3暗褐色粘質土	
32	10YR8/6黄褐色粘質土ブロック混	SD940
33	10YR3/3暗褐色粘質土	
33	10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック多混	SD940下層
34	7.5YR2/2黒褐色土	
34	7.5YR6/8橙色土ブロック混	SD943
35	10YR3/2黒褐色粘質土	
35	7.5YR6/8橙色土ブロック多混	SD943
36	10YR3/3暗褐色土	
36	10YR7/8黄褐色粘質土ブロック多混	
37	7.5YR2/3極暗褐色粘質土(しまり弱)	
38	7.5YR2/2黒褐色粘質土(しまり強)	S2942
39	7.5YR3/2黒褐色粘質土に燒土・炭混	S2942
40	10YR2/3集褐色粘質土	S2942
41	10YR3/3暗褐色粘質土	
41	10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少混	S2942
42	10YR2/3黒褐色粘質土(粘性強)	S2942
43	10YR2/3黒褐色粘質土	
43	10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック混	S2942
44	10YR2/3黒褐色粘質土	
44	7.5YR4/4褐色粘土ブロック多混	S2942
45	10YR3/2黒褐色土	
45	10YR4/4褐色土ブロック混	
46	10YR3/3暗褐色粘質土	
46	10YR4/4褐色粘質土少混	ピット
47	10YR3/2黒褐色粘質土	
48	7.5YR4/4褐色粘土	
48	10YR7/6明黄褐色土少混	ピット
49	7.5YR3/2黒褐色粘質土	
50	10YR2/3黒褐色粘質土	
51	10YR3/3暗褐色粘質土	
51	10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック多混	
52	10YR3/2黒褐色粘質土	
52	10YR5/6黄褐色粘土ブロック混	SD1076
53	7.5YR3/2黒褐色粘質土	
53	10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック混	SD1051
54	10YR3/2黒褐色粘質土	
54	10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック多混	SD1051
55	10YR4/2灰黄褐色粘質土	
55	10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック多混	SD1051
56	10YR3/2黒褐色土	
56	7.5YR6/8橙色土ブロック混	SH926
57	10YR2/3黒褐色土	
57	7.5YR6/8橙色土ブロック混	
58	10YR4/2灰黄褐色土	第IV層
59	10YR7/8黄褐色粘質土	第IV層
60	10YR4/6褐色粘土	第IV層
61	10YR4/4褐色粘土	第IV層
62	10YR4/6褐色粘質土	第IV層

第6表 木造赤坂遺跡e地区東壁土層註記

1	2.5Y3/2黒褐色シルト	第I層
2	10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト	
3	10YR7/4灰白色砂質シルトに裸混	
4	5YR4/4にぶい赤褐色砂質シルト	
5	10YR7/3にぶい黄褐色砂質シルト質細砂 土器片混	
6	10YR5/1褐灰色砂質シルト	第II層
7	10YR3/2黒褐色土	
8	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	
9	10YR6/6明黄褐色砂質シルト 炭化物混	
10	7.5YR5/1褐灰色砂質シルト	SE638
11	2.5Y3/1黒褐色土	
11	黄褐色土ブロック混	
12	7.5YR3/1黒褐色砂質シルト	
13	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	第III層
14	7.5YR6/2灰褐色砂質シルト	
15	7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルトに土器片混	
16	7.5YR6/3にぶい褐色砂質シルトに土器片混	
17	7.5YR5/1褐灰色砂質シルト 土器片・焼土混	
18	7.5YR5/2灰褐色砂質シルト	
19	5YR4/1褐灰色砂質シルトに土器片混	包含層
20	7.5YR5/3にぶい褐色シルト	
21	10YR6/2灰黄褐色砂質シルトに土器片混	ピット
22	7.5YR4/1褐灰色砂質シルト	第III層
23	7.5YR5/2灰褐色砂質シルト に明黄褐色シルトブロック混	第III層
24	7.5YR4/3褐色シルト	
25	10YR5/2灰黄褐色砂質シルト	
26	7.5YR6/1褐灰色砂質シルト	
27	7.5YR5/4にぶい褐色砂質シルト	
28	7.5YR6/4にぶい褐色シルト	
29	10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルト・焼土混	SH630
30	7.5YR6/2灰褐色砂質シルトに土器片混	
31	7.5YR4/2灰褐色砂質シルト 土器片・焼土混	SH591
32	2.5Y4/1黄灰色粘質土に裸混	SD585
33	10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト	SH540
34	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	第IV層
35	5YR6/4にぶい褐色シルト	
36	5YR5/4にぶい赤褐色シルト	
37	記録なし	満
38	2.5Y4/1黄灰色粘質土に裸混	SE546
39	記録なし	SK564
40	7.5YR5/3にぶい褐色シルト	第V層
41	10YR6/6明黄褐色シルト	第V層
42	擾乱	擾乱

第7表 木造赤坂遺跡d地区北壁土層註記(1/2)

1埋戻土	埋戻土
2SYR5/6明褐色土	擾乱
37SYR4/2灰褐色土	第Ⅰ層
47SYR3/2黒褐色土	盛土
5NA/0灰色土	
67SYR3/2黒褐色土	
77SYR4/3褐色土	
87SYR2/1黒色粘質土	
97SYR5/4にぶい黄褐色土	
7SYR2/2黒褐色粘質土ブロック混	
1010YR3/2黒褐色砂質土	
112SYR2/1赤黒色土	
1210YR4/2灰褐色土	
135SYR2/1黒褐色土	
10YR4/1にぶい黄褐色土ブロック混	
142SYR2/1赤黒色土	
10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック混	
1510YR5/3にぶい黄褐色土	
10YR4/3にぶい黄褐色土	
1610YR4/4褐色土ブロック混	
1710YR3/3暗褐色土に10YR6/8明褐色土ブロック混	
1810YR3/3暗褐色土	
1910YR3/1黒褐色土	
2010YR6/8明褐色土	
2110YR3/2黒褐色土に10YR5/6黄褐色土ブロック混	
2210YR5/6黄褐色土に10YR3/2黒褐色土ブロック混	
2310YR4/3にぶい黄褐色土 第Ⅱ層	
247SYR4/2灰褐色土	
2510YR3/2黒褐色土	
2610YR2/1黒色粘質土	ピット
277SYR3/1黒褐色土に10YR5/6黄褐色土ブロック混	ピット
2810YR1/7/1黒色粘質土	
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック混	ピット
2910YR3/1黒褐色粘質土	
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック・炭混	ピット
307SYR3/1黒褐色土に10YR5/6黄褐色土ブロック混	ピット
3110YR3/2黒褐色土に焼土混	ピット
327SYR3/1黒褐色土	
337SYR2/1黒色土に10YR5/6黄褐色土ブロック混	ピット
347SYR3/1黒褐色土に10YR6/8明褐色土ブロック混	ピット
3510YR3/1黒褐色土	
10YR5/6黄褐色土ブロック・焼土混	
367SYR1/1黒色粘質土	ピット
7SYR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック・炭混	
377SYR4/2灰褐色土	ピット
3810YR2/3黒褐色粘質土	ピット
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック多混	
392SYR2/1黒色粘質土	ピット
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック混	
407SYR3/4暗褐色土に焼土少混	SD19
417SYR4/3褐色土に焼土混	SD19
427SYR3/2黒褐色土	SD19
437SYR3/3暗褐色土に7SYR6/6橙色土ブロック混	SD20
447SYR3/2黒褐色土	SD20
10YR5/3にぶい黄褐色土ブロック混	SD20
4510YR3/2黒褐色土	SD20
462SYR3/1黒褐色土に7SYR5/6明褐色土ブロック多混	SD20
472SYR3/1黒褐色土に7SYR5/6明褐色土ブロック混	SD20
4810YR3/4暗褐色粘質土	SD20
10YR5/6黄褐色粘質土ブロック混	SD20
50SYR4/2灰褐色土に10YR6/8明褐色土混	ピット
5110YR2/2黒褐色粘質土	SD10
10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック少混	SD10
525SYR3/1黒褐色土	SD10
5310YR2/1黒色粘質土に炭混	SD10
5410YR2/2黒褐色粘質土	SD10
10YR6/3にぶい黄褐色粘土ブロック少混	SD10
5510YR2/2黒褐色粘質土	SD10
10YR6/3にぶい黄褐色粘土ブロック多混	SD10

第7表 木造赤坂遺跡d地区北壁土層註記(2/2)

5610YR2/2黒褐色粘質土		SD10
5710YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック・炭混		
585SYR2/1黒褐色土	SD42	
5910YR1/7/1黒色粘質シルト		SD42
10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック少混		SD42
6010YR1/7/1黒色粘質シルト		SD42
10YR4/4褐色粘土ブロック多混		SD42
6110YR1/7/1黒色粘質シルト		SD42
10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック少混 (土器小片多量)		最下層
6210YR3/1黒褐色粘質土		SD910
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック混		SD910
6310YR2/1黒褐色粘質土		SD910
10YR3/2黒褐色粘質土		SD910
657SYR3/1黒褐色土	SD929	
6610YR2/2黒褐色粘質土に炭少混		SD912
6710YR3/2黒褐色粘質土		SD912
10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック混		SD912
6810YR3/2黒褐色土に7SYR5/6明褐色粘土ブロック混		ピット
6910YR2/2黒褐色粘質土		SD911
707SYR3/2黒褐色粘質土		SD911
75YR4/3黒褐色シルトブロック・炭混		SD911
7210YR3/1黒褐色粘質土		SD911
10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック多混		SD911
7310YR3/1黒褐色粘質土		SD911
10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック混		SD911
7410YR3/1黒褐色粘質土		SD911
10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック少混		SD911
7510YR3/1黒褐色粘質土		SD911
10YR4/2灰褐色シルトブロック混		SD911
7610YR2/3黒褐色粘質土		SD911
10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック混		SD911
775SYR3/1黒褐色シルト		SD1051
10YR4/2灰褐色シルトブロック混		
7810YR2/3黒褐色粘質土		SD932
10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック混		
795SYR3/2黒褐色粘質土		SD932
10YR3/3暗褐色粘質土		SD932
8010YR2/2黒褐色粘質土		SD930
8110YR3/2黒褐色粘質土		SD930
2.5Y5/4黒褐色シルトブロック混		
8210YR3/2黒褐色粘質土		SD930
2.5Y5/4黒褐色シルトブロック・炭混		
837SYR3/2黒褐色粘質土に炭混		SD930
8410YR2/3黒褐色粘質土		SD930
10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック混		
857SYR2/2黒褐色粘質土に焼土・炭混		
865YR2/1黒褐色粘質土		SE918
10YR3/2黒褐色粘質土		SE918
8810YR2/2黒褐色粘土		SE918
10YR2/2黒褐色粘質土		
8910YR4/4暗褐色粘土ブロック混		ピット
9010YR2/2黒褐色粘質土		ピット
7.5YR3/4暗褐色粘土ブロック多混		
917.5YR2/2黒褐色粘質土に焼土・炭混		
925YR3/2黒褐色粘質土		第Ⅲ層
10YR4/2灰褐色シルトブロック混		第Ⅲ層
937.5YR2/2黒褐色粘質土		第Ⅲ層
10YR4/2灰褐色粘土ブロック混		第Ⅲ層
947.5YR3/2黒褐色粘質土		第Ⅲ層
10YR3/4暗褐色粘土ブロック混		第Ⅲ層
957.5YR2/2黒褐色粘質土		第Ⅲ層
10YR3/4暗褐色粘土ブロック混		第Ⅲ層
967.5YR3/2黒褐色粘質土		第Ⅳ層
10YR2/4黒褐色粘土ブロック混		第Ⅳ層
977.5YR4/3にぶい黄褐色粘質土		第Ⅳ層
9810YR5/4にぶい黄褐色粘質土		第Ⅳ層
997.5YR5/6黄褐色粘質土		第Ⅳ層

## IV 池新田遺跡の遺構と遺物

### 1 遺構 (第15~19図)

主に古墳時代前期と平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺構が確認された。以下、主要な遺構について時代ごとに説明する。

#### a 古墳時代前期の遺構

調査区北部で土坑1基（SK39）、大溝1条（SD8）、溝1条（SD10）を確認した。

**SK39** (第16図) 調査区北西部、AO14・15に位置している土坑である。SD8と重複しており、全形は不明である。SD8を挟んだ南側にSK39と対応するような土坑を確認したが、断面形態はSD8と接する付近で浅くなっているため、同一遺構の可能性は低いと考えられる。土坑内から土師器台付甕が出土した。

**SD8** (第16図) 調査区北部、AO14～AP23に位置している東西方向の大溝である。溝は大きく上層と下層に分かれ、上層は最大幅8.0mで、断面は浅いレンズ状を呈する。埋土は南に位置しているSD10も覆っていた。溝下層部分が埋没する際に周囲が大きく崩れ、周辺よりも低い窪地になっていたものと推測される。埋土からは古代～室町時代の遺物が出土した。

下層は幅3.4m、深さ100～110cmである。断面形態は東壁で逆台形、西壁でU字状となっており、いずれも南側の方が急傾斜である。埋土は基本的に粘土で植物遺体を包含していたことや砂粒がほぼ確認できなかったことから、溝内には常に水があるが流れはほとんど無く濁んでいたことが推測される。また埋土から大量の古式土師器が出土していることから、埋没時期は古墳時代初頭頃と考えられる。

**SD10** (第16図) 調査区北部、AQ14～23に位置している幅0.6m、深さ50cmの東西溝である。断面形態は逆台形で幅の割合に深い。調査区東壁の土層観察からSD10埋土の上にSD8上層が堆積しており、SD8と同時期に機能していた可能性が高いと考えられる。なお、遺物は僅かであるが、古式土師器が出土した。

#### b 平安時代末期から鎌倉時代の遺構

調査区南部で溝、土壙墓などを確認した。SD5・22、SX6、SZ38について詳述する。

**SD5** 調査区中央やや南寄り、AU14～AV23に位置している幅1.6～3.0m、深さ40～70cmの溝である。溝の幅・深さ共に調査区中央付近が最も広く深くなっている。断面形態は概ねU字形であった。調査区西側でSZ38に接しているが、双方の遺構の重複関係は明確にできなかった。SZ38で検出、出土した木杭・板状木製品が水量の調節に関わるもののが可能性があり、同時期に機能していた可能性が高いと考えられる。

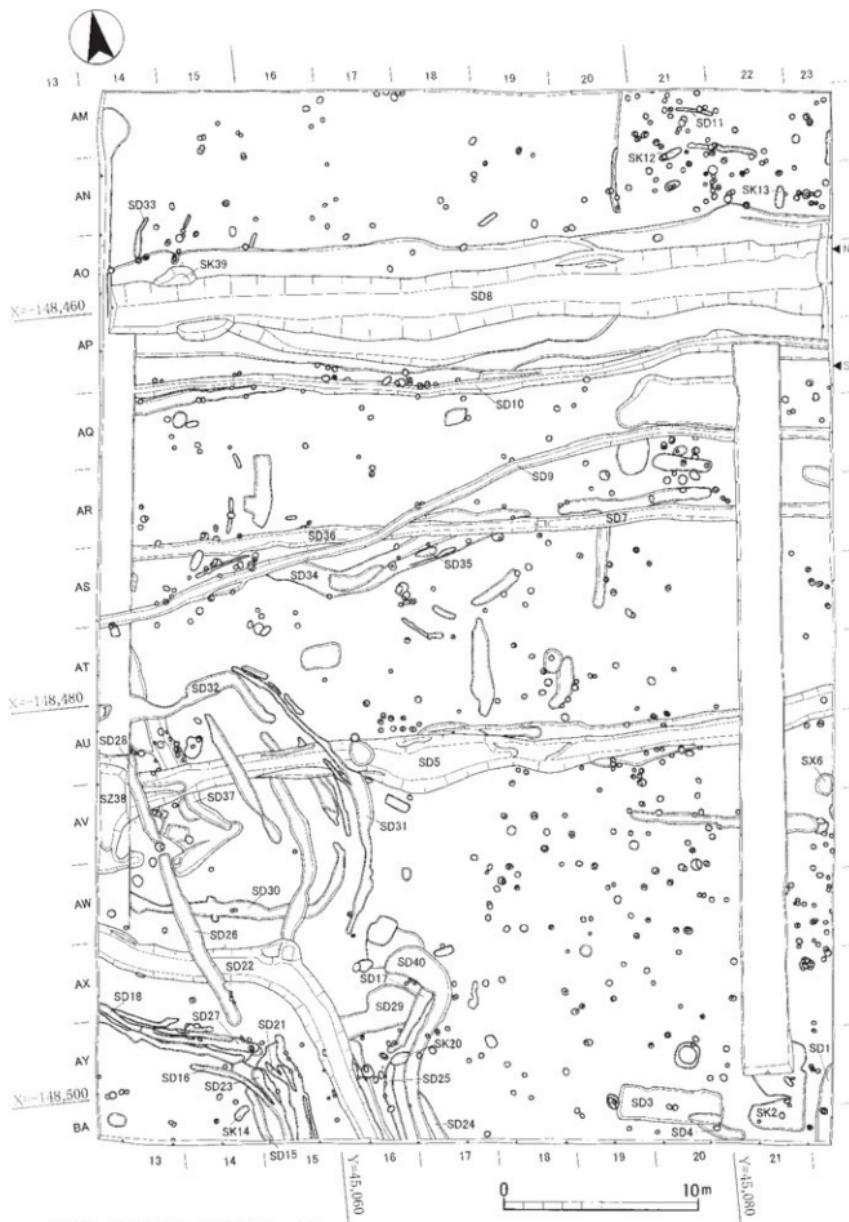
**SZ38** (第17図) 調査区南西部、AW13～BA16に位置している幅2.0m、深さ50～60cmの溝である。断面形態は概ねU字形であった。向きは調査区南端でN20°Wであるが、AX15付近で弧を描きつつ西北西へと大きく変化している。規模・位置関係から木造赤坂遺跡SD354に繋がると推定される。周辺遺構との重複関係は、SD29より新しく、SD26より古い。

**SX6** (第17図) 調査区東端、AV・AW22に位置している土壙墓である。平面形態は1.1×0.8mの梢円形、深さ20cmで、断面形態は隅丸方形である。主軸はN21°Eである。

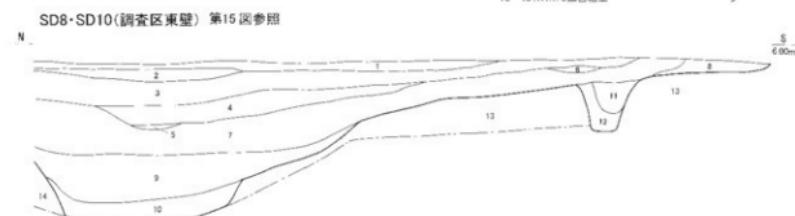
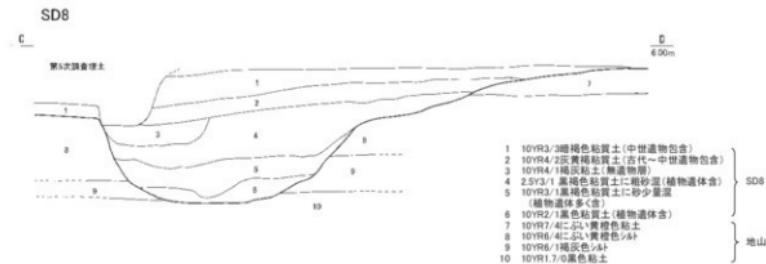
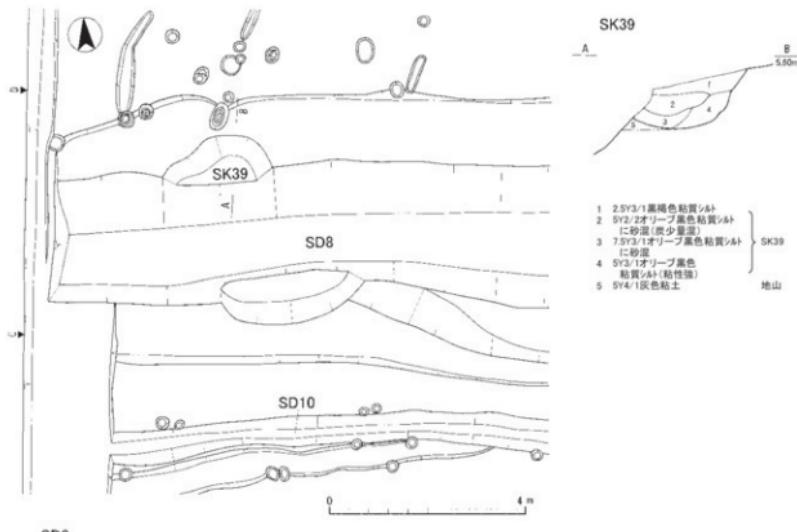
遺物は土壙内中央部東側で山茶碗が1点出土した以外は中央部西側に土師器皿4点、小皿9点が集中して認められた。破片での出土はごく僅かで、総じて完存に近いものが多かった。また、土師器小皿は概ね3点ずつ重ねて置かれたよう見受けられた。なお、遺物は底から約10cm上で確認した。

土壤から骨等は確認できなかったが、遺物の出土状況から土壙墓と推察される。土壤の平面形態や遺物出土範囲から頭位を北、体を西に向けて屈葬した可能性が考えられる。

**SZ38** (第18図) 調査区中央西端、AU・AV13に位置している性格不明遺構である。平面形は6.0m以上×1.5m以上の不整梢円形で、深さ100～110cmの落ち込みである。東側はSD5と接している

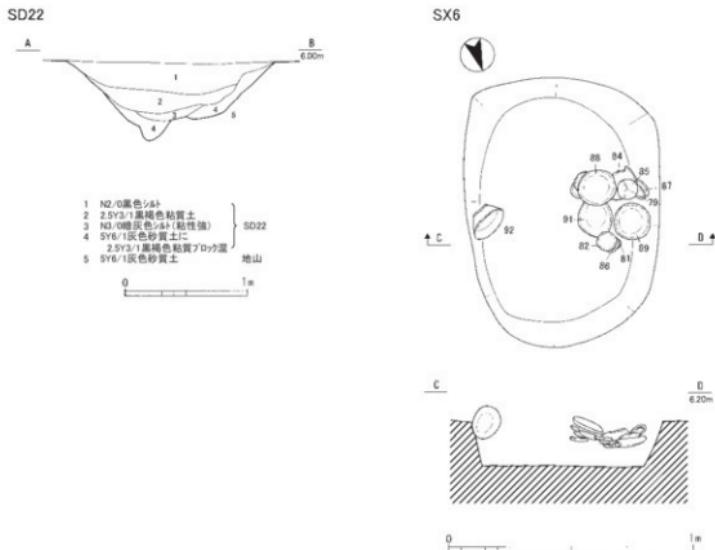
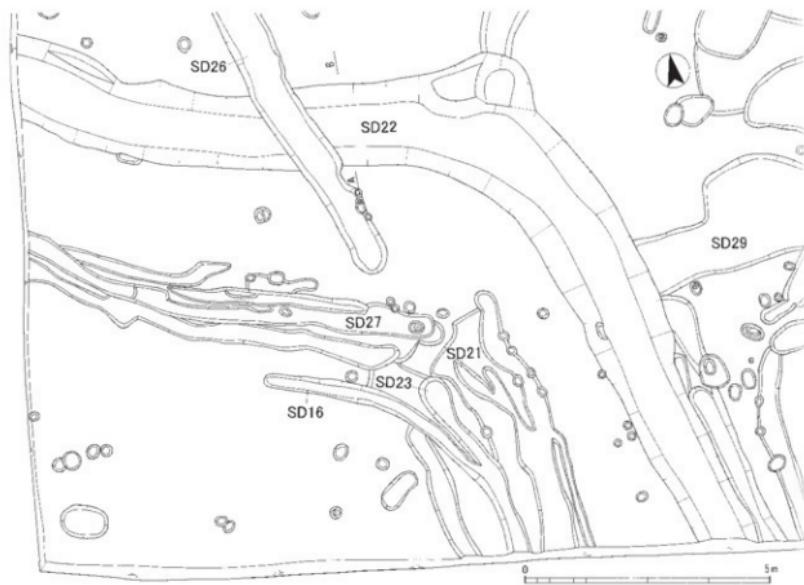


第15図 池新田遺跡 遺構図 (1 : 250)

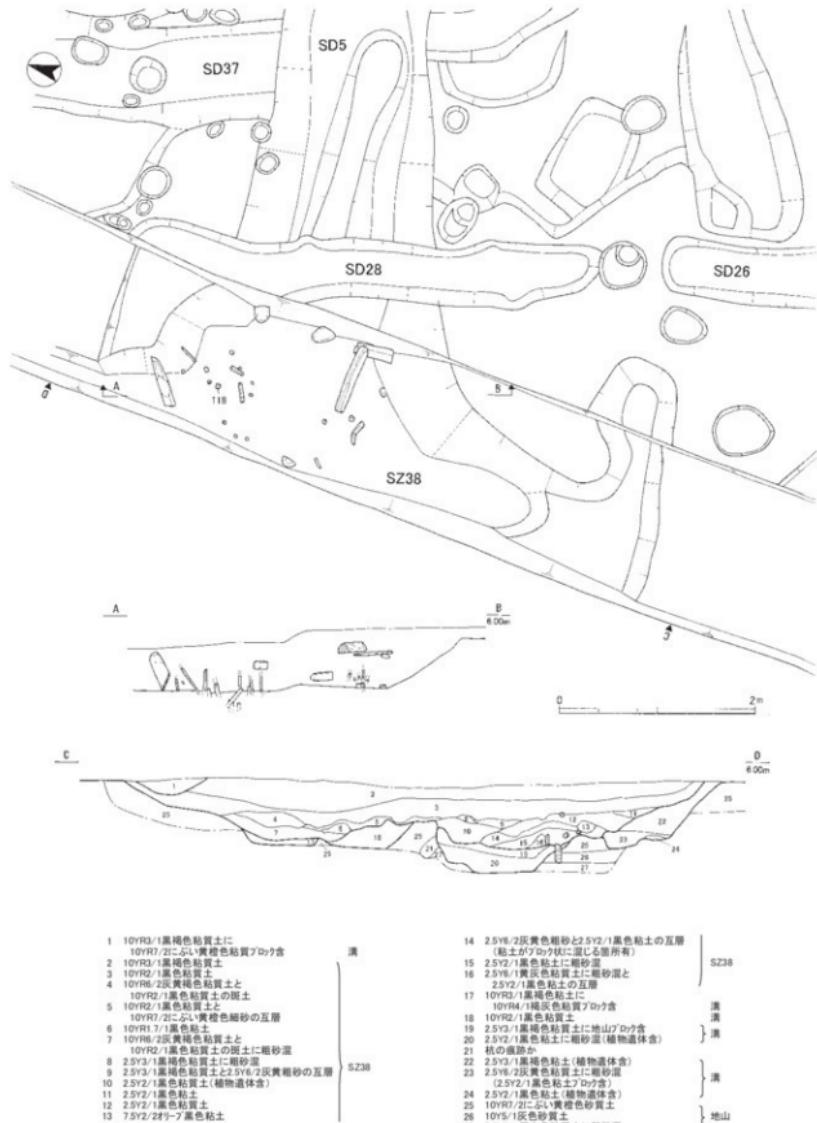


1 10YR2/2 黒褐色粘質土	8 2SY5/2 暗灰黃色粘質土
2 2SY4/1 黄灰色粘土	9 2SY5/1 暗灰黃色粘土
3 10YR2/2 黑褐色粘土(中世遺物包含)	10 2SY5/1 暗灰黃色粘土(植物遺体多く含)
4 10YR6/1 暗褐色粘土	11 10YR5/2 暗黃褐色粘土
5 10YR2/1 黑褐色粘土	12 10YR3/1 黑褐色粘土
6 2SY6/2 暗黄色粘土	13 2SY5/2 暗灰黃色粘土
7 N3/0 黑褐色粘土	14 N2/0 黑褐色粘土に粗砂混入(植物遺体多く含)

第16図 池新田遺跡 SK39・SD8・10構造図 (1 : 100)・土層図 (1 : 40)



第17図 池新田遺跡 SD22遺構図 (1 : 100)・土層図 (1 : 40)、SX6遺物出土状況図 (1 : 20)



第18図 池新田遺跡 S Z 38遺構図 (1 : 50)

るが、双方の遺構の重複関係は明確にできなかった。

埋土の堆積状況は、特に下層で粒子の異なる土砂の互層と粘質土の堆積が交互にみられ、水流の変化が頻繁にあったことを示している。また、SD 5に近い北半部の底付近には多数の木杭の他、板状木製品が遺存しており、環などの構築部材であった可能性も考えられる。

これらの状況から、明確な時期決定のできる遺物は古代の土器杯のみであるが、SD 5と関連した遺構である可能性が高いため、当該時期の遺構とした。

### c 時期不明の遺構

**SD 7** 調査区中央東半部、AS 19～23に位置している幅0.6m、深さ20～30cmの溝である。西側にある溝SD 36に続いている。溝の向きはSD 5とほぼ同じで、SD 5とは概ね10m離れている。

**SD 36** (第19図) 調査区中央西半部、AS 14～19に位置している幅0.9m、深さ20～40cmの溝である。東側にある溝SD 7に続いている。周囲の遺構との重複関係は、SD 34より新しくSD 9より古い。溝の向きはSD 5とほぼ同じで、SD 5とは概ね10m離れている。  
(原田)

## 2 遺物 (第20～23図)

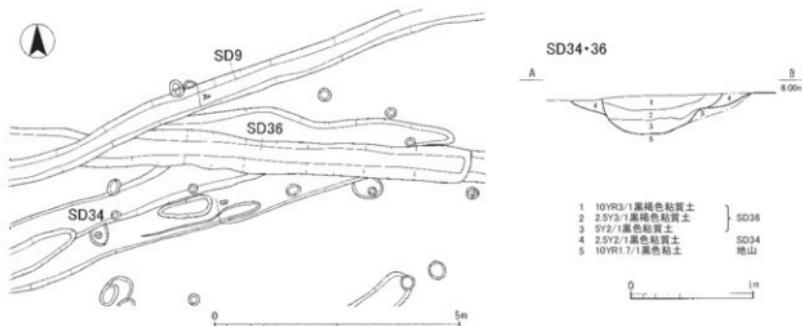
縄文土器から近世陶磁器、土製品・石製品・木製品など、多種多様な遺物がコンテナケース57箱程度出土した。遺構出土遺物を中心に、主な遺物について説明する。

### a 古墳時代前期の遺構出土遺物

S K39、SD 8出土遺物について詳述する。

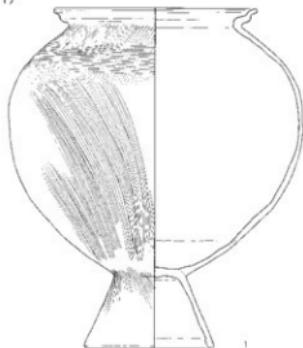
**S K39 (1)** S字状口縁台付壺（以後、S字壺と呼称）である。口縁端部が外方に広がるが、頭部調整技法は認められず肩部の張りはそれほど強くない。外面は羽状ハケメの後、肩部に横方向のハケが施される。台部はハの字状に開き、端部は内側に折り返している。赤塚次郎氏による分類<sup>13)</sup>（以後、赤塚分類と呼称）のB類（新）ないしはC類とみられる。内外面共にススが認められ、内面下半部には炭化物が付着している。

**SD 8** (2～66・114) 2～18は壺である。2～7は頭部から逆ハの字状に大きく外反する口縁部を持つものである。4・5・7は口縁端部が垂下して幅広い面を形成し、3・5は頭部に突帯が付いている。3の内面には不整円形の赤彩が9箇所確認された。7は少なくとも円形浮文が2個一組で1箇所認められる。6は口縁端部が上方に伸び、内外面に貝殻状工具による刺突が認められる。8～10は直口する頭部の上端が屈曲し、外方へ広がる口縁部を持つものである。いずれも頭部に突帯が付いている。8は口縁端部に棒状浮文の痕跡が2箇所認められる。また、8・9は口縁部内外面が赤彩されている。11・12は二重口縁壺である。12は外方に大きく広がる口縁部を持ち、頭部に突帯が付いている。15は中形の長頸壺で内外面共に赤彩されている。17は口縁端部が外方に折り返されている。18は外面上に繩文およびS字状結節繩文がみられ、東遠江または駿河系のもの

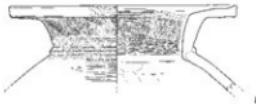


第19図 池新田遺跡 SD 34・36遺構図 (1 : 100)・土層図 (1 : 40)

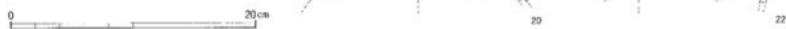
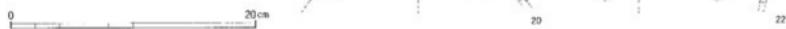
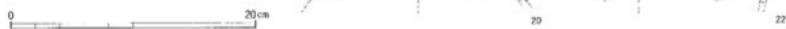
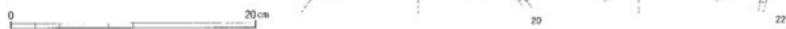
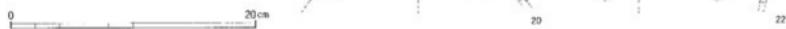
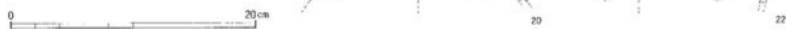
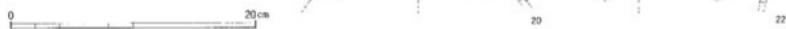
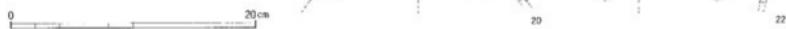
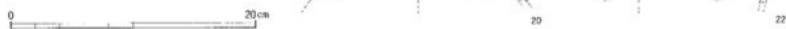
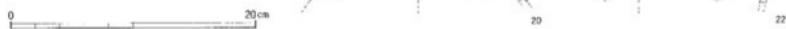
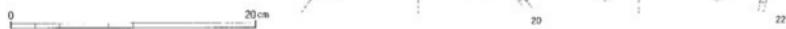
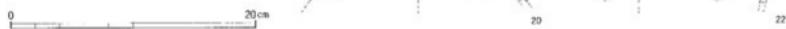
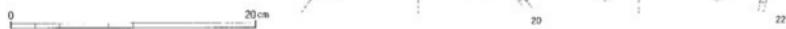
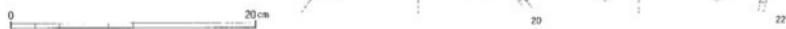
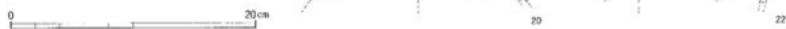
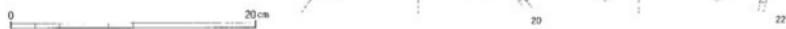
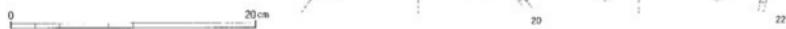
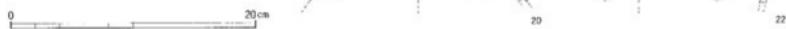
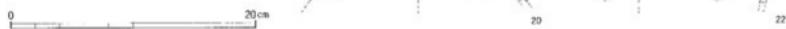
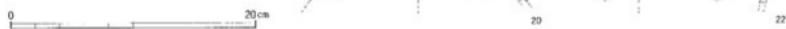
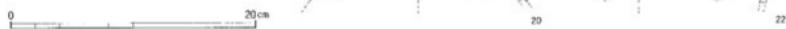
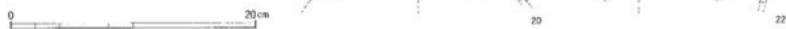
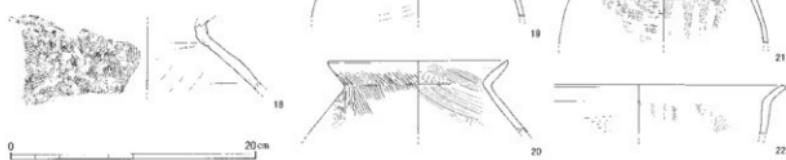
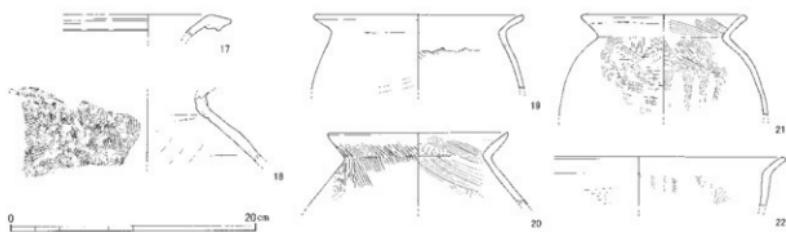
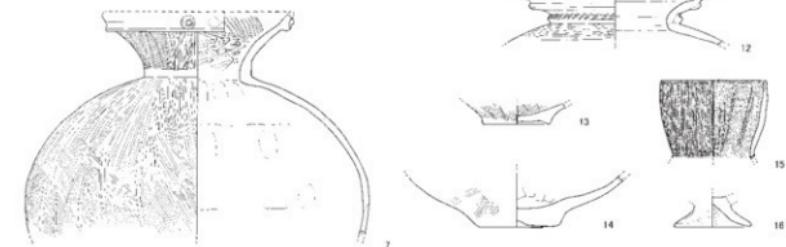
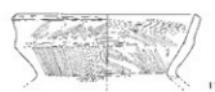
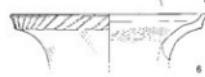
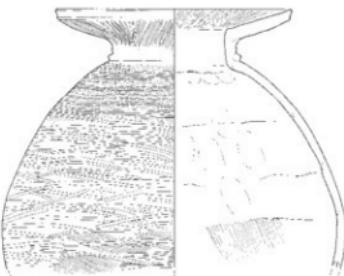
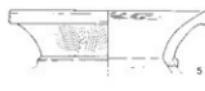
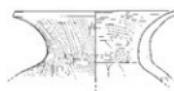
SK39(1)

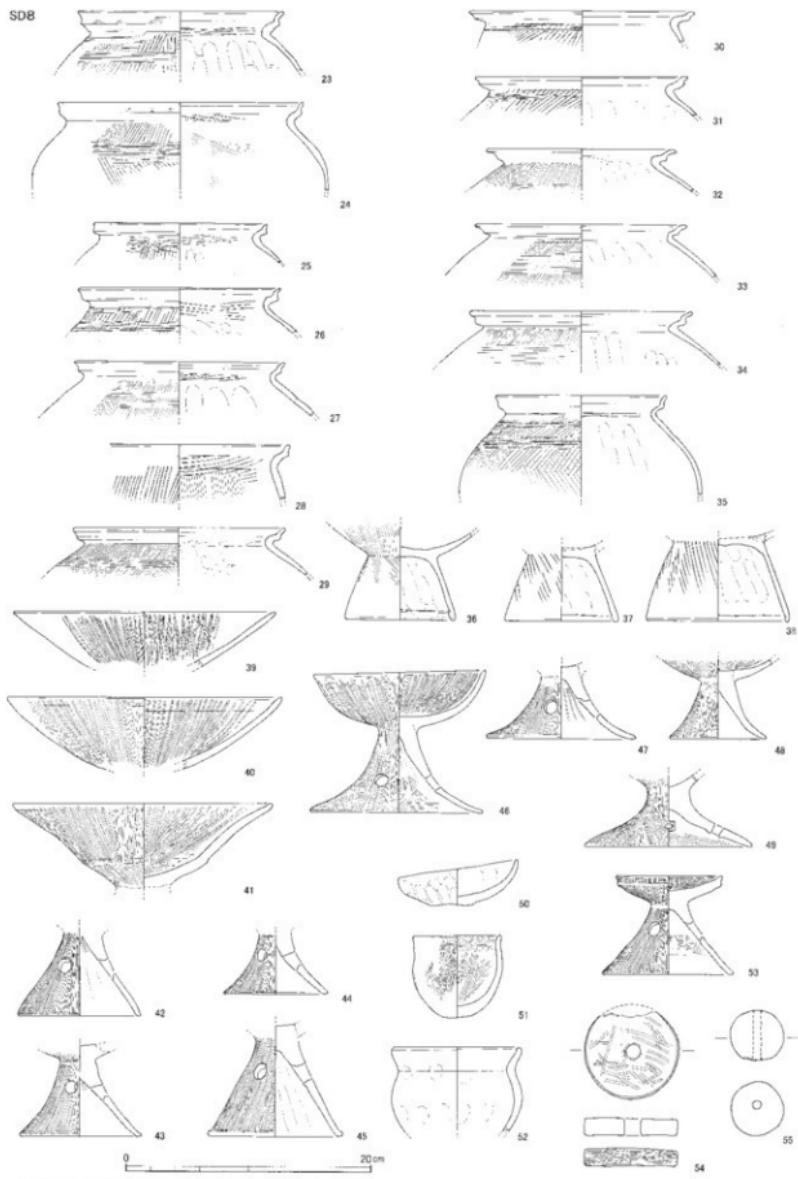


赤影



SDB(2~66-114)





第21図 池新田遺跡 出土遺物実測図2 (1 : 4)

のと思われる。17および18の内面は磨耗著しい。

19~21・23~38は甕である。S字甕の比率が高く、く字状口縁甕は少ない。19~21はく字状口縁甕である。外面調整は19が不明瞭だが僅かにタタキの痕跡がみられ、21がタタキ後ハケ、20がハケである。23~38はS字甕である。23・24が赤塗分類のA類、25~31がB類、32~34がC類とみられる。28は肩部の張りが認められず、内外面共に比較的粗いハケ調整を施している。口径は不明であるが、大形品とみられる。35は口縁部が上方に拡張するものであろう。36~38は、いずれも端部に折り返しが認められる台部で、38は大きく、体部と台部の接合状況や砂粒充填の痕跡が確認できる。

39~49は高杯である。39・40は有段高杯の杯部で内彎志向は強くなく、逆ハの字状にはほぼ直線的に広がるものである。42~45は有段高杯の脚部である。脚端部が僅かに内彎するもの(42)、直線的に広がるもの(43・45)、やや外反するもの(44)がある。いずれも円形の3方透孔が脚部の中央より上方に認められる。46~48は挽形高杯である。48は残存部位をみると透孔は認められない。41は杯部が屈曲して外反する傾向を示すもの、49はゆるく内彎しながら大きく聞く脚部でやや小さい円形4方透孔が認められるものである。41・49は伊勢湾沿岸地域でみられる高杯よりも器壁が厚く、形状から畿内系のものとみられる。

22・50~521鉢である。22は大形の有頸鉢とみられるが、口径は不明である。50は器壁が薄く、胎土は精緻であるが、ユビオサエなどが残り歪である。内面に薄く赤色顔料の付着が認められる。外面は明瞭ではないが僅かに黒化しているように見える箇所もあり、黒化が被然によるものと仮定するならば、これらの状況から赤色顔料が水銀朱である可能性が想定される。51は器表面の剥離が著しいため不明瞭であるが、少なくとも外面および内面口縁部付近は赤彩されていたとみられる。

53は器台である。浅い皿状の受部で脚部はほぼ直線的に広がり、脚部径が受部径を僅かに凌駕する程度である。口縁端部にはピッチの細かい押し引き刺突が認められる。

54は紡錘車である。比較的大きいもので器表面は

丁寧なミガキ調整が施される。55は土玉である。

56~60は宽带文土器である。素文の宽带が56は1条、57は2条付いており、ナデ調整がされている。おそらく甕であろう。58~60は深鉢である。口縁端部付近に宽带が1条認められる。宽带は58・60が素文で、59は宽带貼り付け後貝殻とみられる原体で押圧している。61は条痕文土器の粗製深鉢である。56~61はいずれも混入品であろう。

木製品(114)は、端部が欠損しており用途は不明だが、器面に削りが認められる。(原田)

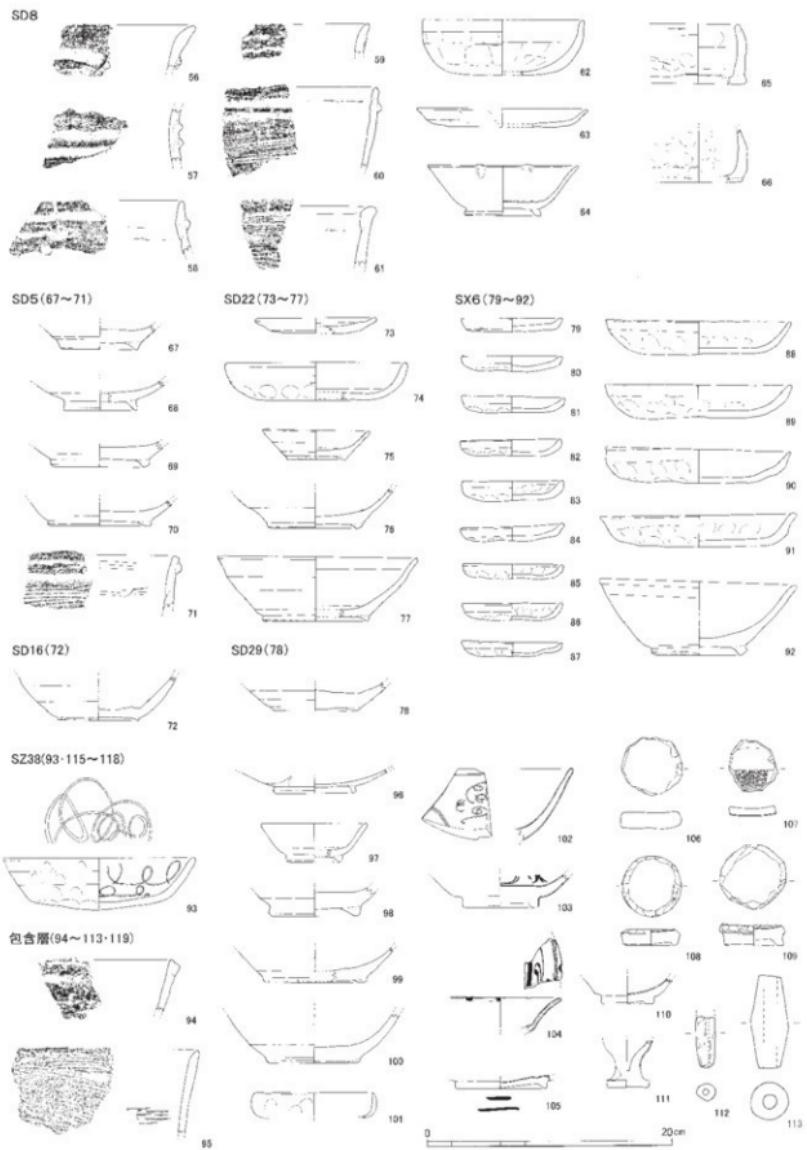
この他、SD 8からの出土として取り上げられている遺物には、土師器(62・63)・縄釉陶器(64)・製塙上器(65・66)など古代の土器や、中世の遺物もある。62は深手で腰の丸みが強い土師器碗で、飛鳥時代以降にみられる器形である。63は、底裏にユビオサエ、口縁部には強いヨコナデが施された白っぽい色調を呈する土師器皿で、斎宮編年<sup>31</sup> 第Ⅱ期第4段階(900~950)のものに類似する。64は、口縁部に輪花、見込みに圓線とトチノ痕が認められる全面施釉の縄釉陶器碗で、ヘラミガキは施されていない。猿投窯・尾北窯もしくは美濃窯の製品で、平安京では平尾政幸氏による土師器編年<sup>31</sup> のII新~III古(900~960年頃)に属する遺構から類品が出土する。これら古代・中世の遺物は、SD 8 出土遺物の圧倒的多数を占める古墳時代前期の土器群に較べ、非常に量が少ないうえに、年代的なまとまりを欠いている。調査時の所見によれば、古代から中世の遺物は溝の上面を広範囲に覆う土層(第16図中段SD 8 上層図1・2層)から出土したということであるから、溝が機能を停止して埋没してしまってから、周辺よりも窪んでいた部分に流れ込んだものかと思われる。

## b 平安時代末期~鎌倉時代の

### 遺構出土遺物

SD 5・16・22・29、SX 6、SZ 38出土遺物について詳述する。

SD 5(67~71) 縄文土器・土師器・「山茶碗」<sup>41</sup>がある。67は混美系<sup>42</sup>、68~70は尾張系<sup>43</sup>の「山茶碗」で、藤澤良祐氏による「山茶碗」編年<sup>44</sup>(以下、山茶碗編年と略す)の第3~5型式に相当する。71は、縄文土器の深鉢口縁部。



第22図 池新田遺跡 出土遺物実測図3 (1 : 4)

**S D 16 (72)** 尾張系の「山茶碗」が1点ある。見込みに強いコピナデが施されており、腰に弱い丸みを残している体部の形状や、非常に粗雑な胎土からみて山茶碗編年第6型式に比定できよう。

**S D 22 (73~77)** 土師器（皿・鍋）、「山茶碗」（小碗・碗・鉢）がある。73・74は土師器の皿。73は底部が厚く、腰が折れる浅い小皿で、木造編年<sup>8)</sup>4期、74は口縁部の2段ナデが特徴的な皿で、5期に比定できる。75~77は、尾張系の「山茶碗」。75は、高台に粉殻痕が認められる小碗。口縁部はやや尖り気味で、体部は直線的に開く。76・77は体部が直線的に開く碗で、高台には粉殻痕や砂粒痕が認められる。77は口縁部が外反し端部は丸い。いずれも山茶碗編年の第4・5型式に比定できよう。

**S D 29 (78)** 土師器（皿・鍋）、「山茶碗」がある。78は高台が幅広で低く、底部が厚くて、砂っぽい胎土の涅美系の碗である。山茶碗編年第6型式に比定される。

**S X 6 (79~92)** 土師器、「山茶碗」がある。

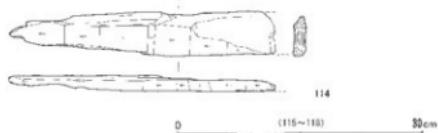
13点出土した土師器皿（79~91）は、形状・胎土・焼成がすべて似通っており、口径15cm強と口径8cm強に法量の集中が認められる。92は体部が直線的に開き、器高が高い涅美系の碗で、山茶碗編年の第5型式に相当する。

**S Z 38 (93, 115~118)** 弥生土器か古式土師器の破片、古代の土師器杯、中世の土師器羽釜などが少量ある。93は土師器杯で、外側面にヨコナデ、見込みに螺旋状暗文、内側面に2段の連弧状暗文が施されている。内外面の調整や暗文の状態から、平安時代前期に属するものかと思われるが、詳細な時期比定は難しい。遺構自体は、中世溝S D 5と一連の施設と目されているので、埋没過程で古い時代の遺物が紛れ込んだのであろう。

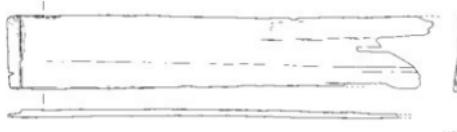
このほかに、木製品の板材（115）や建築部材（116）、杭（117・118）もある。

**c 遺構外（表土・包含層など）出土遺物**  
縄文土器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・「山茶碗」・瀬戸美濃陶器・常滑陶器・青磁・白磁・土鍤・

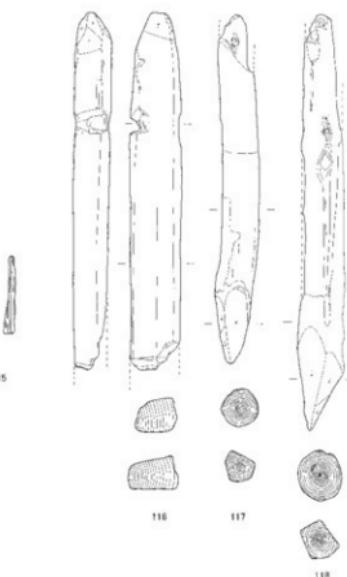
SD8(114)



SZ38(115~118)



包含層(119)



第23図 池新田遺跡 出土遺物実測図 4 (1 : 4) 115~118は1 : 6

製塗土器のほか、近世陶磁器、木製品がある。

96は刷毛で施釉された灰釉陶器碗の下半部で、器壁は薄く白っぽい色調を呈する。9世紀末～10世紀初頭頃の美濃窯製品とみられる。97～100は「山茶碗」で、97・99は尾張系、98・100は渥美系の製品と考えられるが、98については断定を避けておきたい。いずれも山茶碗編年の中第4・5型式に相当する。101は中世の南勢地域に特徴的な形態の土器皿。102・103は龍泉窯系青磁碗で、102は太宰府出土中國陶磁器分類<sup>1)</sup>のI～4類、103はI～2類に比定できる。104は青磁の棱花皿で、戦国時代の中世城館などから時折出土するものである。111は鉄軸が施された瀬戸美濃陶器の花瓶で、古瀬戸中期<sup>2)</sup>に属する。105・107～110は近世の瀬戸美濃陶器で、105は見込みの軸が挿き取られた灰釉皿、107は柿釉すり鉢、108～110は鉄釉天目茶碗の底部だが、107～109については二次的に縁辺部分が打ち欠かれ、直径4～5cmほどの円盤に加工されている。106は常滑陶器の壺か甕の体部で、やはり二次的に加工されて円盤状になっている。94・95は網文土器、112・113は土鍤、119は木製の火付け棒である。（水橋）

### 【註】

- 1) 赤塚次郎1990「V 考察」『廻間遺跡』財团法人愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告 I 内院地区的調査 本文編』
- 3) 財團法人京都市埋蔵文化財研究所1990『平安京右京三条三坊』
- 4) いわゆる「山茶碗」は、過去研究者によって異なる概念で用いられてきており、学術用語として問題がないとは言えないが、本稿では便宜的に亮器系中世陶器第2類（白瓷系陶器）（橘崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1977）を指す名称として使用する。
- 5) 渥美窯産と湖西窯産の「山茶碗」は胎土が似通つており、肉眼観察だけでは識別が難しいため、ここでは両者を一括して渥美系と呼ぶこととした。
- 6) 猿投窯・瀬戸窯・常滑窯の「山茶碗」は、胎土に一定の傾向は認められるものの、肉眼観察だけで厳密に三者を識別することは困難であるため、ここでは一括して尾張系と呼ぶこととした。
- 7) 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I、藤澤良祐1994「山茶碗

研究の現状と課題』『研究紀要』第3号 三重県

埋蔵文化財センター

- 8) 本報告書の付論3「木造赤坂遺跡と伊勢平氏・平正度」
- 9) 横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中國陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4
- 10) 藤澤良祐1984「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』III 土岐市美濃陶磁歴史館

## V 木造赤坂遺跡 a 地区の遺構と遺物

### 1 遺構 (第24~27図)

弥生時代後期から古墳時代初頭、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代の遺構が確認された。以下、主要な遺構について時代ごとに説明する。なお、a地区については、調査時期が異なる南北二つの調査区を合わせて報告するため、遺構位置の説明の際に北調査区・南調査区の呼称を使用する。

#### a 弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構

**S D 805** (第25図) 南調査区南東部で確認された方形周溝墓の周溝の可能性がある溝。現代のゴミ穴により大きく削られているため、遺構の全体的な形は分からぬが、溝は方形に巡っていたと考えられる。溝の規模は幅0.4m~1.2m、深さ20cmで、方形周溝墓としての規模は、一辺10m程度と推定される。

(浅尾)

#### b 古代の遺構

**S D 802** (第25図) 南調査区南西部で確認された長さ33m以上、幅0.9m、深さ20cmの溝である。方位はN22.5°Eで、直線状に掘削されている。遺物は少なく、古代の土師器杯と土師器片が出土したのみである。この溝は、b地区で確認されたS D303の延長上に位置し、埋土・断面形状がよく似ていることからS D802とS D303は、一連のものである可能性がある。

(浅尾)

#### c 平安時代末期から鎌倉時代の遺構

主に北調査区で土坑、井戸、溝を確認した。SK 803、SE 360~362・367・372・376、SD 353~355・358・363・364・369・381・383・804について詳述する。

**S K 803** (第25図) 南調査区南東隅寄りで検出された一辺1.3m、深さ70cmの方形の土坑である。断面は逆台形をしている。

(浅尾)

**S E 360** 北調査区北西部、BH 13で検出された井戸。平面形は長辺1.5m×短辺1.3mの隅丸方形、中心部は1.0m×0.85mの楕円形で、断面形は上部が広がるすり鉢状である。底部の標高は4.91mである。

(水橋)

**S E 361** (第26図) 北調査区中央西壁際、BG 12付近に位置している井戸である。長辺3.4m×短辺2.3mの不整形で、断面形はすり鉢状である。底部の標高は4.55mであった。井戸を掘削した地盤は、標高約4.6m以下で不透水層である粘土層になり、その上面の帶水層から水を得ていたとみられる。

**S E 362** (第26図) 北調査区北東部、BH 18付近に位置している井戸である。井戸の東半分は溝SD 354により削平されているが、径1.7m程度の円形であったと推定される。周囲の遺構との前後関係は、SD 364→S E 362→SD 354である。底部の標高は4.98mであった。

**S E 367** (第26図) 北調査区北東部、BG 20に位置している井戸である。SD 355より新しい遺構である。長辺2.4m×短辺2.3mの不整形で、断面形はすり鉢状である。底部の標高は5.06mで、底部には状態があまり良くないものの曲物が確認された。

(原田)

**S E 372** 北調査区南西部、BL 14で検出された井戸。長辺1.2m×短辺1.1mの平面楕円形を呈する。底部の標高は4.93mである。

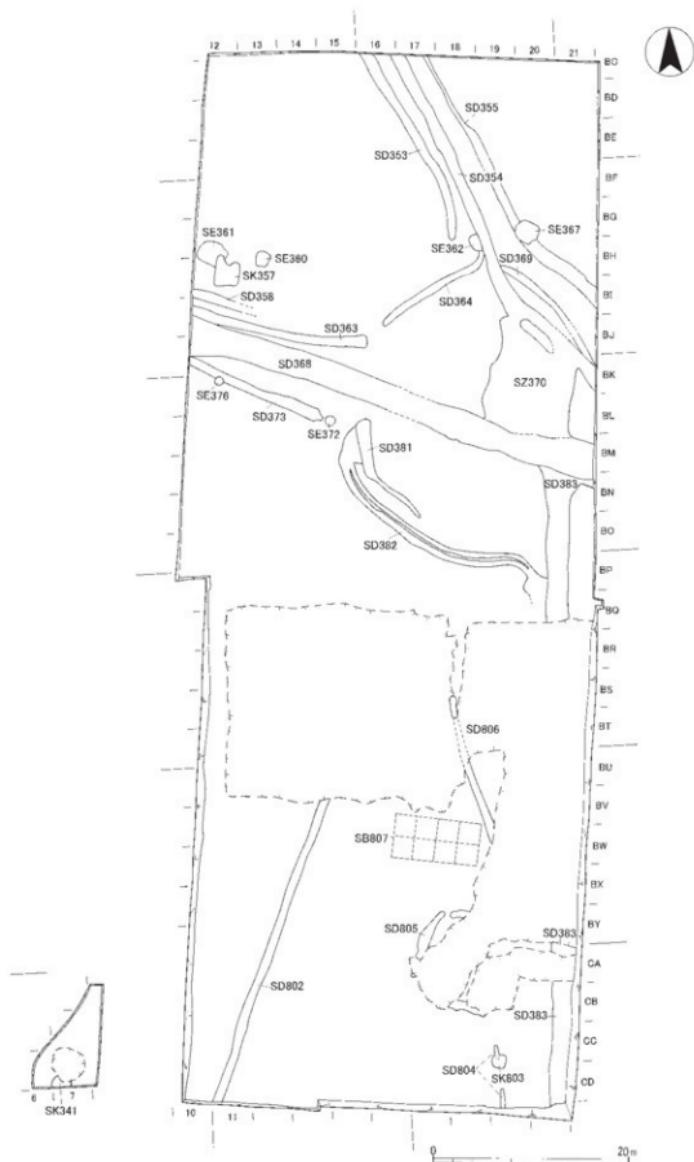
**S E 376** 北調査区南西部の西壁寄り、BK 11・12で検出された井戸。直径0.9mの平面円形を呈する。底部の標高は5.24mである。

(水橋)

**S D 353** 北調査区北部中央、BC 16~BG 18に位置している幅0.8m、深さ22cmの溝である。溝底は西側に浅い平坦面があり、東側は深くなっている。向きは概ねN27°Wであるが、南端部はやや西方へ振っている。位置関係から、池新田遺跡SD 16に繋がる可能性がある。

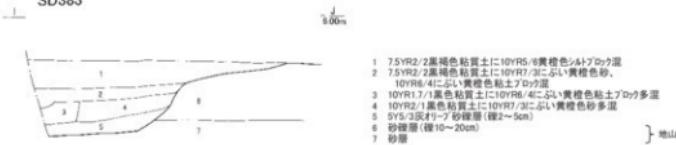
**S D 354** 調査区北西部、BC 16~BK 21に位置している幅1.4m、深さ51cmの溝である。向きは北半部でN25°W、B I 19以南で大きく東方に振っている。規模・位置関係から池新田遺跡SD 22に繋がると推定される。周囲の遺構との重複関係は、SE 362・SD 364・369より新しい。

**S D 355** 北調査区北部中央、BC 17~B I 21に位置している幅0.4m、深さ8cmの小規模な溝であ

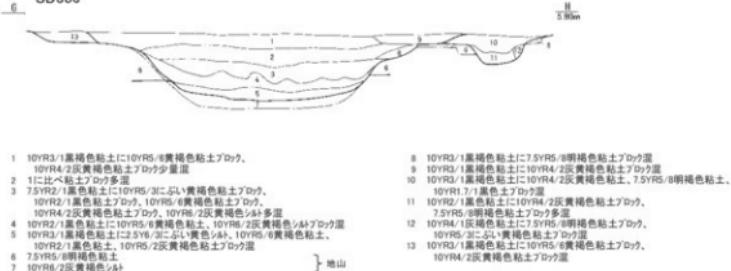


第24図 a 地区主要造構平面略図 (1 : 500)

## SD383



## SD383



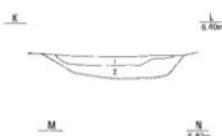
## SD804



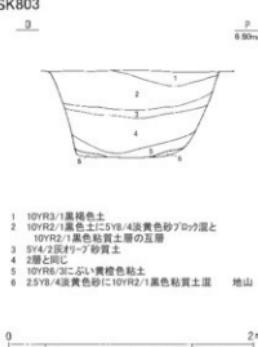
## SD802



## SD805

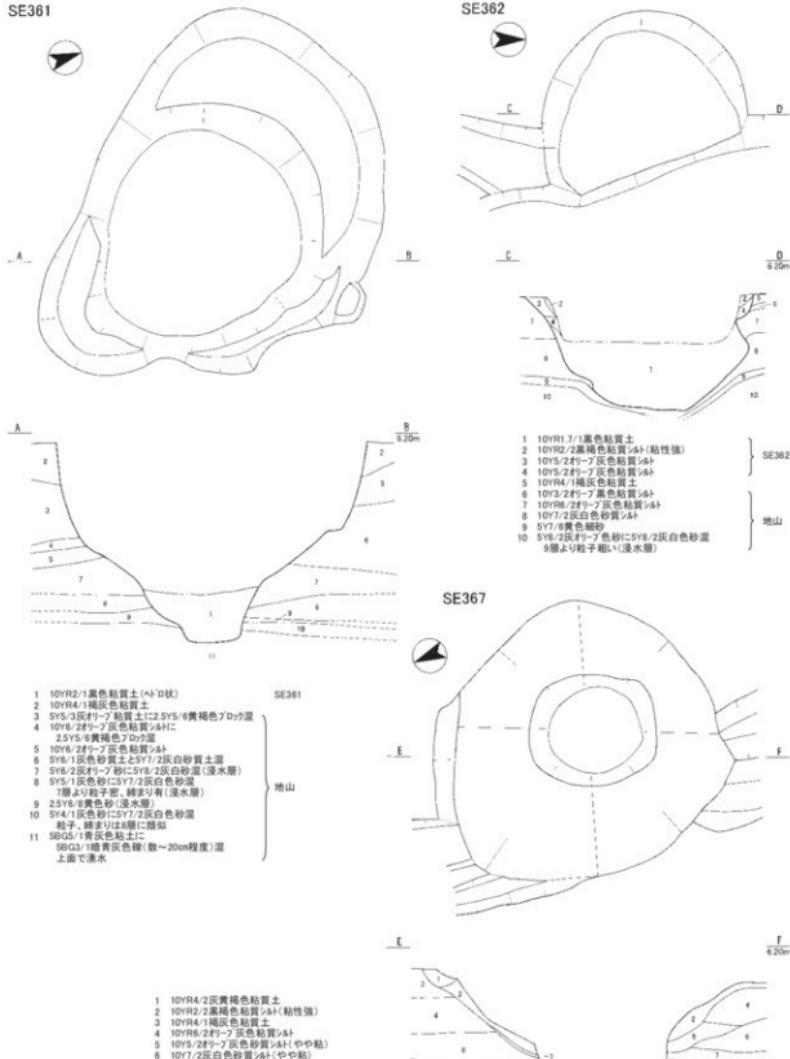


## SK803



第25図 a地区 S D383・802・804・805・S K803土層図 (1 : 40) 参照

SE361



第26図 a地区 S E361・362・367遺構図 (1:40)

る。S D354の東側約1.5mでS D354とほぼ平行している。S E367より古い遺構である。(原田)

**S D358** 北調査区中央の西壁際、B I 11～B I 13で検出された幅1.0m、深さ10cmの落ち込みのような溝である。S D363とほぼ平行している。中世の土器・陶器以外に、新しい時期の破片も含まれるため、時代が下る可能性もある。

**S D363** 北調査区中央西側、B I 11～B J 15に位置している幅1.1m、深さ13cmの東西溝である。調査区西端ではS D368に接しているが、平面検出時も壁面土層観察でも新旧関係は判然としない。

(水橋)

**S D364** 北調査区中央付近、B H18～B I 16に位置している幅0.7m、深さ13cmの溝である。向きは北東～南西方向であるが、やや弧状を描く。周辺の遺構との重複関係は、S E362・S D354より古い。

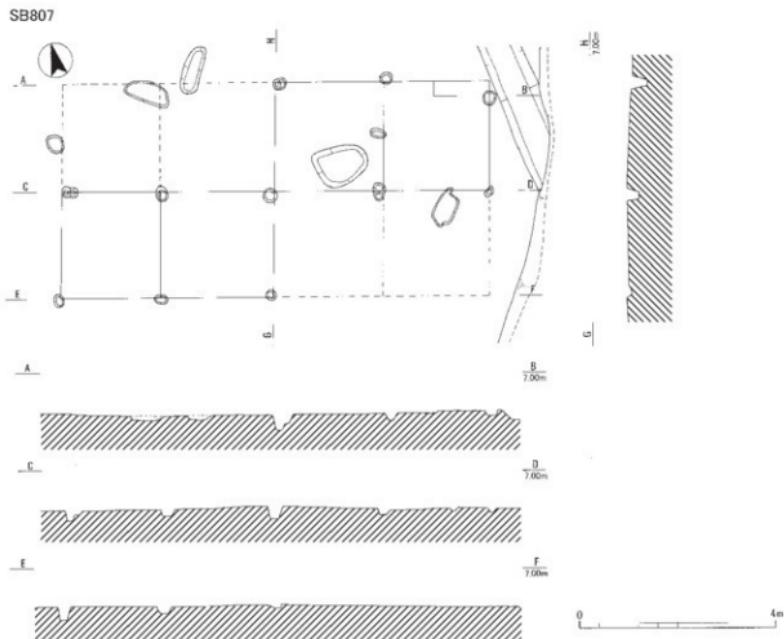
(原田)

**S D369** 北調査区中央東壁寄り、B H19～B J 21付近に位置している幅0.6m、深さ16cmの溝である。向きは北西～南東方向であるが、やや弧状を描く。遺構の重複関係から、S D354より古いことが判っている。(水橋)

**S D381** 北調査区中央やや南寄り、B L15～B N16付近に位置している幅0.8m、深さ11cmの溝である。向きは北北西～南南東で、弧状を描いている。

**S D383** (第25図) 調査区の中央付近から南端にかけての東壁際、B N20～C D19に位置している溝である。後世の搅乱により大きく削平されているが、位置関係・埋土・断面形状などから一連の遺構と考えられ、規模は長さ64.8m以上、幅2.5m、深さ55cmである。向きはN2.5°Eで、S D368よりも古い。(原田)

b 地区の区画溝 S D241と規模・形状・方向が似ていることから、このS D383も同様の目的で掘ら



第27図 a地区 SB807遺構図 (1:100)

れた可能性がある。

(浅尾)

**S D 804** (第25図) 南調査区南東隅寄りで検出された長さ1.2m、幅0.4m、深さ10cmの溝である。山茶碗が出土していること、S K803と重複関係にありS K803が先行することから鎌倉時代に埋没したとみられる。埋土と同じであり、この溝の延長に位置することから、この溝の南で確認された溝状の遺構も一連のものと思われる。溝の上部が削平され底部のみが残っているとみられる。(浅尾)

#### d 室町時代の遺構

北調査区中央で溝などを確認した。SD368・373・382について詳述する。

**S D 368** 北調査区中央、B I 11～B M21に位置している幅2.7m、深さ84cmの溝である。調査区西壁の上層から、溝が再掘削されていることを確認した。遺構の重複からみた前後関係は、S D383よりも新しい。

出土遺物は中世後期のものが多く、遺物と周辺の遺構との重複関係から当該期の遺構と判断したが、遺物の中には古代や中世前期のものも含まれており、再掘削される以前の溝も含めた遺構の時期幅はさらに広がるものと考えられる。

また、溝東半部（特にB L18・BM19を中心とした範囲）では木杭が集中して認められた。

**S D 373** 北調査区中央西側、B J 11～B L14に位置している幅0.9m、深さ8cmの溝である。向きは概ねSD368と同じであるが、西へいくに従い北方へ振り、調査区西端ではSD368に接している。

**S D 382** 北調査区南半、B L15～B P20に位置している幅0.6m、深さ21cmの溝である。向きは西北～東南東方向で弧状を描いている。(原田)

#### e 時期不明の遺構

**S B 807** (第27図) 南調査区中央で検出した総柱建物。桁行4間×梁行2間の規模を想定したが、周辺が現代のゴミ穴により削られているため、更に大きくなる可能性がある。柱間隔は、桁行2.1～2.3m、梁行2.0m～2.2m、主軸方向N75°Wである。建物南東部の柱穴が検出されていない等、南東部の形状については不明な点がある。この建物が北方向に広がることや東に別の建物が存在する可能性もある。遺物は、柱穴からわずかに土師器片が出土した

のみで、時期を特定することは難しい。

**S D 806** 南調査区北半で検出した、長さ16.0m以上、幅0.75m、深さ10cmの直線状の溝である。現代の擾乱により南北とも削平されている。土師器片が出土しているが、時期は不明である。(浅尾)

**S Z 370** 北調査区中央部北東寄り、B J 19～B L21に位置している遺構である。S Z 370の周辺は、S D354・364・368・371・381・382など弧状に造る溝を検出しており、これらの溝に囲まれた部分は浅いすり鉢状を呈していた。この形状と標高の低さから、調査時も水が溜まりやすい状態となっていた。中でもS Z 370は深くなっていた箇所であった。これらの状況から、池状の遺構の一部であった可能性が考えられる。(原田)

## 2 遺物 (第28～31図)

縄文土器から近世陶磁器、土製品・石製品・木製品など、多種多様な遺物が出土した。遺構出土遺物を中心に、主な遺物について説明する。

#### a 弥生時代後期から古墳時代初頭の

##### 遺構出土遺物

**S D 805 (1・2)** 共に広口壺である。1は器表面が磨滅しており、調整は口縁端部のヨコナデのみ確認できる。2は体部の大きさの割に頸部径が大きく、口縁端部で強く外反するものである。基本的にヘラミガキおよびナデ調整を行い、加飾は認められない。(原田)

#### b 古代の遺構出土遺物

**S D 802 (3)** 土師器皿である。底部外面にナデ調整、内面から外側面にかけてヨコナデ調整が施されている。地城色が強い形態のため、既存の編年に当てはめて時期比定することは難しいが、類例が津市惣作遺跡<sup>11)</sup> S Z 4やS K 9などから出土しており、共伴須恵器の年代観から、平安時代前期頃に属するものと推測される。

#### c 平安時代末期～鎌倉時代の

##### 遺構出土遺物

S K341・803、S E 360～362・367・372・376、S D353・354・358・363・369・381・383出土遺物について詳述する。

**S K 341 (5)** 尾張系の「山茶碗」<sup>12)</sup> (小皿)

で、藤澤良祐氏による「山茶碗」編年<sup>3)</sup>（以下、山茶碗編年と略す）の第5型式に比定できる。

**S E 803 (4)** いわゆる伊勢型鍋で、伊藤裕偉氏による中世南伊勢系土師器鍋編年<sup>4)</sup>（以下、土師器鍋編年と略す）では、（仮）A段階に属する。

**S E 360 (6~15)** 土師器（皿・鍋）、「山茶碗」（碗・鉢）がある。6は赤褐色の色調を呈する非ロクロ成形の土師器小皿で、口縁部に2段のナデが施されている。木造編年<sup>5)</sup>5期に比定できる。7~13は、胎土に砂粒が多く含まれる渥美系の「山茶碗」の碗で、口縁部に灰釉が漬けがけされたもの（7・10・11）や輪花が施されたもの（7~9）がある。山茶碗編年の第4型式に相当する。14は「山茶碗」（鉢）で、内面の磨耗が著しい。15は伊勢型鍋で、土師器鍋編年では（仮）A段階に属する。

以上のことから、埋没年代は、おおむね12世紀中葉頃と推定されよう。

**S E 361 (16~28・128・129)** 土師器（皿）、「山茶碗」（碗・小皿）、木製品がある。16~18は粗雑な胎土の非ロクロ成形土師器皿で、16・17は口縁部にヨコナデが殆ど施されない。「山茶碗」（19~27）には、尾張系（19・21・22・27）と渥美系（20・23~26）の製品が混在する。山茶碗編年第5型式に相当するものが主体群を占めるが、25のように新しい様相を示すものも存在する。28は砂岩の砥石、128・129は木製曲物の底板である。

埋没年代については、おおむね12世紀後葉頃と推定されよう。

**S E 362 (29)** 渥美系の「山茶碗」（碗）である。

**S E 367 (30~33・130~132)** 「山茶碗」（碗）、木製品がある。30~33はすべて渥美系の製品である。130は下駄、131は用途不明品、132は曲物の側板である。

**S E 372 (34~42)** 土師器（鍋）、「山茶碗」（碗・小碗・小皿・広口瓶）がある。「山茶碗」の碗皿類は、尾張系（35~38）と渥美系（34）の製品が混在しており、山茶碗編年第4~5型式に相当する。39は渥美系の広口瓶である。40~42は土師器鍋で、頭部が短く、口縁端部の折り返し部は丸く肥厚している。40・42に比べ41は頭部が更に短く、外面にタテハケ、内面にヨコハケが認められる点で若干古相

を呈する。

埋没年代については、おおむね12世紀末~13世紀初頭と推定されよう。

**S E 376 (43~46)** 「山茶碗」（碗）、青磁（碗）がある。43~45はすべて渥美系の碗で、山茶碗編年第6型式の中でも古相を示す。46は龍泉窯系青磁の碗で大宰府出土中国陶器分類<sup>6)</sup>（以下、大宰府分類と略す）のI~4類に比定できる。

埋没年代については、おおむね13世紀前葉と推定されよう。

**S D 353 (47)** 山茶碗編年第4型式に相当する渥美系の「山茶碗」（碗）である。

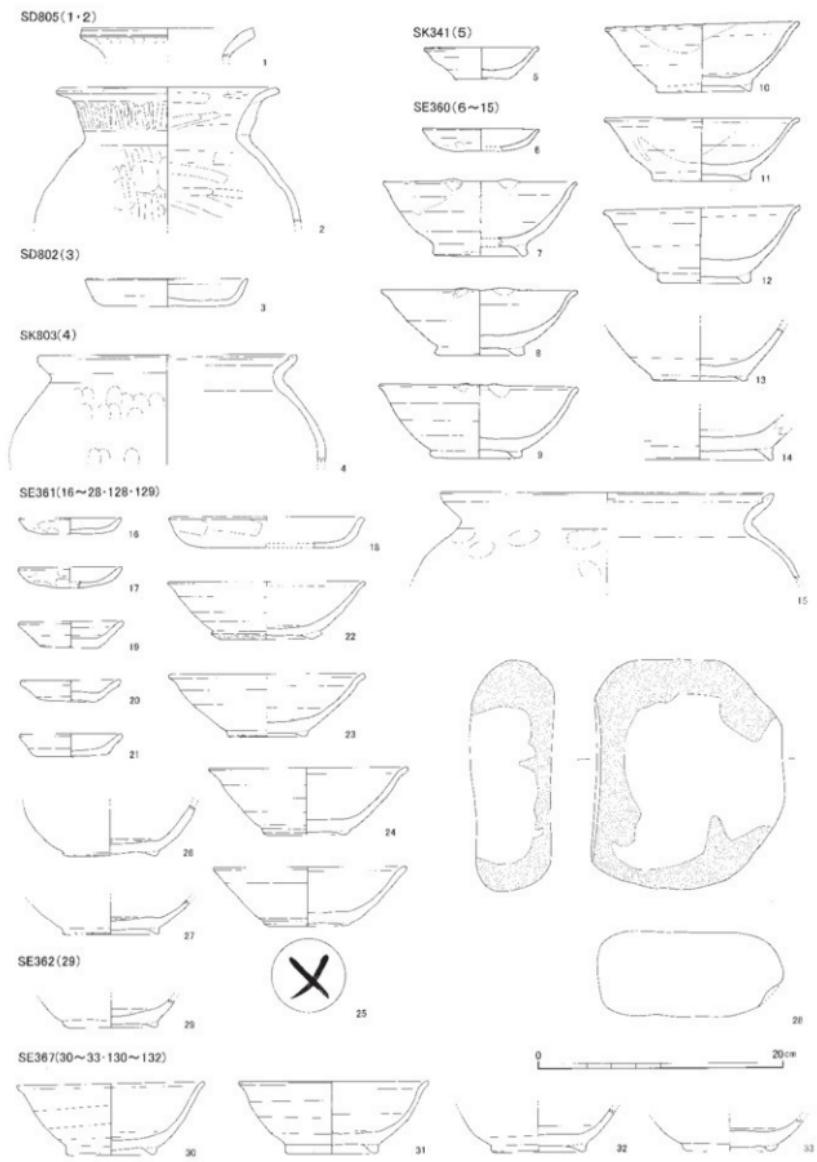
**S D 354 (48~84)** 土師器（皿・鍋）、ロクロ土師器、瓦器、「山茶碗」（碗・小碗・鉢）、青磁、白磁、土鍤などがある。48~51は、口縁部にヨコナデが施される非ロクロ成形の土師器皿。「山茶碗」の碗皿類には、尾張系（52~56・61~65・70）と渥美系（57~60・66・72~74）の製品が混在する。灰釉陶器の最末期のもの（71）から山茶碗編年第7型式に比定されるもの（64）まで見受けられるが、大半は第4・5型式に相当する。78は渥美系の短頭壺である。75~77は土師器の伊勢型鍋で、頭部が短く、口縁端部の折り返し部は丸く肥厚しているもの（75・76）や、頭部が長く口縁折り返し部が瘤むもの（77）がある。土師器鍋編年の（仮）A段階や第1段階に比定できよう。79~83は磁器で、大宰府分類の白磁IV類（79・80）の碗、白磁V類（81）の碗、白磁VI類（82）の皿、龍泉窯系青磁I類（83）の碗がある。84は土鍤である。

出土遺物には11世紀から13世紀台までの幅が認められる。

**S D 358 (85)** 山茶碗編年第5型式に比定される尾張系の「山茶碗」（小皿）である。

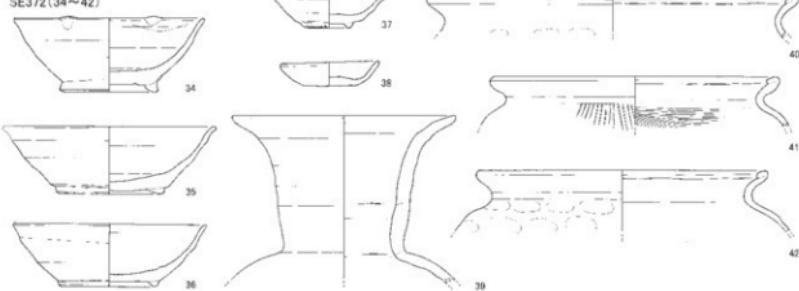
**S D 363 (86~89)** 土師器（皿）、「山茶碗」（碗）などがある。86は非ロクロ成形の土師器小皿で、底部から口縁部へ直角に立ち上がる。87は渥美系、89は尾張系、88は東濃系の「山茶碗」で、89は山茶碗編年第5型式もしくは第6型式、88は東濃窯編年<sup>7)</sup>の大烟大洞4号窯式に比定できる。

中世前期の範囲にはほぼ治まるが、年代的なまとまりに欠ける。

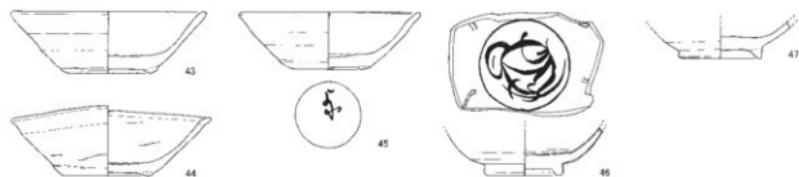


第28図 a地区 出土遺物実測図1 (1 : 4)

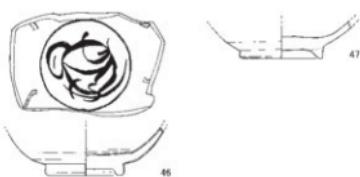
SE372(34~42)



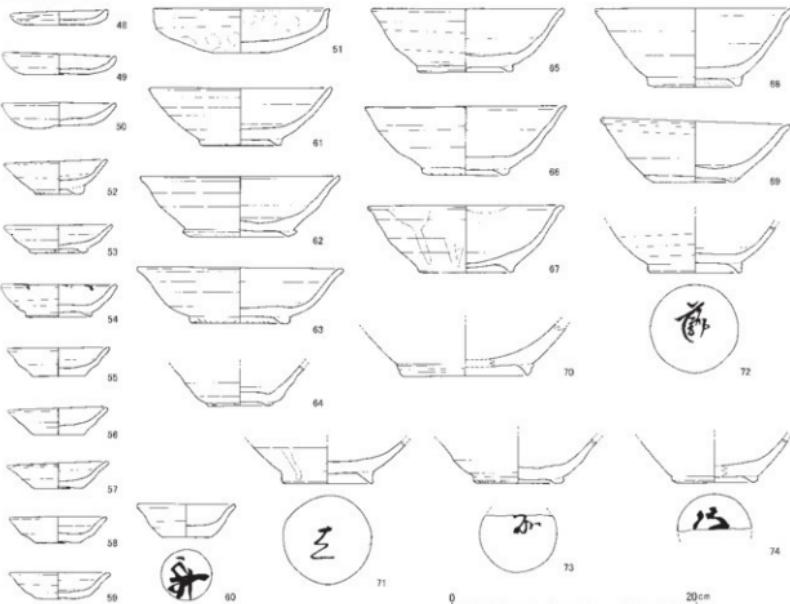
SE376(43~46)



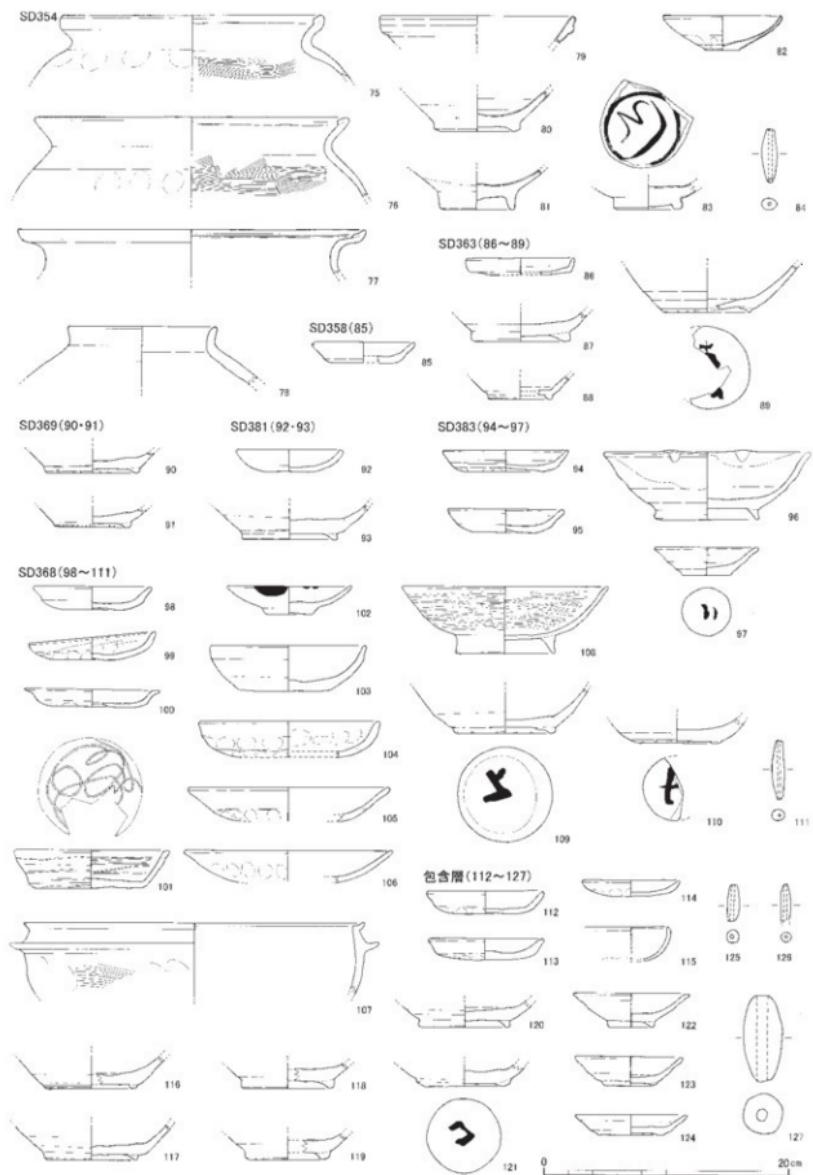
SD353(47)



SD354(48~84)



第29図 a地区 出土遺物実測図2 (1 : 4)



第30図 a地区 出土遺物実測図3 (1 : 4)

S D 369 (90・91) どちらも尾張系の「山茶碗」(碗)で、山茶碗編年第5・6型式に比定できる。

S D 381 (92・93) 土師器(皿)、「山茶碗」(碗)がある。92は口縁部にヨコナデが施される非ロクロ成形の土師器小皿。93は渥美系の「山茶碗」である。

S D 383 (94~97) 土師器(皿)、「山茶碗」(碗・小皿)などがある。94・95は口縁部にヨコナデが施される非ロクロ成形の土師器小皿で、胎土も似通っている。96は渥美系の碗、97は尾張系小皿で、ともに山茶碗編年第5型式に相当するものであろう。

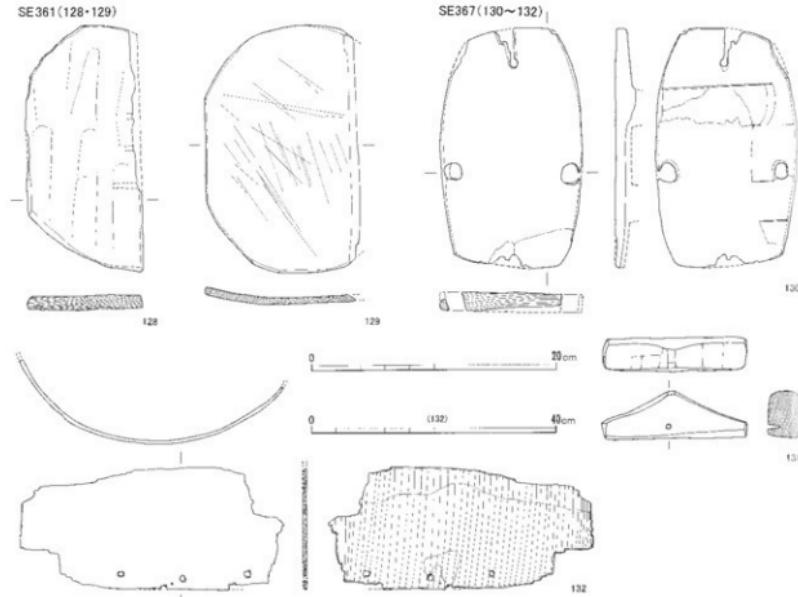
#### d 室町・戦国時代の遺構出土遺物

S D 368 (98~111) 土師器(皿・羽釜)、ロクロ土師器、「山茶碗」(碗・小皿)、土鍤のほか、弥生土器か古式土師器の高杯、古代の土師器(杯・瓶)、黒色土器碗、灰釉陶器瓶、須恵器などもある。

98~100・104は12・13世紀頃の非ロクロ成形土師器皿、101は平安時代前期頃の地域色の強い土師

器杯、102は底部に糸切り痕がのこるロクロ土師器の小皿、103はロクロ土師器かと思われるが底部にヘラ切り痕の残る杯、105・106は口縁部が大きく聞く非ロクロ成形の土師器皿。107は土師器羽釜で、中北勢地域に通有の形態である。108は内面のみ黒化処理が施された黒色土器碗。109・110は「山茶碗」(碗)で、109は山茶碗編年第5型式に比定できる尾張系、110は渥美系である。どちらも底部外面に墨書が認められる。111は土鍤である。

遺物には時期幅があり、溝の埋没過程で混入したと考えられる古代以前のものも多い。溝の調査時には一条の溝として認識され、遺物は一括して取り上げられているが、調査区壁面の土層観察により、新旧2条の溝が重複していたことは明らかである。層位的な検証は出来ないが、最も新しい一群(105~107)が新しい溝の時期を示しているとするならば、最終的な埋没時期は15・16世紀頃になる。古いほうの溝の時期について確実なこと



第31図 a地区 出土遺物実測図4 (1:4) 132は1:8

はいえないが、同じ方向性をもつ周囲の構の時期や、遺物量の時期別多寡をみると、12・13世紀頃と考えるのが妥当であろう。

e 遺構外（表土・包含層など）出土遺物

土師器・須恵器・瓦器・「山茶碗」・青磁・白磁・近世陶磁器・土鍤などが出土した。112～114は土師器小皿、115は土師器皿、116～124は「山茶碗」、125～127は土鍤である。

(木橋)

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2002『惣作遺跡発掘調査報告』
- 2) 「山茶碗」の概念規定および产地分類について  
は、「IV 池新田遺跡の遺構と遺物」の註4～6  
を参照されたい。
- 3) 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I、藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 4) 伊藤裕偉1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol. 1』三重歴史文化研究会
- 5) 本報告書の付論3「木造赤坂遺跡と伊勢平氏・平正度」
- 6) 横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中國陶磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4
- 7) 田口昭二1983『考古学ライブラリー17 美濃焼』  
ニュー・サイエンス社

## VI 木造赤坂遺跡 b 地区の遺構と遺物

### 1 遺構 (第32~45図)

#### a 古代の遺構

堅穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝3条などを検出した。飛鳥・奈良時代に属するものが多いようである。

##### (1) 堅穴住居

S H316 (第33図) 規模は、南北3.0m、東西約3.9m、深さ約30cmである。ほぼ全周する壁周溝とみられる溝があり、北壁のやや東よりにカマドが存在する。この部分では、崩落土及び焼土が確認された。また、土師器長胴甕の口縁部2枚片が対をなし立てられた状態で出土しており、焚き口に据付けた可能性がある。土師器甕、須恵器杯身・壺が出土しており、飛鳥時代の遺構と考えられる。

##### (2) 掘立柱建物

S B329 (第34図) 建物の西側が調査区外のため、全体の規模は不明であるが、桁行1間以上、梁行2間の側柱建物である。柱間は、桁行約2.5m、梁行1.5m~2.0m、主軸方向は、N80°Wである。土師器甕が出土しており、飛鳥・奈良時代の遺構と考えられる。

##### (3) 土坑

S K248 (第45図) 長さ1.4m、幅1.2m、深さ60cmのほぼ円形をした土坑である。土師器の皿・甕等が出土しており、古代に埋没したとみられる。

S K310 (第34図) S H316の北側に位置し、長辺3.5m、短辺3.1m、深さ59cmの隅丸方形の土坑である。出土遺物から飛鳥・奈良時代の遺構と考えられる。S D309とほぼ同時期の遺構と考えられるが、検出状況から、この溝よりも前に埋没したとみられる。

##### (4) 溝

S D233 b地区からc地区にまたがり、調査区の北西から南東を貫く溝である。調査区で確認された範囲で、長さ71.5m、幅2.3m、深さ約130cmである。第7図に示したように断面形状は上部が逆台形、下部が箱型である。遺物としては、少し窪んだ部分

に中世の遺物が見られるが、埋土に含まれる遺物から、飛鳥・奈良時代に機能していたと考えられる。

また、この溝が位置する部分は、第7図に見られるように99層が下降しているところであり、99層形成前は、小規模な谷状地形になっていたものと推察される。なお、この溝の壁面(地山)ではテフラ層が確認された。テフラ層分析の詳細については、後述の自然科学分析の章に記載している。

S D303 長さ8.5m以上、幅1.2m、深さ39cmの溝である。北側と南側は、調査区外に延びる。土師器甕や須恵器が出土しており、古代の溝とみられる。a地区で確認された溝S D802が一直線上にあり、埋土・形状が似ていることから、同一の溝の可能性がある。S D340と重複関係にあり、これより先行する。

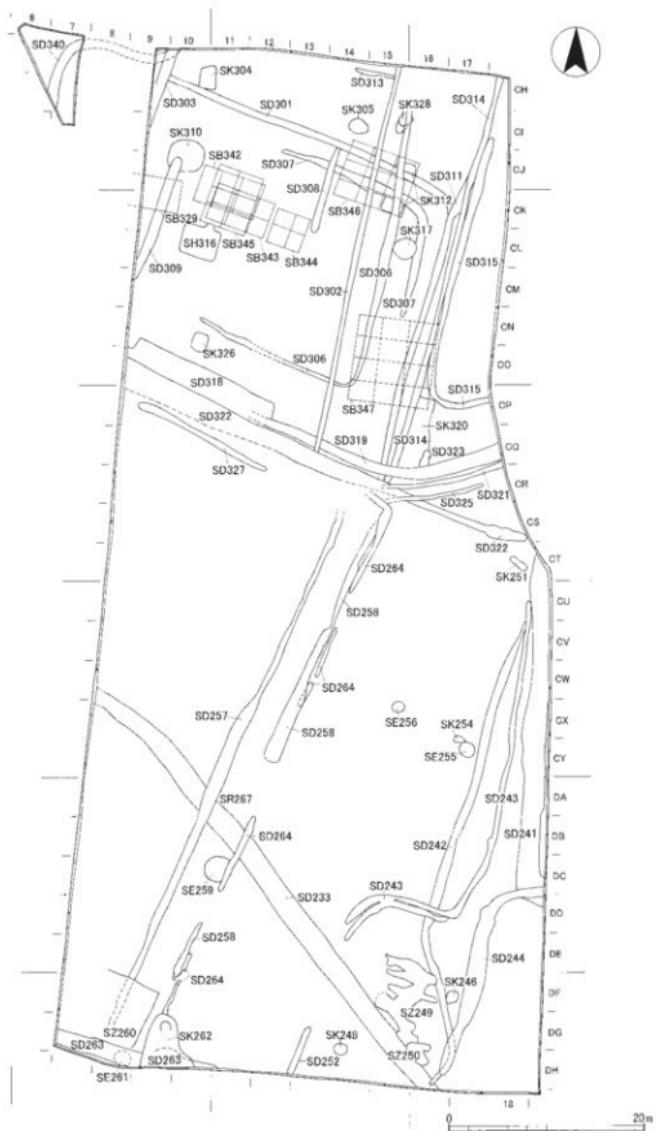
S D309 (第42図) 南側は調査区外になるが、長さ12.6m以上、幅1.0m、深さ13~39cmで、断面形状は逆台形である。暗文土師器、須恵器、土錐等が出土している。SK310で記述したように、SK310埋没後に埋没したと考えられるが、溝がSK310で途切れていること、時期が同時期であることからこの土坑に関連した溝とみられる。

##### (5) 性格不明遺構

S Z249・S Z250 ともに性格不明の不整形の遺構である。S Z249は、長さ7.3m以上、最大幅5.4m、深さ25cmである。S D233・S D242と重複関係があり、これらの溝が先行する。須恵器、土師器・皿・甕、製塙土器が出土している。S Z250は、長さ2.4m以上、幅2.0m、深さ8cmである。S D233・S Z249と重複関係があり、これらの遺構が先行する。須恵器、土師器・甕が出土している。これらの遺構は、出土遺物より古代の遺構とみられる。この周辺は、擾乱による削平が著しい場所であり、表土直下で検出を行っており、遺構の底部のみが残った可能性がある。

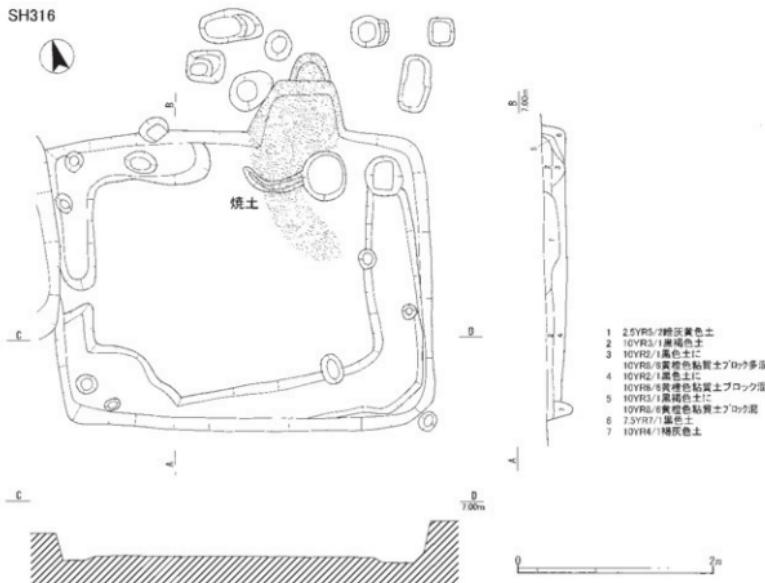
##### b 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

掘立柱建物5棟、井戸4基、土坑・溝等を検出した。溝は、調査区北部で比較的多く検出された。

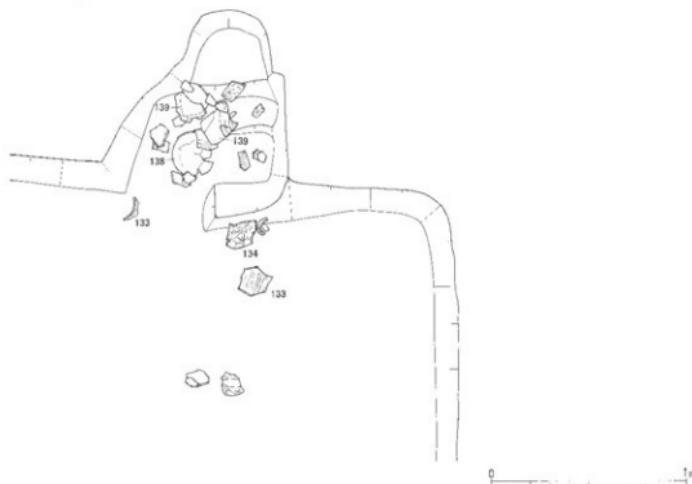


第32図 b 地区主要構造平面略図 (1 : 500)

SH316

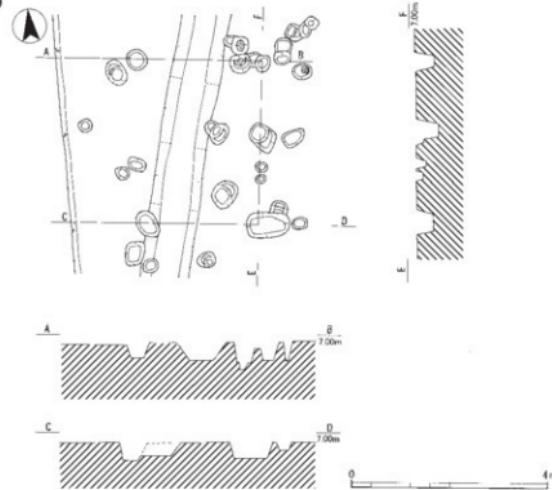


SH316カマド周辺

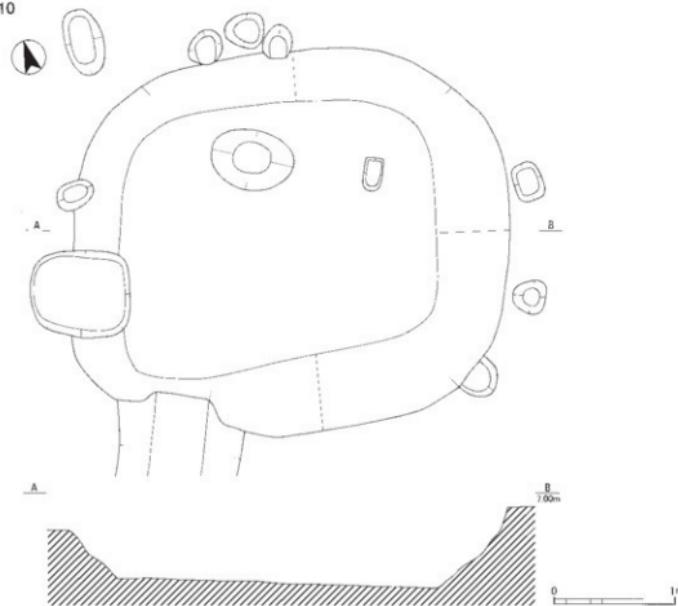


第33図 b 地区 SH316遺構図 (1:50)・カマド周辺遺物出土状況図 (1:25)

SB329



SK310



第34図 b 地区 SB329造構図 (1 : 100)、SK310造構図 (1 : 40)

### (1) 捩立柱建物

調査区北西部で4棟、やや東寄りで1棟の擗立柱建物が検出された。調査区北西部の4棟（S B342～345）は、出土遺物から詳細な時期がわかるものは少ないが、方向性がすべて同じ総柱建物で、重複もしくは近接して建てられていることから、ほぼ同時代の遺構と判断した。

**S B342** (第35図) 柱間3間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行2.0～2.2m×梁行1.8～2.0m、主軸方向はN73°Wである。柱穴から山茶碗、瓦器等が出土しており、平安時代末期～鎌倉時代頃の遺構とみられる。

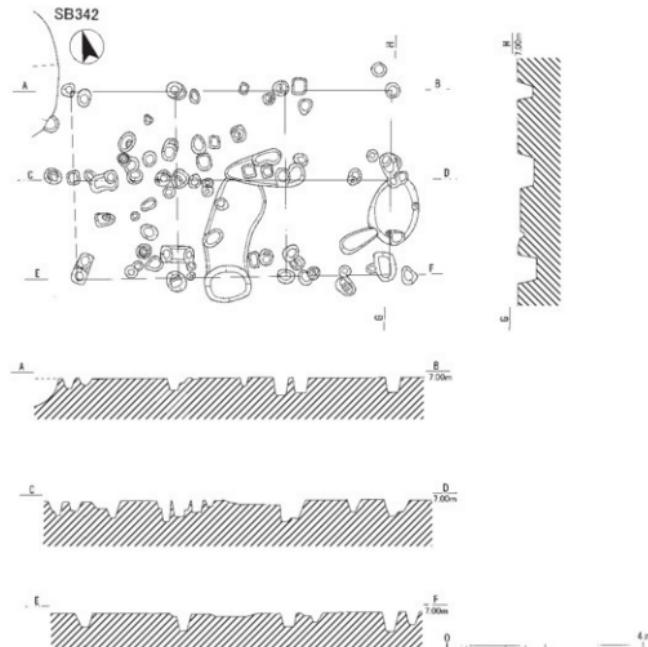
**S B343** (第36図) 柱間3間×梁行2間の総柱建物である。柱間は、桁行1.8～2.4m、梁行1.8～2.0m、主軸方向は、N20°Eである。柱穴から土師器片が出土している。

**S B344** (第36図) 柱間2間×梁行2間の総柱

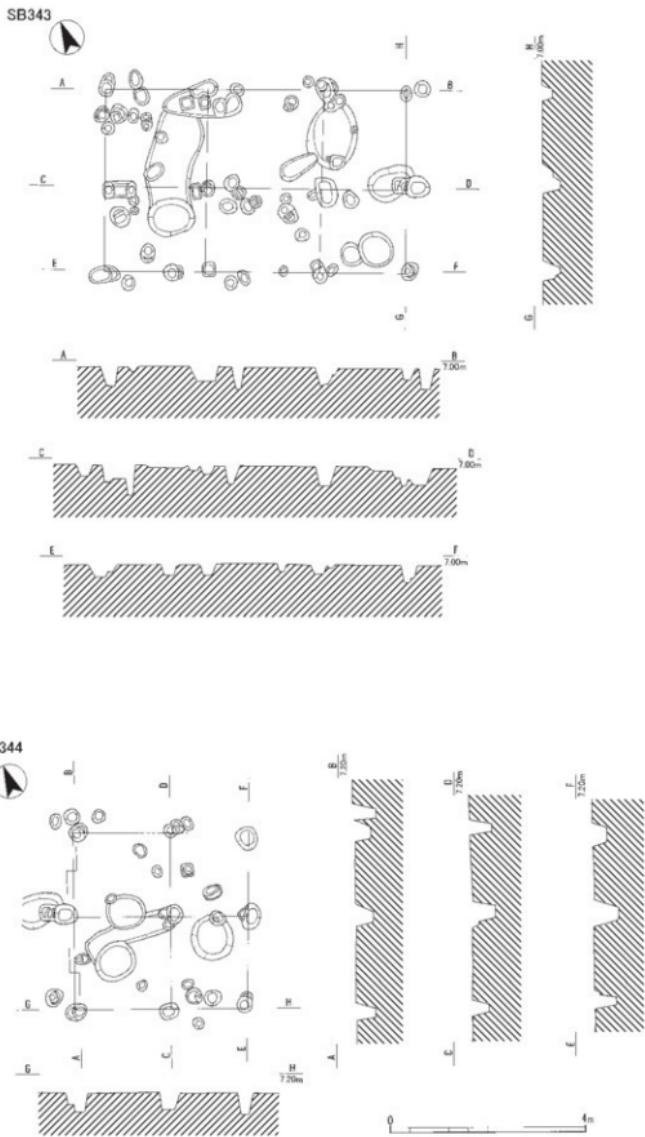
建物である。柱間は桁行1.8～2.0m、梁行1.6～2.0m、主軸方向はN20°Eである。柱穴からは、山茶碗、土師器鍋が出土している。他と比較し小規模でありS B345の主軸方向と一致することから、S B345との関連が考えられる。

**S B345** (第37図) 柱間3間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行1.9～2.1m、梁行2.2～2.4m、主軸方向はN20°Eである。柱穴からは、山茶碗等が出土している。

**S B346・S K312** (第38図) 柱間3間×梁行3間の総柱建物である。柱間は、桁行2.3～2.6m、梁行1.8m～2.0mであり、主軸方向はN22°Eである。S K312は、位置・形状からS B346の付随施設と考えられる。長さ5.2m、幅約2.0m、深さ10cmの方形の土坑である。鎌倉時代の溝（SD306・SD307）に削平されていることや、山茶碗や古代の土師器が出土していることから平安時代末期頃の遺構とみら



第35図 b地区 S B342遺構図 (1:100)



第36図 b 地区 SB343・344遺構図 (1 : 100)

れる。

### (2) 土坑

**S K246** 長さ1.2m、幅1.1m、深さ19cmのほぼ方形の土坑である。須恵器、土師器鍋、山茶碗等が出土している。

**S K251** 長さ2.0m、幅0.6m、深さ48cmの土坑である。山茶碗、ロクロ土師器、瀬戸美濃陶器(天目茶碗)が出土している。土坑のほぼ中央が擾乱されており、天目茶碗は混入とみられる。

**S K254** (第39図) 長さ1.1m、幅0.6m、深さ36cmの土坑である。山茶碗、土師器が出土している。

**S K304** 長さ2.4m、幅1.6m、深さ23cmの台形をした土坑である。山茶碗が出土している。

**S K320** 長さ7.5m以上、幅1.8~2.4m、深さ11cmの土坑である。山茶碗が出土している。S D314・S D319と重複関係があり、これらの溝よりも古いため、鎌倉時代の遺構とみられる。

**S K326** (第39図) 長さ1.9m、幅1.5m、深さ9cmの方形の土坑である。中央に長さ1.9m、幅0.6

m、深さ56cmの窪みがある。山茶碗、土師器が出土している。

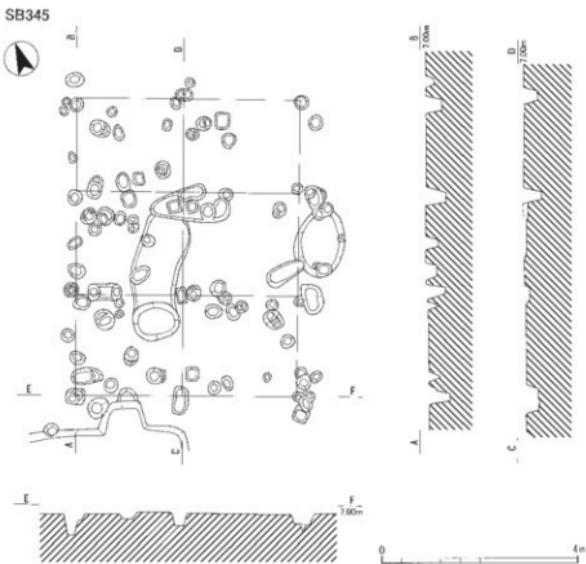
**S K328** 長さ2.1m、幅1.2m、深さ64cmの不整形の土坑である。S D306との重複関係からS D306掘削前に埋没したとみられる。

### (3) 井戸

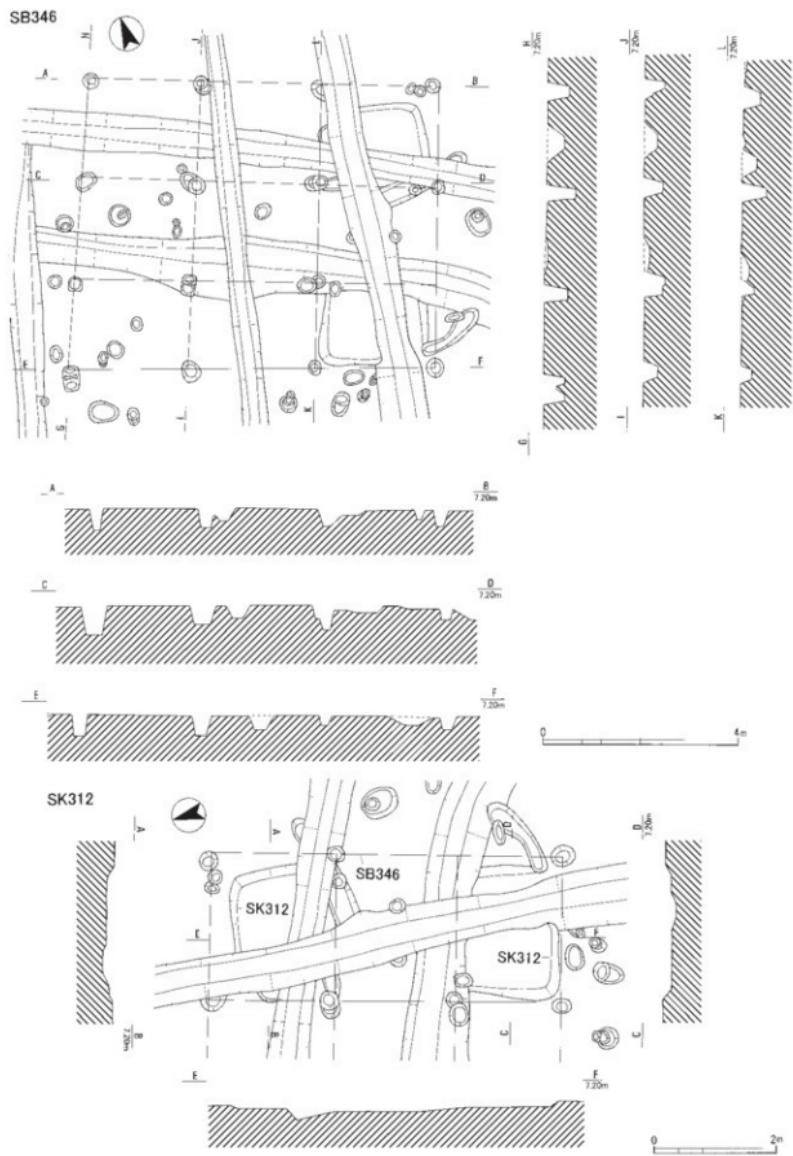
**S E255** (第39図) 長径1.7m、短径1.5m、深さ132cmの素掘りの井戸である。北西側は、長さ112cm、幅136cm、深さ20cm程テラス状に掘削されている。山茶碗、常滑陶器甕、土師器等が出土している。井戸壁面地山の土層観察では、テフラ層が確認されている。

**S E256** (第39図) S E255の北西約7mのところに位置する長径1.3m、短径1.1m、深さ134cmの筒状の素掘り井戸である。山茶碗、土師器皿等が出土しており、S E255と同時期に埋没したとみられる。S E255と同様、井戸壁面地山の土層観察では、テフラ層が確認されている。

**S E259** (第40図) 幅2.7m、深さ157cmのほぼ



第37図 b地区 S B345遺構図 (1 : 100)

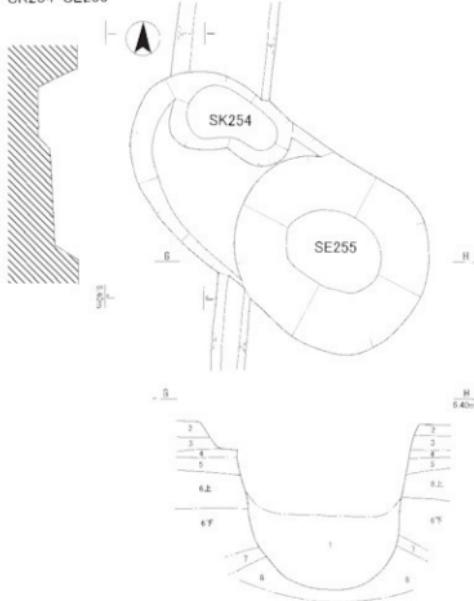


第38図 b 地区 SB346造構図 (1:100)、SK312造構図 (1:80)

円形をした井戸である。断面形状は、途中20cm程度の平坦部があり、底部が幅40cm程円形に掘り込まれている。須恵器、山茶碗、常滑陶器甕、砥石等が出土している。その大部分は、鎌倉時代までの遺物であり、この時期に埋没したものとみられる。中世後期とみられる土師器鍋もみられたが、S D264と重複しており、この溝の遺物が混入したものと考えられる。

**S E 261** (第40図)　　幅約1.5m、深さ130cmの円筒形をした井戸である。山茶碗、土師器鍋等が出土している。S D263と重複関係にあり、上部は、この溝に削平されている。中世後期とみられる土師器鍋はこの溝の遺物が混入したものとみられる。

SK254・SE255

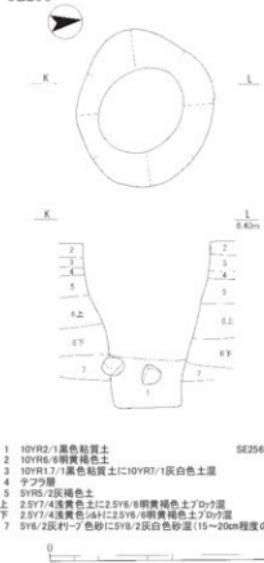


- 1 10YR2/1黒色粘質土
- 2 10YR8/6明黄色土
- 3 10YR1/1藍色粘質土に10YR7/1灰白色土層
- 4 テフラ層
- 5 SYRS/2灰褐色土
- 6上 2.5Y7/4浅黄色土に2.5Y6/6明黄色褐色土ブロック混
- 6下 2.5Y7/4浅黄色土に2.5Y6/6明黄色褐色土ブロック混
- 7 2.5Y5/6黄褐色シルト
- 8 8DGS/1青灰色土に礫混

SE255埋土



SE256



SE256埋土

- 1 10YR2/1黒色粘質土
- 2 10YR8/6明黄色土
- 3 10YR1/1黒色粘質土に10YR7/1灰白色土層
- 4 テフラ層
- 5 SYRS/2灰褐色土
- 6上 2.5Y7/4浅黄色土に2.5Y6/6明黄色褐色土ブロック混
- 6下 2.5Y7/4浅黄色土に2.5Y6/6明黄色褐色土ブロック混
- 7 5Y6/2灰村-7色砂に5Y8/2灰白色砂混(15~20cm程度の埋土)



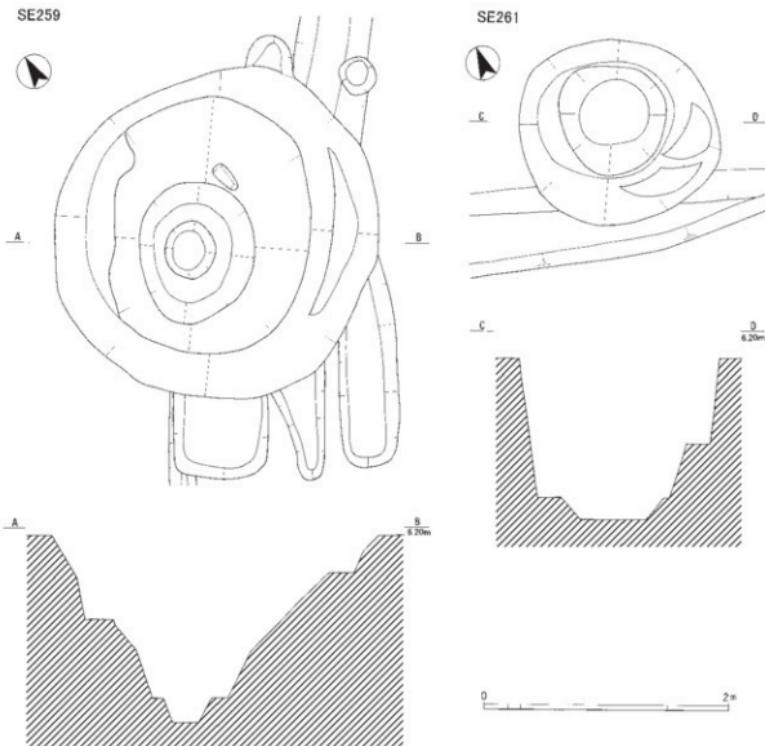
第39図 b 地区 S K254・326・S E255・256遺構図 (1 : 40)

#### (4) 溝

溝8条が検出されている。このうちb地区の北部に位置するSD301・SD306・SD307・SD311は、「(1) 振立柱建物」の項で記述した建物の主軸方向とほぼ一致している。また、建物の周囲に沿う形で掘削している溝もあり、区画溝等これらの建物との関連が推察される。以下、それぞれの溝について記した。

**SD241** (第42図) 長さ35.2m以上、幅2.2m、深さ55cmの溝である。南北溝の南端はL字状に東に屈曲する。断面形状は逆台形をしており、端部が緩やかに傾斜している。土師器鍋、山茶碗等が出土している。東側は調査区外であるが、この形状から区

画溝とみられる。この時代の溝としては、b地区で最大規模の溝である。明治30年3月作成の地籍図では、この溝の東側に方形の区画がみられる。a地区でも同規模の溝SD383が検出されている。2つの溝の南北方向の傾きを比較するとSD383がN2.5°Eに対し、SD241がN3.5°EとややSD241の方が東に傾いているもののほぼ同一の方向を向いている。  
**SD301** (第42図) 長さ31.6m以上、幅0.7m、深さ約20cmの東西溝である。東端は、SD311に削平されており、山茶碗等中世の遺物が出土している。SD311は出土遺物から鎌倉時代の遺構と考えられ、SD311との重複関係からSD301は鎌倉時代の遺構とみられる。



第40図 b地区 SE259・261遺構図 (1 : 40)

**S D 306** (第42図) 長さ44.0m、幅0.6m、深さ16cmの溝である。南北溝の南端で西にL字状に屈曲する。山茶碗、土師器小皿等が出土しており、鎌倉時代に埋没したとみられる。

**S D 307** (第42図) 長さ26.4m、幅0.8m、深さ約10cmの溝である。東西溝の東端で南にL字状に屈曲する。山茶碗、須恵器等が出土しており、鎌倉時代に埋没したとみられる。

**S D 308** 長さ9.0m、幅0.7m、深さ8cmの溝である。出土遺物はないが、重複関係からS D 307より新しく、S D 301より古いとみられ、鎌倉時代の遺構とみられる。

**S D 311** (第42図) 長さ30.5m以上、幅0.7m、深さ15cmの南北溝である。南は、S D 319・S D 322等に削平されている。山茶碗、土師器片が出土しており、鎌倉時代に埋没したとみられる。

**S D 318** 長さ15.3m、幅1.5m、深さ25cmの溝であるが、南側が削平されており、全体の規模は不明である。山茶碗等が出土しており鎌倉時代に埋没したとみられる。

**S D 340** b地区の北西端で確認された長さ16.1m以上、幅0.8~1.0m、深さ20cmの溝である。一部が確認されたのみで、詳細は不明である。南北方向は、S D 306・S D 307・S D 311と同一方向に掘削されているが、北端で東に屈曲し、その後調査区外へ延び、再び調査区内に入るが、その後北に屈曲し調査区外に出る。

### c 中世後期の遺構

b地区南部で溝が確認された。

#### (1) 溝

**S D 243・S D 252** 長さ47.5m、幅0.5m、深さ16cmの溝であり、南北溝の南端で西に屈曲し、更に南へ屈曲する。南端付近は擾乱による削平が著しく、表土直下で遺構検出を行っていることから遺構の底部のみを検出している可能性がある。このため、遺構全体の状況については不明瞭である。山茶碗、土師器（鍋・小皿）が出土している。この溝の南の方向にS D 252が検出されている。S D 252は、長さ5.2m、幅0.6m、深さ4cmの溝であり、南側は調査区外に延びる。2つの溝が一連のものである可能性がある。

**S D 244** (第42図) 長さ21.8m以上、幅0.7~2.0m、深さ10cmである。北側はS D 241の方向に屈曲し、S D 241の端と重複し調査区外に延びる。擾乱による削平が著しく、表土直下で遺構検出を行っていることから南端については不明瞭である。遺構の底部のみを検出している可能性がある。須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器鍋等が出土しており、中世後期に埋没したものとみられる。明治30年3月作成の地籍図の溝とはほぼ一致し、地籍図では、東側に方角の区画がみられる。

**S D 263** b地区南端で確認された長さ17m以上、幅1.7m、深さ21cmの溝である。灰釉陶器碗、山茶碗、土師器鍋等が出土しており、中世後期に埋没したものとみられる。上述の地籍図字界及び道路と一致する。

### (2) 道路

**S D 257** (第41図) 長さ57.5m以上、幅0.6~1.8m、深さ約20cmの溝である。検出状況から1.8m程の幅を掘削している時期と80cm程の幅を掘削している時期があり、幅の狭い方が先行する。古代から中世後期にわたる遺物が出土している。

**S D 258** (第41図) 部分的に途切れるが、長さ52m以上、幅0.4~1.5m、深さ5cmの溝である。古代から近世にわたる遺物が出土している。

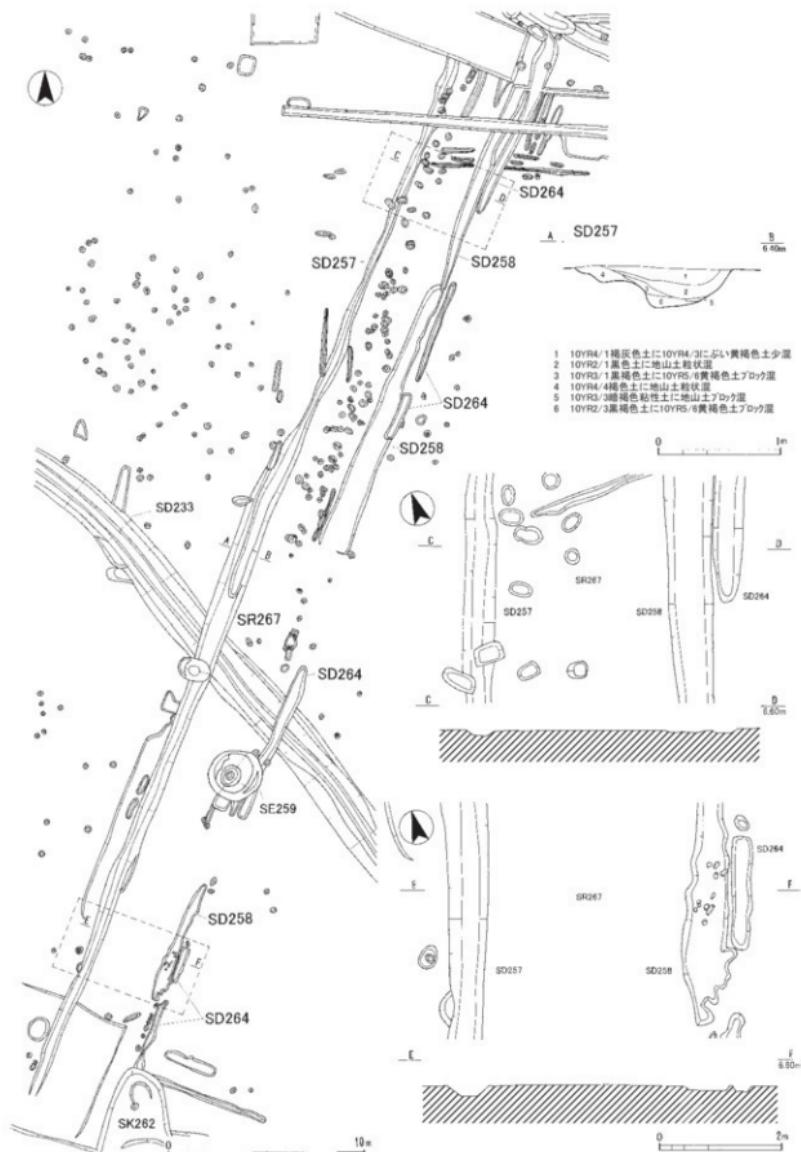
**S D 264** (第41図) 部分的に途切れるが、長さ57.0m以上、幅0.3~0.6m、深さ7cmの溝である。遺物は出土していない。S D 258と重複関係にあり、S D 264が先行する。

**S R 267** (第41図) S D 257を西側溝、S D 264を東側溝とする幅約4mの道路とみられる。北側は、東側溝の状況から西側に屈曲すると考えられる。南端は不明瞭であり、どのように延びるか不明である。また、S D 258もこの道路の方向に掘削されたものであり、S R 267に閑闊した遺構の可能性がある。S E 259との重複関係や溝の出土遺物から中世の遺構と考えられる。

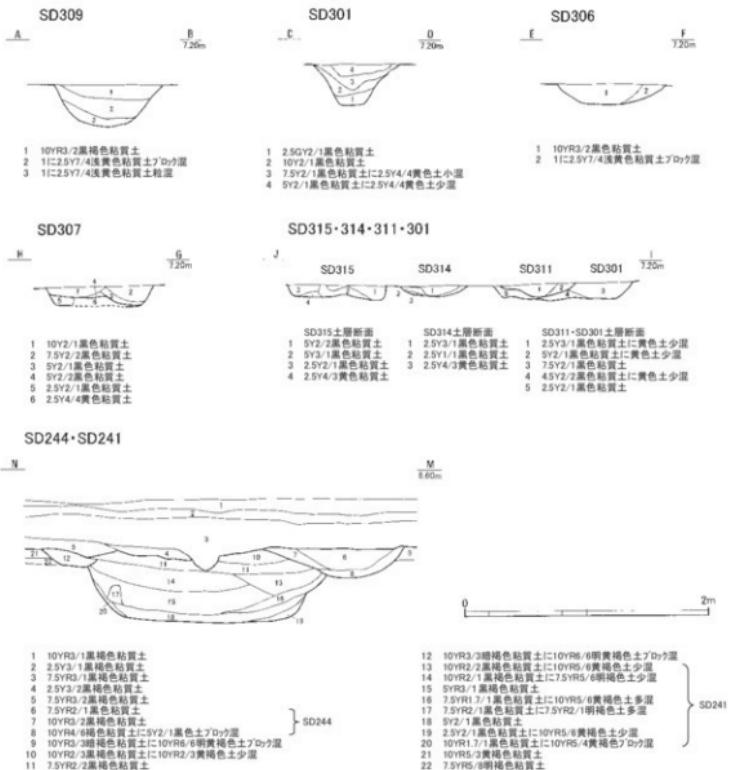
### d 近世の遺構

**S D 302** 長さ40.2m、幅0.4m、深さ24cmの南北溝である。陶磁器片、瓦、土師器等が出土している。

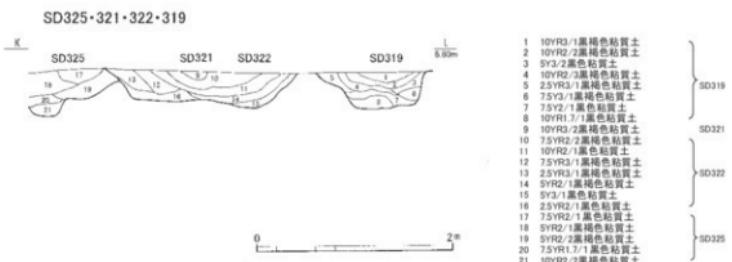
**S D 319** (第43図) b地区的ほぼ中央に位置する長さ25.5m、幅1.0~1.5m、深さ40cmのほぼ東西



第41図 b 地区 S R267遺構図 (1 : 250) (1 : 80)、S D257土層図 (1 : 40)



第42図 b地区 S D241・244・301・306・307・309・311・314・315土層図 (1 : 40) ※付図2参照



第43図 b地区 S D319・321・322・325土層図 (1 : 50) ※付図2参照

にわたる溝である。断面は、逆台形である。土師器皿、近世磁器、瓦等が出土している。

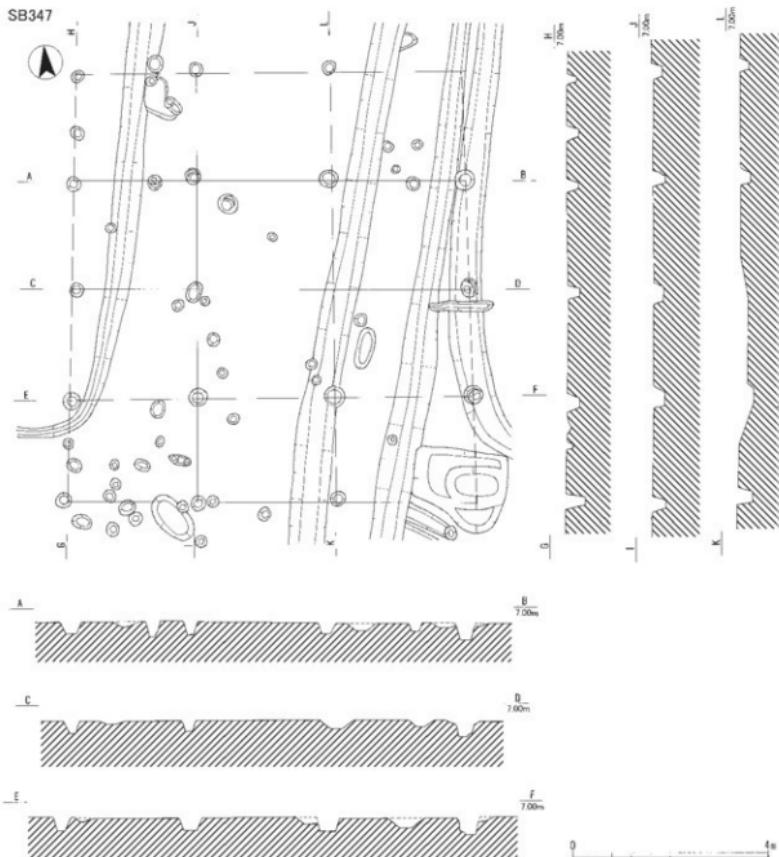
**S D 321** (第43図) S D319・S D325に平行する長さ27.0m以上、幅0.4m、深さ10cmの小規模な溝である。S D322と重複関係があり、S D322が先行する。

**S D 322** (第43図) 長さ44.2m以上、幅0.5~2.0m、深さ35cmの東西にわたる溝である。S D325と重複関係があり、S D325より古い。須恵器、土

師器(皿・鍋)、山茶碗、瀬戸美濃陶器(天目茶碗)、瓦等が出土している。

**S D 325** (第43図) S D319・S D321に平行する長さ33.0m以上、幅0.9m、深さ22~45cmの溝である。山茶碗、瓦が出土している。

**S D 327** S D322に平行する長さ14.6m以上、幅0.6m、深さ30cmの溝である。東端は、削平され不明瞭である。土師器、山茶碗等が出土している。S D319からS D327はほぼ同一方向に掘削されてお



第44図 b 地区 SB347遺構図 (1 : 100)

り、ほぼ同じ場所を何度も掘り返し利用していたとみられる。S D319・S D321・S D325は、東側でやや北に屈曲する点も共通する。S D322のみ東西に直線状にのびる。また、平安時代末期～鎌倉時代の溝S D301・S D306・S D307の方向とほぼ一致することや、これらの溝と出土遺物が一致することからS D301等と同時期から溝が掘削され、近世にかけて何度か掘り返しながら利用したと考えられる。また、この溝境が上述の地籍図字界、道路と一致している。

#### e 時期不明の遺構

**S B347** (第44図) 柱行4間×梁行3間の総柱建物である。柱間は、桁行2.1～2.3m、梁行2.5～2.8m、主軸方向は、N 8° Eである。柱穴からは、須恵器杯身が出土している。S D311・S D315と重複関係があり、S B347が先行する。

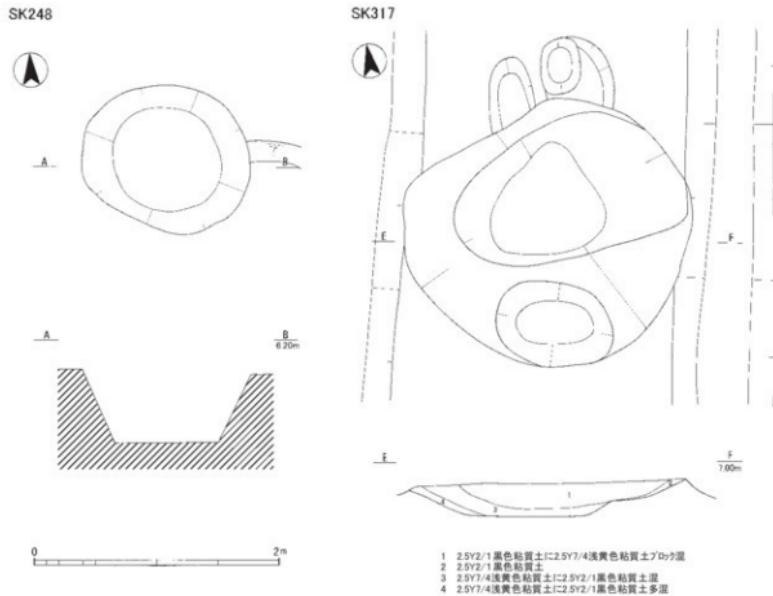
**S K262** 長さ5.6m以上、幅5.0m以上、深さ25

cmの土坑である。須恵器、土師器皿、羽釜、山茶碗、陶器鉢等が出土している。S D263と重複関係にあり、S D263が先行する。これらのことから、中世後期以降のものとみられる。

**S K305** 長さ1.9m、幅1.6m、深さ23cmの土坑である。遺物は出土していない。

**S K317** (第45図) 長さ2.4m、幅2.2m、深さ30cmの土坑である。遺物は出土していない。S D306やS D307と重複関係があり、これらの溝が先行するため、鎌倉以降の遺構とみられる。

**S D242** 長さ50.5m以上、幅0.8m、深さ15cmの溝である。南側は、表土直下で検出し、北側はS D243に削平されている。10mほど南のc地区で検出された平安時代末期～鎌倉時代の道路（S R266）の東側溝（S D239）と規模・深さが似ていることからつながる可能性も想定できるが、対になる西側溝や路面・路面下施設などは確認されなかった。調



第45図 b 地区 S K248・317遺構図 (1 : 40)

査時の重複関係の所見によると、飛鳥・奈良時代の溝 S D233よりも新しく、平安時代前半頃の遺物が出土した性格不明遺構 S Z249よりも古い。出土遺物には平安前期の土師器杯や室町時代頃の土師器皿の小片が少量あるのみで、時期判定は困難である。

**S D313** 長さ4.6m、幅0.2~0.5m、深さ2~5cmである。山茶碗小皿が出土している。

**S D314** (第42図) 長さ43.0m、幅0.6m、深さ20cmの南北溝である。S D311を削平しており、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

**S D315** (第42図) 長さ33.7m、幅0.6m、深さ17cmの溝である。南北溝の南端で東へL字状に屈曲する。出土遺物がなく埋没時期は不明である。

S D306と規模がよく似ており、北端の基点及びL字状に折れ曲がる地点が対照的になっていることから2つの溝が関連している可能性がある。

**S D323** 長さ4.0m、幅0.9m、深さ17cmの溝である。山茶碗が出土している。S D319と重複関係があり、S D323の方が先行する。

## 2 遺物 (第46~49図)

### a 古代の遺構出土遺物

**S H316** (133~139) 133・134・137・138は、土師器甕である。133・134は長胴甕で、体部には内外面ともハケ調整が施されている。137の外側は、ハケ調整後ヘラケズリが施される。138は口縁部が欠損し、欠損部から5cm程度外面にススが付着している。139は、土師器の把手付鍋である。外側は、ハケ調整後ケズリが施されているが、底部については、磨減のため調整が不明瞭である。135・136は須恵器杯身である。

**S B329** (140) 140は土玉である。

**S K310** (141~144) 141・142は、土師器杯である。142には内側面に2段の放射状暗文、見込みに螺旋状暗文があり、体部外側には横方向にミガキが、口縁部にはヨコナデが施されている。143は須恵器杯身。144は須恵器短頸甕で、体部外側にはカキ目が施されている。

**S D233** (149~175) 149・150・160・162は土師器杯である。160には放射状と螺旋状の、162には螺旋状の暗文がある。体部外側には横方向にミガキ

が、口縁部はヨコナデが施される。152は土師器高杯の脚部である。かなり風化している。161は土師器甕である。内面には放射状と螺旋状の暗文がみられ、外側にはヘラケズリが施される。153~159は土師器甕である。153は口縁部をヨコナデし、体部外側は縱方向に、内面は口縁端部付近までハケ調整されており、外側にススが付着している。157は磨減し調整が不明瞭である。163は須恵器杯蓋、164~168は須恵器杯身である。164は明瞭にヘラ切りの痕跡がのこる。166はヘラ切り後、ナデ調整される。169は須恵器蓋、170・171は須恵器高杯の脚部、172・173は須恵器長頸甕である。174・175は台石である。174の中央には敲打痕がみられ、一部被熱のためか黒変している。

**S D303** (268・269) 268は須恵器杯蓋としたが杯身の可能性もある。269は土師器甕の口縁部小片で、内外面にヨコナデが施される。

**S D309** (145~148) いずれも細身の土錐である。

**S Z249** (271~273) 271~273は土師器杯の口縁部である。272は、やや丸みを帯び273はやや外反する。

b 平安時代末期~鎌倉時代の  
遺構出土遺物

**S B342** (176) 176は山茶碗で、内面にススが付着している部分がある。

**S B346** (177) 177は土師器甕の口縁部小片である。

**S K246** (181) 181は土師器鍋の口縁部小片である。いわゆる南伊勢系土師器鍋<sup>1)</sup>の第1段階とみられる。

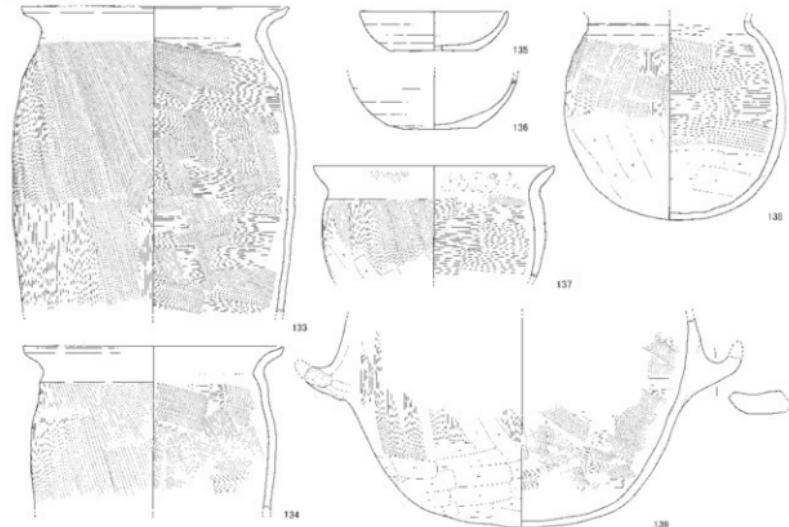
**S K251** (182・183) 182は土師器小皿である。底部が内側にやや突出している。内外面とも風化が著しいため、調整は不明瞭である。183は山茶碗底部で、高台は低く粗雑である。

**S K304** (184) 184は山茶碗底部で、糸切り痕が明瞭に残る。高台の貼付けが雑である。

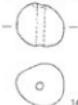
**S K312** (178・179) 178は山茶碗の小碗で、胎土に砂粒を含んでいる。179は山茶碗の底部小片で、自然釉、初穀痕がみられる。

**S K320** (180) 180は山茶碗の底部小片で、自

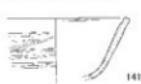
SH316(133~139)



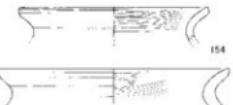
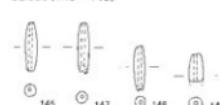
SB329(140)



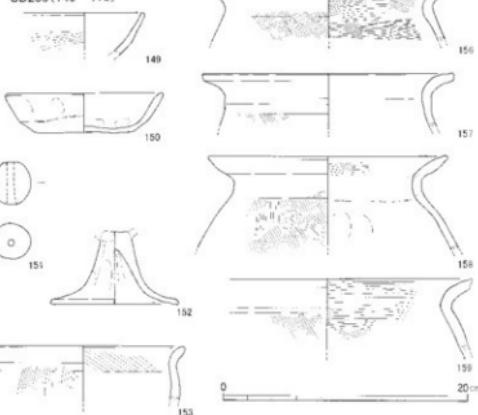
SK310(141~144)



SD309(145~148)

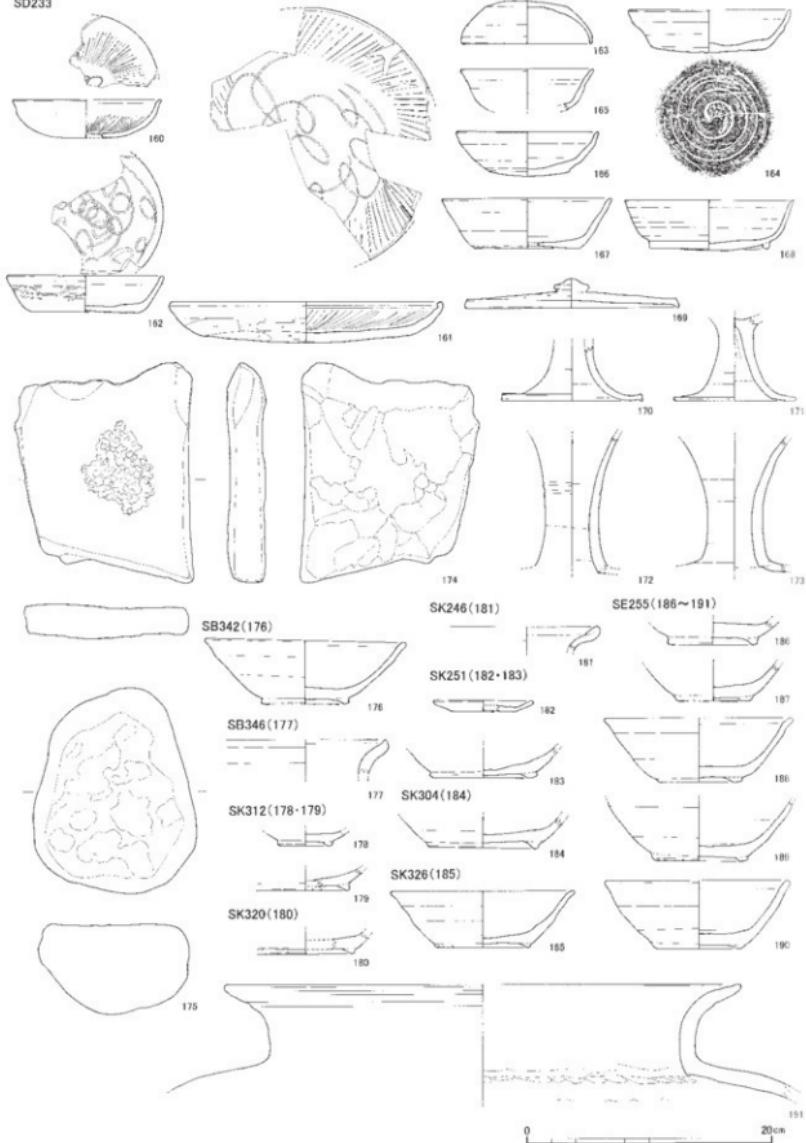


SD233(149~175)

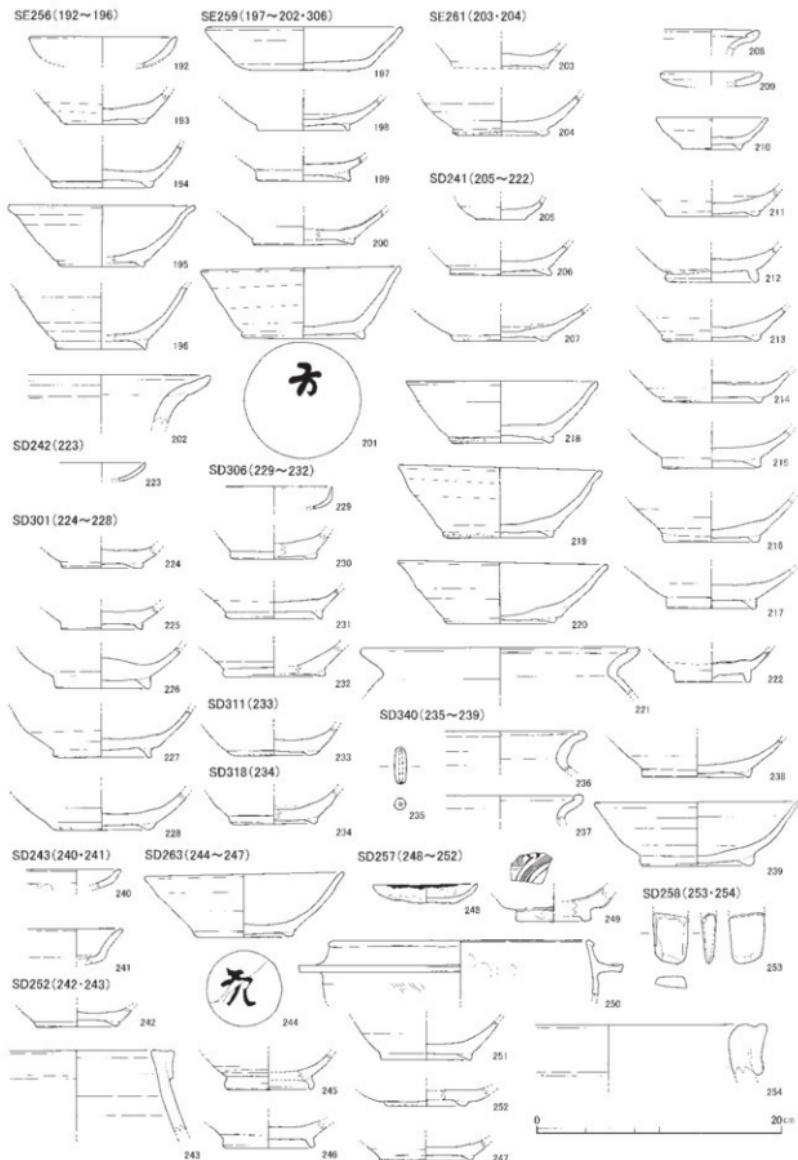


第46図 b 地区 出土遺物実測図 1 (1 : 4)

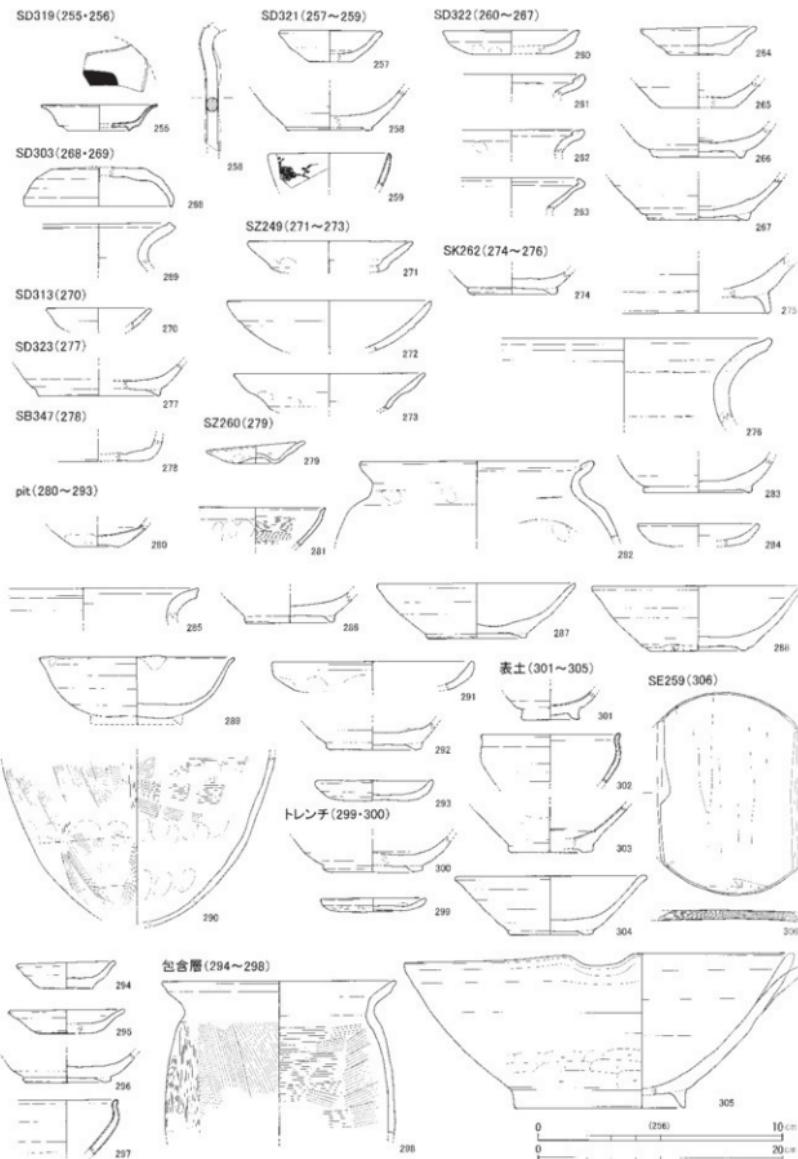
SD233



第47図 b 地区 出土遺物実測図 2 (1 : 4)



第48図 b 地区 出土遺物実測図 3 (1 : 4)



第49図 b地区 出土遺物実測図4 (1 : 4) 256は1 : 2

然軸、粗穀痕、砂粒痕がみられる。

**S K326** (185) 185は尾張系の山茶碗で、高台には粗穀痕がみられる。

**S E255** (186~191) 186~190は山茶碗である。186は内外面ともススが付着している。187は内面に厚く自然軸がみられ、割れ目にガラス質が付着する。底部はナデ調整される。188は自然軸がみられ、口縁部はやや外反する。高台は低く底部外面はナデ調整される。189は明瞭に粗穀痕、糸切痕が見られ、内面に少しススが付着する。190の内面には自然軸が見られ、内外面にススが付着しており、内面特に厚く付着している。口縁部は歪みが大きい。191は常滑陶器甕である。口縁部は内外面共に自然軸がみられ、沈線が施される。12世紀中頃のものとみられる。

**S E256** (192~196) 192は土師器皿の口縁部片であり、内外面ともナデ調整される。193~196は山茶碗である。193の底部内面には比較的厚くススが付着している。195・196はともに内外面及び破断面にススが付着し、195は内面に特に厚く付着している。

**S E259** (197~202・306) 197はロクロ土師器杯である。198~201は山茶碗である。200の内面には自然軸がみられ、重ね焼痕がある。201の底部外面には「方」の墨書きがみられる。202は常滑陶器甕である。S E255出土品 (191) と非常に似ており、おそらく同一個体とみられる。306は曲物底板で、木釘孔が2箇所確認できる。

**S E261** (203・204) 203・204は山茶碗である。204の高台には明瞭に粗穀痕がみられる。

**S D241** (205~222) 208は土師器鍋の口縁部小片であり、外面にはススが付着している。209は土師器小皿である。205~207・210~220は山茶碗で、205は小皿、210は小碗、206・207・211~220は碗である。高台には、206・207・210・212・214・218・219に粗穀痕、215・220に砂粒痕がみられる。211の底部内面は磨耗しており、外面にはススが付着している。212の底部には重ね焼痕が明瞭にみられ、高台は色調が異なる。215の底部内面は磨耗しており、高台はやや梢円形を呈し、口縁部に歪みがある。221は土師器甕で、内面がやや黒変している。222は白

磁碗で、見込みは軸が剥ぎ取られている。

**S D301** (224~228) 224~228は山茶碗である。227の内面は少しススが付着している。底部内面は磨耗しており、外面には板状压痕がある。粗穀痕が明瞭にみられる。228の高台は低く粗穀痕がみられる。

**S D306** (229~232) 229は土師器小皿の口縁部小片である。内外面ともヨコナデ調整が施される。230~232はいずれも山茶碗の底部である。231は底部が完存し、胎土は緻密で、糸切り痕が明瞭にみられる。

**S D311** (233) 233は山茶碗で、高台は低く、粗穀痕がみられる。高台内には糸切り痕がみられる。

**S D318** (234) 234は山茶碗で、高台には粗穀痕がみられる。

**S D340** (235~239) 235は土鍾、236・237は土師器甕の口縁部小片で、いわゆる南伊勢系土師器鍋の(仮)A段階に相当するとみられる。236外面には多量のススが付着する。238・239は山茶碗である。239は自然軸が付着し、粗穀痕がみられる。

### c 中世後期の遺構出土遺物

**S D243** (240・241) 240は土師器小皿の口縁部小片である。口縁部はやや外反し、ヨコナデ調整される。241は土師器杯の口縁部小片である。

**S D252** (242・243) 242は山茶碗の底部小片である。内面には自然軸がみられ、高台内には糸切り痕がみられる。243は常滑陶器甕の口縁部小片で、自然軸がみられる。

**S D257** (248~252) 248は土師器小皿である。内外面ともユビオサエ後ナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整される。口縁端部にススが付着しており灯明皿として利用された可能性がある。249は青磁碗、250は土師器羽釜である。羽釜の外面にはススが付着している。251・252は山茶碗であり、252の高台には粗穀痕がみられる。

**S D258** (253・254) 253は砥石。254は常滑陶器甕の口縁部小片で、外面に自然軸が付着する。

**S D263** (244~247) 244・246・247は山茶碗である。244の高台は半分程はがれており、高台内には糸切痕があり墨書きが施される。247は高台が歪み、内面には自然軸がみられる。245は灰釉陶器椀

である。

#### d 近世の遺構出土遺物

S D 319 (255・256) 255は染付磁器の皿、256は鉄釘である。

S D 321 (257～259) 257・258は山茶碗の小皿と碗で、258の底部内面と高台端部は磨耗している。259は染付磁器の碗である。

S D 322 (260～267) 260は土師器皿である。内面にはナデ、外面にはユビオサエ後ナデ、口縁端部にはヨコナデが施される。261～263は土師器鍋の口縁部小片で、いずれも外面にはススが付着している。261・262は南伊勢系土師器鍋の第1段階に、263は第4段階に相当するとみられる。264は山茶碗小皿、265～267は山茶碗であり、265は高台が付かず、底面には糸切痕がみられる。267は粗雑な高台に初穀痕がみられ、底部内面は磨耗している。

#### e 時期不明の遺構出土遺物

S B 347 (278) 278は須恵器杯身である。

S K 262 (274～276) 274は山茶碗で、高台に砂粒痕がみられる。275は鉢の底部小片であり、山茶碗と同じ窯で焼かれたものである。276は常滑陶器窯の口縁部小片であり、内面に粘土接合痕や自然釉がみられる。

S D 242 (223) 223は土師器小皿の口縁部小片である。口縁端部付近はヨコナデが施される。

S D 313 (270) 270は山茶碗小皿である。

S D 323 (277) 277は山茶碗で、底部外側はナデ調整される。

S Z 260 (279) 279は土師器小皿であり、内外面ともススが付着している。底部が内側に突出するいわゆる「へそ皿」である。

#### f ピット出土遺物

280は白磁皿、281は瓦器椀の口縁部小片である。内面はミガキ調整され、外面はユビオサエ、口縁部はヨコナデ調整される。282は土師器鍋であり、内外面はともにユビオサエ、ナデ調整され、外面には多量のススが付着する。いわゆる南伊勢系土師器鍋の（仮）A段階に相当するとみられる。284・293は土師器小皿である。293の底部内面はナデ調整され、底部外側はユビオサエ、ナデ調整される。口縁部はヨコナデ調整される。285・290は土師器甕である。

290の底部は焼成後穿孔された可能性がある。291は土師器皿の口縁部片である。283・286～289・292は山茶碗である。287の高台は低く一部ははがれいる。初穀痕がみられる。288も高台は低く初穀痕がみられ、内外面及び破断面にススが付着する。289は自然釉がみられ、輪花が3箇所施される。底部内面は磨耗している。高台ははがれています。

#### g 遺構外（表土・包含層など）出土遺物

294・295は山茶碗小皿、296・300・304は山茶碗である。296の底部には糸切痕が明瞭にみられ、304の高台は低く砂粒痕がみられる。297・301・302は瀬戸美濃陶器の天目茶碗、303は白磁碗である。298は土師器長胴甕で、内面は横方向に、外面は縱方向にハケ調整が施され、外面に少しススが付着する。299は土師器小皿である。305は山茶碗の窓で焼かれた片口鉢で、外面下半にはケズリ調整が施され、この部分から底部にかけて胎土の粗さが目立つ。

(浅尾)

#### 【註】

1) 伊藤裕偉1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会

## VII 木造赤坂遺跡 c 地区の遺構と遺物

### 1 遺構 (第50~100図)

以下、時代ごとに説明する。道路については、平安時代末期から近世にかけて長期間使用された遺構であるため、時代で区切らずまとめて説明する。

#### a 古墳時代の遺構

堅穴住居3棟、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条を検出した。遺構は南部に集中している。

##### (1) 堅穴住居

**S H57** (第53図) 南端西寄りで検出した小規模な堅穴住居である。主柱穴、壁周溝は確認されていない。埋土最下層で焼土が確認されており、がもししくはカマドの存在が考えられる。この建物の北側では同時期の掘立柱建物S B60が位置しており、この付属施設である可能性がある。

出土遺物には土師器壺や土鍤の他、古墳時代後期の土師器台付甕や須恵器蓋がある。

**S H62** (第52図) 南東部で検出した。主柱穴、壁周溝などは確認されていない。東壁の中央がやや外側へ張り出し、その手前はレンズ状に窪む。建物外側の張り出し部延長上には、溝状の落ち込みが見られる。被熱痕や焼土・炭等、カマドの痕跡を示すようなものは確認されていないが、こうした状況から東壁際にカマドが存在し、建物外の溝状遺構は煙道であった可能性が考えられる。建物規模が小さいことや、後述するS H72との位置関係からS H72の付属施設である可能性が考えられる。

出土遺物には古墳時代後期の土師器甕・壺や須恵器蓋がある。

**S H72** (第52図) 南部東端、S H62の東側に位置する。全体の西半部分を検出した。北壁際の建物に伴う土坑埋土上層で、カマドの痕跡と考えられる焼土が確認されている。壁周溝はカマドの痕跡と考えられる土坑下も含めほぼ全周するが、土坑下の壁周溝埋土は他の部分と違い地山起因の黄橙色土で埋められている。これは、住居構築にあたります四周に壁周溝を設け、その後カマド部分の壁周溝を埋めた後にカマドを造り付けたことを示している。

主柱穴は2基確認した。そのうちの1基から土師器台付甕が出土した。住居埋土からは古墳時代後期の須恵器杯身や蓋、土師器台付甕が出土した。

**S D74**は性格不明ではあるが、この住居に伴うものであろう。

#### (2) 掘立柱建物

**S B60** (第53図) 南西部で検出した桁行3間×梁行1間の近接棟持柱建物である。柱掘形は一边約40cmの略方形、柱痕跡は直径20cmの円形を呈する。棟持柱の柱穴が他と比べ若干深い。

柱痕跡から古墳時代後期の須恵器杯蓋や土師器椀もしくは高杯が出土した。

#### (3) 土坑

**S K69** (第54図) 南東部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。床面は平らで、壁面は緩やかに立ち上がる。

古墳時代後期の土師器台付甕・壺や須恵器杯身が出土したほか、縄文土器浅鉢の混入も見られた。

#### (4) 溝

**S D36** (第54図) 南東部で検出した、弧状に巡る小規模な溝である。S H72・S K69と重複関係にあり、これらに先行する。古墳時代の土師器台付甕小片が出土した。

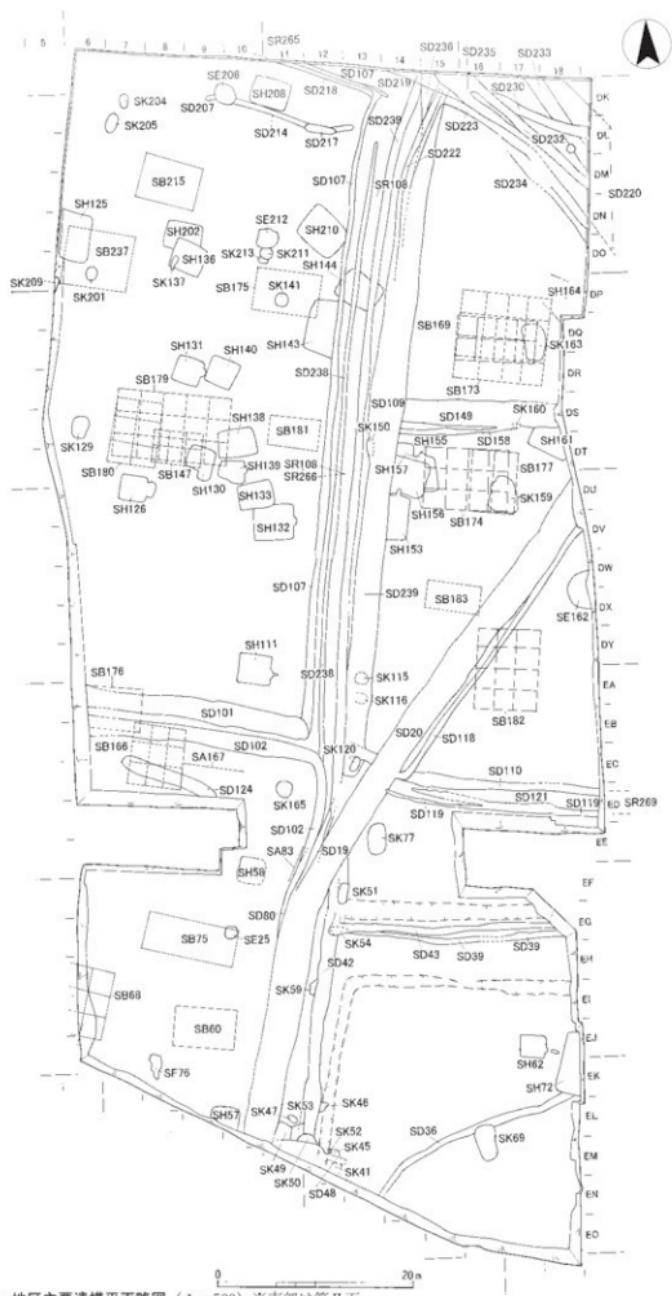
#### b 飛鳥・奈良時代の遺構

堅穴住居21棟、掘立柱建物4棟、土坑1基、溝1条を確認した。調査区北西部に集中している。溝(S D233)は大部分がb地区で確認されているため、b地区に詳述した。

#### (1) 堅穴住居

この時代の堅穴住居は小規模で、長さ・幅ともに3m前後のものが多い。カマドがあるものは、設置された箇所の壁を突き抜けて張り出し部が造られている。ある程度の深さが残っているにもかかわらず、袖が確認されていないのは、造り付けのカマドではなく、移動式窓などを設置して使用していた可能性も考えられる。

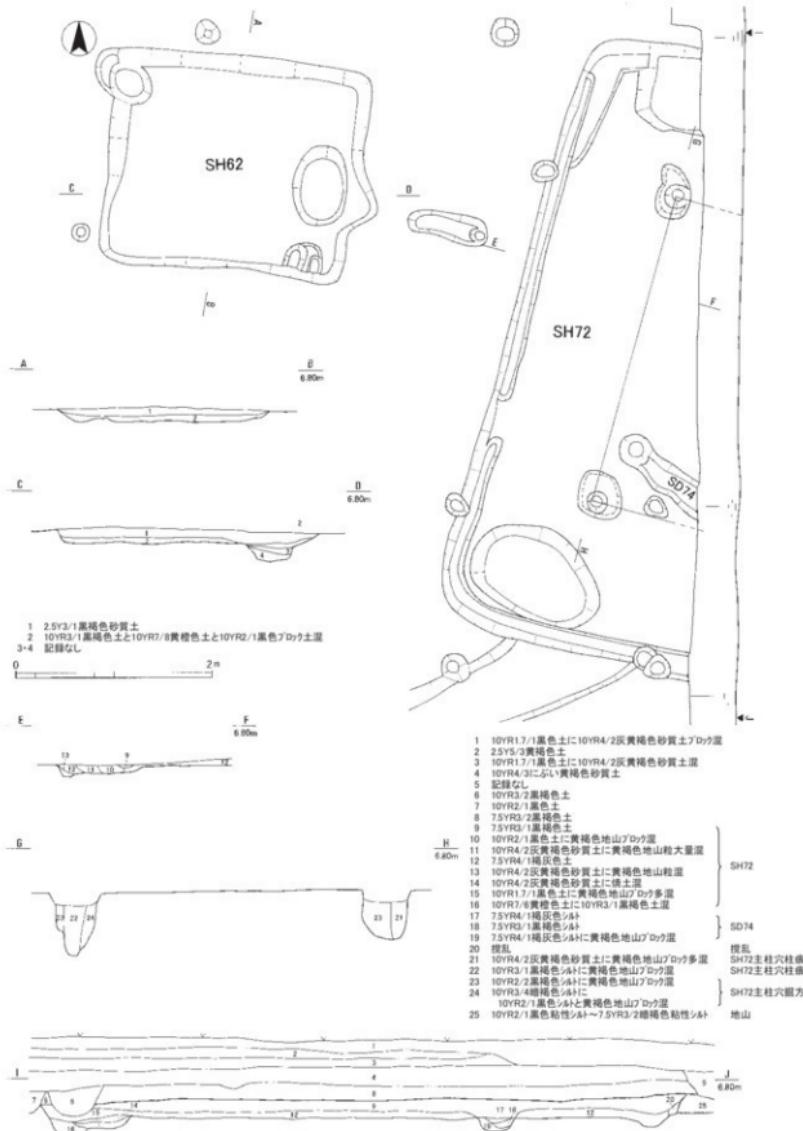
貯蔵穴は南東隅に設けられている場合が多い。貯蔵穴がない場合でも、南東隅に土器が集中して出土



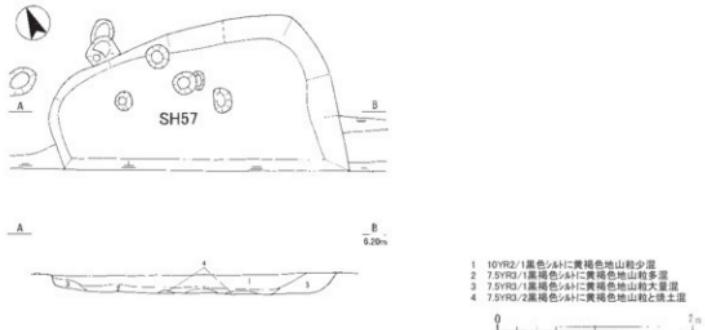
第50図 c 地区主要遺構平面略図 (1 : 500) ※南部は第II面



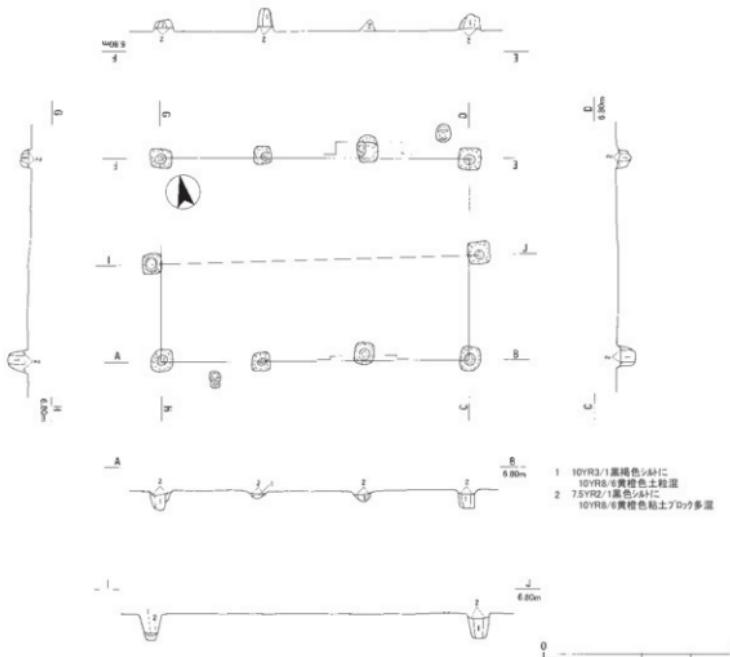
第51図 c地区南部第I面遺構図 (1 : 250)



第52図 c地区 SH62・72遺構図 (1 : 50)



SB60



第53図 c地区 SH57遺構図 (1 : 50)、SB60遺構図 (1 : 100)

する場合が多く、南東隅が保管場所として認識されていたことが窺える。南東隅に貯蔵穴や土器集中が認められるものの大部分は東壁中央付近にカマドが設置されており、カマドの位置と貯蔵穴に一定の法則があったと考えられる。主柱穴、壁周溝はあるものとのないものがある。中央に小土坑があるものがある。1棟（SH208）を除いてそのほとんどが貼床を切って（もしくはその部分にだけ床を貼っていない）設置されている。小土坑からの出土遺物はほとんどない。堅穴機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたものなのかは不明である。

**S H111** (第55図) 中央西寄りで検出した。壁周溝は西側で部分的に認められるが、全周しない。主柱穴は検出されていない。

カマド痕跡と考えられる東壁中央の張り出し部と、張り出し部から延びる長さ約0.6mの煙道に焼土が堆積していた。張り出し部の手前には支柱石の痕跡と考えられる一辺約20cmのピットがあり、その脇には炭の集積が確認された。また、南東隅の張り出し

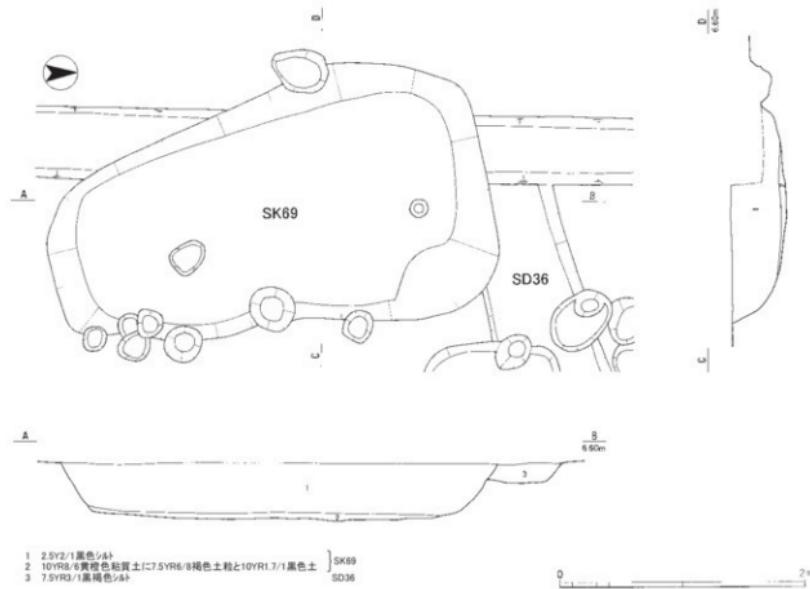
部床面が被熱しており、ここにもカマドが存在していた可能性がある。被熱痕の手前には、直径約60cm、深さ約50cmの貯蔵穴が確認され、土師器甕や暗文が施された皿が出土した。この貯蔵穴と南東隅のカマドが同時に機能するのは不可能であるから、カマドは南東隅から東壁中央に付け替えられ、貯蔵穴が設置されたと考えるのが妥当であろう。

住居のほぼ中央に直径約0.8mの小土坑が検出されたが、土層堆積状況は、遺構が埋没する初期段階に構築された状況を示している。出土遺物はなく、その性格や堅穴住居との関係は判然としない。

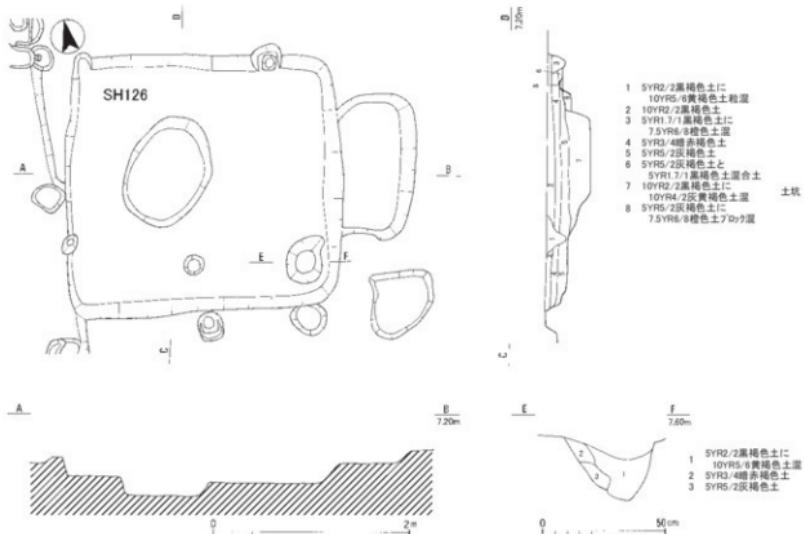
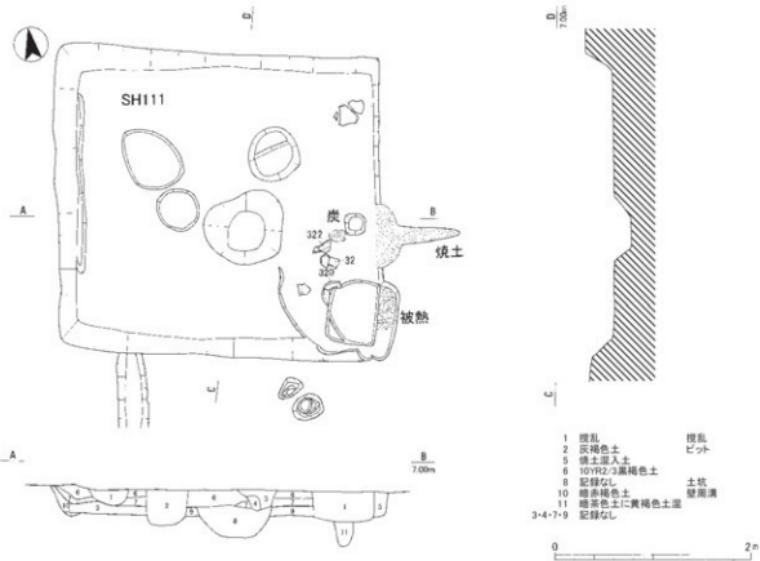
貯蔵穴以外の出土遺物は、土師器甕・瓶などの煮炊具が多く、その他に鉄製刀子などがある。

**S H125** (第56図) 北部西端で、全体の約半分を検出した。S B237に重複し、これに先行する。検出面からの深さは46cmで、同時期の他の堅穴住居と比べてかなり深い。

壁周溝、主柱穴、貯蔵穴は検出されていない。北壁際にカマドの痕跡と考えられる焼土の集中する部



第54図 c 地区 S K69・S D36遺構図 (1 : 40)



第55図 c 地区 SH111・126遺構図 (1 : 50)、SH126貯藏穴土層図 (1 : 20)

分が確認された。

出土遺物には土師器甕が多く、その他に須恵器杯身・杯蓋などがある。

**S H126** (第55図) 中央西部で検出した。西邊には壁周溝の痕跡と思われる幅10cmのごく浅い溝が検出されたが、全周しない。主柱穴は検出されていない。南東隅には貯蔵穴と考えられる直径約50cm、深さ約60cmのビットが確認され、土師器小片が出土した。

カマドの痕跡を示す被熱痕や焼土・炭は確認されていない。しかし、前述のS H111や後述するSH 131・133のカマドは、東壁中央付近に造られた貼り出し部に設置されており、この場合も東壁中央の貼り出し部にカマドがあった可能性がある。

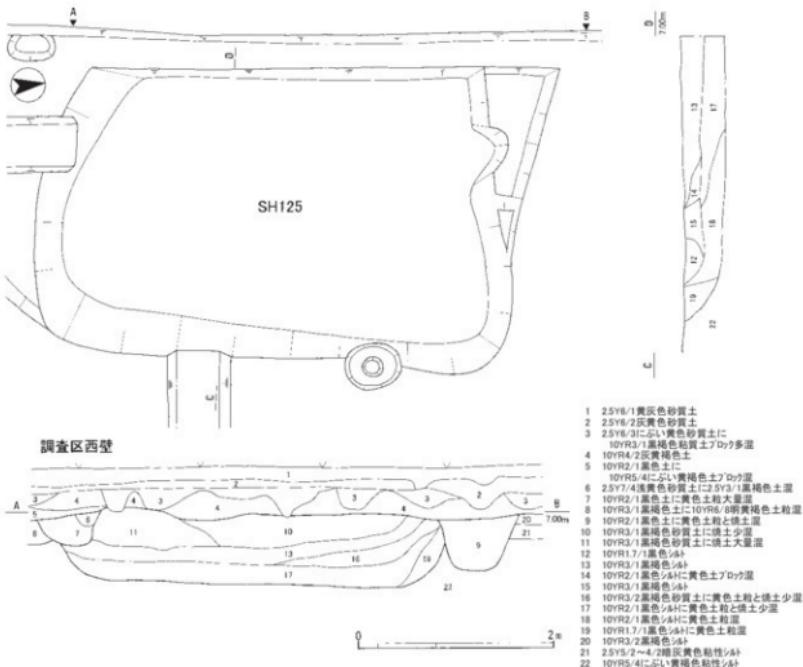
住居床面の中央西寄りで1.2m×0.9mの小土坑が検出された。出土遺物はなく、土層からは小土坑が

住居機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたのかは不明である。

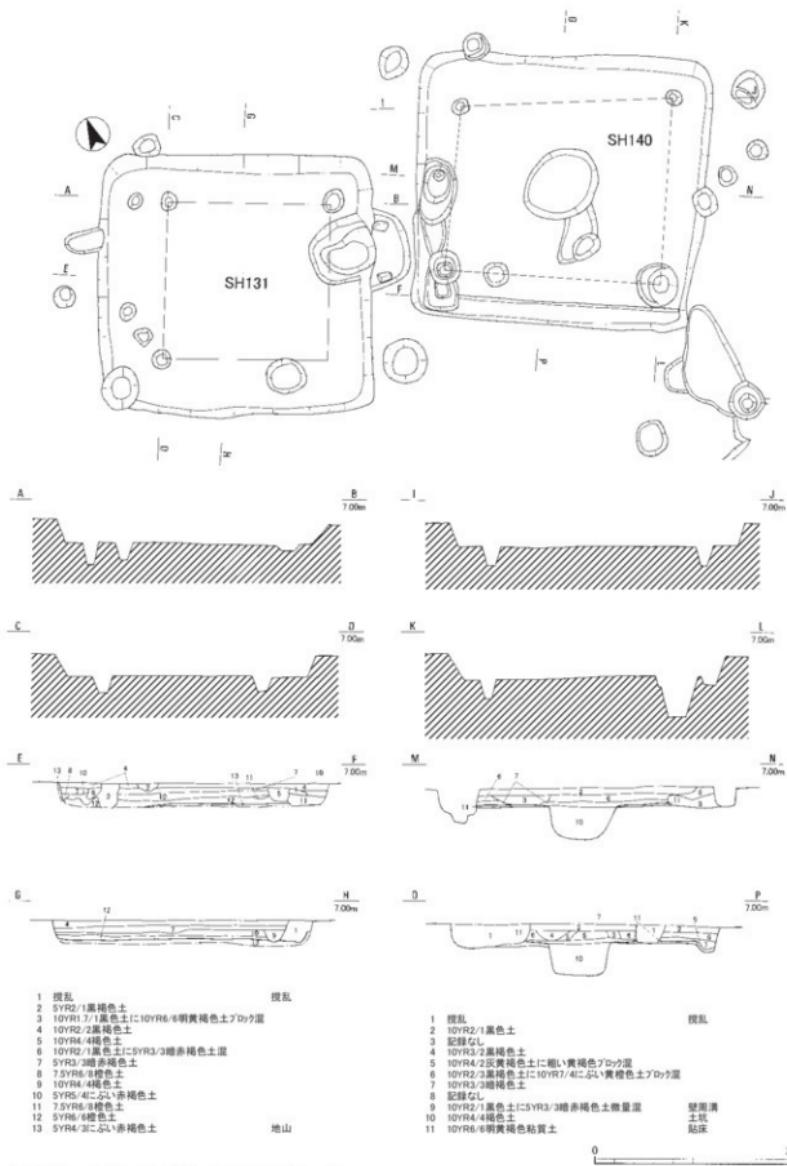
出土遺物には土師器煮炊具を中心に、暗文の施された土師器皿、少量の須恵器杯身・蓋などがある。

**S H131・140** (第57図) 中央北寄り西部で検出した。2棟は重複しないが、同時存続するには近接しており、平面形・規模・方向性が酷似することからも、建て替えられた建物の可能性がある。

S H131では主柱穴を3基確認した。壁周溝、貯蔵穴は確認されていない。東壁中央北寄りに張り出し部があり、直径約20cmの縫が2個掘えられていた。張り出し部手前には深さ約20cmの土坑があり、カマドは半地下式であったと考えられる。カマドからは土師器甕が出土した。また、カマド北脇から移動式竈が出土している。遺物は南東隅で土師器甕・甕などの煮炊具が多く出土した。



第56図 c地区 SH125構造図 (1:50)



第57図 c 地区 SH131・140遺構図 (1 : 50)

S H140では主柱穴を4基確認した。ただし南東隅の主柱穴は他の3基に比べ規模が大きく、その位置からも貯蔵穴であった可能性がある。壁周溝は南辺から西辺を巡る。被熱痕や焼土・炭、張り出し部など、カマドの痕跡を示すようなものは認められていない。中央に0.8m×0.7mの小土坑が検出された。この小土坑は貼床を切って設置されているが、住機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたのかは不明である。小土坑からは遺物は出土していない。

出土遺物は土師器甕を中心に、須恵器杯蓋がある。

**S H132**（第58図） 中央西部で検出した。北西部がS H133と重複し、これに先行する。

主柱穴を4基確認した。壁周溝は、S H133と重複する北西辺と東辺以外は全周する。貯蔵穴は確認されていない。

東壁中央に張り出し部が存在する。貼床はほぼ全面に施されていたが、張り出し部とその周辺には認められない。被熱痕や焼土・炭などは検出されていないが、他の堅穴住居との類似性などから、東壁中央にカマドが設置されていた可能性がある。

土師器甕・瓶などの煮炊具を中心に、須恵器杯蓋など少量の須恵器が出土した。

**S H133**（第58図） 北西部で検出した。南東部がS H132と重複し、これに後出する。

床面にはビットが検出されたが、主柱穴に相当するものは認められていない。壁周溝は北西辺から西辺にかけて検出された。

東壁中央北寄りに張り出し部があり、周辺の床面が被熱していた。被熱部の手前にはカマド袖部の残骸と思われる黄橙色土の盛り上がりが認められた。

張り出し部の南脇からは小形の土師器甕が出土した。

貯蔵穴は検出されていないが、南東隅で土師器甕や須恵器杯蓋がまとまって出土した。

中央に直径約0.9mの小土坑が検出された。この小土坑は貼床を切って設置されているが、住機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたのかは不明である。小土坑からは遺物は出土していない。

カマドや南東隅以外では土師器甕が多く出土した。

**S H136・202**（第59図） 北西部で検出した。

S H202が先行し、南側へS H136が一部重複して建てられている。S H136の東側に幅約0.2mの浅いL

字溝が確認されているので、さらに堅穴住居1棟が重複する可能性がある。

S H136では床面にビットが数基検出されたが、主柱穴に相当するものは確認されていない。壁周溝は東辺から北辺で検出したが、北辺の壁周溝の残りは悪い。北壁中央東寄りの遺構埋土内に、焼土が確認されており、ここにカマドがあった可能性がある。土師器甕など少量の遺物が出土した。

S H202では床面にビットが数基検出されたが、主柱穴に相当するものは確認されていない。西・北・東辺を壁周溝が巡る。壁周溝は2条の溝が重複しており、同一地点での建て替えが行われたことが窺える。北壁中央東寄りの埋土に、焼土が混在することが確認されており、ここにカマドがあった可能性がある。カマドと想定される部分では、壁周溝は途切れている。土師器甕などの遺物が少量出土した。

**S H138**（第60図） 中央西部で検出した。主柱穴を3基確認した。壁周溝は東辺以外ほぼ全周する。貼床は西半で検出され、中央部分に硬化面が認められた。被熱痕や焼土・炭などカマドの痕跡は確認されていない。しかし、東壁中央に張り出し部があり、その手前に浅い土坑が認められる。このような状況は、他の堅穴住居のカマドに共通して見られる特徴であり、ここにカマドが存在していた可能性がある。

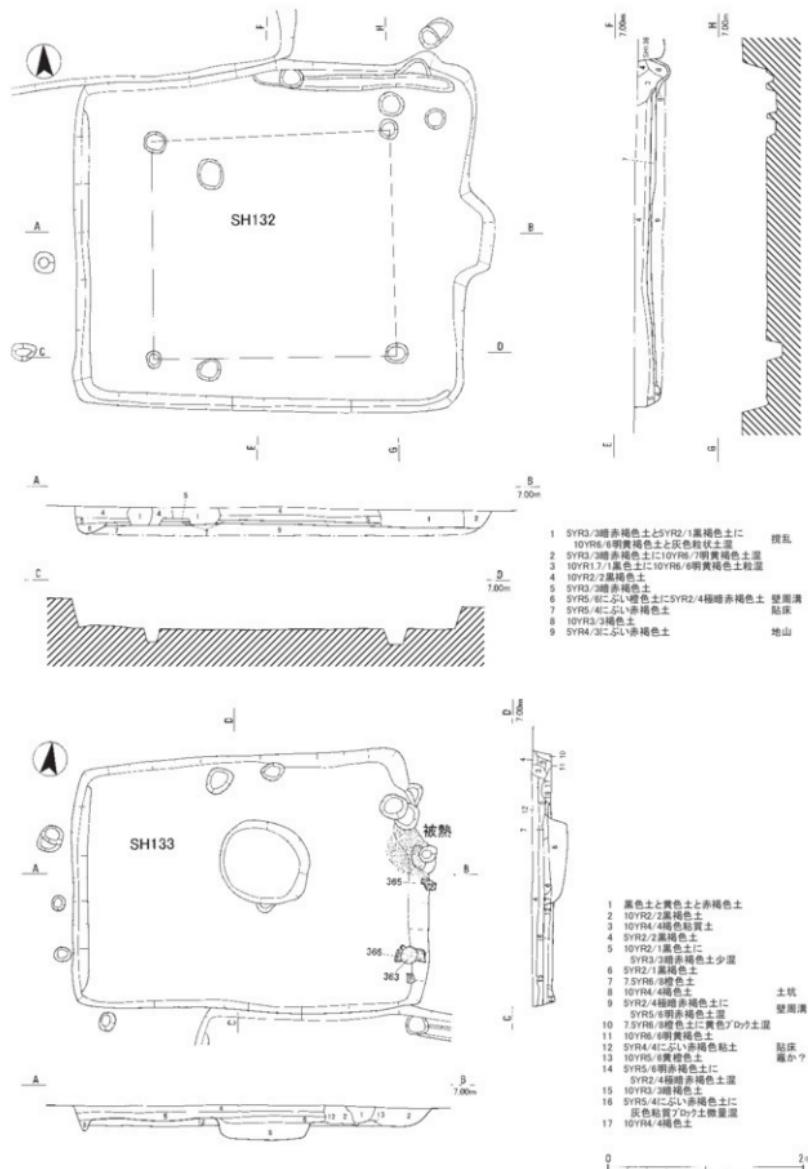
中央西寄りに直径約1.0mの小土坑が検出された。この小土坑は貼床を切って設置されているが、住機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたのかは不明である。小土坑からの出土遺物はなかった。

出土遺物には土師器甕を中心に、暗文が施された土師器杯、須恵器杯身、鉄製鎌がある。

**S H139**（第60図） 中央西部で確認した。前述のS H138の南側に位置する。東壁中央北寄りと南壁東半が張り出し、やや歪な平面形を呈する。

主柱穴や壁周溝は認められない。また、被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を示すような痕跡は確認されていない。しかし、東壁中央北寄りの張り出しは、他の堅穴住居のカマドに共通して見られる特徴であり、ここにカマドが存在していた可能性がある。

土師器甕・瓶などの煮炊具を中心に、須恵器横瓶などが出土した。



第58図 c地区 SH132・133遺構図 (1 : 50)

**S H143** (第61図) 北側中央で検出した。SH144やSB175、中世の道路と重複し、これらに先行する。西側の主柱穴を2基検出した。壁周溝は南辺から西辺の一部を巡る。被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を示すような痕跡は確認されていない。

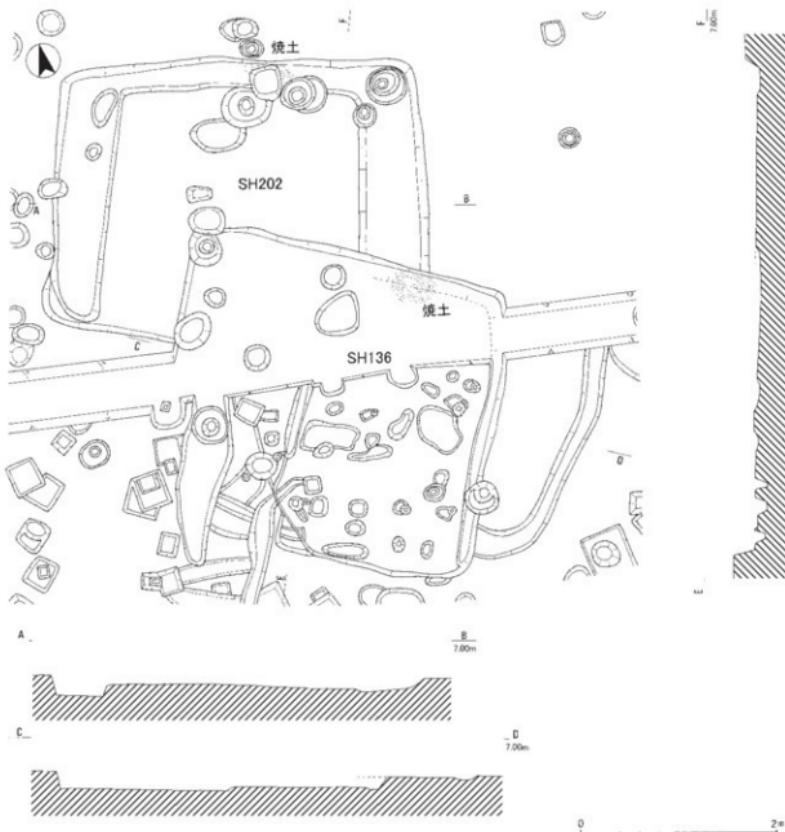
中央に土坑を確認した。中世の道路に破壊され、全体の3分の2ほどが残存する。土坑は中央部分で確認された貼床を切って設置されているが、住居機能時に存在していたのか、廃絶時に掘られたのかは不明である。小土坑から遺物は出土していない。

出土遺物には道に伴う中世の遺物が多数混在し

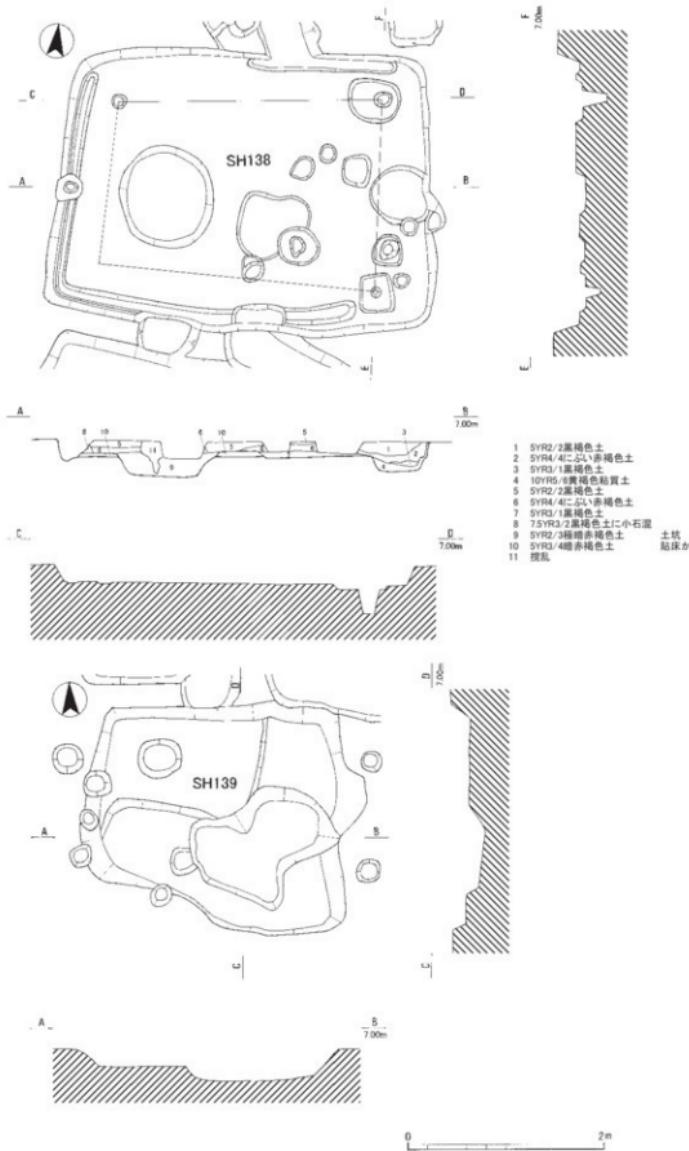
ており、堅穴住居の時期を特定することはできない。しかし、周辺からは他の時代の堅穴住居が確認されていないことから、この時代のものと判断した。

**S H144** (第62図) 北側中央で検出した。前述のSH143の北側に位置する。SH143や中世の道路と重複し、SH143→SH144→道路の前後関係が窺える。北西に隣接するSH210と平面形・規模・棟方向が酷似するが、深さは約30cm違う。

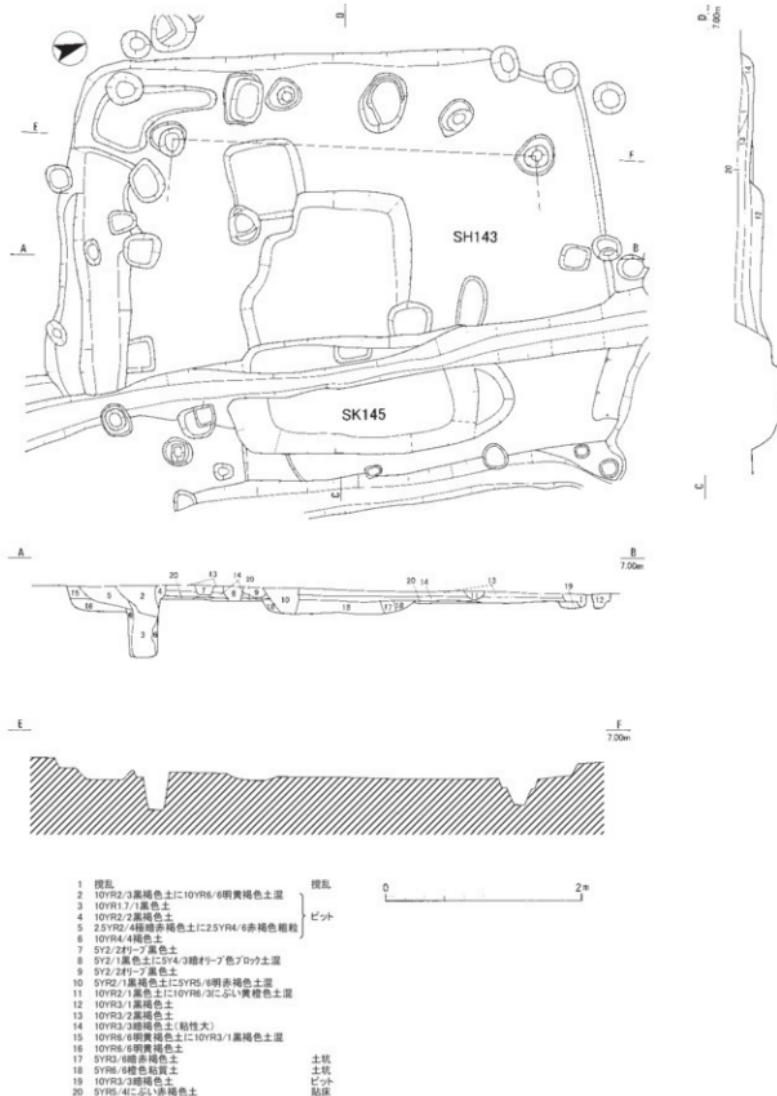
床面にピットが数基検出されたが、主柱穴に相当するものは確認されていない。壁周溝は東辺を除き全周する。被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を



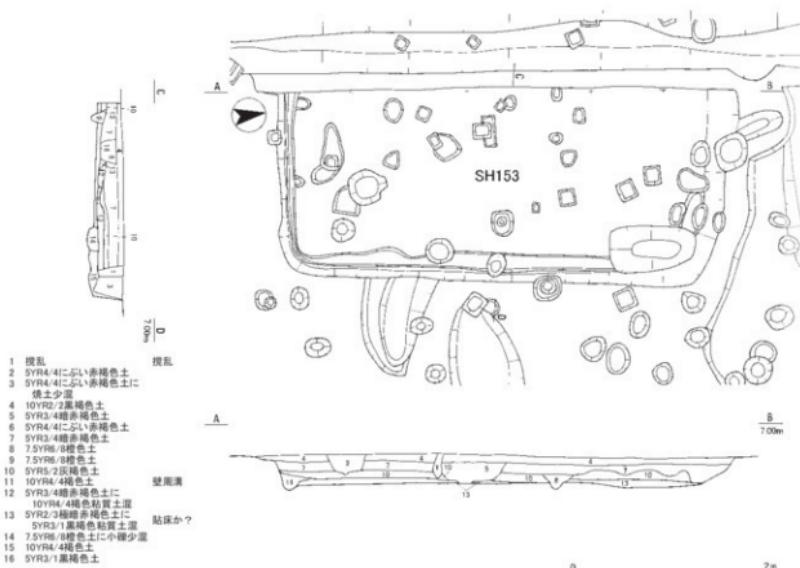
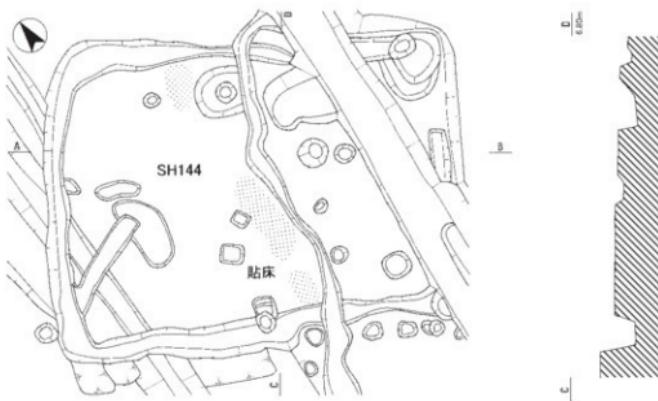
第59図 ◦地区 SH136・202遺構図 (1 : 50)



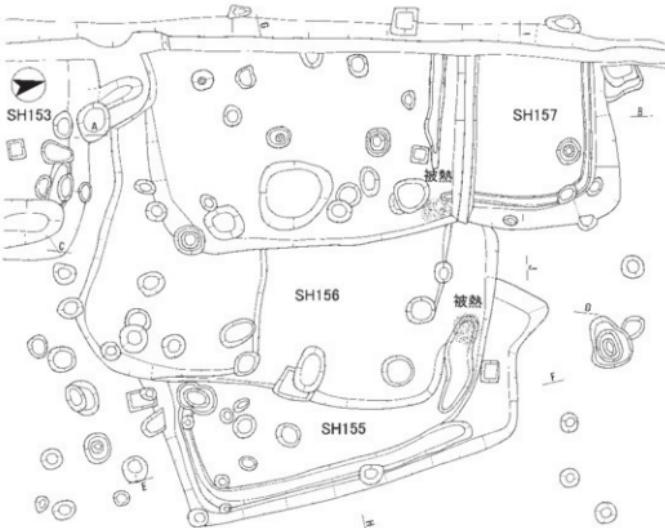
第60図 c地区 SH138・139遺構図 (1 : 50)



第61図 c地区 SH143造構図 (1:50)



第62図 c地区 SH144・153遺構図 (1 : 50)



第63図 c地区 SH155・156・157遺構図 (1 : 50)

示すような痕跡は確認されていない。貼床は部分的に認められた。

出土遺物の大半は、中世の道路に伴うもので、飛鳥・奈良時代に属するものはほとんどないが、SH210との類似性や、周辺から他の時期の堅穴住居が確認されていないことから、この時期のものと判断した。

**S H153 (第62図)** 中央東部で検出した。西半を S D109に破壊されている。北側に位置するSH156と重複し、これに後出する。

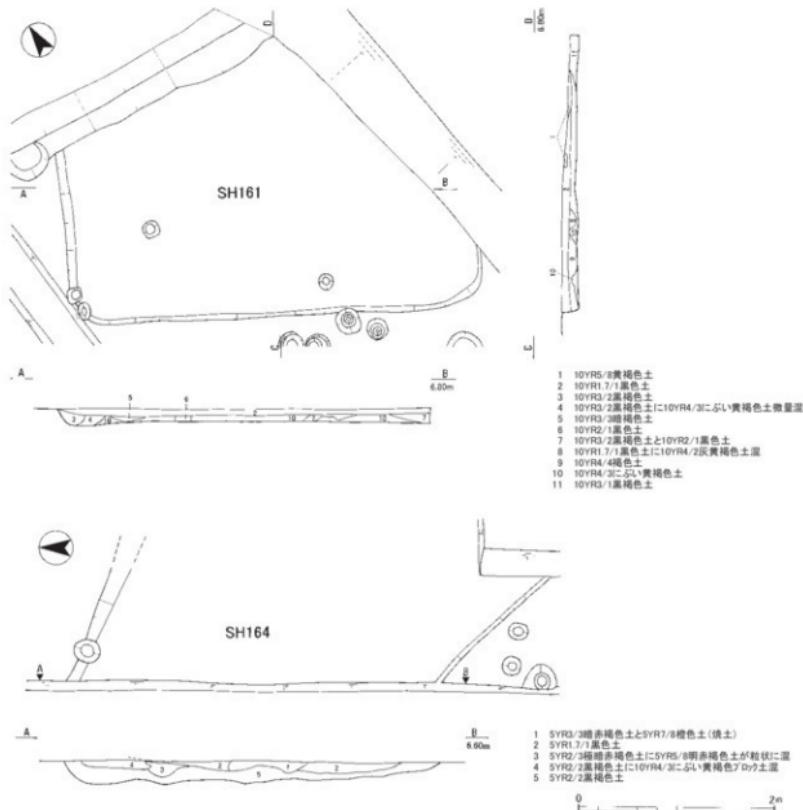
床面にピットが数基検出されたが、主柱穴に相当

するものは確認されていない。壁周溝は南辺から東辺、北辺一部を巡る。貼床は検出された床面ほぼ全体に認められた。土層観察から、貼床を施した後、壁周溝を掘削したことが窺える。

埋土に焼土が混じるが、集中しない。被熱痕なども認められない。

北東隅の床面に0.9m×0.5m、深さ約30cmのピットを検出した。出土遺物はなく、その機能は明確にしがたいが、住居に伴う可能性がある。

出土遺物には、土師器甕を中心に、暗文の施された土師器杯、須恵器杯がある。



第64図 c地区 SH161・164遺構図 (1 : 50)

**S H155・156・157** (第63図) 中央東部のほぼ同一地点で、重複して検出された。3棟の新旧関係は、若干不明確な部分もあるが、SH157→SH155→SH156と思われる。

SH155は3棟の内の最も東に位置する。床面で数基のピットを検出したが、主柱穴に相当するものは認められない。東辺から南辺を巡るが、北辺には検出されていない。北壁中央が張り出し、その手前にカマドの痕跡と考えられる被熱痕が認められた。出土遺物には、土師器甕を中心に、暗文の施された土師器皿や少量の須恵器がある。

SH156は真ん中の最も新しい竪穴住居である。床面でピットを多数検出したが、主柱穴と判断するには至らない。北辺に壁周溝が認められたが、部分的である。検出時に作成する略測図には、被熱痕の記録が残されているが、SH156北壁中央もしくはSH157東壁中央に相当し、どちらの竪穴住居の床面に伴うものかは記録が残されていないため不明である。ただし、SH156からは移動式竈が出土しており、住居内で煮炊きが行われていた可能性は十分ある。

中央に直径約0.7mの小土坑が確認された。小土坑は床面で検出されたが、詳細な記録がなくSH156とSH157のどちらに伴うものかは判断できない。

出土遺物には、土師器甕や移動式竈を中心に、暗文の施された土師器杯・皿、須恵器杯蓋、砥石、鉄製刀子がある。

SH157は3棟の内の最も西に位置する。床面でピットを多数検出したが、主柱穴と判断するには至らなかった。北辺から東辺の一部に壁周溝が検出された。前述のとおり、東壁中央付近に認められた被熱痕は、この住居に伴うものであるとは断定できない。また、床面の南東隅に相当する場所で小土坑が検出されたが、これもどちらの竪穴住居に伴うものかは判断できない。

出土遺物には、土師器甕を中心に、暗文の施された土師器杯がある。

**S H161** (第64図) 中央東端で検出した。北側がSD149に破壊され、東側が調査区外に相当するため、全体の約3分の1程度を確認した。

主柱穴・壁周溝・貯蔵穴などは確認されていない。

被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を示すような痕跡は認められていない。

出土遺物には土師器甕や皿がある。

**S H164** (第64図) 北部東端で検出した。南北壁は検出できたが、東西壁は調査区外などに当たり、全体の平面形は不明である。

主柱穴・壁周溝・貯蔵穴は確認されていない。被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を示すような痕跡も検出されていない。

出土遺物には土師器甕や暗文が施された土師器杯小片、須恵器杯蓋がある。

**S H208** (第65図) 北西部で検出した。削平が著しく、検出時に既に貼床と壁周溝が見えていた。

主柱穴に相当するピットは認められなかった。壁周溝は北辺で2ヶ所途切れるが、ほぼ全周する。

被熱痕や焼土・炭など、カマドの存在を示すような痕跡は検出されていない。

中央の貼床を除去すると、土坑が確認された(SK268)。土坑は貼床下からの深さで20cmと浅いものである。土坑埋土は貼床の土と全く同じであり、建築当時に掘削され、貼床を行う段階では埋められているという、極めて短期間のものと考えられる。

出土遺物には暗文の施された土師器杯がある。

**S H210** (第65図) 北部中央で検出した。南東に隣接するSH144と平面形・規模・棟方向が酷似するが、深さは約30cm違う。

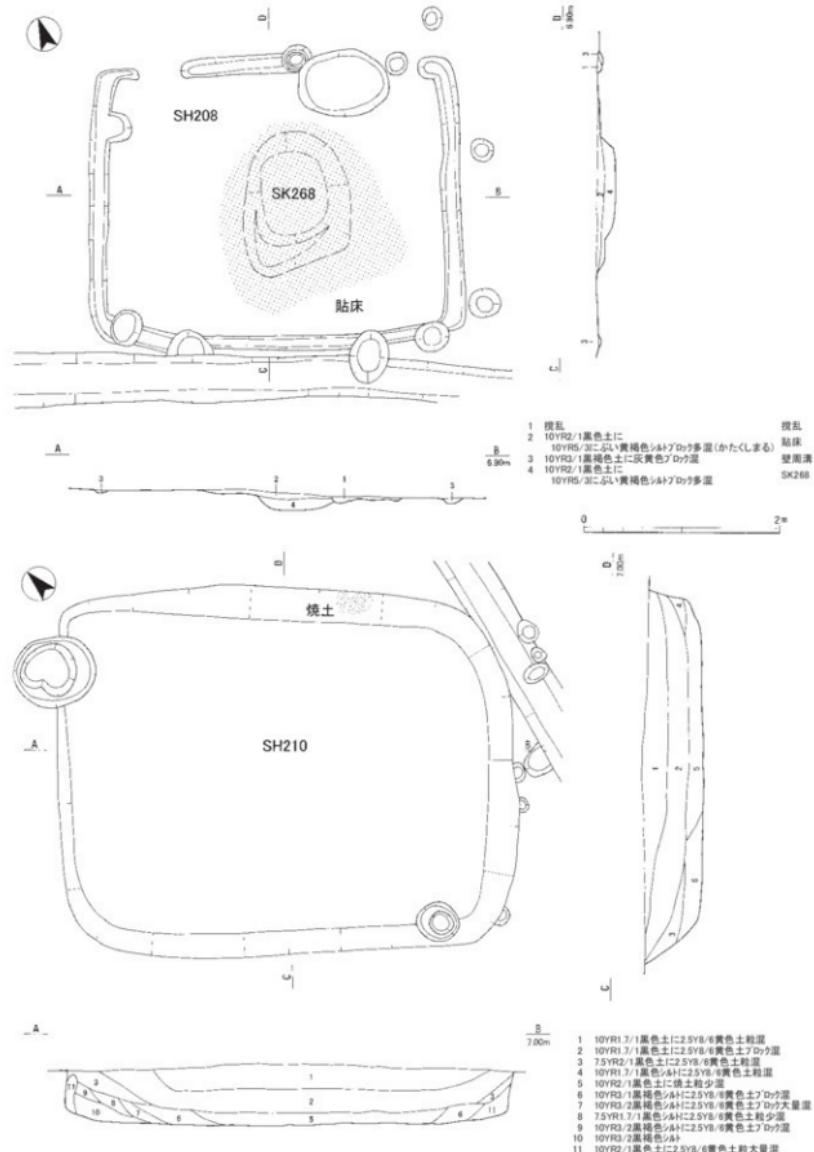
主柱穴・壁周溝に相当するものは認められなかつた。北東壁中央付近で、カマドの痕跡と考えられる焼土の集中箇所が認められた。

出土遺物には、土師器甕や須恵器杯蓋が少量ある。

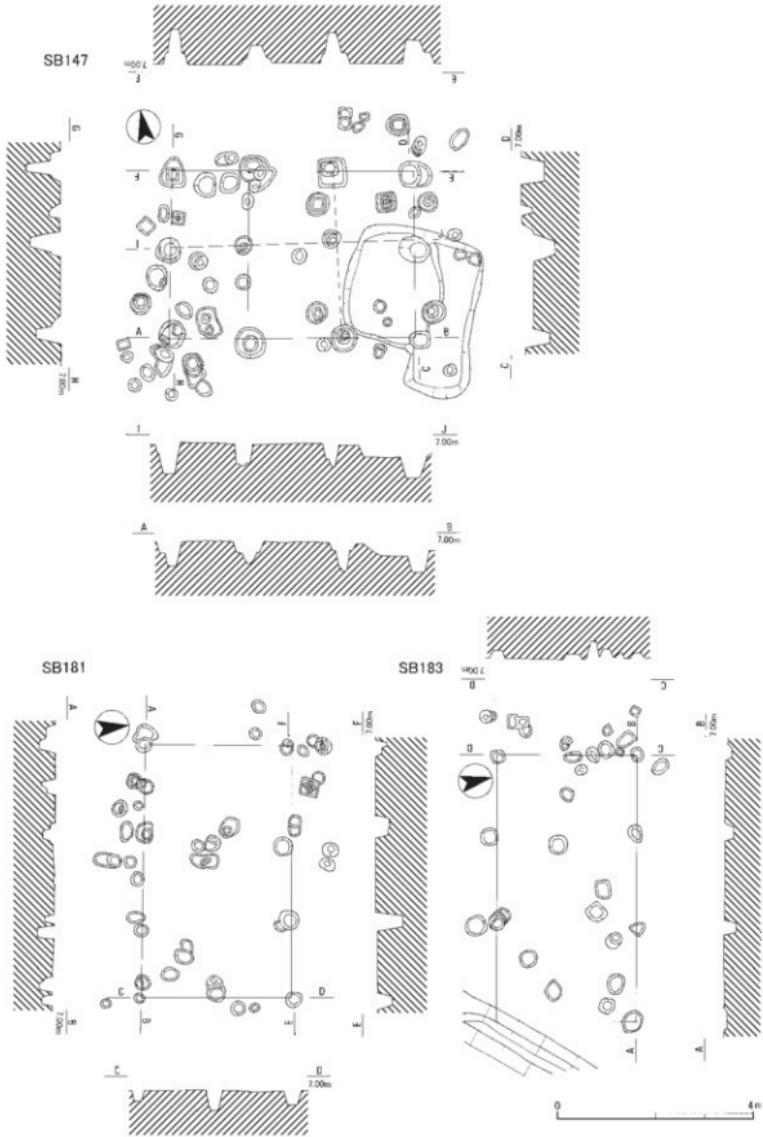
## (2) 挖立柱建物

**S B147** (第66図) 調査区西部で検出した。桁行3間×梁行2間の純柱建物である。柱間は桁行1.5~1.9m、梁行1.5~2.0mである。方位はN10°Eで、東西棟である。この掘立柱建物に重複するように平安時代から鎌倉時代のSB179・180も位置している。出土遺物は小片のため図化できなかつたが、土師器甕などが出土した。

**S B175** (第67図) 桁行3間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行2.0~2.3m、梁行2.1~2.3mである。方位はN10°Eで、東西棟である。土師



第65図 c地区 SH208・210遺構図 (1 : 50)



第66図 c 地区 SB147・181・183遺構図 (1 : 100)

器小片や鍛造剥片が出土した。

**S B181** (第66図) 枠行3間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行1.5~2.2m、梁行1.6mである。方位はN8°Eで、東西棟である。柱穴からの出土遺物はないが、S B147と同方位であることから、S B147とはほぼ同時期の遺構と判断した。

**S B183** (第66図) 枠行3間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行1.7~2.0m、梁行1.4~1.6mである。方位はN10°Eで、東西棟である。柱穴からの出土遺物はないが、S B147やS B175と方位が似ていることから、これらとほぼ同時期の遺構と判断した。

### (3) 土坑

**S K141** (第67図) 直径約1.4m、深さ24cmの円形土坑である。S B175の内側に位置するが、S B175との関係は不明である。出土遺物は小片のため図化できなかったが、土師器甕が出土した。

### (4) ピット

**D L 18 pit 1** (第67図) 調査区北東部、SD233南肩で確認された。土師器甕1個体分が潰れた状態で出土した。この部分は後世にも溝が掘削されており、溝によってピットの上部が削平されたと考えられる。

## c 平安時代前期～後期の遺構

堅穴状遺構、掘立柱建物5棟、柵、土坑14基、溝3条、焼土・遺物集積1ヶ所を確認した。建物跡や土坑は全て溝の西側で確認されている。

### (1) 堅穴状遺構

**S H130** (第74図) 調査区西部で検出した。長さ約2.5m、幅約2.7mの方形の遺構であるが、南東部に長さ約0.7mの張り出し部が付属している。深さは22cmであるが、張り出し部は12cmと浅い。土坑の中央部に貼床の可能性がある灰褐色粘土層が薄く確認されたため、堅穴状遺構としたが、被熱を受けた痕跡は認められなかった。土師器皿・甕、灰釉陶器や山茶碗、鉄釘など多数の遺物が出土しており、平安時代後期の遺構と考えられる。

### (2) 掘立柱建物

**S B68** (第68図) 調査区南西隅で検出したため、全体は不明であるが、枠行3間×梁行1間以上の総柱建物である。柱間は桁行2.3~2.4m、梁行2.3

mである。方位はN13°Eである。出土遺物は土師器小皿、灰釉陶器、黒色土器などがあり、平安時代中期～後期の遺構と考えられる。

**S B75** (第69図) 調査区南西部で検出した。枠行5間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行1.7~2.1m、梁行1.8~2.1mである。方位はN13°Eで、東西棟である。土師器杯、灰釉陶器、黒色土器、志摩式製塩土器、鐵鑓などが出土した。平安時代中期頃の遺構と考えられる。

**S B166** (第70図) 調査区南西部で検出した。枠行3間×梁行3間の総柱建物である。柱間は桁行2.3m、梁行1.6~1.9mである。方位はN10°Eで、南北棟である。出土遺物が土師器小片のみのため、詳細な時期は不明であるが、古代の遺構であろう。

**S B180** (第69図) 調査区西部で検出した。枠行3間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行2.1~2.4m、梁行2.2~2.6mである。方位はN11°Eで、南北棟である。出土遺物は小片のため図化できなかったが、土師器甕、灰釉陶器、黒色土器、須恵器などが出土しており、平安時代中期～後期の遺構と考えられる。

**S B237** (第68図) 調査区北西部で検出した。枠行3間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行2.0~2.6m、梁行2.9mである。方位はN11°Eで、東西棟である。出土遺物は小片のため図化できなかったが、土師器皿・杯・甕、灰釉陶器瓶などが出土しており、平安時代中期～後期の遺構と考えられる。

### (3) 柵

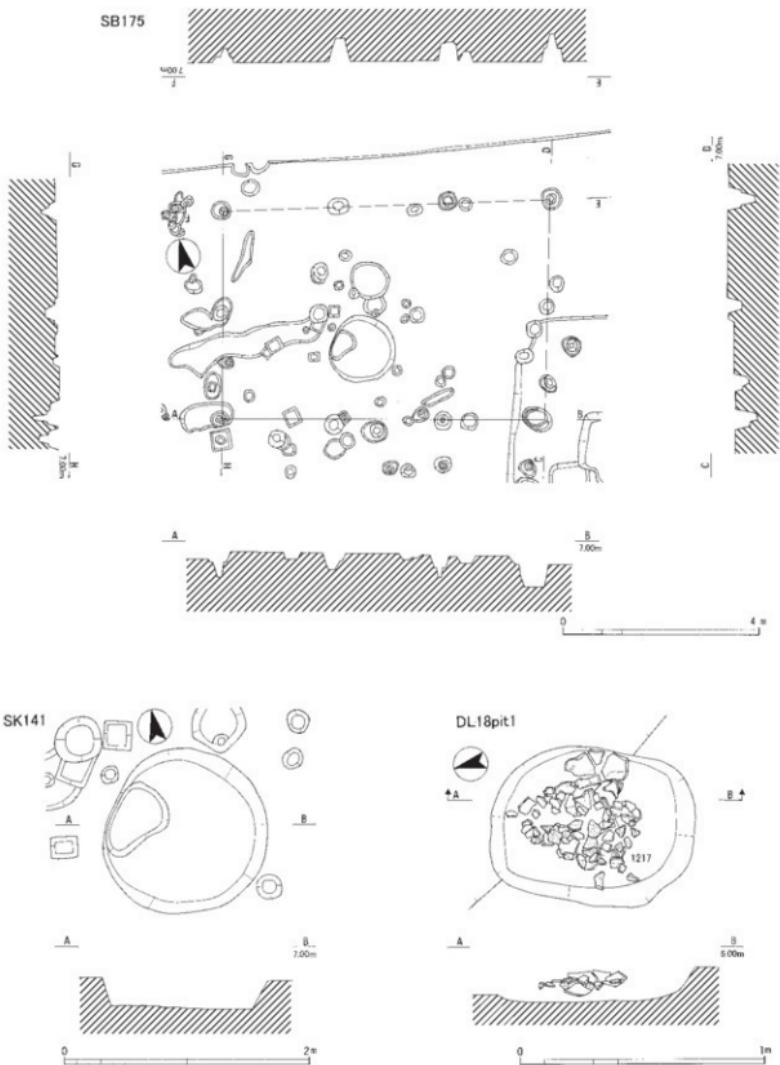
**S A167** (第68図) 調査区南西部、S B166の東隣で検出した4間の柵である。柱間は1.5~1.7mである。方位はE10°Sで、S B166と同じであるが、西端が重複するため、同時期にあった可能性は低い。土師器甕片などが出土しており、平安時代中期～後期の遺構と考えられる。

### (4) 土坑

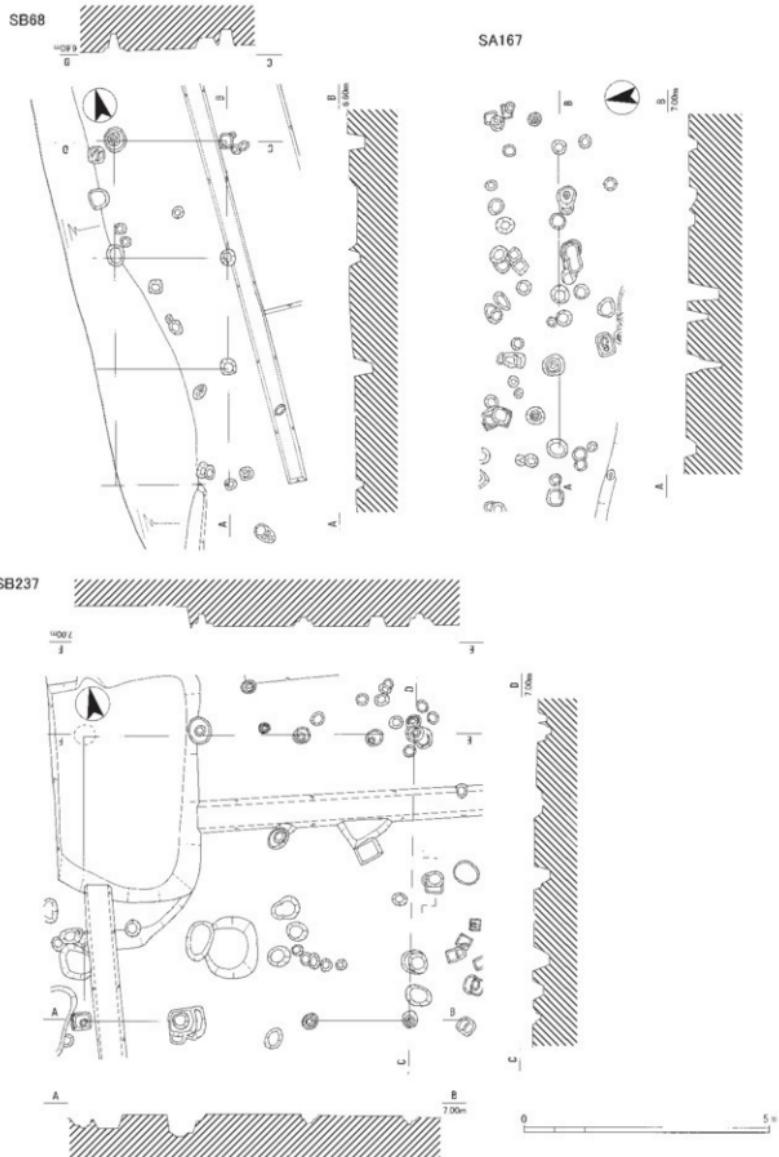
**S K41・45・47・49・50・52・53** (第71図)

調査区南端中央で検出した。数基の土坑が激しく重複し、さらにはSD42・48とも重複するため、平面形や規模などの詳細を把握するには至らなかった。

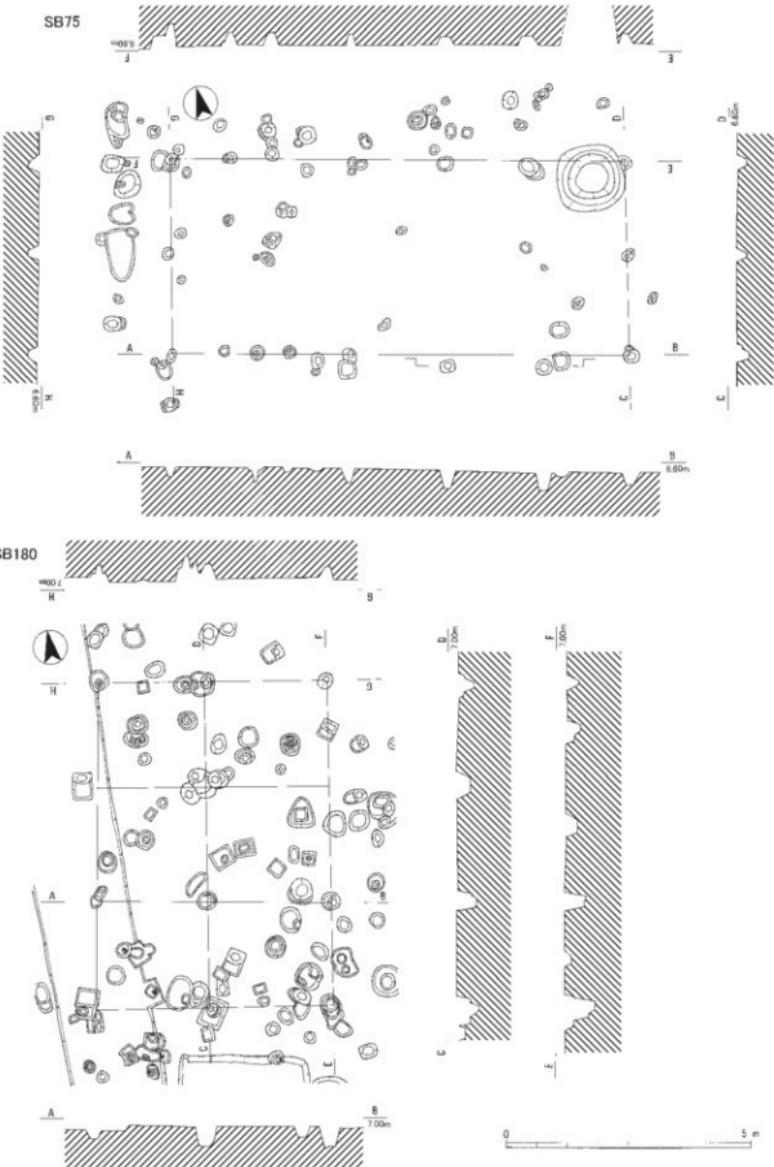
出土遺物や他の遺構との前後関係から、平安時代中期の遺構と考えられる。



第67図 c地区 SB175遺構図(1:100)、SK141遺構図(1:40)、DL18pit1遺物出土状況図(1:20)



第68図 c地区 SB68・237・SA167構造図 (1 : 100)



第69図 ○地区 SB75・180造構図 (1 : 100)

**S K54** (第72図) 長さ約1.8m、幅0.3~0.8m、深さ33~46cmの土坑である。S D42とS D43の合流地点に位置し、S D42より新しく、S D43より先行する。遺物は土師器杯や灰釉陶器瓶が出土しており、平安時代中期の遺構と考えられる。

**S K115・116** (第72図) S D109の南端付近にある土坑が複数重複した土坑群である。これらの中でも最も大きなS K116は長径約2.3m、短径約1.5m、深さ110cmの規模である。いずれもS D109に先行する。遺物はS K116からのみ出土しており、土師器台付小皿・甕、ロクロ土師器、灰釉陶器椀、須恵器などがある。平安時代後期の遺構であろう。

**S K201** (第72図) 調査区北西部に位置する土坑で、S B237の内側にある。長径約1.3m、短径約1.0m、深さ25cmの規模である。土師器杯・甕や灰釉陶器、土鍾などが出土しており、平安時代中期の遺構と考えられる。S B237と比較的近い時期の遺

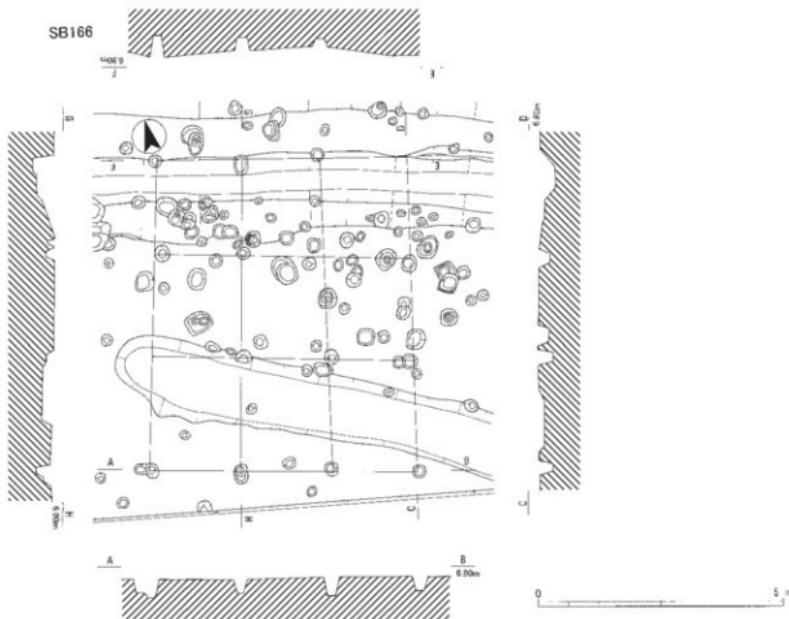
構ではあるが、関係は不明である。

### (5) 区画溝

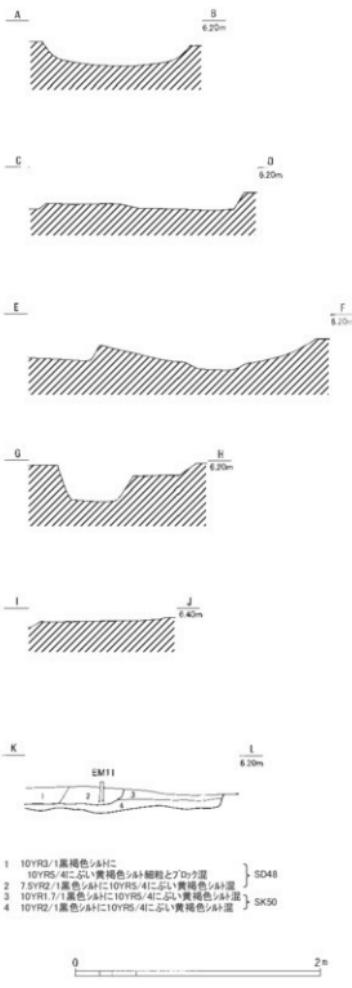
**S D42・236** (第73図) S D42はc地区南部からd地区にかけて検出された南北溝である。北側は後世の溝S D20と重複し、その北には溝の続きが確認されなかつたため、S D42はS D20内で終結していたと考えられる。

c地区北端ではS D42と同時期の溝S D236が検出された。この溝の東肩側はS D109により破壊されている。S D109は、S D42の北側同一直線延長上で確認され、平安時代末期頃まで機能していた溝であるが、平安時代前期から中期の遺物も多数出土した。おそらくS D236はもともとS D109同様、S D20付近まで延びていたが、後にS D109がS D236をほぼ全て包含するように掘削されたのであろう。

溝の西側では掘立柱建物や柵、土坑が確認されて

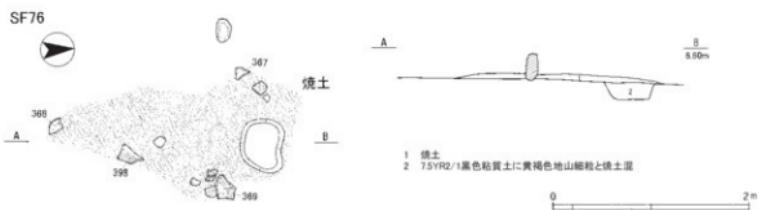
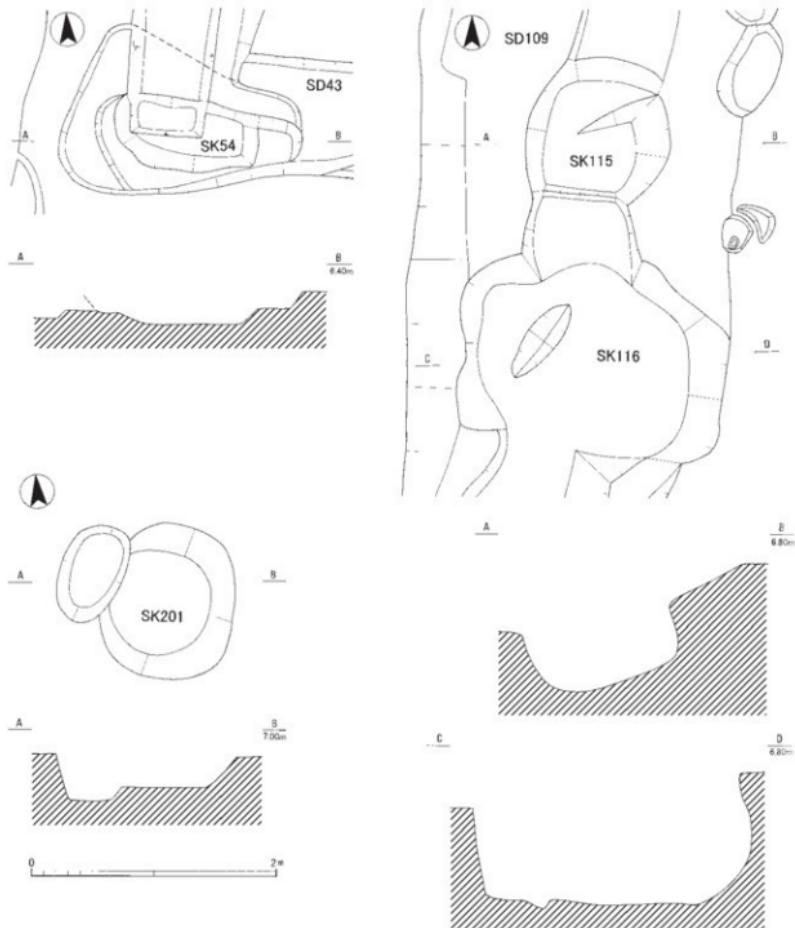


第70図 c地区 S B166遺構図 (1 : 100)



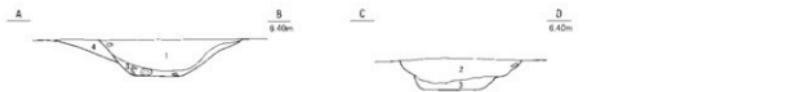
- 1 10YR5/4黒褐色シート  
10YR5/4ニ-CLV青褐色シート細粒とアロカ混  
2 7SYR2/1黒色シートに10YR5/4C-3C-3C-3C  
3 10YR1.7/1白色シートに10YR5/4C-3C-3C  
4 10YR2/7黒色シートに10YR5/4C-3C-3C  
SK48

第71図 c 地区 SK41・45・47・49・50・52・53・SD48構造図 (1 : 40)



第72図 c地区 SK54・115・116・201遺構図 (1:40)、SF76遺物出土状況図 (1:50)

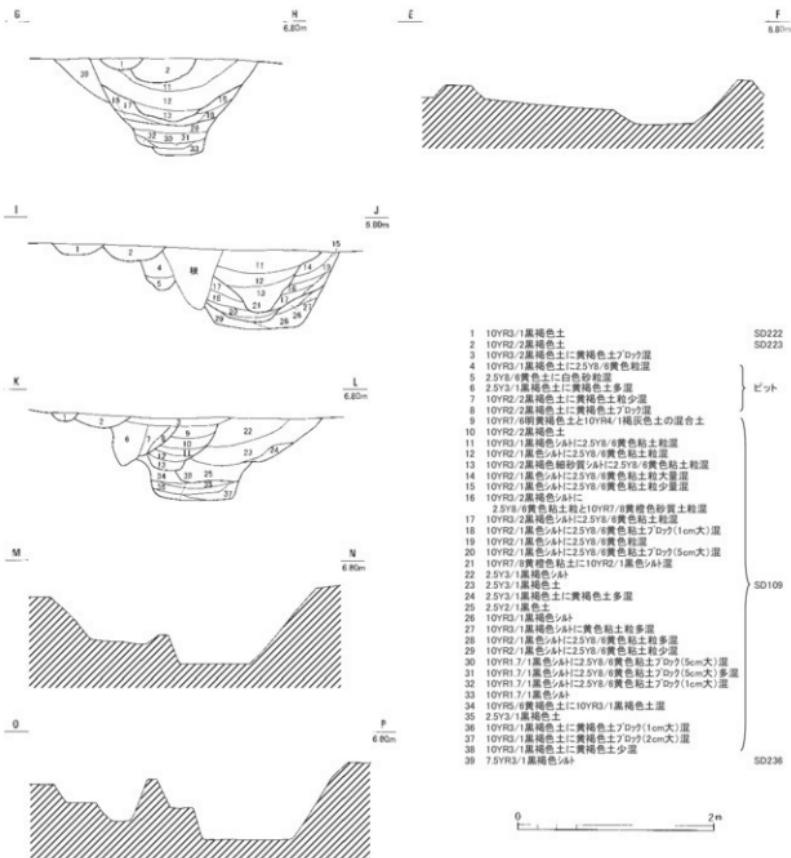
## SD42



- 1 10YR2/1黒褐色  
2 7.5YR2/1黒色シルトに10YR5/4に近い黄褐色シルト粒混  
3 10YR2/1-2/1黒褐色～黒色シルト～粘質土に  
10YR5/4に近い黄褐色シルト粒土器多混  
4 7.5YR2/1黒色粘質土に10YR5/4に近い黄褐色シルト細粒混 SK58

SD42

## SD109-236



第73図 c 地区 SD42・109・236土層図・断面図 (1 : 50) 参照

いるが、東側ではなく、溝を境に西側が居住エリアに利用されていたようである。S D 42とS D 109は連結せず、両者の間は地山が掘り残されており、この部分は土橋として居住域への出入り口の機能を果たしていたと考えられる。

d 地区検出のS D 42は、西半分以上がS D 10によつて掘削されており、最下層と東半分が確認されたのみである。最下層では土師器皿・灰釉陶器、緑釉陶器、製塙土器、土鍤などの小片が溝底に貼り付くように多数出土した。この状況はS D 42の南側に延びるS D 501最下層でも認められることから、S D 42はさらに南へと延びていたと考えられる。

S D 42を中心とし土師器や灰釉陶器、石製品など多數の遺物が出土しており、平安時代前期～中期頃の遺構と考えられる。

**S D 48** (第71図) 調査区南端で検出した東西方向の溝である。前述のS D 42と直交し、S D 42より東側へ約3.5m延びて、なだらかに立ち上がり終結する。S D 42と直交する部分の底面で、円錐が多數確認されたが、意図的に置かれたような状況は見られなかつた。前述のS D 42と同様、区画溝であつたと考えられる。土師器や灰釉陶器、須恵器などが出土した。

#### (6) カマド

**S F 76** (第72図) 南西部で焼土と土器の広がりを確認した。焼土の広がりのほぼ中心で、直径約10cm、長さ約30cmの棒状の縁が出土した。c 地区南部は黒ボク（土壤化した地山）が非常に発達しており、もともとこの場所に存在した堅穴住居を検出できなかつた可能性がある。

周辺からは平安時代前期頃の土師器皿・皿や長胴甕が出土した。

#### d 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

##### (1) 壁穴状遺構

**S H 58** (第74図) 調査区南部で検出しが、全体を検出することができなかつた。長さ約2.8m、幅2.5m以上の方形を呈する。深さは19cmである。貼床が確認できたことから、壁穴状遺構としたが、壁周溝や被熱を受けた痕跡は認められなかつた。出土遺物としては、灰釉陶器や山茶碗、志摩式製塙土器などがあり、平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構

と考えられる。

#### (2) 梁立柱建物

**S B 169** (第75図) 調査区北東部で検出した。桁行4間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行1.9～2.3m、梁行2.2～2.4mである。方位はN 8° Eで、東西棟である。S K 163に先行する。出土遺物は小片のため図化できなかつたが、土師器小片、山茶碗が出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S B 173・S K 163** (第75図) 調査区北東部で検出した。S B 173とS K 163の重複関係は不明であるが、S K 163がS B 173の東端に位置することから付属施設である可能性があると認識した。いずれも平安時代末期の遺物が出土している。

S B 173は桁行4間×梁行4間の総柱建物である。柱間は桁行1.9～2.6m、梁行1.9～2.4mで、ほぼ正方形の平面形を呈する。方位はN 8° Eである。S B 169と重複する。出土遺物は小片のため図化できなかつたが、土師器甕や山茶碗が出土した。

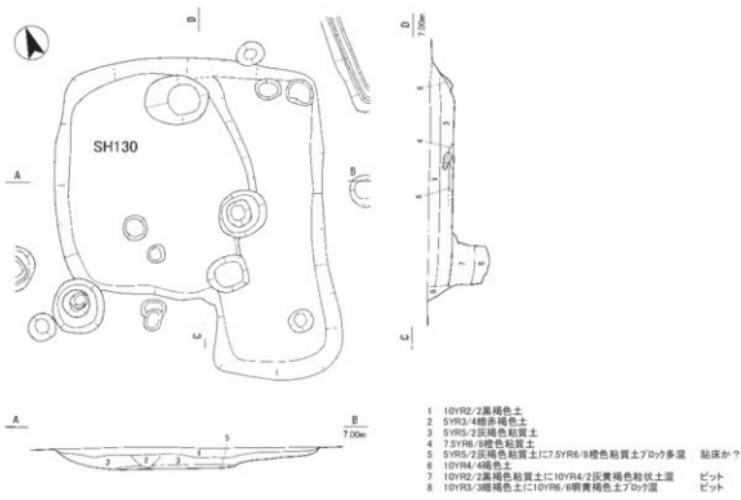
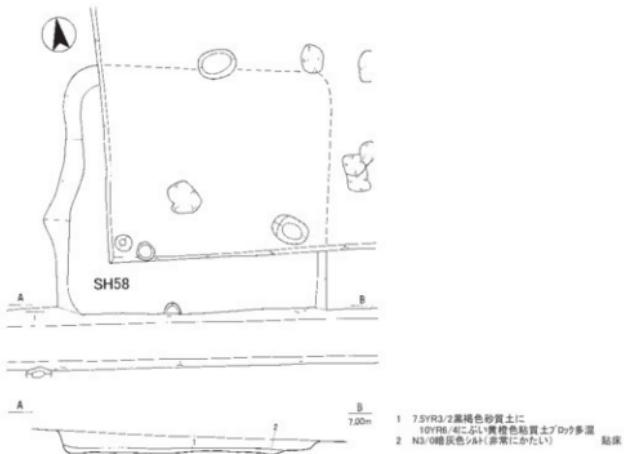
S K 163は長径約3.2m、短径約2.0m、深さ21～45cmの楕円形土坑である。中央部に焼土が確認された。土師器皿・甕、灰釉陶器、山茶碗、瓦器椀などが出土した。

S K 163がS B 169より新しいことから、S K 163がS B 173の付属施設であるとすれば、S B 173はS B 169の建て替えであると考えられる。

**S B 174** (第76図) 調査区東部で検出した。桁行4間×梁行3間の総柱建物である。柱間は桁行、梁行とも2.0～2.2mである。方位はN 4° Eで、東西棟である。S B 177と重複するが、前後関係は不明である。土師器皿、山茶碗などが出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S B 177・S K 159** (第76図) 調査区東部で検出した。S B 177とS K 159の重複関係は不明であるが、S B 173・S K 163と同様、S K 159がS B 177の東端に位置しており、付属施設である可能性があると認識した。いずれも平安時代末期頃の遺物が出土している。

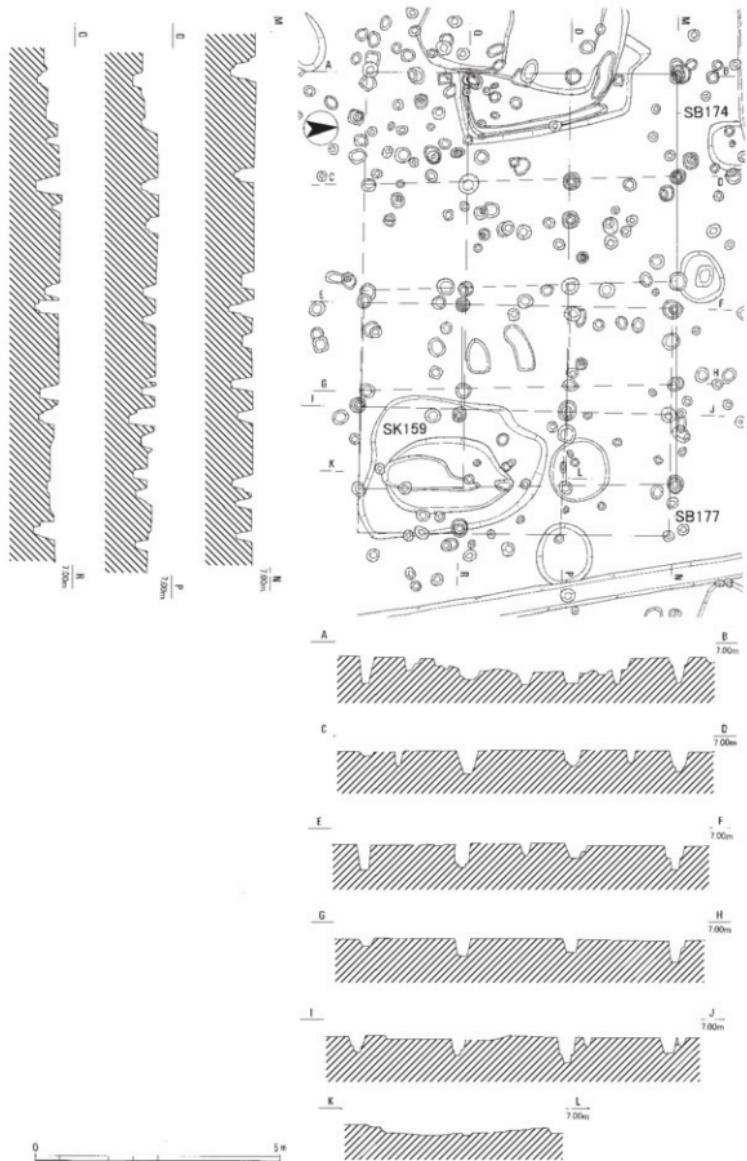
S B 177は桁行3間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行2.0～2.2m、梁行2.2～2.6mで、南北棟である。方位はN 5° Eである。出土遺物は土師器



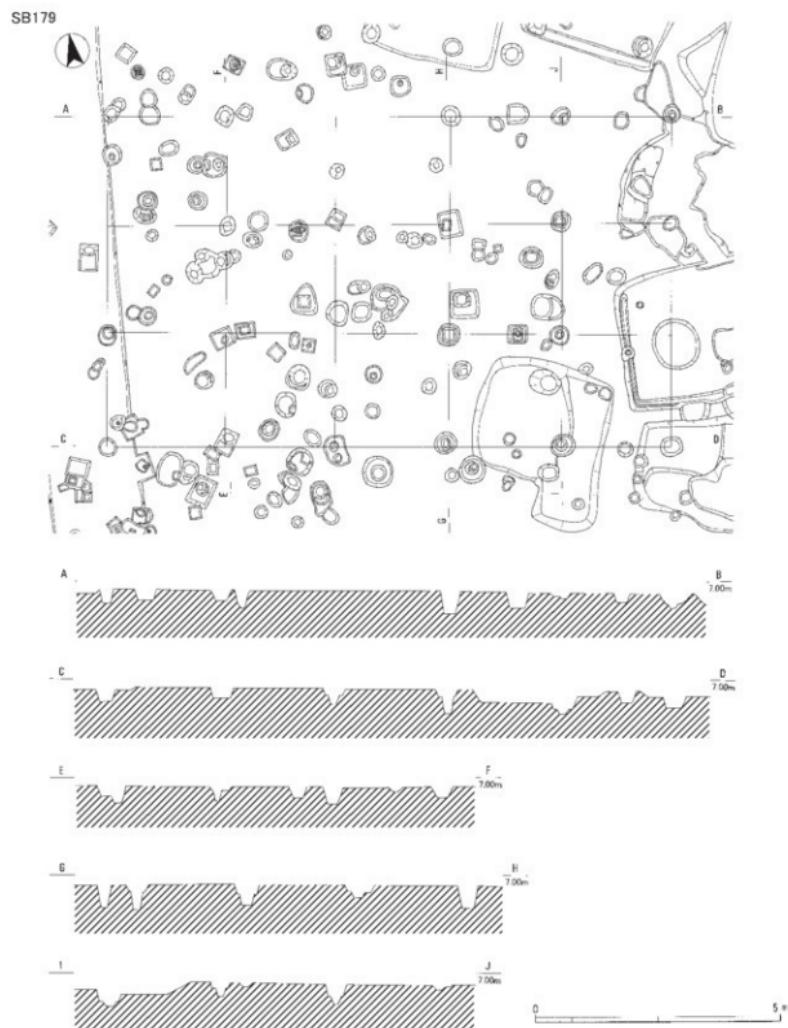
第74図 c地区 SH58・130造構図 (1 : 50)



第75図 c 地区 SB169・173・SK163遺構図 (1 : 100)



第76図 c地区 SB174・177・SK159遺構図 (1 : 100)



第77図 c 地区 SB179構造図 (1 : 100)

皿、山茶碗、黒色土器などが出土した。

S B159は長径約3.5m、短径2.0~3.0m、深さ6~20cmの不整形土坑である。土師器皿・甕、灰釉陶器、山茶碗、白磁碗、土鍤などが出土した。

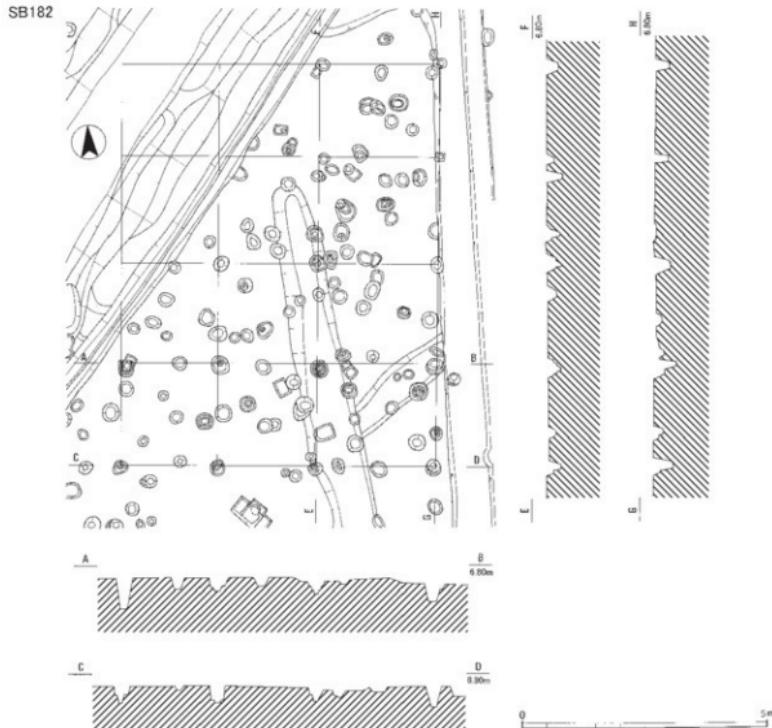
S B177はS B174と重複するが、前後関係は不明である。ただし、S B169・S B173・S K163の関係を考慮すると、S B174がS B177に先行する可能性のほうが高いのではないだろうか。

**S B179** (第77図) 調査区西部で検出した、S B147・180に重複する掘立柱建物である。桁行5間×梁行3間の總柱建物である。柱間は桁行2.2~2.4m、梁行2.2~2.3mである。方位はN 7° Eで、東西棟である。出土遺物は土師器皿・甕、灰釉陶器碗、山茶碗などが出土しており、平安時代末期～鎌

倉時代前期の遺構と考えられる。

**S B182** (第78図) 調査区南東部で検出した。北西部はS D20によって掘削されているが、桁行4間×梁行3間の總柱建物である。柱間は桁行1.9~2.2m、梁行1.9~2.4mである。方位はN 4° Eで、南北棟である。根石のある柱穴も見つかっている。出土遺物は土師器小片と鉢具のみであるため、詳細な時期は不明である。

**S B215** (第79図) 調査区北西部で検出した。桁行3間×梁行2間の側柱建物である。柱間は桁行1.9~2.2m、梁行2.1~2.3mである。方位はN 17° Eで、東西棟である。出土遺物は小片であるため図化できなかったが、土師器小片と山茶碗があり、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。



第78図 c地区 S B182遺構図 (1 : 100)

### (3) 土坑

**S K77** (第80図) 長径約3.2m、短径約2.0m、深さ約20cmの楕円形土坑である。20cm大の礫やスサの混じる粘土塊が出土している。この粘土塊は壁土かカマドであった可能性がある。土師器皿・甕、山茶碗、鉄釘なども出土しており、平安時代末期頃の遺構であろう。

**S K120** (第80図) S D109の南端に位置する不整楕円形の土坑で、S D109よりも新しい。長径1.6~1.8m、短径0.6~0.8m、深さ約35cmの規模である。南側の一段高くなっているところから、15cm大の礫が出土している。また、須恵器、土師器皿・甕、灰釉陶器、山茶碗、常滑陶器、白磁碗など多数の遺物が出土した。平安時代末期頃の遺構と考えられる。

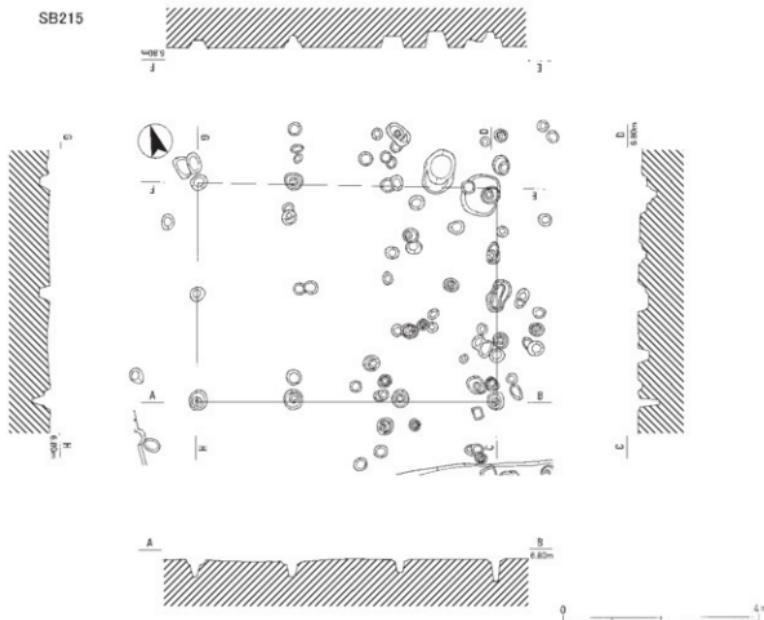
**S K129** (第81図) 調査区西端部で検出した。長径約2.3m、短径約1.6m、深さ18cmの楕円形土坑である。南東部に土器の集中部があったが、包含層

(DS 5・6グリッド)で取上げを行った。土師器皿・甕、山茶碗、瓦器碗などが出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

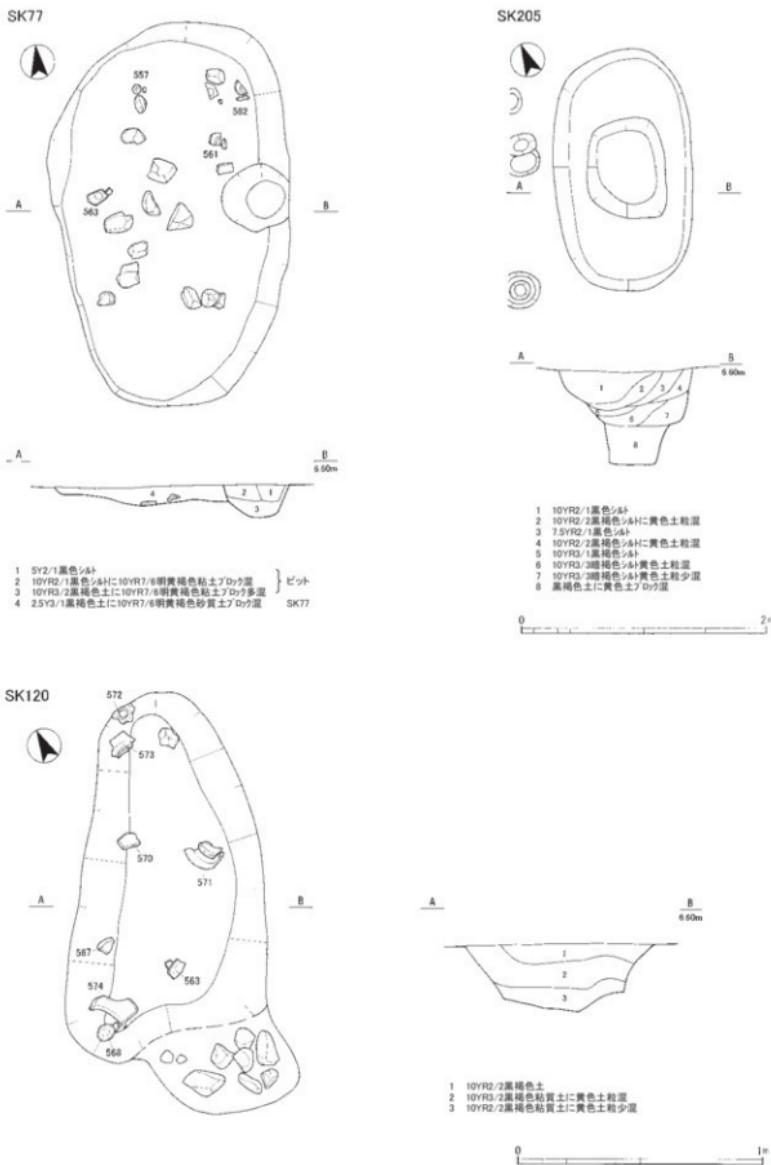
**S K165** (第81図) 調査区南部で検出した。直径約1.6m、深さ約16cmの円形土坑である。土師器皿や甕などが出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S K205** (第80図) 調査区西北部で検出した。長径約2.0m、短径約1.0m、深さ79cmの円形土坑である。土師器皿、山茶碗、土鍤、志摩式製塙土器などが出土しており、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S K211・213** (第82図) S E212と重複する土坑、新旧関係はS K213→S K211→S E212である。S K211の規模は長径約1.1m、短径約1.0m、深さ60cmである。底面から山茶碗が伏せた状態で出土した。S K213の規模は長径約1.0m、短径0.8m



第79図 c地区 S B215遺構図 (1:100)



第80図 c地区 SK77遺物出土状況図・SK205遺構図 (1:40)、SK120遺物出土状況図 (1:20)

以上、深さ51cmである。土師器皿が出土した。SK211は鎌倉時代前期、SK213は鎌倉時代前期以前の遺構と考えられる。

#### (4) 井戸

**S E25** (第83図) 調査区南部で検出した。直径約1.6m、深さ286cmの井戸である。掘形は隅丸方形である。地山の砂礫層から湧水があった。土師器皿・甕・灰釉陶器、山茶碗、常滑陶器甕などが出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S E162** (第82図) 調査区東端部で検出したため、東半分は調査区外にある。長径約3.9m、短径2.3m以上、深さ250cmの井戸である。埋土の単位は比較的薄く、自然堆積したようである。土師器杯・皿・甕・灰釉陶器、山茶碗、瓦器小皿、鉄滓のほか、曲物などの木製品も出土した。平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S E206** (第83図) 調査区北部で検出した。長径約2.3m、短径約2.0m、深さ145cmの井戸である。埋土最上層から常滑陶器甕や15cm大の縁が多数出土したが、埋土の状況から井戸が埋没した後に再度掘

削された別遺構の可能性もある。最上層以外は自然堆積した埋土であろう。土師器皿・鍋、山茶碗などが出土しており、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**S E212** (第82図) 平面形が方形を呈する井戸で、規模は一边約2.0m、深さ164cmである。土師器皿・鍋、山茶碗、灰釉陶器、砾石などが出土しており、鎌倉時代前期の遺構である。

#### (5) 溝

##### 1 区画溝

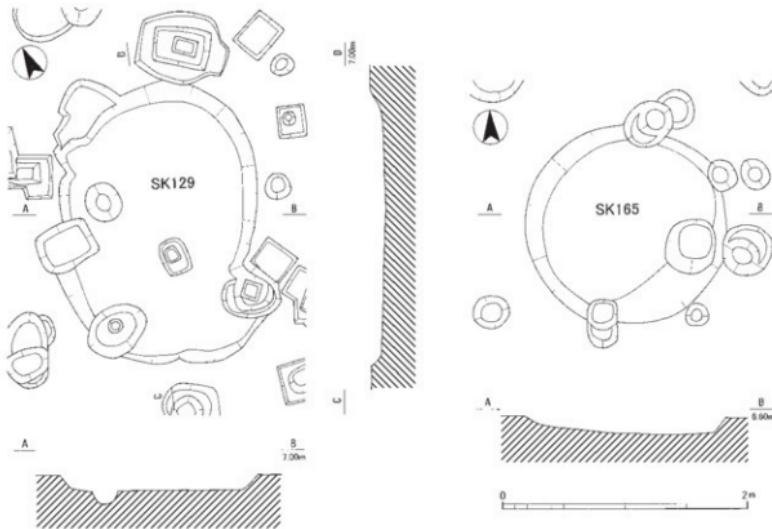
c 地区北部はSD109により東西に分けられ、さらにその東側のエリアはSD149・230・232・235により2つの区画地が形成されている。

南部では、室町後期の区画溝SD7～11・15・101・102が検出されているが、これらの溝の出土遺物には平安時代末期～鎌倉時代前期のものが多数含まれており、この時期にも機能していた可能性がある。

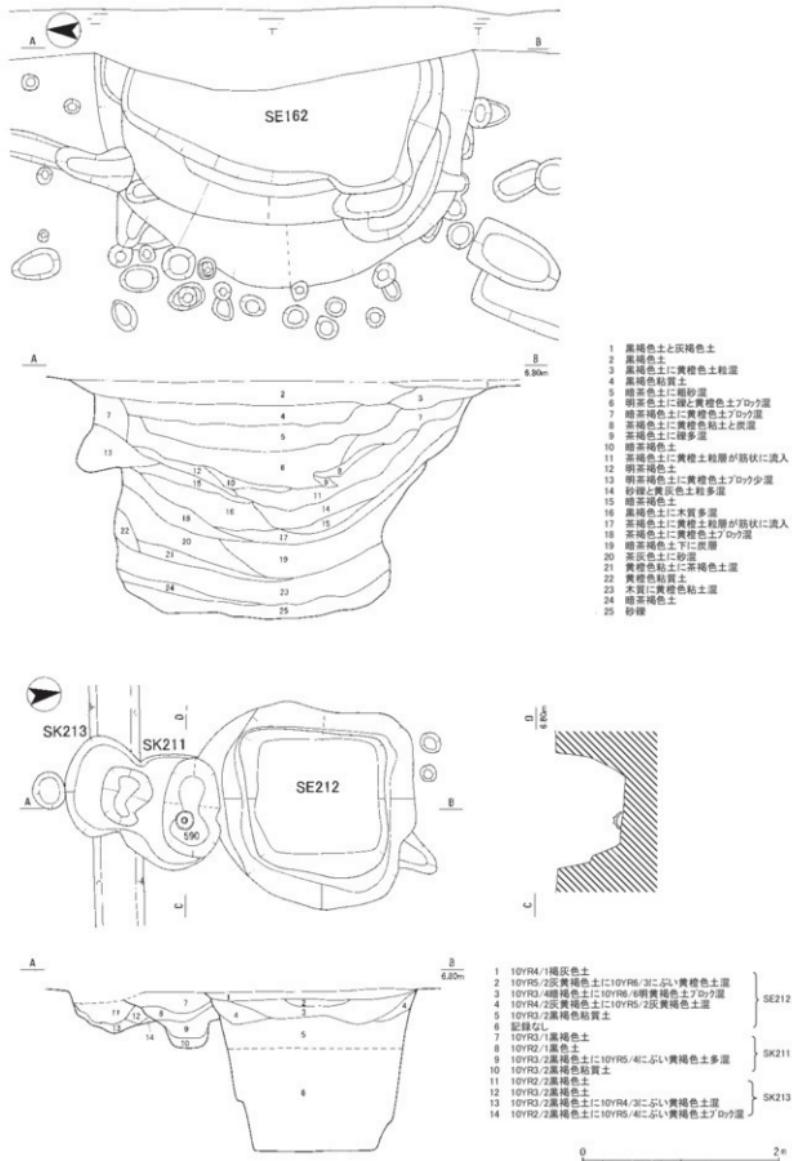
これらも含めると、当地区には西半に2区画、東半に3区画の計5区画が存在していたと考えられる。

なお、これらの区画溝からは恒常的な通水を示すような層は見られなかった。

**S D109** (第73図・付図3) 中央で検出した南



第81図 c 地区 SK129・165遺構図 (1 : 40)

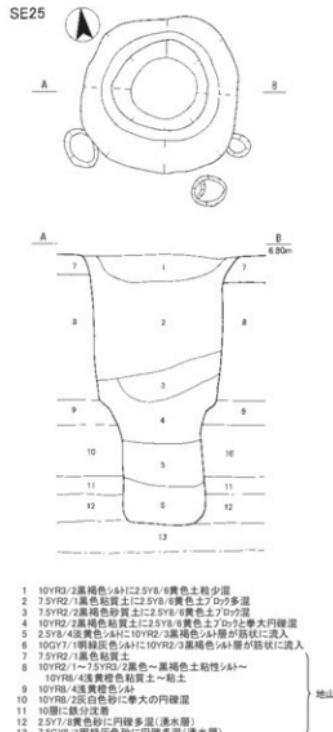


第82図 c地区 SE162・212・SK211・213遺構図 (1 : 50)

北方向の溝である。南端はS D20北肩付近で終結する。北端はc地区北端で急激に浅くなり、近世以降の大溝S D220に破壊されているが、おそらく東西方向の区画溝S D230・232・235につながるものと思われる。前述のように、南部で検出された室町時代後期の区画溝S D8・15が、この時代にも区画溝として機能していたのであれば、S D109南端とS D8・15西端の間が出入り口に相当すると考えられる。

断面形は逆台形を呈し、土層断面から少なくとも2度の掘り直しが確認できる。

土師器皿・甕・鍋、灰釉陶器、山茶碗、瓦器類、

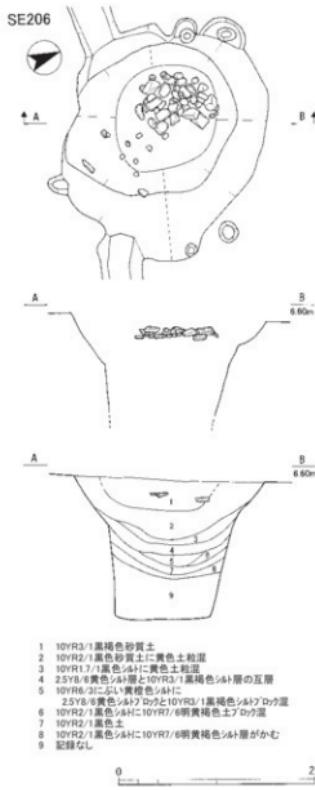


白磁碗・皿・青磁皿・雁巣罐・刀子・鉄鍋など平安時代前期から平安時代末期頃の遺物が出土した。

**S D149 (第84図)** 東側中央北寄りで検出した、東西方向の溝である。西端はS D109につながるが、両者には切り合い関係が確認されており、S D109より先に機能を停止した状況が窺える。

断面形は逆台形を呈し、土層断面からは掘り直しは確認できない。埋土上層には黄褐色粘質土が厚く堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

埋土からは、平安時代末期頃の土師器小皿や山茶碗が大量に出土し、埋め戻し時に投棄されたのではないかと思われる。遺物は時期的にまとまりがあり、



第83図 c地区 S E25遺構図・S E206遺物出土状況図 (1 : 50)

SD109の最も新しい時期の出土遺物に比べ若干古めである。

**SD230・232・235** (第84図) 北端東部で検出した。SD230は東西方向に、SD232・235は北西—南東方向に平行してのびる溝である。上部を近世以降の大溝SD220に削平されている。SD232は一ヶ所切れる部分があるが、もともと繋がっていた溝の一部が若干浅く、後世に上部を大きく削平されこのような状態になったのであろう。SD232・235には重複関係が見られない。SD230・235は交差するが、調査で前後関係を明確にすることはできなかった。出土遺物からも前後関係を窺うことはできないが、西端でSD109に繋がり、相前後して区

画溝として機能していたと考えられる。

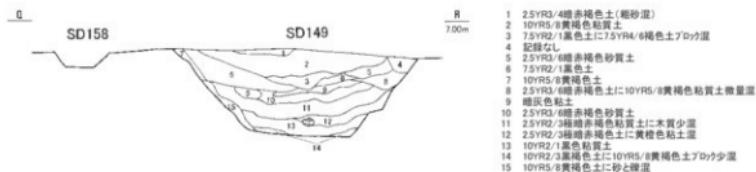
出土遺物は少ないが、土師器皿・甕や山茶碗など平安時代末期～鎌倉時代前期のものが見られた。

## 2 その他の溝

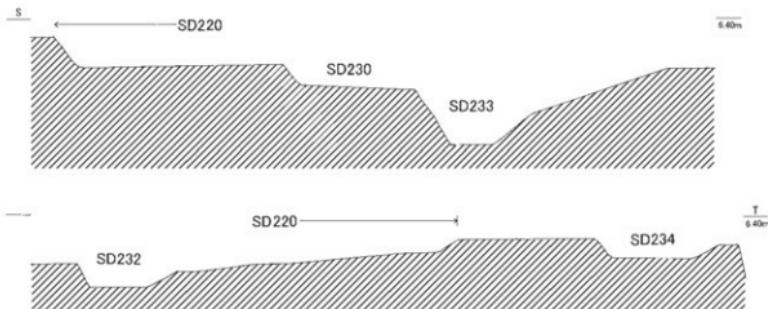
**SD158** (第84図) 東側中央北寄りで検出した、西端がSD109に、東端がSD149に取り付く。出土遺物はほとんどないが、SD109・149とともに機能していた溝であろう。

**SD207・214・217** (第84図) 北端西側で検出した、東西方向の小規模な溝である。SD214とSD207は一連の溝で、SD217は掘り直された溝である。重複関係からSE206に先行することが確認されている。

### SD149・158



### SD220・230・232・233・234



### SD214・217



第84図 c地区 SD149・214・217土層図、SD158・220・230・232・233・234断面図 (1 : 50) 参照

山茶碗など鎌倉時代前期の遺物が若干出土した。

#### (6) ピット (第85図)

**E H14pit 4** 長径約0.35m、短径約0.3m、深さ37cmのピットである。土師器皿が出土しており、平安時代末期の遺構と考えられる。

**D Q12pit 3** 長径約0.4m、短径約0.2m以上のピットである。SD107に先行する。土師器小皿・皿が出土しており、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

**E D14pit 1** 直径約0.25m、深さ29cmのピットである。完形の山茶碗が出土しており、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

#### e 室町時代の遺構

##### (1) 挖立柱建物

**S B84・SK63** (第86図) 調査区南東部の第I面で検出した。SB84はSB84の南東部に位置し、前後関係は不明であるが、付属施設と考えられる。

SB84は桁行5間×梁行3間の總柱建物である。柱間は桁行2.0~2.9m、梁行2.1~2.6mで、SK63の位置する東端の柱間が広い。方位はN13°Eで、東西棟である。土師器皿・鍋、山茶碗、瀬戸美濃陶

器折縁小皿などの遺物が出土した。

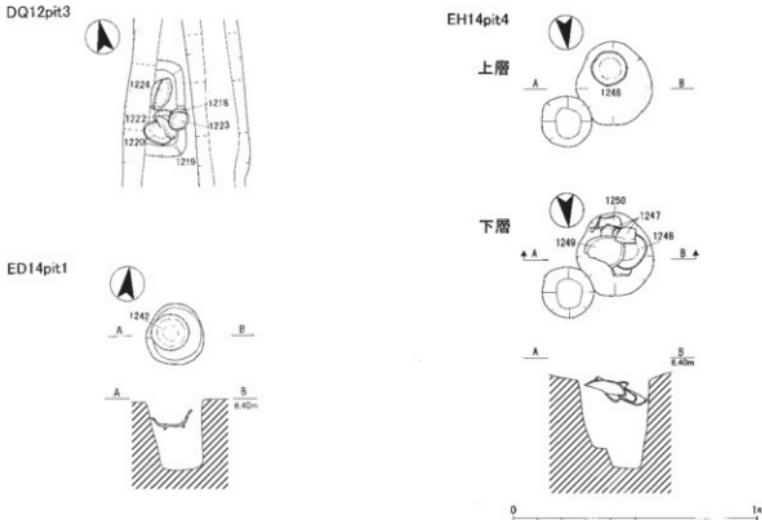
**S K63**は長辺約3.1m、短辺約2.8m、深さ20~27cmの土坑で、平面形は隅丸方形を呈する。土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗、常滑陶器などが出土した。

いずれも室町時代後期、15世紀後半頃の遺構と考えられる。

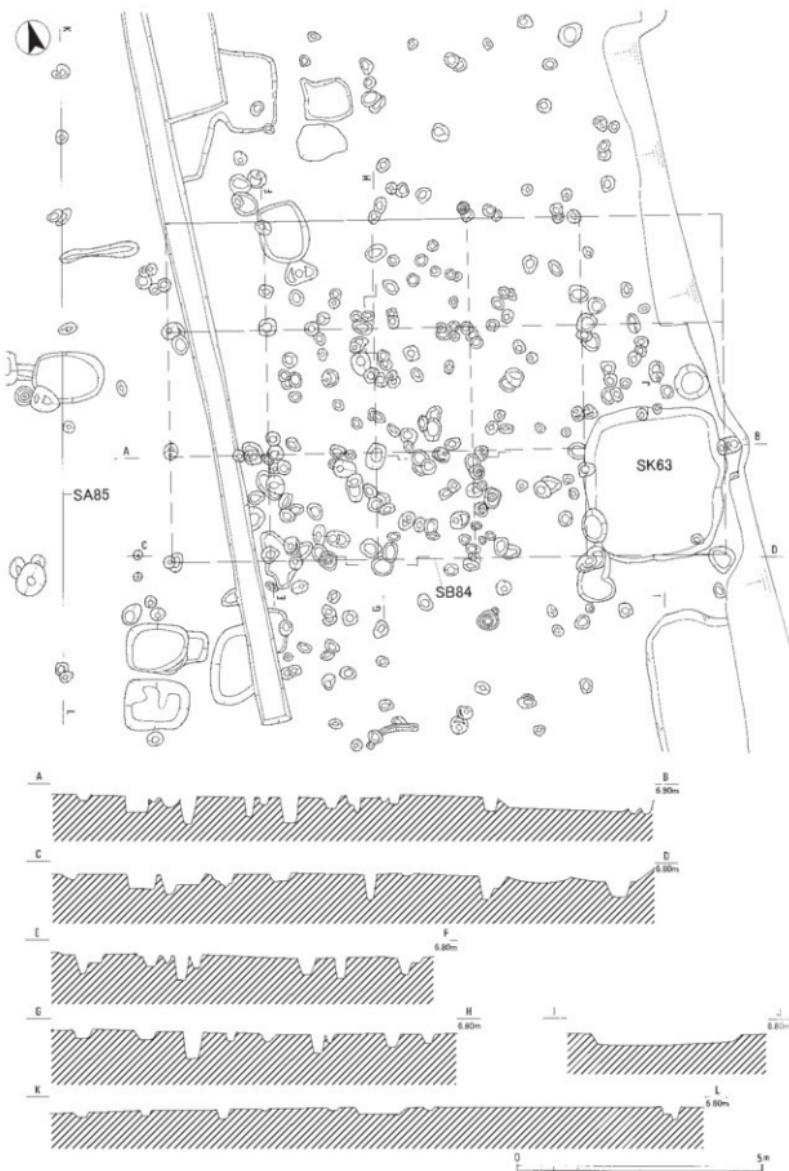
##### (2) 檻

**S A83・86・87** (第51・87図) SD20に伴う一連の檻で、西側に位置する。SA86・87は第I面で検出した。柱間は0.4~1.4mと差があるが、0.5~0.6mの間隔が多い。方位はSD20の屈曲に沿っている。全長100m以上あるSD20の中で、なぜこの辺りのみ檻が確認されたのかは今後の課題である。出土遺物は小片のため図化できなかったが、土師器皿・甕、山茶碗、陶器片などが出土しており、室町時代後期の遺構と考えられる。

**S A85** (第86図) SB84に伴う檻で、西側に位置する。第I面で検出された。柱間は1.3~2.2mである。方位はN14°Eで、SB84とほぼ等しい。出土遺物は小片のため図化できなかったが、土師器皿や山茶碗が出土した。



第85図 c地区 DQ12pit 3・ED14pit 1・EH14pit 4遺物出土状況図 (1:20)



第86図 c地区 SB84・SA85・SK63遺構図 (1 : 100)

### (3) 土坑

**S K 1 ~ 6 • 65 ~ 67** (第88・89図) 調査区南東部に位置する方形土坑群である。第I面で検出した。規模は、大半が長さ約1.2~1.5m、幅約0.8~1.0mで類似している。深さは10~22cm。方位もS K 2~5は東西に長く、S K 65~67は南北に長く、一定の方向性がある。これらのことから同じ性格をもった遺構と考えられる。土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗などが出土しているが、小片が大半である。室町時代後期の遺構と考えられる。

**S K 26** (第89図) 調査区南部の第I面で検出した。直径約1.0m、深さ6cmの浅い円形土坑である。上師器甕や灰釉陶器などが出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

### (4) 溝

#### 1 区画溝 (第90~93図)

**S D 7 • 9 • 10 • 11** c地区南東部からd地区北西部に位置する、室町時代後期の区画地を形成する溝である。区画地の西側から南側を巡る。c地区ではS D 7・9~11の4条の溝が重複して検出され、d地区ではS D 42に重複して検出されており、掘り

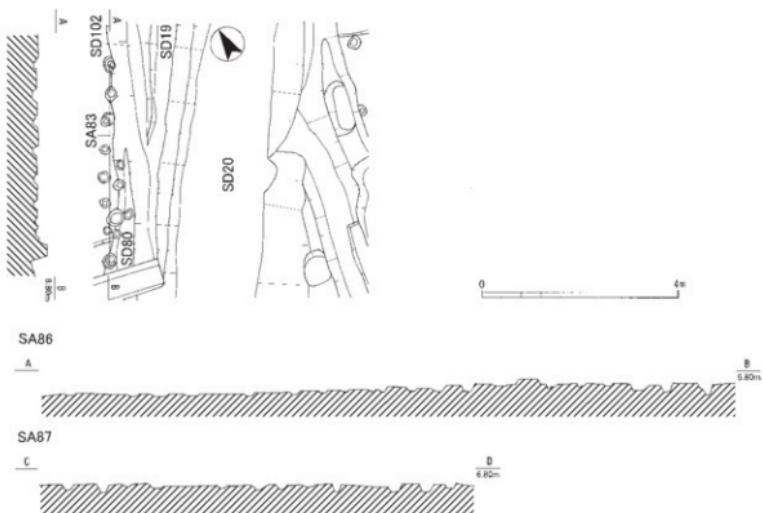
直しが何度も行われた様子が窺える。このうちのS D 10が最後に掘り直しされた溝である。区画地の東側をめぐる溝はd地区のS D 910が相当するが、北半部はc地区の調査区外へのびる。S D 910については後述するが、S D 910の西端はS K 925などの土坑によって掘削されており、d地区検出のS D 10も東端がやや南へ曲がっていることから、S D 10とS D 910の接点はない。区画地の規模は、南北約46m、東西約27m (d地区で計測) であるが、北側の東西方向は27m以上あると想定される。

S D 7・10の断面形状はやや崩れた逆台形を、S D 9はU字形を呈する。

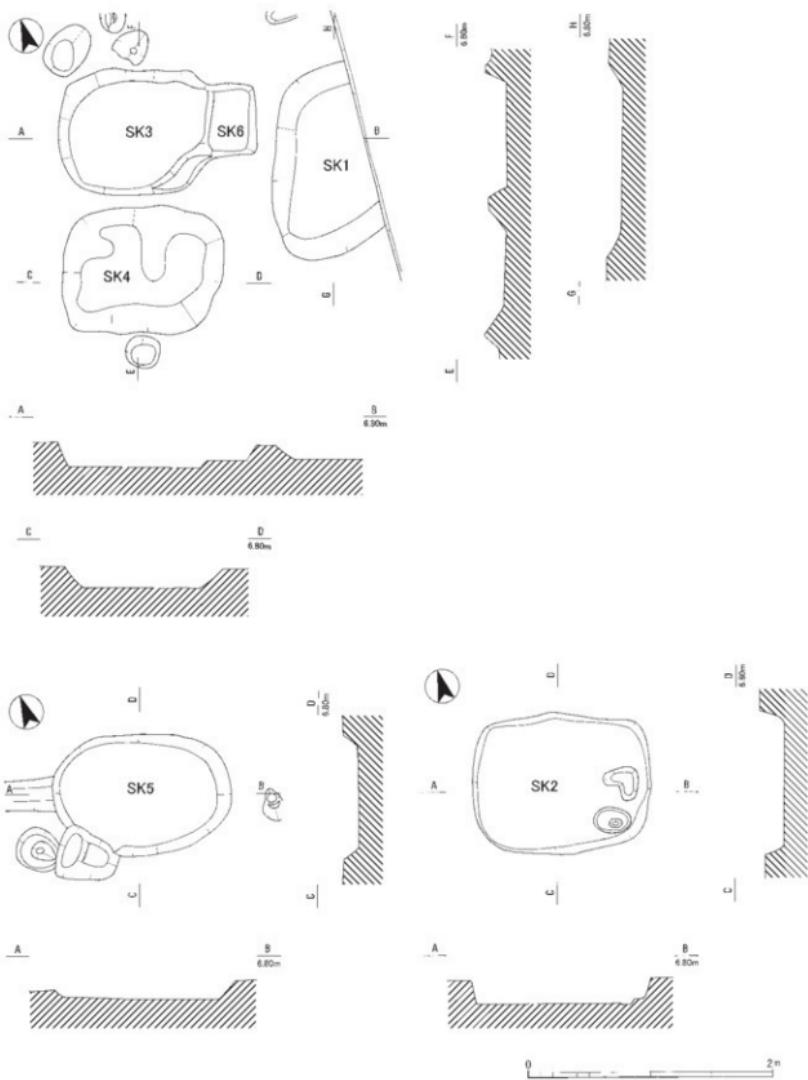
出土遺物には室町時代後期のもの他に、鎌倉時代前期の遺物も多数含まれており、鎌倉時代前期から機能していた可能性も考えられる。

区画の北側を東西にはしる溝S D 8・15・71との間約5.5mと、区画の西側を南北にはしる溝S D 80・102の間3m以上が、通路として使用されたのであろう。

**S D 8・15・71** c地区南東部で検出した東西方向の溝である。3条の溝はほぼ同一地点で重複し



第87図 c地区 S A83遺構図、S A86・87断面図 (1 : 100) ※ S A86・87は第51図参照



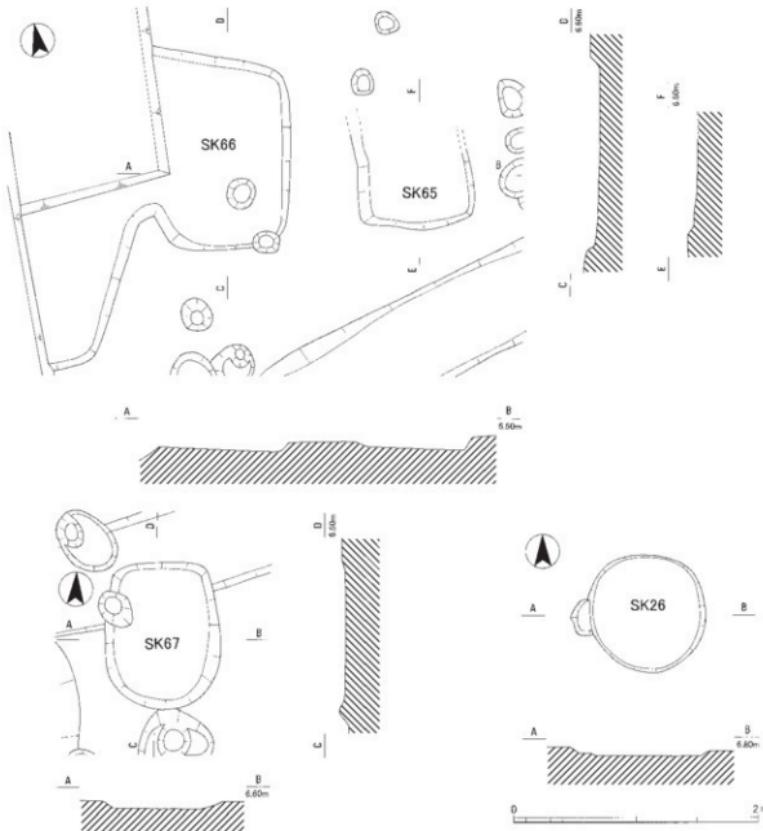
第88図 c地区 SK1・2・3・4・5・6遺構図 (1:40)

ており、何度も掘り直された様子が窺える。このうち S D 8 が最後に掘り直された溝である。西端を S D 20 に切られ、その西側には続기가確認されなかつたため、S D 20 内で終結していたと考えられる。S D 20 の西肩には同時期の区画溝 S D 80・102 が重複しており、これらの溝に繋がっていた可能性も考えられる。

埋土から鎌倉時代前期から室町時代後期の遺物が出土したが、鎌倉時代前期のものが多数を占める。したがって、この時代から区画溝として機能していた可能性も考えられる。

**S D 101** 中央南より西部で検出した。後述する S D 102 東西方向の溝の北側を、1 m弱の間隔を持つて並走し、調査区中央で終結する。S D 102 とは重複関係がなく、出土遺物からも前後関係は見られないが、両者の間を通路とするには狭すぎる感がある。瀬戸美濃陶器の壺などが出土している。

**S D 80・102** 南西部で検出した。S D 102 は c 地区南西部に形成された区画地の北～東側を巡る。南北方向の溝の大部分が S D 20 に破壊されている。S D 80 はこの区画地の東側を巡る。土層断面では S D 102 より新しいことが確認されており、S D 102

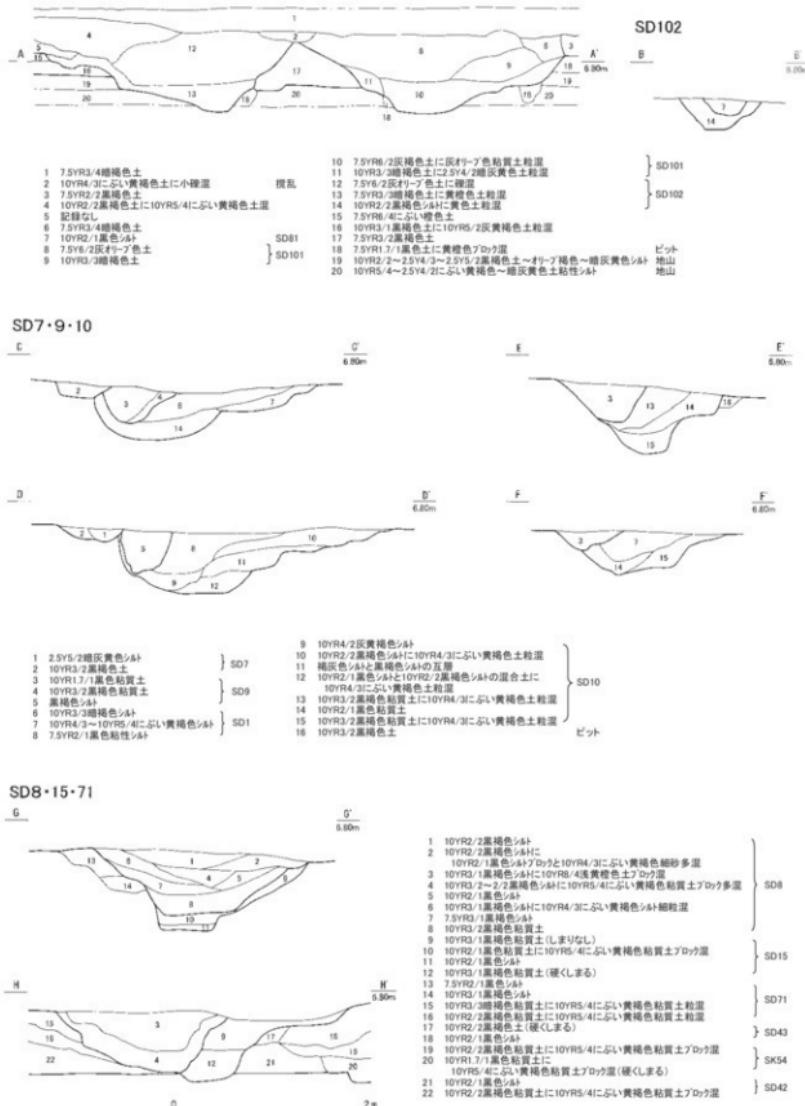


第89図 c 地区 SK26・65・66・67遺構図 (1 : 40)



第90図 c・d地区 区画溝造構図 (1:400)

SD101 • 102



第91図 C地区 古世後期区画遺土層図① (1:50) 透第90図参照

の掘り直しであろうと推察される。

埋土から鎌倉時代前期から室町時代後期の遺物が出土しており、鎌倉時代前期から区画溝として機能していた可能性も考えられる。

## 2 その他の溝

**S D 20** (第90・92・93図) c 地区南東部からd地区北西部にかけて検出した。北側はc地区外東へと続く。室町時代後期の区画溝を破壊して掘削されている。南端は西側へ曲がるようであるが、S D 19やS D 922と重複しており、詳細は不明である。土師器鍋、瀬戸美濃陶器、常滑陶器、山茶碗、青磁碗などが出土しており、室町時代後半の溝と考えられる。

### f 江戸時代の遺構

**S D 19** (第90・92・93図) c 地区南部からd地区北西部にかけて検出した。S D 20の掘り直しの溝で、S D 20より規模が縮小している。c地区中央南寄りで削平され、それより北側では検出されていないが、おそらくS D 20同様、北側は調査区外東へと続いているのである。南端は西側へ曲がるようであるが、S D 20やS D 922と重複しており、詳細は不明である。出土遺物は常滑陶器甕や瀬戸美濃陶器、白磁碗などが出土しており、江戸時代の溝と考えられる。

### g 道路 (第94~99図)

検出された遺構は側溝13条、不整形・楕円形・円形を呈したピット列として検出された波板状凹凸遺構、道路路盤に相当するレンズ状砂質シルト層である。道路は4本あり、最古の道路である平安時代末期から鎌倉前期のものは区画溝に沿って敷設されている。その後、室町時代後期までは、道路幅を拡幅しながらも、もとの道路の位置は踏襲されている。しかし近世になると、南北方向の道路は消滅し、東西方向の道路のみが使用されたようである。

以下、時期的に古いものから順に説明する。

**S R 266** その形状や規模、検出された位置や出土遺物の時期から、S D 43 (39)・89・239が一連の溝であり、S D 238とともに幅2.0m (溝心々幅) の道路 S R 266の側溝であると推定される。S D 239は土層断面から掘り直しが明確であり、この溝の古い時期に相当するのがS D 39である。

以下、まとめると

S D 239古=S D 39

S D 239新=S D 89=S D 43

となる。

S D 238は深さ20cm弱、S D 239は60cm弱で、同じ道路の東西側溝ではあるが、両者の規模には大きな違いが見られる。これは、この付近の地形が東側へ傾斜しているため、路面の排水対策として、東側溝に相当するS D 239をより深く掘削するという工夫がなされたものと思われる。S D 238はc地区北部で削平されている。また、S D 239と一連の溝であるS D 43・39の南側には、S D 238の続きは確認されなかった。

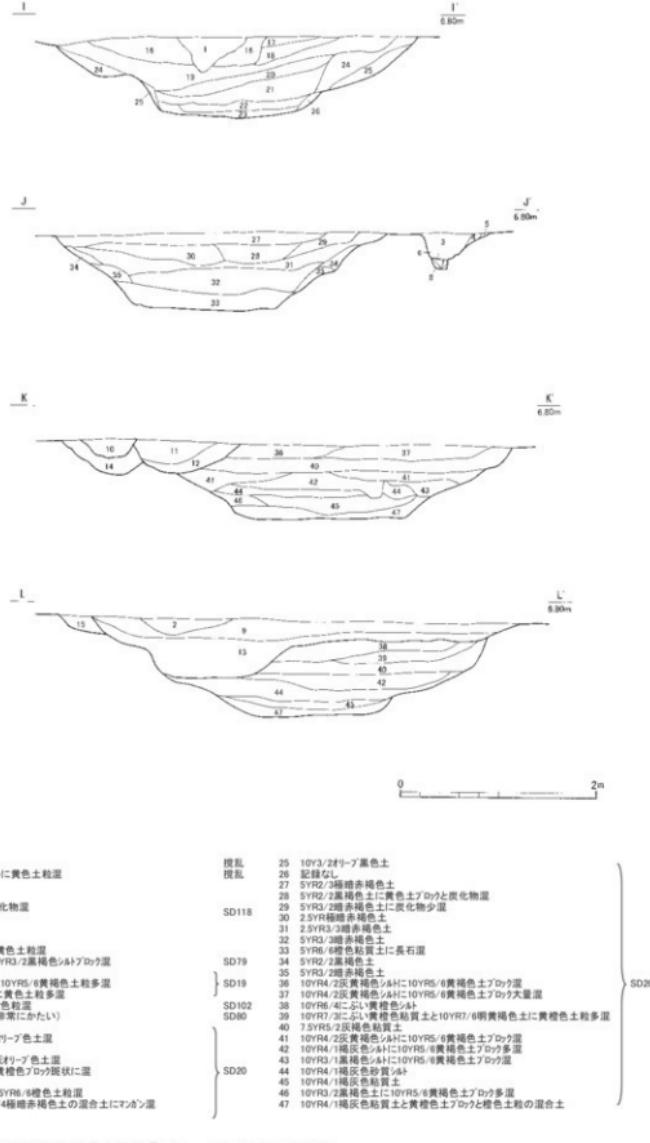
これらの溝からは平安時代末期～鎌倉時代前期の遺物が出土した。

**S R 108** (第94・98・99図) S R 266に重複して敷設された道路である。道路使用当時の路面である硬化面は削平されており、最上層には路盤に相当する硬くしまった吸水性の高い砂質シルトがレンズ状に薄く数枚堆積していた。路盤層は、c地区北部で削平されている。ここからは平安時代末期から室町時代後期までの遺物が出土し、出土遺物はS R 108で取り上げた。路盤層下部では波板状凹凸遺構が検出された。

波板状凹凸遺構は、第6次調査ではその存在に注意が払われておらず、大部分のものが上部の路盤層と同一遺構として調査され、遺物もS R 108 (調査はS D 108) として取り上げられている。したがって詳細が不明確ではあるが、掘り上がりの形状からここに波板状凹凸遺構が存在していたことは明らかである。ここではc地区北部で検出された波板状凹凸遺構を中心に説明をする。

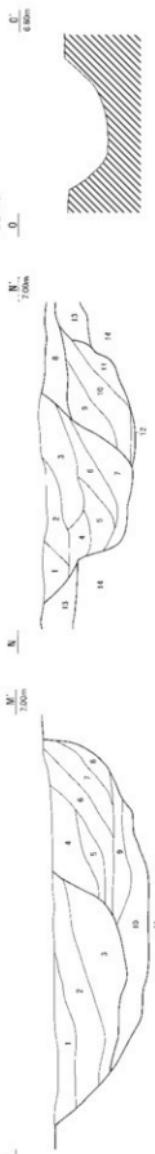
波板状凹凸遺構は、検出された位置・規模・形状・埋土から4種類に分けられる。

波板Aは0.9m×0.5mほどの楕円形ピット列である。S D 239の西肩を切って造られている。したがってS R 266→波板Aの前後関係が明らかである。ピットは同時期の他の遺構埋土とは明らかに異なる、硬くしまった砂質シルトで充填されており、底には拳大的礫と、ほぼ同じ大きさに打ち欠いた山茶碗の破片が貼り付けられていた。その年代観から、平安時



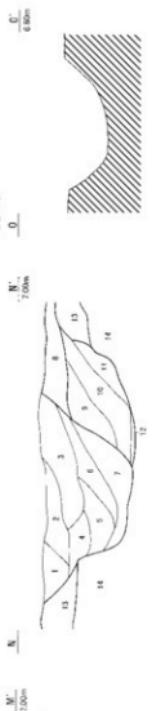
第93図

SD19+20(d地区北壁)



d地区 区画溝土層図 (1 : 50) ※第90図参照

SD10+42(d地区北壁)



1 7.5YR0.4H褐色土に漂土少量

2 7.5YR0.3H褐色土に漂土少量

3 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

4 7.5YR0.1H褐色土に漂土少量

5 10YR0.2H褐色土に漂土少量

6 10YR0.2H褐色土に漂土少量

7 2.5YR0.1H褐色土に漂土少量

8 2.5YR0.1H褐色土に漂土少量

9 10YR0.2H褐色土に漂土少量

10 10YR0.1H褐色土に漂土少量

11 10YR0.1H褐色土に漂土少量

12 10YR0.1H褐色土に漂土少量

13 10YR0.2H褐色土に漂土少量

14 10YR0.2H褐色土に漂土少量

1 D910-4H褐色土に漂土少量

2 10YR0.2H褐色土に漂土少量

3 10YR0.1H褐色土に漂土少量

4 10YR0.2H褐色土に漂土少量

5 10YR0.2H褐色土に漂土少量

6 10YR0.2H褐色土に漂土少量

7 10YR0.2H褐色土に漂土少量

8 10YR0.2H褐色土に漂土少量

9 10YR0.2H褐色土に漂土少量

10 10YR0.1H褐色土に漂土少量

11 10YR0.1H褐色土に漂土少量

12 10YR0.1H褐色土に漂土少量

13 10YR0.2H褐色土に漂土少量

14 10YR0.2H褐色土に漂土少量

15 10YR0.2H褐色土に漂土少量

16 10YR0.2H褐色土に漂土少量

17 10YR0.2H褐色土に漂土少量

18 10YR0.2H褐色土に漂土少量

19 10YR0.2H褐色土に漂土少量

20 10YR0.2H褐色土に漂土少量

21 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

22 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

23 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

24 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

25 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

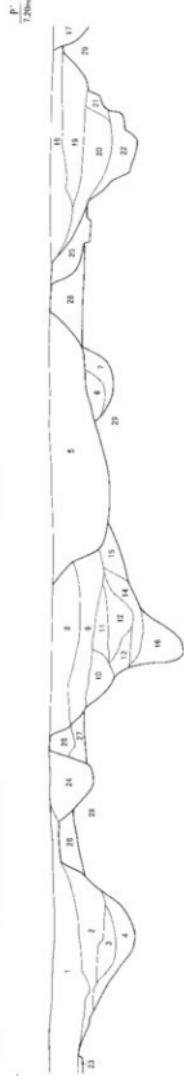
26 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量

27 10YR0.2H褐色土に漂土少量

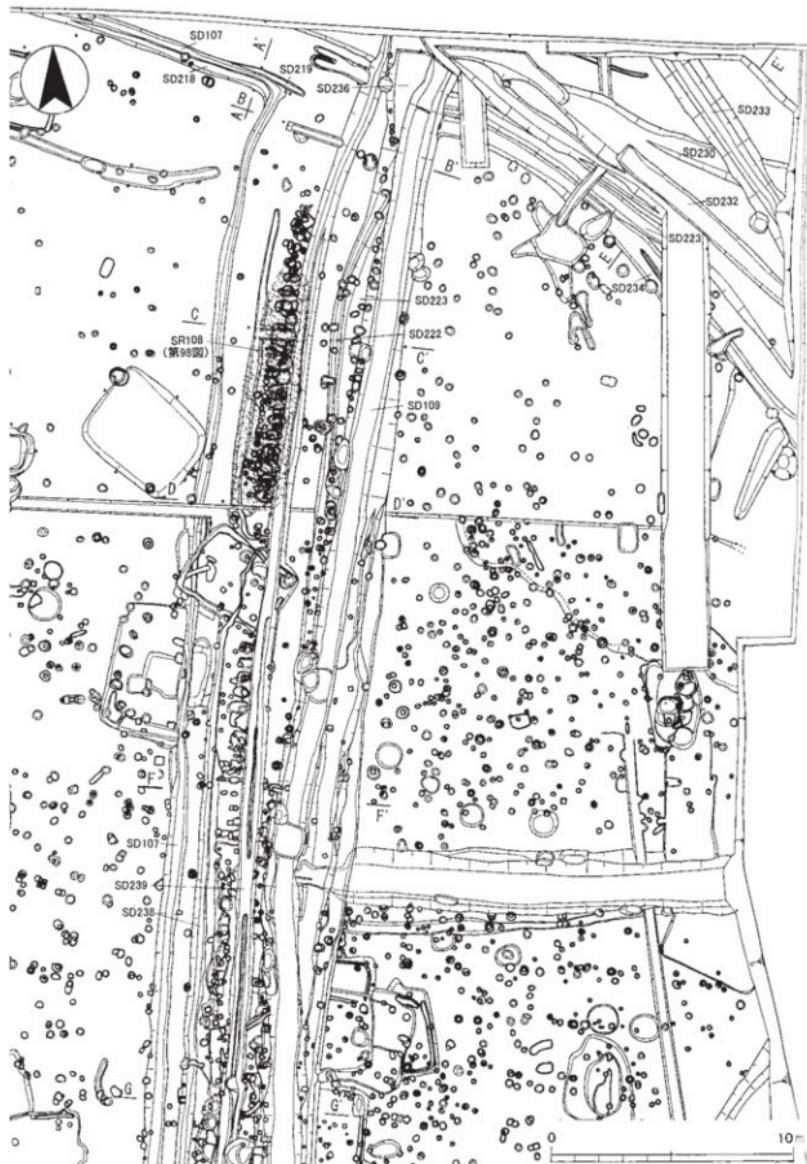
28 10YR0.2H褐色土に漂土少量

29 10YR0.2H褐色土に漂土少量

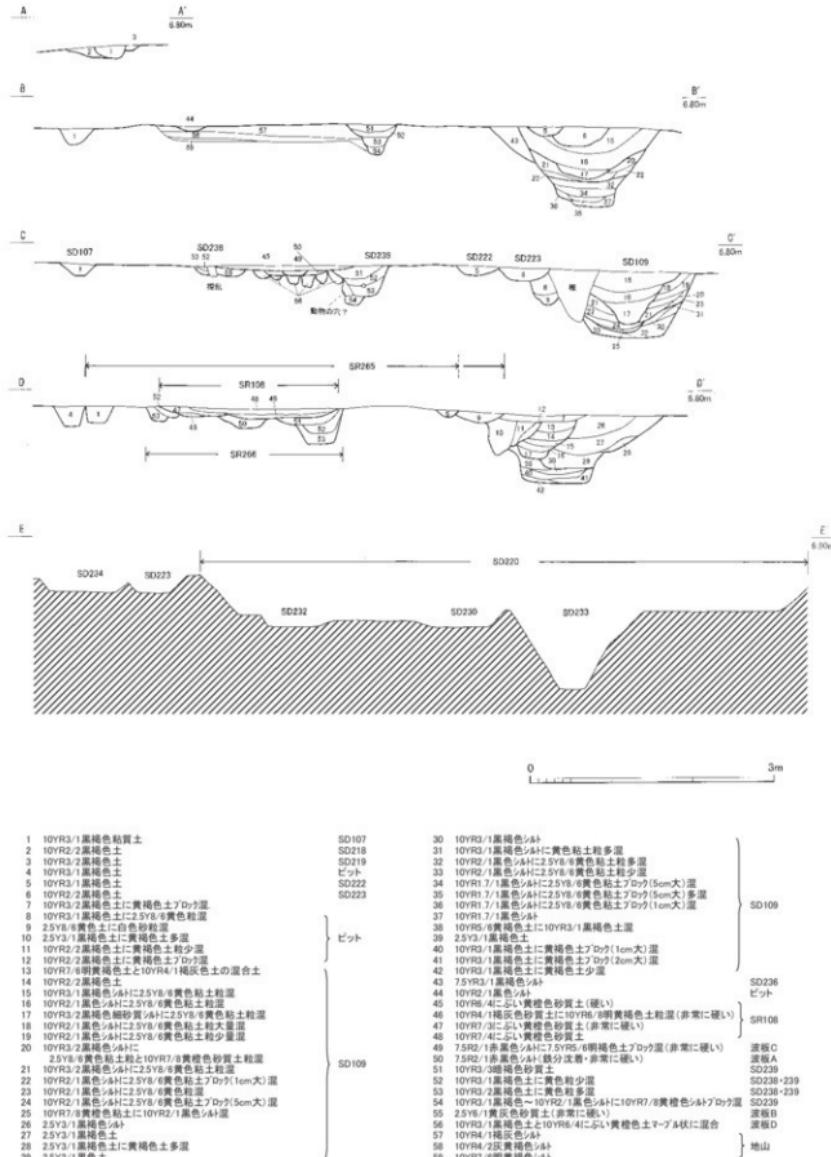
SD910+929+932+911+1051+930(d地区北壁)



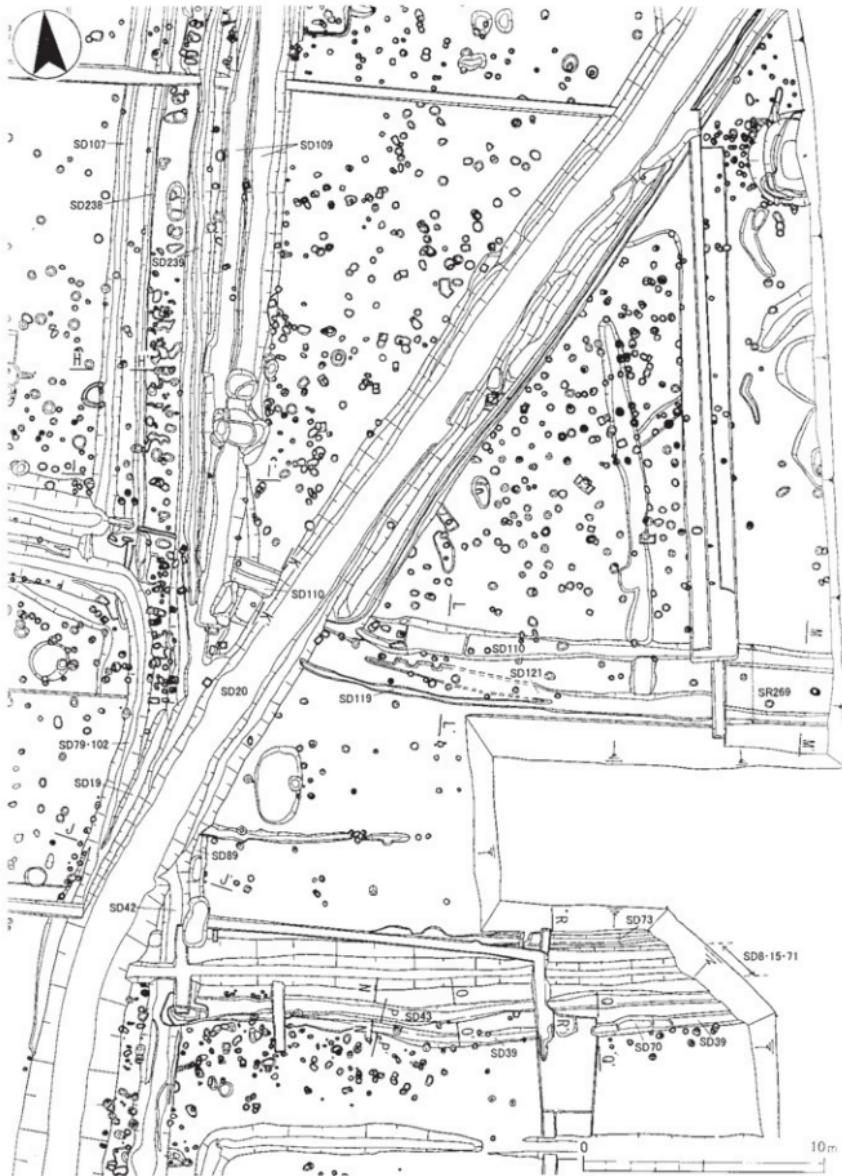
1 10YR0.2H褐色土に漂土少量	17 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
2 10YR0.2H褐色土に漂土少量	18 10YR0.2H褐色土に漂土少量
3 10YR0.2H褐色土に漂土少量	19 10YR0.2H褐色土に漂土少量
4 10YR0.2H褐色土に漂土少量	20 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
5 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量	21 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
6 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量	22 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
7 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量	23 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
8 10YR0.2H褐色土に漂土少量	24 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
9 10YR0.2H褐色土に漂土少量	25 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
10 10YR0.2H褐色土に漂土少量	26 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量
11 10YR0.2H褐色土に漂土少量	27 10YR0.2H褐色土に漂土少量
12 10YR0.2H褐色土に漂土少量	28 10YR0.2H褐色土に漂土少量
13 7.5YR0.2H褐色土に漂土少量	29 10YR0.2H褐色土に漂土少量
14 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD910
15 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD929
16 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD932
17 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD911
18 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD1051
19 5YR0.2H褐色土に漂土少量	SD930



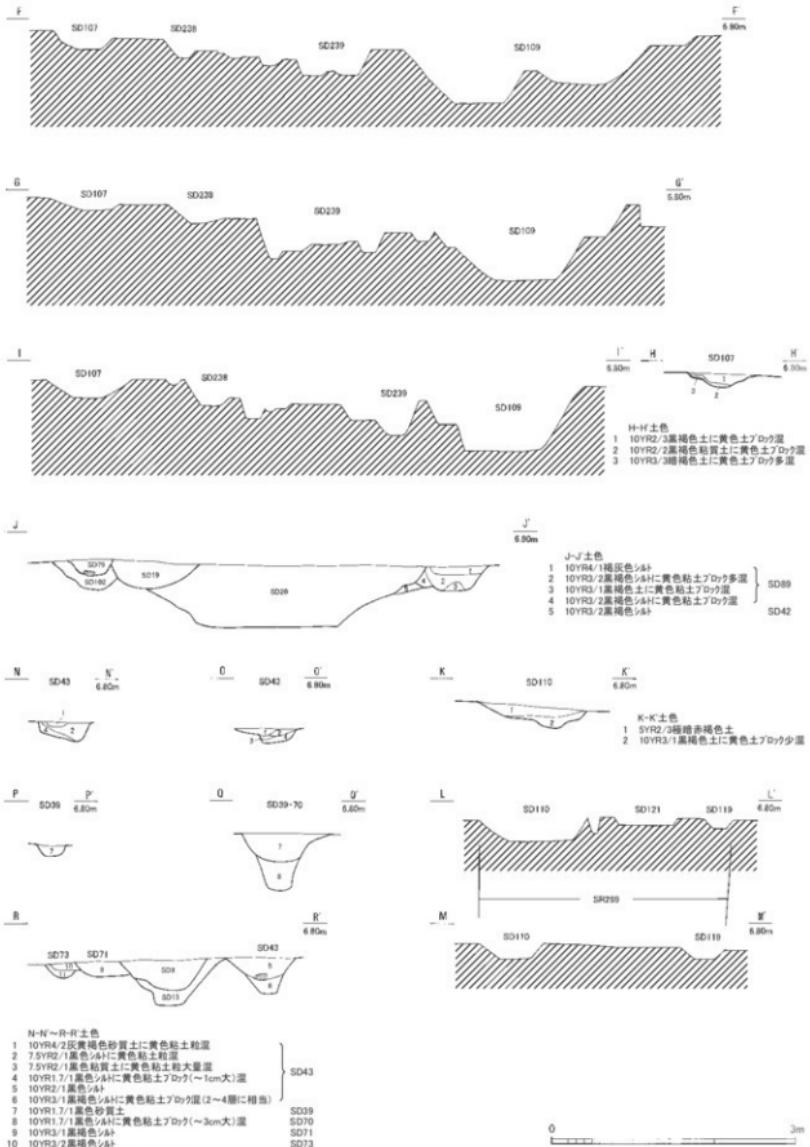
第94図 地区 道路状遺構 造構図① (1 : 200)



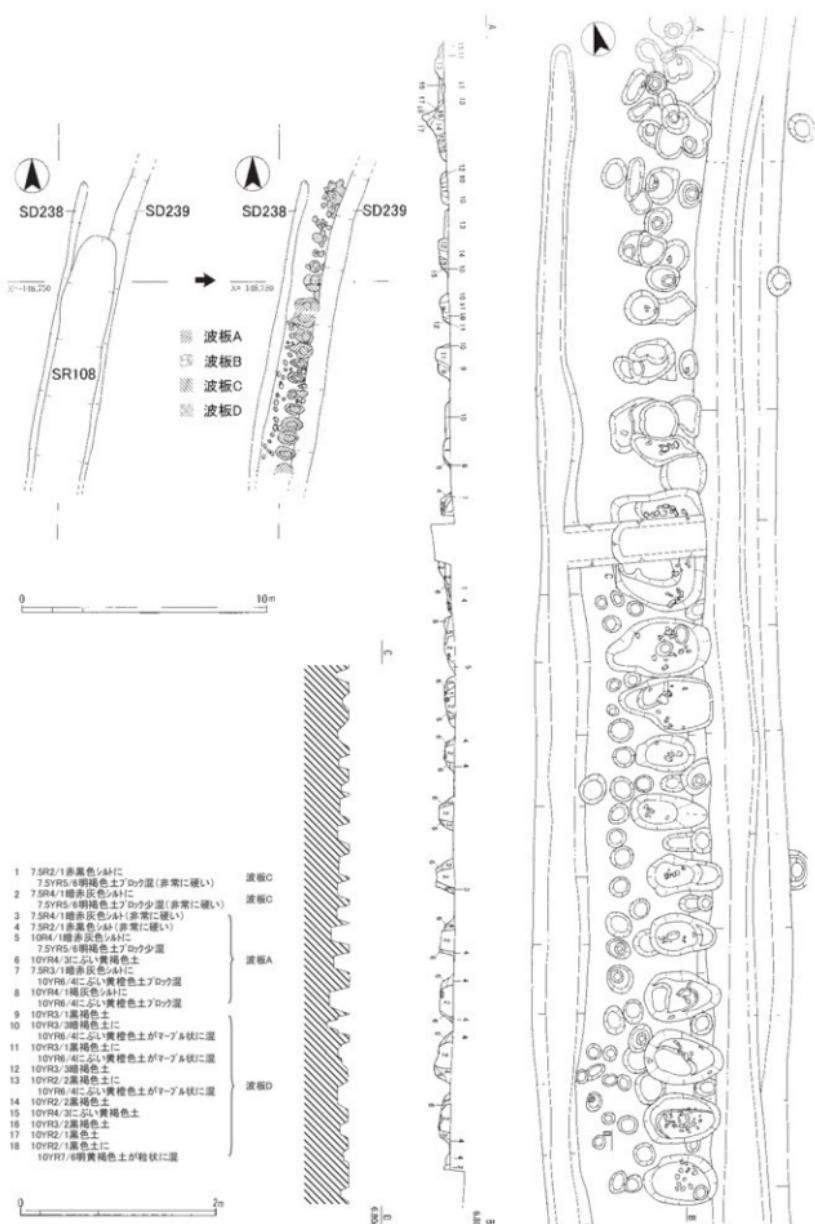
第95図 C地区 道路状況構造層図・断面図① (1:60) 参照第94図参照



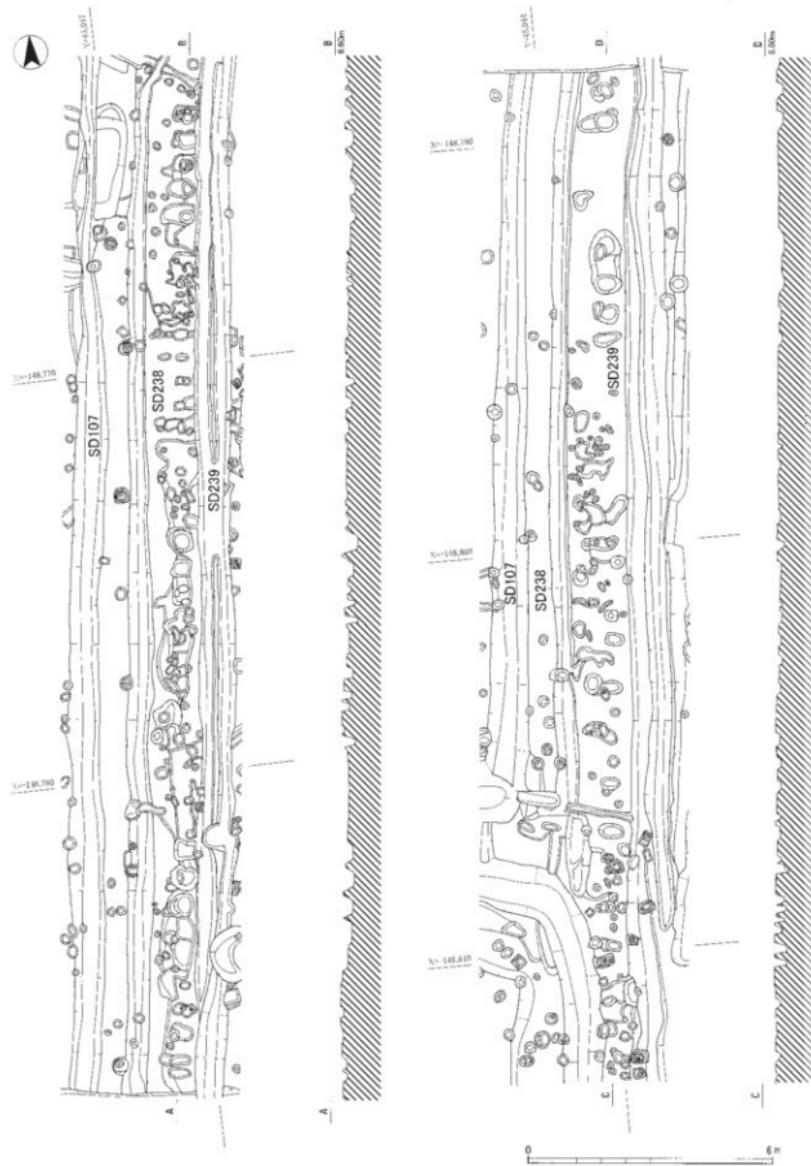
第96図 ○地区 道路状遺構 造構図② (1 : 200)



第97図 c地区 道路状遺構土層図・断面図② (1 : 60)  
(Q-Q'、R-R'は黒ボク上面検出時の土層図) ※第94・96図参照



第98図 c 地区 S R 108・波板A～D換出状況 (1 : 200)、波板A・C・D土層図・波板B断面図 (1 : 50)



第99図 地区 波板状凹凸造構 遺構図 (1 : 120)

代末期～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

波板Bは波板Aの西側で検出された、 $0.3m \times 0.2m$ の小ビット列である。波板A同様、硬くしまった砂質シルトで充填されていた。出土遺物や重複関係から、平安時代末期から鎌倉時代前期のものであると考えられる。

波板Cは $0.5m \times 0.3m$ の小ビット列である。波板Aと同位置に配列されており、重複関係から波板A→波板Cの前後関係が明らかである。波板A同様、硬くしまった砂質シルトで充填されていた。出土遺物はないが、重複関係から鎌倉時代前期から室町時代後期のものであると考えられる。

波板Dは不整形のビット列である。底面は波状を呈する。ビットの規模は一定しない。波板Dと波板A・Bには重複関係が見られ、波板D→波板A・Bの前後関係が窺える。埋土は棕褐色土（地山）と黒褐色土（混じり物のある黒ボク土）が攪拌された土で、波板Dが意図的に形成されたものではないことを示している。出土遺物はないが、他の波板状凹凸遺構との時期に大きな隔たりはないであろう。

波板A～Cと波板Dは、埋土の特徴の違いから異

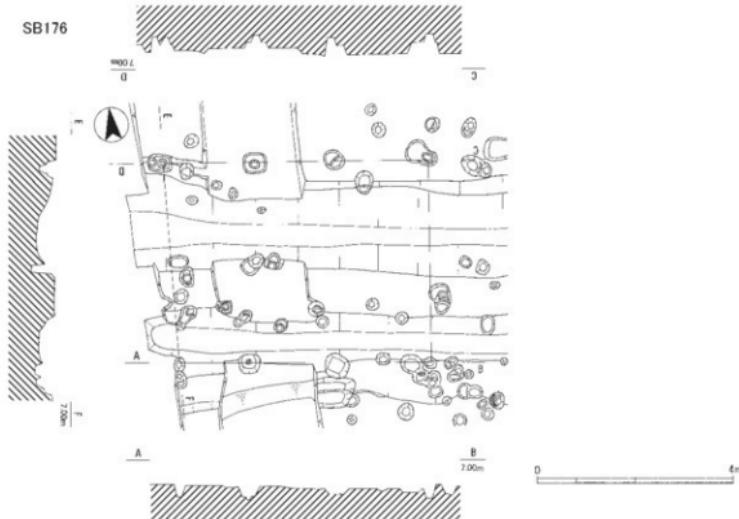
なった性格のものであろうと推察される。波板A～C埋土は吸水性に優れ、調査では特にその部分だけが乾燥が速いという所見が得られている。したがって、これらは、道路地下に造られた暗渠排水であると考えられる。波板A床面の繩や陶器片なども、こうした機能を期待して敷かれたものであろう。

一方、波板Dは、重複関係から他の波板状凹凸遺構に先行することが明らかで、埋土の特徴・平面・床面の形などから、意図的に造られたものとは考えがたい。なぜ、どのように形成されたものであるのかは窺い知れないが、検出された場所からも、道路に関係したものであることは明らかである。

S D43・39の南側で検出された不整形の土坑やビット（S K33～35ほか）は、検出された位置や出土遺物の時期などから、c地区北部で確認された波板状凹凸遺構と性格を同じくするものと考えられる。

以上をまとめると、S R108は地下に暗渠排水施設と路盤を作成する道路であると考えられる。波板状凹凸遺構には重複関係が認められ、S R108には少なくとも2時期存在すると考えられる。

波板DはS R108に先行して形成された遺構であ



第100図 c地区 SB176遺構図 (1 : 100)

る。S R 108に先行する道路 S R 266との前後関係は不明であるが、どちらかの道路上に併走して形成された遺構であろう。

**S R 265** S D 107・218・219と S D 222・223・234は丁字路を含む道路 S R 265の側溝である。南北方向の道路幅が約5.0m、東西方向の道路幅は北側溝が調査区外に当たるため不明である。S D 222・223は平安時代末期頃の区画溝 S D 109と重複し、S D 109埋没後に掘削されたことが確認されている。第6次調査では S D 222・223に相当する溝が検出されていないが、削平されているか、S D 109と完全に重複しているため、調査で認識できなかった可能性がある。

これらの溝から、平安時代末期～室町時代後期の遺物が出土した。なお、東西方向の道路は、明治年間に字切図に表されている道路と一致する。調査では同一方向に走る小規模な近世の溝 S D 221も確認されており、S R 265の東西方向の道路は近世まで利用されていたことが窺える。

**S R 269** S D 110と S D 119・121は東西に走る道路 S R 269の南北側溝である。S D 110は S D 101と重複する部分で、また S D 119・121は調査区中ほどで削平されている。この道路は明治年間に作成された字切図に表されている道路とも一致し、出土遺物からも近世から現代にかけて使われた道路であると考えられる。

#### **h 時期不明の遺構**

**S B 176** (第100図) 調査区南西部で検出した。西側は調査区外へのびる可能性はあるが、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物と考えられる。ちょうどS B 176の中央を S D 101・102が重複するため、側柱建物か総柱建物かは不明である。柱間は桁行1.7～1.9m、梁行約2.0mである。方位はN 7° Eで、東西棟である。土師器小片しか出土しておらず、他の遺構との前後関係も不明であることから、詳細な時期は不明である。

(才木・小林美)

## **2 遺物 (第101～124図)**

### **a 古墳時代の遺構出土遺物**

**S H 57** (307・308) 307は土師器壺である。風化が著しく、調整は内面のヨコナデしか確認できな

い。308は土鍤である。完存で重さ4.2gである。

**S H 72** (309～311) 309・310は須恵器杯身である。立ち上がりはやや内傾し、端部の稜はやや甘い。田辺昭三氏による陶邑窯須恵器編年<sup>1)</sup> (以下、田辺編年と略す) のMT 15型式に併行すると考えられる。

**S B 60** (312・313) 312は須恵器杯蓋の小片である。天井部と口縁部をわける稜は鈍く突出し、TK 47～MT 15型式に併行するだろうか。313は土師器碗である。

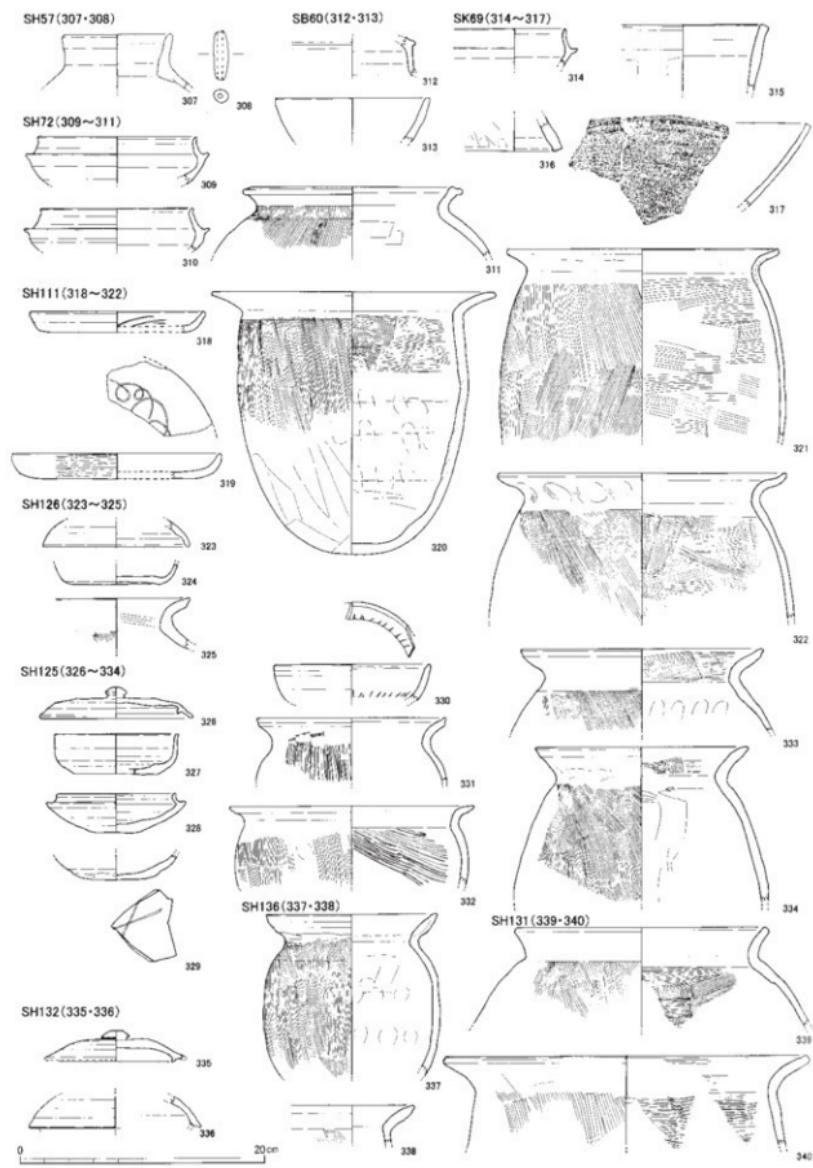
**S K 69** (314～317) 314は須恵器杯身である。立ち上がりはやや内傾し、端部の稜はかすかに残る。受部先端も鈍く、MT 15～TK 10型式に併行するだろう。315は土師器瓶である。316は土師器台付甕の台部である。317は繩文土器浅鉢で、混入と考えられる。

### **b 飛鳥・奈良時代の遺構出土遺物**

**S H 111** (318～322) 318・319は土師器皿である。318は内面に放射状暗文、319は内面に螺旋状暗文、外面にミガキが施される。320～322は土師器甕である。いずれも口縁部は外反するが、321・322は端部が内傾している。

**S H 125** (326～334) 326は須恵器杯蓋である。天井部はクロケズリによってほぼ水平に仕上げられ、中央にやや扁平な宝珠つみがつく。口縁部内面にかえりをもつが、かえりの先端が口縁部以下に突出しない。田辺編年TK 217型式に併行する。327～329は須恵器杯身である。327は体部下半から底部外面がクロケズリされ、体部は上方に直線的にのび、外傾しない。口縁端部は少し外反する。田辺編年TK 217型式に併行する。328は立ち上がりが短く、強く外反する。他のものと焼成が異なり、尾野善裕氏による猿投窯編年<sup>2)</sup> のIV期古段階に併行すると考えられる。329の底部外面には「×」のヘラ記号がある。330は土師器杯である。内面に放射状暗文が認められる。

**S H 126** (323～325) 323は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部をわける稜線は全く認められない。端部は折り返して丸くおさめている。田辺編年TK 209～TK 217型式に併行すると考えられる。324は須恵器杯身である。底部と体部との境界は丸みをも



第101図 c地区 出土遺物実測図1 (1:4)

ち、体部は外傾してのびる。底部外面は未調整である。田辺編年T K217～MT21型式に併行すると考えられる。

**S H131** (339・340) 339・340は土師器甕である。339は口縁部が短く「く」の字状に屈曲する。340の口縁部は外反し、体部は直線的にのびる。

**S H132** (335・336) 335・336は須恵器杯蓋である。どちらも内面のかえりは口縁部よりも下方へ突出している。335には天井部に扁平な宝珠つまみがつく。いずれも田辺編年T K217型式に併行すると考えられる。

**S H133** (363～366) 363は須恵器杯蓋である。天井部は扁平で、かえりは鈍く下方へ曲がる。飛鳥地域や平城宮跡の土器の大別や編年<sup>43</sup>（以下、飛鳥・平城宮編年と略す）の平城宮IIに併行するだろうか。364は土師器皿である。口縁部は丸みをおびてのびる。外面はヘラケズリ、内面には左上がりの放射状暗文が施される。365・366は底部のない筒状の瓶である。どちらも外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整された後、365は内外面下部、366は外面下部にケズリが施される。366の内面下部はユビオサエ後斜めのハケ調整である。

**S H136** (337・338) 337・338は土師器甕である。337は口縁部が厚く作られ、「く」の字状に屈曲する。

**S H138** (341～344) 341は土師器杯である。体部と底部の境界は認められない。内面には放射状暗文がある。342は須恵器杯身である。高台はわずかに外方へ張る短いものがつく。田辺編年T K7型式に併行するだろうか。343は土師器甕である。頭部の屈曲は認められず、口縁部は外反する。344は鉄製品で、おそらく古地金であろうと思われる。

**S H140** (345～347) 345は須恵器杯蓋である。内面のかえりはなく、口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端はにぶい稜をなす。天井部中央に扁平な宝珠つまみをもつ。飛鳥・平城宮編年の飛鳥V～平城宮Iに併行すると考えられる。346・347は土師器甕である。347の口縁は短く強く外反する。

**S H155** (348・349) 348は土師器皿である。口縁部ヨコナデの後、内面はミガキ、外面底部はヘラケズリが施される。口縁端部内面にわずかな沈線

が認められる。349は土師器甕である。

**S H156** (350～355) 350は須恵器杯である。底部にはロクロケズリが施され、口縁部は直線的にのびる。351は土師器杯である。口縁部と底部の境は丸みをもち、口縁部は外上方に開く。外面をヘラケズリし、内面はミガキを施している。斎宮跡出土土器の編年<sup>43</sup>（以下、斎宮編年と略す）の第I期第2～3段階に併行すると考えられる。352は何かの工具と思われる鉄製品である。幅1cm、厚さ0.25cmである。353は土師器杯である。口縁部は直線的に外開し、内面には2段の斜放射状暗文が認められる。口縁端部は肥厚する。飛鳥・平城宮編年飛鳥V～平城宮Iに併行するだろう。354は土師器甕である。355は砥石である。2面に砥面が確認できる。

**S H157** (356) 356は土師器杯である。内面に2段の斜放射状暗文が認められる。

**S H161** (357) 357は土師器皿と思われるが、高杯の可能性もある。口縁部と底部の屈曲はほとんどなく、外面にはケズリが施されている。

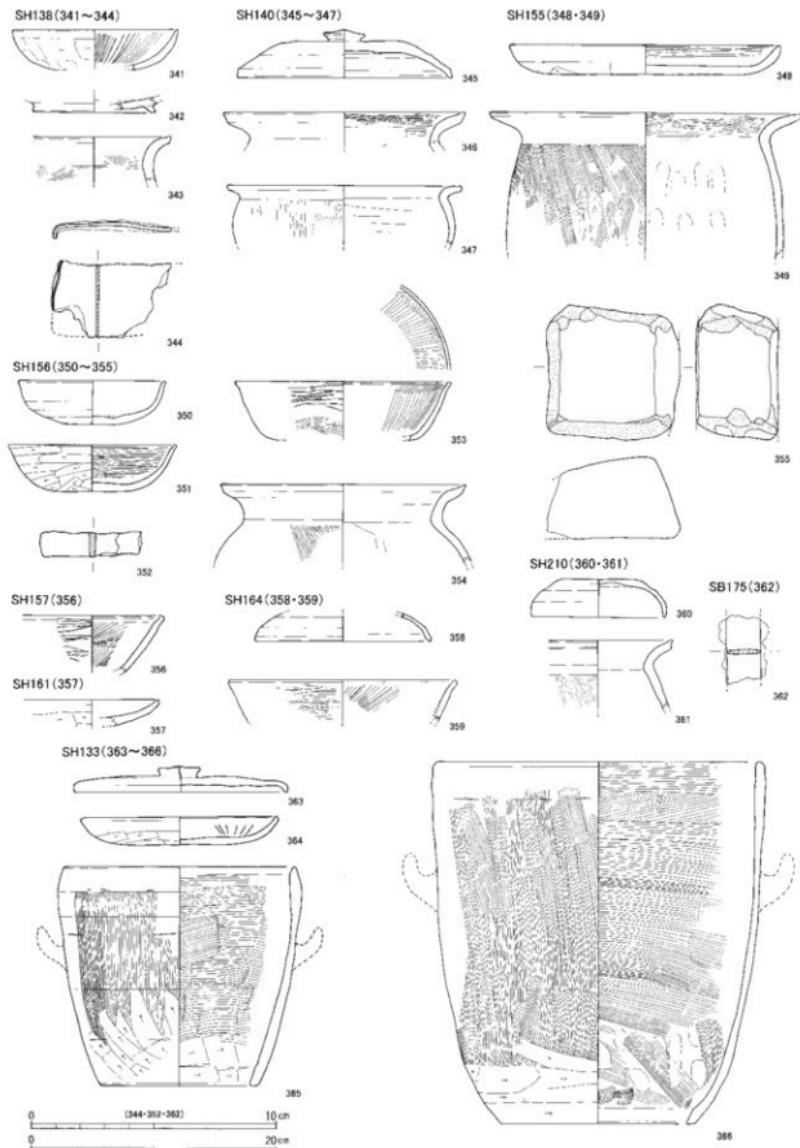
**S H164** (358・359) 358は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部をわける稜線はない。359は土師器杯である。内面に1段の斜放射状暗文が認められ、外面にはミガキが施される。

**S H210** (360・361) 360は須恵器杯蓋である。天井部はロクロケズリ後ナデが施されており、平らに仕上げられている。猿投窓編年IV期古段階に併行すると考えられる。361は土師器甕である。

**S B175** (362) 362は鍛造刹片である。幅1.4cm、厚さ0.2cmである。

### c 平安時代前期～後期の遺構出土遺物

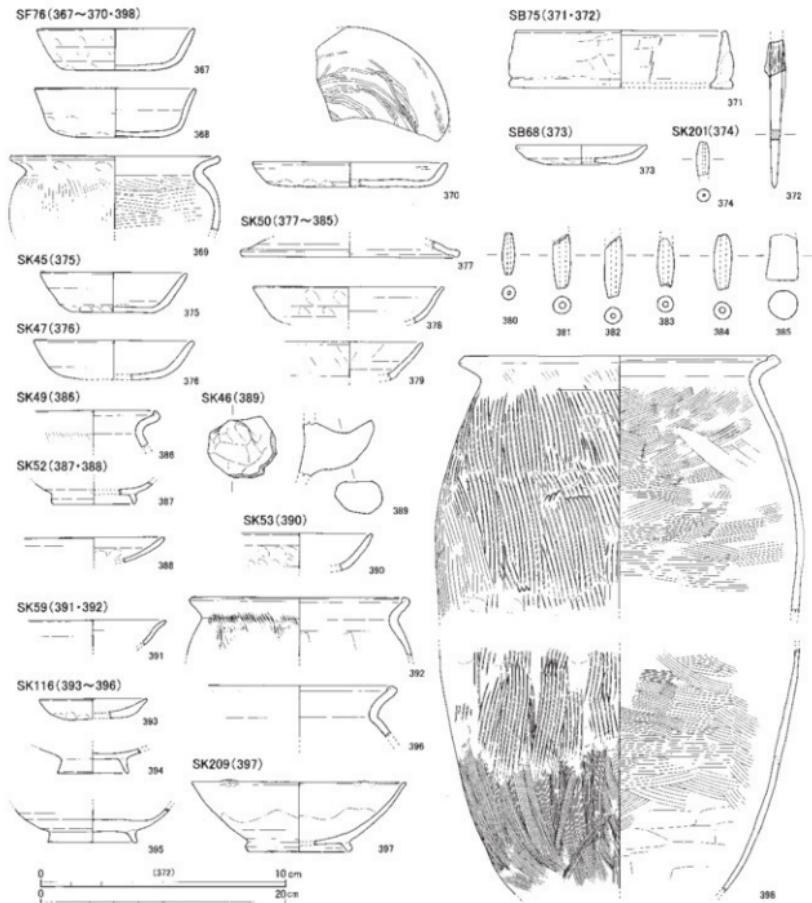
**S H130** (530～545) 530～533は土師器小皿である。530は器壁が厚く、口径が7.8cmと小型である。531・532は平らな底部から屈曲して口縁部が開く。伊藤裕像氏による雲出島貢遺跡出土土器の編年<sup>43</sup>（以下、島貢編年と略す）のF2期新相に併行すると考えられる。533はいわゆる「て」の字状口縁の小皿である。531～533の口径は9.0～9.7cmである。534～537は土師器皿である。口径は14.4cm～15.3cmである。口縁部にはナデ、体部外面にはユビオサエが認められるものが多い。534～536の口縁部のヨコナデは2単位あり、534・535は平底である。島貢編



第102図 c地区 出土遺物実測図2 (1:4) 344・352・362は1:2

年F 2期新相～F 3期に併行すると考えられる。

538～541は灰釉陶器と山茶碗である。538は口径11.2cmと非常に小型の椀で、逆三角形の高台がつく。内面には磨耗が認められる。539～541は口径が16.6～16.7cmと均一である。539・540は口縁部が外反し、逆三角形の高台がつく。藤澤良祐氏による山茶碗編年<sup>8)</sup>（以下、藤澤編年と略す）第2～3型式に併行すると考えられる。



第103図 c地区 出土遺物実測図3 (1:4) 372は1:2

542・543は土師器甕である。口縁部は短く、端部は丸く肥厚し、内側に折り返しが認められる。頸部内面は稜をもたず丸い。南伊勢系のもので、伊藤裕偉氏による中世南伊勢系土師器鍋編年<sup>7)</sup>（以下、伊藤鍋編年と略す）の仮（A）段階に相当すると考えられる。

544は鉄滓で、自然科学分析では椀型滓とされている。他のものよりも銅成分が高い。545は鉄釘で

ある。頸部と下端部は欠損している。

**S B68** (373) 373は土師器小皿である。口縁部の立ち上がりはほとんどなく、わずかに屈曲する。底部外面はユビオサエ・ナデ調整である。斎宮編年第III期第2段階に併行すると考えられる。

**S B75** (371・372) 371は志摩式製塗器である。内面に板状工具痕、底部に初穀痕が認められる。372は無間鉄鍍で、上部に木質が確認できる。断面は四角形で、茎の可能性がある。

**S K45** (375) 375は土師器杯である。口縁部は丸みをおびて直線的に開く。底部外面はユビオサエ後ナデ調整され、口縁部はヨコナデされる。斎宮編年第II期第1～3段階に併行すると考えられる。

**S K46** (389) 389は土師器瓶もしくは鍋の把手と思われる。断面形はやや扁平な梢円形に近い。

**S K47** (376) 376は土師器杯である。口縁部は丸みをおびてほとんど屈曲することなくのびる。底部外面はナデ、口縁部はヨコナデされる。斎宮編年第II期第1～3段階に併行すると考えられる。

**S K49** (386) 386は土師器甕の小片である。口縁端部が内側に折り返され、肥厚している。斎宮編年第II期第3～4段階に併行すると考えられる。

**S K50** (377～385) 377は須恵器蓋の小片である。全体的に厚く、かえりもわずかに下方へ突出している程度である。378・379は土師器杯である。378の口縁部は丸みをおびてやや大きく開く。斎宮編年第II期第3～4段階に併行すると考えられる。379の口縁部下部はやや強くヨコナデされる。斎宮編年第II期第1～3段階に併行すると考えられる。385は不明土製品の破片で、最大径は2.3cmである。全体はナデ調整であり、底部は平らに整えられている。

**S K52** (387・388) 387は灰釉陶器碗である。高台は下半が内彎しつつ下端が尖っており、横崎彰一・斎藤孝正氏による猿投窯灰釉陶器編年<sup>8)</sup>（以下、横崎・斎藤編年と略す）の黒雀90号窯式期併行と考えられる。388は土師器皿である。

**S K53** (390) 390は土師器杯である。口縁部は丸みをおびてほとんど屈曲することなくのびる。斎宮編年第II期第1～3段階に併行すると考えられる。

**S K59** (391・392) 391は土師器杯である。器壁は薄く、口縁部はヨコナデされ強く外反する。斎

宮編年第II期第3～4段階、島貫編年のE期新相（新）に併行すると考えられる。392は土師器甕である。口縁部は短く、口縁端部は折り返され肥厚する。

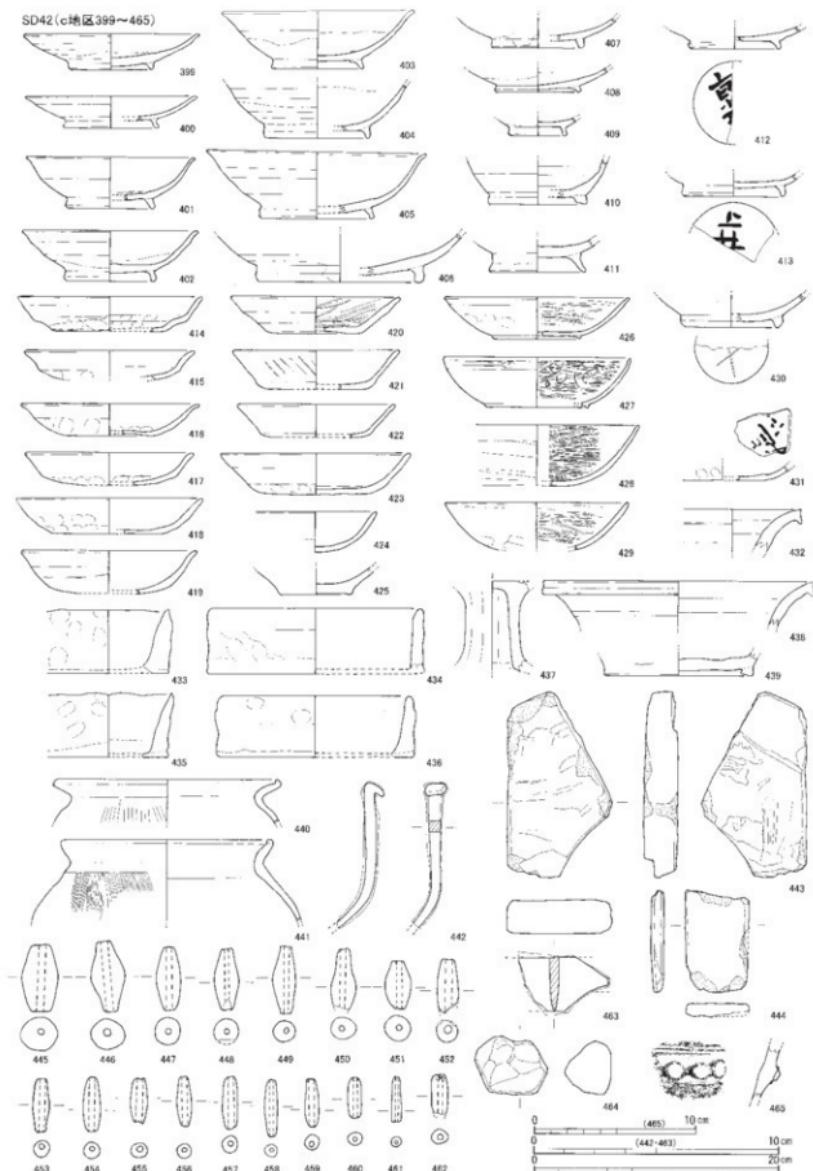
**S K116** (393～396) 393は土師器小皿である。394は土師器台付小皿である。脚は低く、斎宮編年第II期第4段階～第III期第1段階頃に併行するだろう。395は灰釉陶器碗である。高台はやや高く、外に開く。396は土師器甕である。口縁部はやや外反気味であり、端部は折り返して肥厚する。

**S K209** (397) 397は灰釉陶器碗である。器壁は薄手で、口縁部の外反、体部下半の張りは弱い。輪花が3箇所あったと考えられ、灰釉は漬け掛け施釉である。横崎・斎藤編年折戸53号窯式に併行すると考えられる。

**S D42** (c 地区399～465) 399・400・407・408・412は灰釉陶器皿である。399は体部が緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台はやや幅広く、横崎・斎藤編年黒雀90号窯式に併行すると考えられる。400は高台が外反する。412の底部外面には墨書があるが、一部のみの残存である。

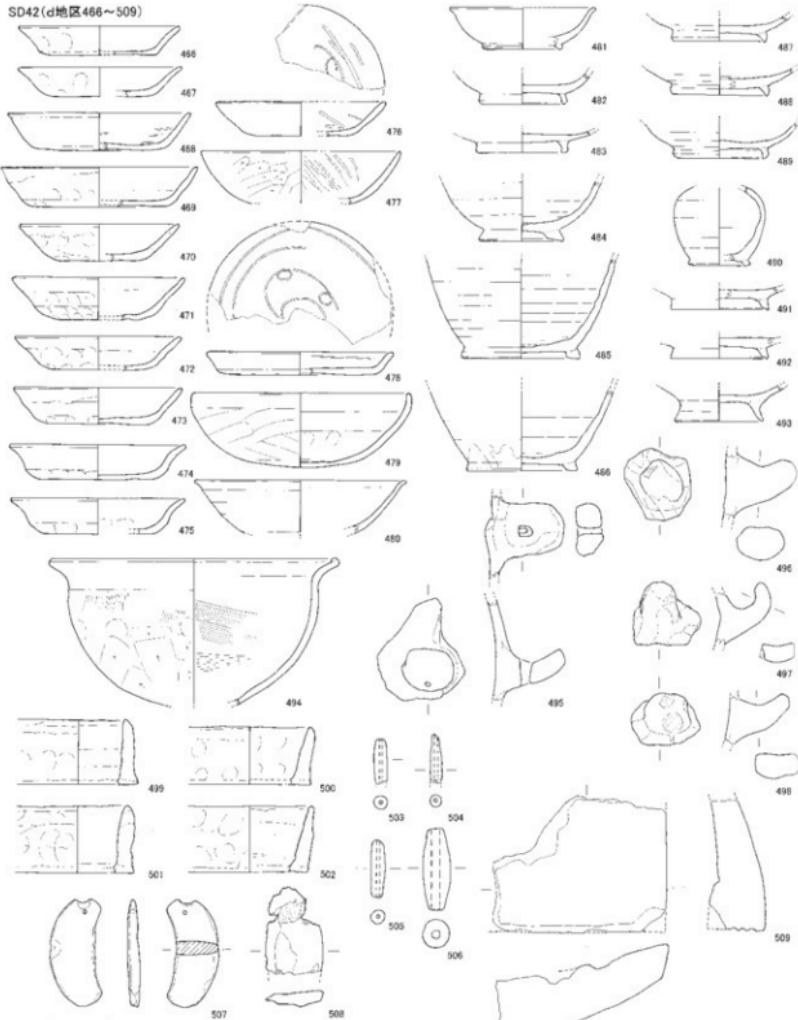
401～405・413・430は灰釉陶器碗、409は小椀である。403は口縁部が外反し、八の字形に開く高台がつく。折戸53号窯式2型式に併行するだろうか。402には三日月高台がつく。404は体部外面下半にロクロケズリが施され、三日月高台がつく。405は口縁部は外反し、内彎の長方形の高台がつく。体部外面下半はロクロケズリが施される。横崎・斎藤編年黒雀90号窯式1型式に併行するだろうか。413の底部外面には一部ではあるが「上井」のように見える墨書が確認できる。430の底部外面にはケズリ後「×」のヘラ記号がある。

406は灰釉陶器鉢で、三日月高台がつく。410・439は灰釉陶器瓶である。410の外面にはロクロケズリが施される。411はロクロ土師器台付皿である。外反して開く脚がつく。414～424は土師器杯である。414～419は口縁部がヨコナデされることにより外反し、底部はユビオサエやナデ調整される。口径は13.6～15.0cmである。斎宮編年第II期第2～4段階に併行すると考えられる。420～423は口縁部が底部から屈曲して立ち上がり、直線的に開く。420は内面にミガキが認められる。421は口縁部外面に工具

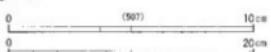
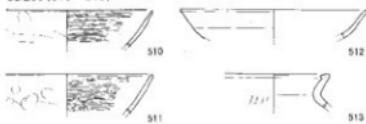


第104図 c地区 出土遺物実測図4 (1:4) 442・463は1:2、465は1:3

SD42(d地区)466~509



SD236(510~513)



第105図 c地区 出土遺物実測図5 (1:4) 507は1:2

痕が認められる。424は丸底の杯で、焼け歪みのため正確な口径を測ることは難しいが、10cm程度の小型品である。

426～429は黒色土器碗である。426は内面にミガキが施されるが暗文ではなく、外面は風化のため調整不明である。口縁端部はわずかに外反し、扁平な三角高台がつく。大川勝宏氏による斎宮跡出土の黒色土器編年<sup>91</sup>の平安時代Ⅲ期に併行すると考えられる。427は内面に螺旋状暗文が見られ外面にはわずかにミガキが残る。口縁端部内面にわずかに段があり小さな三角高台がつく。428・429は高台がなく、外面はケズリが施される。429はやや器壁が厚手である。

431は土師器皿小片で、内面に墨書きが認められるが、判読は困難である。433～436は志摩式製塙土器である。442は鉄釘で、頭部は打ち平たくして折り曲げ、面を作り出している。443・444は砥石である。スリ面は443が2面、444が3面確認でき、443には一部工具痕が認められる。445～462は土鍾である。30g以上の大型のもの、15g程度の中型のもの、10g以下の小型のものに大きく分けられる。463は鍛造品の古地金である。片側に撫閑のようにみえる箇所がある。

**S D42 (d地区466～509)** 466～477は土師器杯である。466～476は口縁部が底部から屈曲して大きく開き、ヨコナデのためやや外反するものが多いが、474・475は口縁部のヨコナデが特に強く、強く外反する。斎宮編年第II期第2～4段階頃に併行するだろうか。476は内面に螺旋状暗文を意識した雑な暗文が認められる。477は口縁部が屈曲することなく、なだらかに立ち上がり、椀形態にやや近い。外面はケズリ、内面はミガキが施される。

478は土師器皿である。口縁部は底部から屈曲して立ち上がり、内面には螺旋状暗文がみられる。479は土師器碗である。外面はケズリが施され、内面はユビオサエ後ナデ調整される。

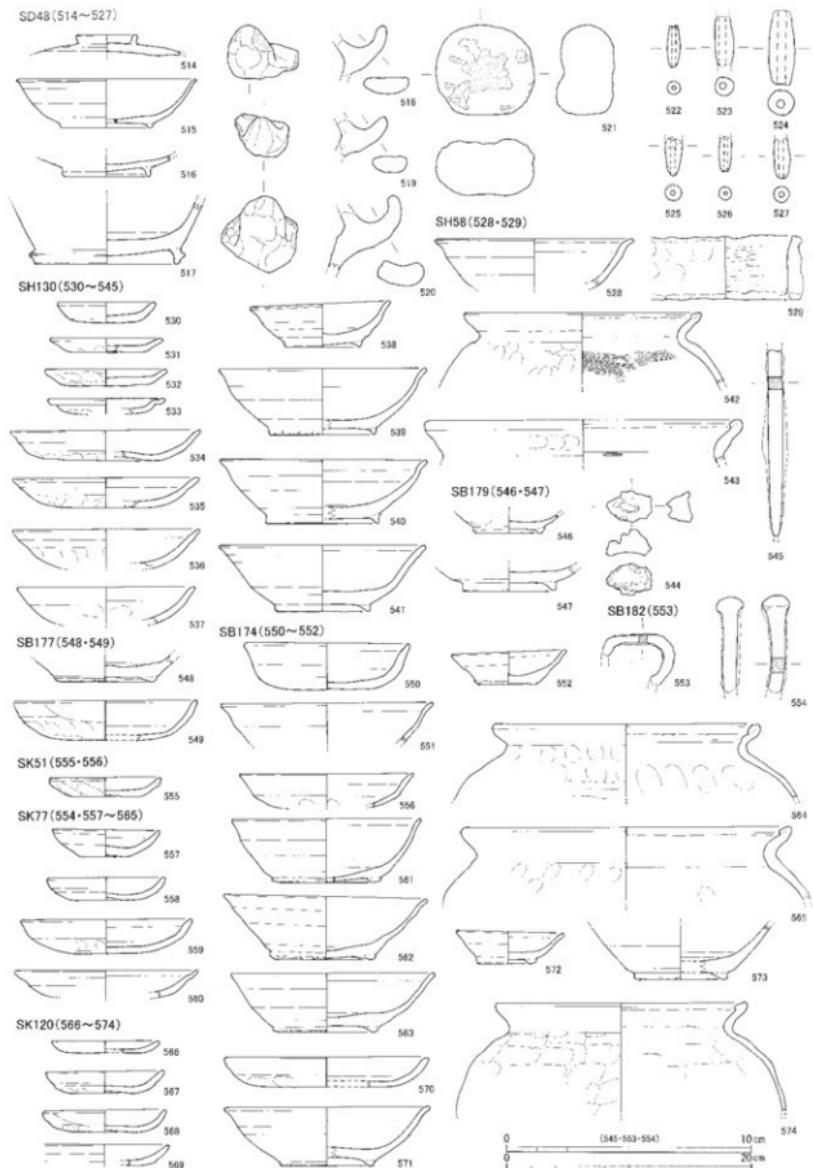
480・482・483・487～489は灰釉陶器碗である。482・483には端部がやや拡張した高台がつく。487・488は下半が内彌しつつ端部が尖る高台がつき、489は定型化した三日月高台がつく。柄崎・斎藤編年黒鍔90号窯式に併行すると考えられる。

481は灰白色であるが、緑釉陶器小椀と思われる。体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部は外反する。外側へふんばる低い高台がつく。485・486は灰釉陶器瓶である。いずれも外面はロクロケズリされ、やや内彌する貼付高台がつく。491・492は緑釉陶器碗である。いずれも有段輪高台がつき、近江産のものと考えられる。493はロクロ土師器台付皿である。台部はほとんど外反することなく直線的に開く。495～498は土師器把手である。495は扁平な把手の中央部に穿孔がある。499～502は志摩式製塙土器である。507は勾玉である。長さ4.4cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmと薄く、直径0.1cmの小さな穿孔がある。508は不明石製品で抉り状の加工が認められる。509は軒平瓦である。内区に均正唐草文、外区に線緋衛文を配し、無頬である。文様の下に木目が認められることから、古い範が使われたようである。内面には糸切り痕が残り、外面は削られている。藤原宮式<sup>92</sup>に属すると考えられ、奈良時代後半頃のものと思われる。

**S D236 (510～513)** 510・511は黒色土器碗である。いずれも内面はミガキ、外面はケズリが施され、511は内面に螺旋状暗文が認められる。

**S D48 (514～527)** 514は須恵器蓋であるが、天井中央部に環状鉢がつく。515は灰釉陶器碗である。器壁は薄く、体部は底部からなだらかに立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。高台は低く半円形に近い。516は灰釉陶器皿である。高台は端部の丸いや高めのものがつく。柄崎・斎藤編年折戸53号窯式に併行すると考えられる。521は嵌石である。嵌き面は両面に確認できる。

**S F76 (367～370・398)** 367・368は土師器杯で、どちらも口縁部は丸みをおびて外方へ開く。368の口縁部はわずかに外反気味に開く。いずれも内面はナデ、外面はナデとユビオサエ調整である。369は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に外方へ開き、端部は肥厚する。370は土師器皿である。平らな底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、やや外開する。内面には放射状暗文を意識したと思われる暗文が雑に施される。368・369・371はいずれも斎宮編年第II期第1～3段階頃の併行になるだろう。398は土師器甕である。残存しているだけでも



第106図 c地区 出土遺物実測図6 (1:4) 545・553・554は1:2

高さ41.4cmある長胴甕である。口縁端部は内側へ折り返し、肥厚する。外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケで、内面下部は横向のナデ調整である。

#### d 平安時代末期～鎌倉時代の

##### 遺構出土遺物

**S H 58** (528・529) 528は山茶碗である。口縁端部は外反する。529は志摩式製塙土器である。内面は板ナデ調整され、底部に粉穀痕が認められる。

**S B 174** (550～552) 550は土師器杯である。器壁は厚く、口縁端部内面はヨコナデによるへこみがある。551は山茶碗、552は山茶碗小碗である。552は小さく低い高台がつき、藤澤編年第5～6型式に併行する。

**S B 177** (548・549) 548は山茶碗である。高台は低く、藤澤編年第6型式に併行する。549は土師器皿である。平らな底面から体部が緩やかに広がる。島貫編年F3期に併行すると考えられる。

**S B 179** (546・547) 546は灰釉陶器矮皿である。高台は低く、端部は丸い。547は山茶碗である。高台はやや高く、逆台形に近い。藤澤編年第3～5型式に併行すると考えられる。

**S B 182** (553) 553は鉢具と思われる。幅は2.9cm以上のものである。断面は四角形である。

**S K 51** (555・556) 555は土師器小皿である。口縁端部外面に接合痕が認められ、外面はユビオサエ、内面はナデ調整される。556は土師器杯である。器壁はやや薄く、口縁部は強くヨコナデされることにより、底部との境界に棱がある。斎宮編年第II期第3段階～第III期第1段階に併行すると考えられる。

**S K 77** (554・557～565) 554は鉄釘である。頭部は丸く仕上げられており、下部は断面四角形の角釘である。頭は打ち平たくしてから折り曲げている。557はロクロ土師器小皿である。口縁部は内彎し、底部に糸切り痕が残る。558は土師器小皿、559・560は土師器皿である。558は中央がくぼむ底部から緩く屈曲して開く口縁部をもつ。島貫編年F3～4期に併行する。559・560はともに口縁部のヨコナデが強く、特に560は口縁端部が内彎して棱が残るほどヨコナデが強い。島貫編年F4期に併行すると考えられる。561～563は山茶碗である。いずれも低い高台がつき、562・563は器高が低く、藤澤編年第5～6型

式に併行すると考えられる。564・565は南伊勢系土師器甕である。口縁部は短く、端部は丸く肥厚し、内側に折り返しが認められる。折り返し部分のヨコナデは弱い。伊藤鍋編年の仮(A)段階に相当する。

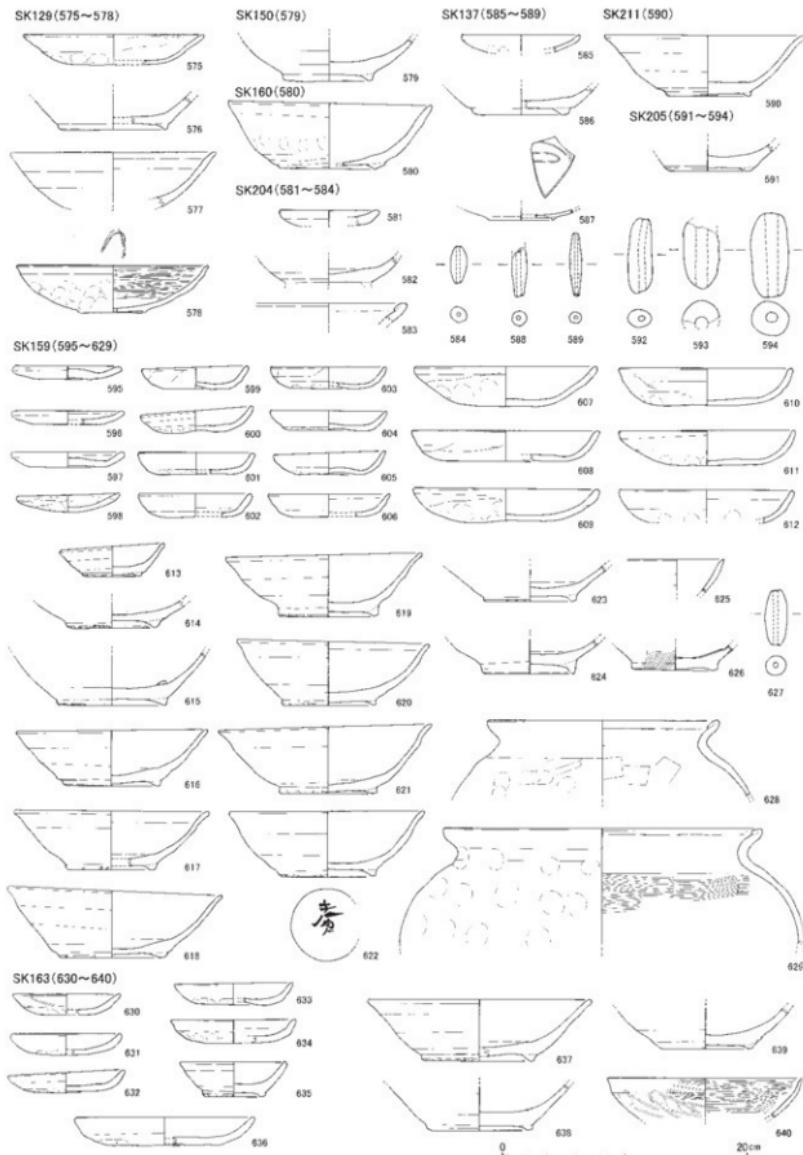
**S K 120** (566～574) 566～568は土師器小皿、569・570は土師器皿である。566は浅い小皿で、567・568はやや中央がくぼむ底部から緩く屈曲して開く口縁部をもつ。570は平らな底部から緩やかに口縁部が開く。いずれも島貫編年F3～4期に併行する。571・573は山茶碗、572は山茶碗小碗である。571は器高が低く扁平で、逆台形の高台をもつ。藤澤編年第5～6型式に相当すると考えられる。572は端部の丸い高台をもつ。574は土師器甕である。口縁部は短く、端部は丸く肥厚し、内側に折り返しが認められる。南伊勢系のもので、伊藤鍋編年の仮(A)段階に相当する。

**S K 129** (575～578) 575は土師器皿である。器壁はやや薄い。口縁部と底部の境にヨコナデによる棱がつくが、口縁部は直線的に開く。576・577は山茶碗である。578は瓦器碗である。器高は低く扁平で、小さな高台がつく。外面のミガキは省略され、内面のみミガキが施される。福田典明氏による伊賀地域出土の瓦器編年<sup>10</sup>（以下、福田編年と略す）の6～7期に併行すると考えられる。

**S K 137** (585～589) 585は土師器小皿である。器壁は薄く、全体的に扁平である。島貫編年F4期に併行すると考えられる。586は山茶碗である。低い逆台形の高台がつき、藤澤編年第5型式に相当すると考えられる。587は瓦器碗である。小さな高台がつき、内面に暗文がみられる。

**S K 150** (579) 579は山茶碗である。高台は逆台形に近い。藤澤編年第4～5型式に相当する。

**S K 159** (595～629) 595～597はロクロ土師器小皿である。口縁部の立ち上がりは低い。598～606は土師器小皿である。598は断面弧状を呈し、口縁部には弱いヨコナデが施される。599～606は中央がややくぼむか平らな底部から緩やかに屈曲して口縁部が立ち上がる。島貫編年F3期に併行すると考えられる。607～612は土師器皿である。607は底部が丸く、口縁部ヨコナデの幅は狭い。島貫編年F2期に併行すると考えられる。608～611は平らな底部か



第107図 c地区 出土遺物実測図7 (1:4)

ら緩やかに口縁部が立ち上がる。島貫編年F 3期に併行すると考えられる。

613は山茶碗小碗、614～624は山茶碗である。624のように高台が高く、占い要素をもつものも含まれるが、多くは低い逆台形から三角形の高台をもち、藤澤編年第5～6型式に相当するものが多い。622の底部外面には墨書が認められる。625・626は白磁碗である。628・629は土師器甕である。口縁部は短く、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は内側に折り返される。南伊勢系のもので、伊藤鍋編年の仮(A)段階に相当する。

**S K 160** (580) 580は山茶碗である。扁平な逆台形の高台をもつ。藤澤編年第5型式に相当すると考えられる。

**S K 163** (630～640) 630～634は土師器小皿である。631はヨコナデが弱いが、他は強くヨコナデされている。島貫編年F 3～4期に併行する。635は山茶碗小碗である。やや外側へ踏ん張る高台がつく。636は土師器皿である。平らな底部から緩やかに口縁部が斜め上方に立ち上がる。島貫編年F 3期に併行すると考えられる。637～639は山茶碗である。低い高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。640は瓦器椀である。内外面共にミガキが施される。

**S K 204** (581～584) 581は土師器小皿である。器壁は厚く、非常に浅い。582は山茶碗である。高台は剥離している。尾張産と思われる。583は土師器鍋である。口縁部は内側に折り返している。折り返し部分のヨコナデは弱い。

**S K 205** (591～594) 591は山茶碗である。形骸化した小さな高台がつく。渥美産と思われる。藤澤編年第6～7型式に相当すると考えられる。592～594は土鍾で、594は重さ68.0gと大型である。

**S K 211** (590) 590は山茶碗である。器高が低く、扁平である。逆台形の低い高台が外側へ広がるようにつく。藤澤編年第6型式に相当する。

**S E 25** (641～646) 641・642は土師器皿である。643～646は山茶碗である。643はやや高い高台だが、他は端部の丸い逆台形の低い高台がつく。藤澤編年第6型式に相当する。

**S E 162** (647～656) 647は瓦器小皿である。口縁部は強くヨコナデされ、底部内面にミガキが認

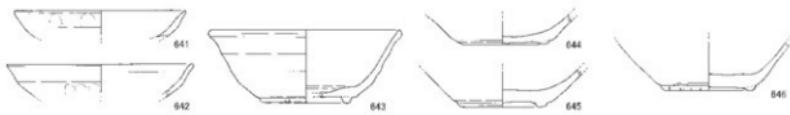
められる。底部外面には鋒が付着しているが、部分的にミガキが確認できる。648は土師器杯である。内面に螺旋状暗文が認められる。649は小型の土師器鉢である。口径8.7cmである。丸底で、口縁部は垂直方向に外反する。650は鍛冶処理途中の鉄滓である。重さ207gである。651は山茶碗小皿である。底部外面に「上」と書かれた墨書がみられる。652～656は山茶碗である。652は高い高台がつき、体部下方の丸みが強い。藤澤編年の第2～3型式のものと思われ、灰釉陶器の可能性もある。653～656の高台は低い逆台形から三角形であり、藤澤編年第5～6型式に相当する。653の底部外面には「上」と書かれた墨書がみられる。

**S E 162最下層** (657～662) 657は土師器小皿である。強いヨコナデにより、強く屈曲して短い口縁部をなしている。658はクロク土師器小皿である。非常に扁平で、口縁部は横方向に大きく開く。島貫編年F 2期に併行すると考えられる。659は山茶碗小皿である。底部外面に墨書が認められる。660～662は山茶碗である。660・661は外側へ踏ん張る低い高台がつく。660は灰釉が漬け掛けされ、輪花がつく。渥美産の第4型式に相当すると考えられる。662は大きな三角形の高台がつき、底部外面に墨書がみられる。体部下方は丸みがある。藤澤編年第3～4型式に相当するだろうか。

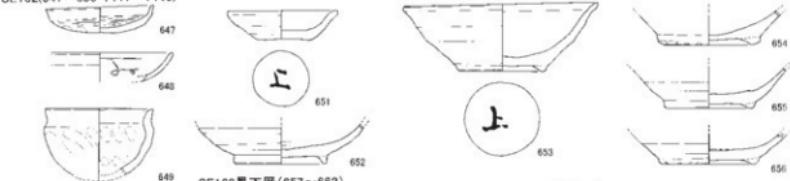
**S E 162木製品** (1441～1446) 1441・1442は曲物底板である。1441はヒノキ科アスナロ属製で、直径10.0cm、厚さ0.8cmのものである。1442はスギ製で、木釘孔が4箇所確認できる。直径13.8cm、厚さ0.8cmである。1443はスギ製の曲物側板である。木釘孔が1箇所確認できる。推定される直径15.7cm、厚さ0.3cmである。1444・1445は不明棒状具である。1444はクリ製、1445はマツ製である。いずれも先端に加工痕がみられる。1446はユキノシタ科ウツギ属の棒状具で、芯の部分は抜かれ、管状になっている。枝の打ち払い痕跡があり、先端が斜めに切られている。祭祀に使われたものであろうか。

**S E 206** (675～685・1447) 675は山茶碗小皿である。口縁部の立ち上がりは低く、全体的に扁平である。676～680は山茶碗である。低い逆台形の高台をもつものが多い。藤澤編年第6型式に相当する。

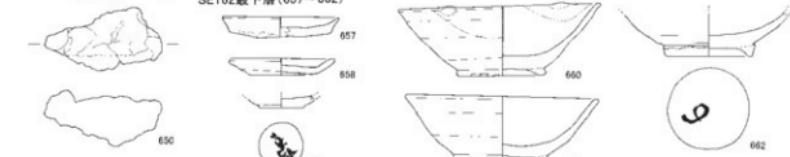
## SE25(641~646)



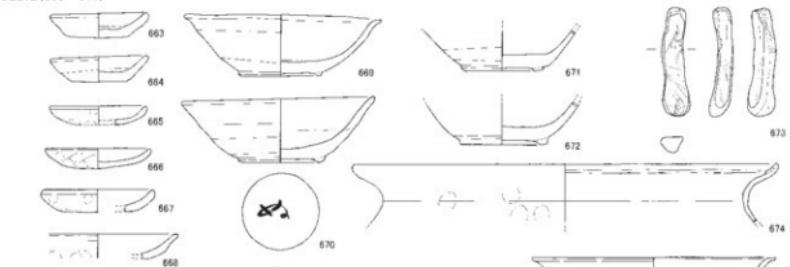
## SE162(647~656-1441~1446)



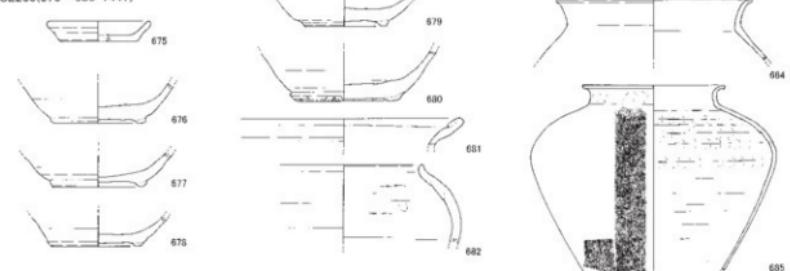
## SE162最下層(657~662)



## SE212(663~674)



## SE206(675~685-1447)



0 20 cm 0 (682~684) 40 cm 0 (685) 50 cm

第108図 c地区 出土遺物実測図8 (1:4) 682~684は1:8、685は1:12

681は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部は内側に折り返され、ナデが施されている。伊藤鍋編年第1段階に相当する。682は山茶碗の窯で焼成された短頸壺である。内外面ともにロクロナデ成形後ナデ調整される。683～685は常滑陶器甕である。683・684の頸部はほぼ直線的に外方へのび、口縁部は外反する。口縁端部内面にはくぼみがある。685の頸部はやや内側へ直線的にのび、口縁部は外反する。口縁端部が下方へ少し拡張される。中野晴久氏による常滑陶器編年<sup>13)</sup>（以下、中野編年と略す）の4型式に相当するだろうか。1447は下駄である。残りが悪く、齒は不明瞭で、鼻緒をつけるための穴の痕跡が3つみられる程度である。

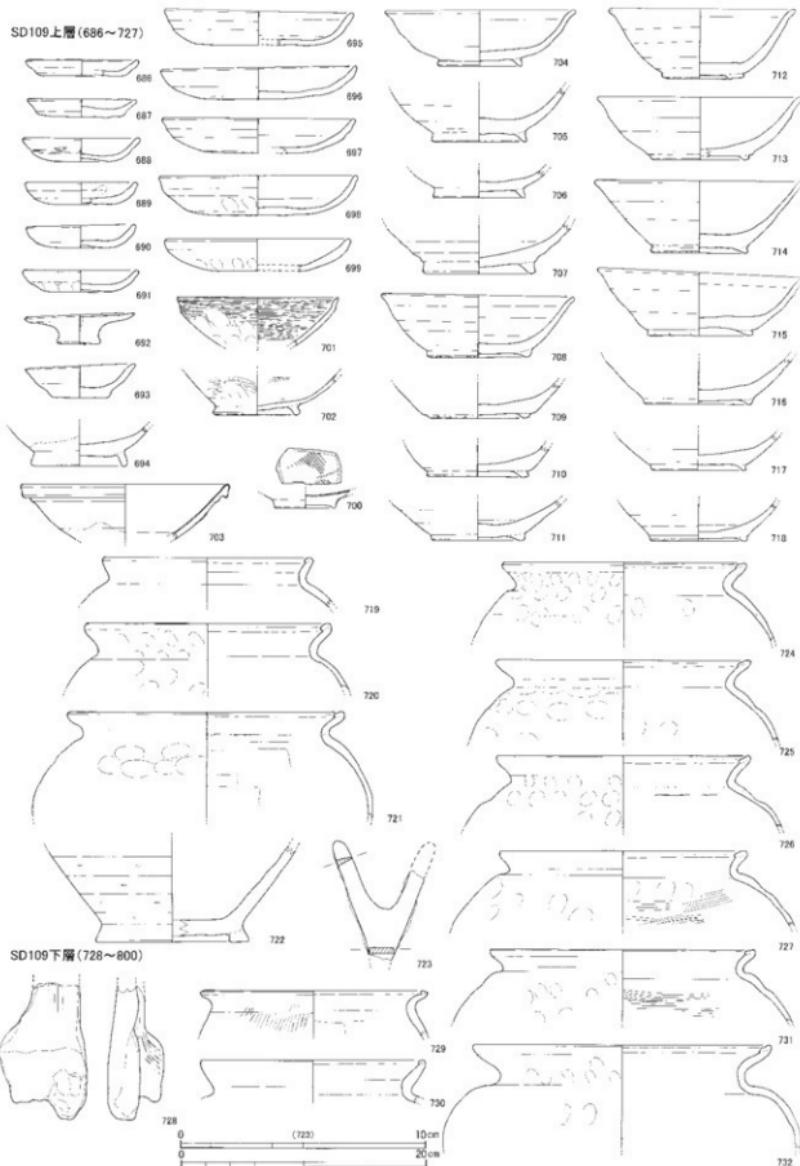
**S E212** (663～674) 663・664は山茶碗小皿である。665～667は土師器小皿である。ほぼ平らな底面から緩やかに口縁部が立ち上がる。668は土師器皿である。669～672は山茶碗である。低い逆台形の高台がつく。670の底部外面には「ぬ」と書かれた墨書きがみられる。藤澤編年第6型式に相当する。673は砥石である。2面にスリ面がある。674は南伊勢系土師器鍋である。頸部はやや長く、口縁部は折り返された後、強くヨコナデされる。伊藤鍋編年第1段階に相当する。

**S D23** (844～846) 844は土師器小皿、845は土師器杯である。844は平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。内面に工具痕が認められる。島貫編年F 3期に併行すると考えられる。845は口縁部が強いヨコナデにより外反する。846は山茶碗である。低い高台をもち、内面に自然釉がかかっている。藤澤編年第6型式に相当する。

**S D109上層** (686～727) 686～691は土師器小皿である。686・687は平らな底部から斜め上方へ口縁部がのびる。口縁部は強くヨコナデされて下半にへこみができている。688～691は中央がややくぼむ底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。島貫編年F 3期に併行すると考えられる。692はロクロ土師器台付小皿である。いわゆる柱状高台をもつ、皿部はほとんど平らである。694は灰釉陶器碗である。高台は高く、わずかに内彎する。灰釉は刷毛塗りされる。695～699は土師器皿である。平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。口縁部のヨコナデが

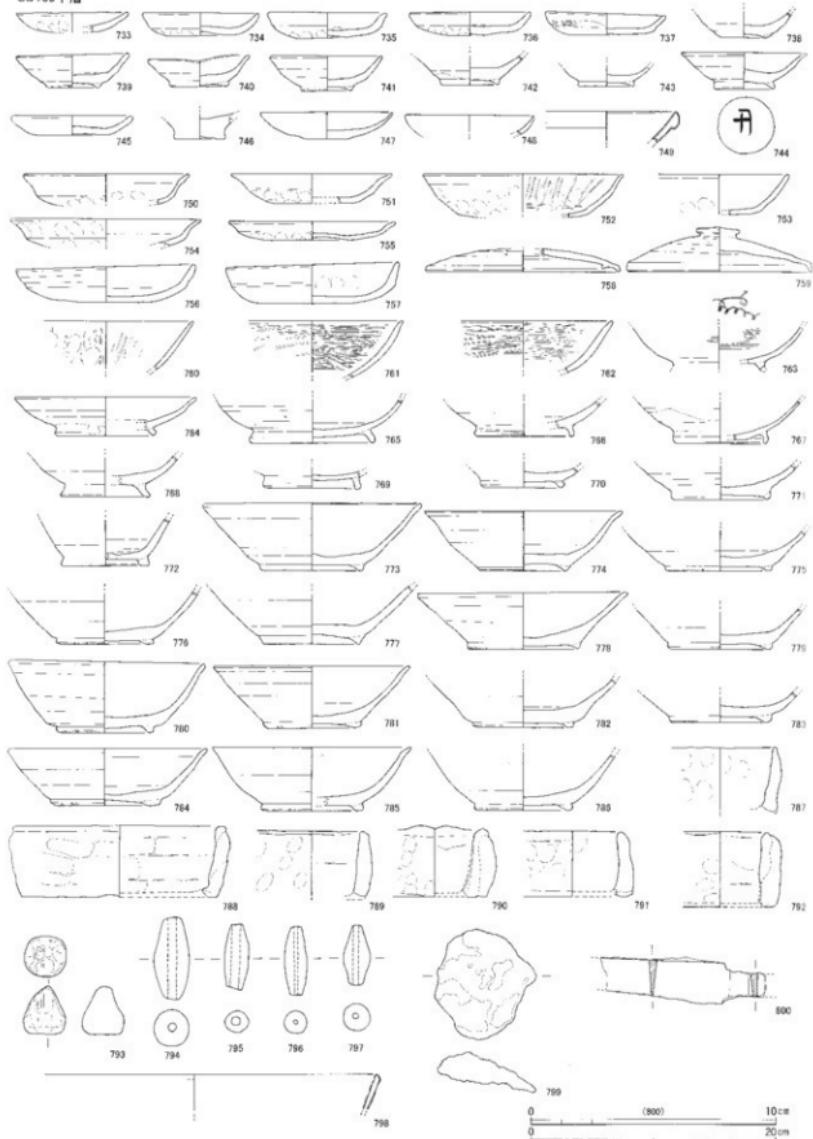
2単位あるものが多い。島貫編年F 3～4期に併行すると考えられる。701は瓦器椀である。内面および外面上半にミガキが施され、外下面はユビオサエ・ナデ調整される。体部は直線的で、口縁部は屈曲して上方にのびる。福田編年5期に併行すると考えられる。702は黒色土器椀である。内面が黒色で、内外面共にミガキが施される。やや高く長方形の高台がつく。700は青白磁の皿である。703は玉縁口縁の白磁碗である。704～718は山茶碗である。704～707はやや高く外方に開く高台がつくが、他は低い逆台形から三角形の高台がつく。後者は藤澤編年第5～6型式に相当する。719～721・724～727は南伊勢系土師器甕である。口縁部は短く、頸部は比較的鋭く屈曲する。口縁端部は内側へ折り返され、端部のヨコナデは弱いものとやや強いものがある。伊藤鍋編年仮（A）段階に相当するだろう。723は雁又鐵である。端部断面は薄い三角形で、茎は長方形である。残存長4.8cmである。

**S D109下層** (728～800) 728は移動式竈の小片と思われる。729～732は土師器甕である。731・732は南伊勢系のもので、口縁部は短く、口縁端部は内側へ折り返され、ヨコナデが施される。伊藤鍋編年仮（A）段階に相当する。733～737は土師器小皿である。733は丸底で、緩やかに口縁部がのびるが、他は平らな底部から屈曲して口縁部が斜め上方へ立ち上がるものが多い。後者は島貫編年F 3期に併行すると考えられる。738～744は山茶碗小碗である。低い三角形の高台がつくものが多い。藤澤編年第4～5型式に相当すると考えられる。744には「升」の墨書きが確認できる。745・747はロクロ土師器小皿である。745は底部から屈曲して口縁部が開く。747は緩やかに内彎しながら口縁部が開き、器壁は薄い。746はいわゆる柱状高台をもつ台付小皿である。748は白磁皿、749は玉縁口縁の白磁碗である。750～754は土師器杯である。750・751・754は口縁部が強くヨコナデされることにより外反している。752は底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、内面にミガキが施される。753は底部から屈曲して口縁部が斜め上方に直線的に開く。755～757は土師器皿である。755は器壁が薄く、全体的に扁平で、



第109図 c地区 出土遺物実測図9 (1:4) 723は1:2

SD109下層



第110図 c地区 出土遺物実測図10 (1 : 4) 800は1 : 2

口縁部はヨコナデにより外反する。756・757は器壁がやや厚く、平らな底部から口縁部が緩やかに上方へ立ち上がる。口縁部は強くヨコナデされ、底部との境界に棱が残る。島貴編年F3～4期に併行すると考えられる。758・759は須恵器蓋である。758は小さな返りがつき、759は端部が下方へ屈曲している。760～762は黒土器椀である。いずれも内外面にミガキが施されている。763は土師器椀である。内外面ともに不明瞭ながらもミガキが施されており、内面には螺旋状暗文がみられるが、黒化処理されていない。764は灰釉陶器皿、765～771は灰釉陶器椀と思われる。764の口縁部はほとんど外反せず、高台は三日月高台を意識した幅のやや広いものがつく。柄崎・斎藤編年黒雀90号窯式に併行すると考えられる。765・768は外方へ開く高い高台がつく。766・767は典型的な三日月高台がつき、柄崎・斎藤編年黒雀90号窯式に相当する。771は底部際に方形に近い高台がつき、柄崎・斎藤編年東山72号窯式に相当すると思われる。

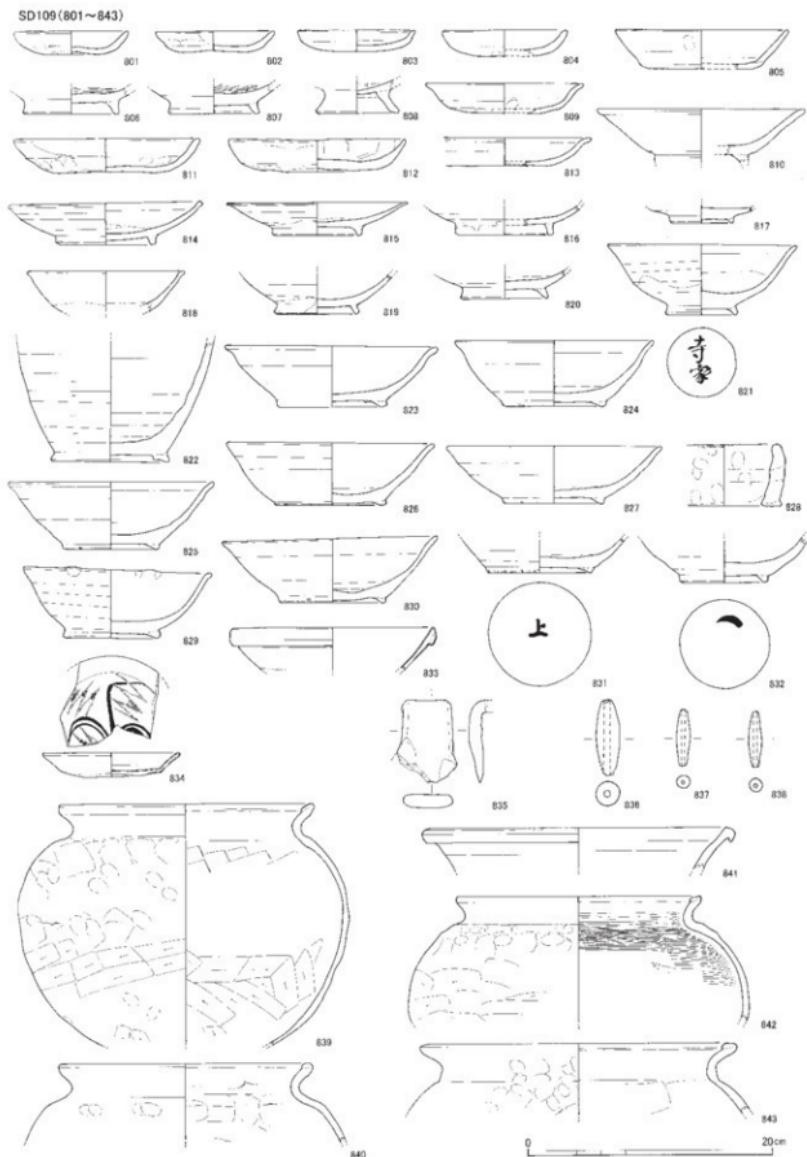
773～786は山茶碗である。全体的に扁平で、体部下半が直線的なものが多い。773は渥美産で、逆台形の高台がつく。藤澤編年第5型式に相当するか。他のものも低い三角形から逆台形の高台がつき、藤澤編年第4～5型式に相当する。787～792は志摩式製塙土器である。788は口径17.0cm、高さ5.8cmのもので、内外面とともにユビオサエ・ナデ調整される。793は不明土製品である。円錐形に近く、直径3.4cm、高さ3.9cmの大きさである。上部に削ったような痕跡があり、円柱形のようなものの上部を4面を削つた後ナデ調整されていると思われる。他の部分はユビオサエ後ナデ調整されている。794～797は土鍤である。長さは4.9cm～6.7cm、重さは15.72g～45.4gである。798は鉄鍋である。厚さは厚いところでも0.3cm程度と思われる。799は鉄滓で、重さ195.5gである。自然科学分析では極型滓とされている。800は刀子である。間のあたりに柄縁装具があると思われる。

**S D 109** (801～843) 801～804は土師器小皿である。801・802は中央がくぼんだ底部から緩やかに口縁部が立ち上がるるもので、島貴編年F3期に併行すると考えられる。803はヨコナデが強く、口縁部

が屈曲して立ち上がるるもので、島貴編年F2期に併行すると考えられる。805・809は土師器杯である。平らな底部から屈曲して口縁部が開く。斎宮編年第II期第1～2段階に併行するだろうか。809はやや丸い底部で、口縁部は強いヨコナデにより外反する。斎宮編年第二期第3段階に併行すると思われる。806・807は黒土器椀である。いずれも内面にミガキが施され、やや高い高台がつく。810はロクロ土師器台付皿である。口縁部は直線的で、大きく開く。811～813は土師器皿である。811は平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がるもので、島貴編年F3期に併行すると考えられる。813は口縁端部が強く外反する。

814・815は灰釉陶器皿である。814は器壁は緩やかに立ち上がり、方形の高台がつく。灰釉は刷毛塗りされ、柄崎・斎藤編年黒雀90号窯式に相当するとと思われる。815は灰釉が漬け掛けられ、柄崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当するだろう。817は灰釉陶器折縁皿である。816・818～821は灰釉陶器椀である。821の底部外面には「寺家」と書かれた墨書きがみられる。灰釉は漬け掛けで、外面のロクロケズリも省略されている。柄崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当する。823～827・829～832は山茶碗である。いずれも低い高台をもち、器高が低く扁平なものが多い。829は輪花が1箇所残っており、体部下半に丸みがあり、他と比べて深めである。831・832には墨書きがあり、831には「上」と書かれている。833は玉縁口縁をもつ白磁碗である。玉縁口縁は折り返されて作り出されている。834は青磁皿である。839・840・842・843は土師器甕である。口縁端部は折り返され、その後のヨコナデは弱い。頸部は短く屈曲する。839・842の体部下半はケズリが施される。いずれも伊藤鍋編年仮（A）段階に相当する。

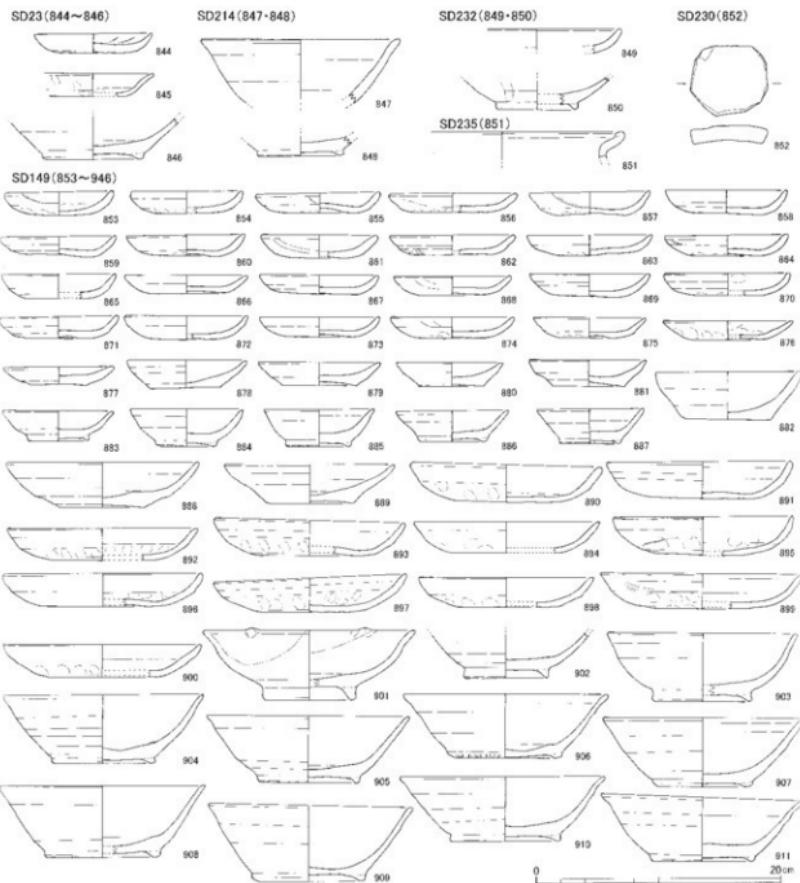
**S D 149** (853～946) 853～876は土師器小皿である。口径は8.7cm～10.4cmである。853～875は平らもしくはやや中央がくぼんだ底部から口縁部が緩やかに立ち上がるもので、島貴編年F3期に併行すると考えられる。876は口縁部の立ち上がりが低く、浅い。口縁部のヨコナデも端部にしか施されていない。877～881はロクロ土師器小皿である。877は非常に浅いが、他は直線的に口縁部が立ち上がる。882



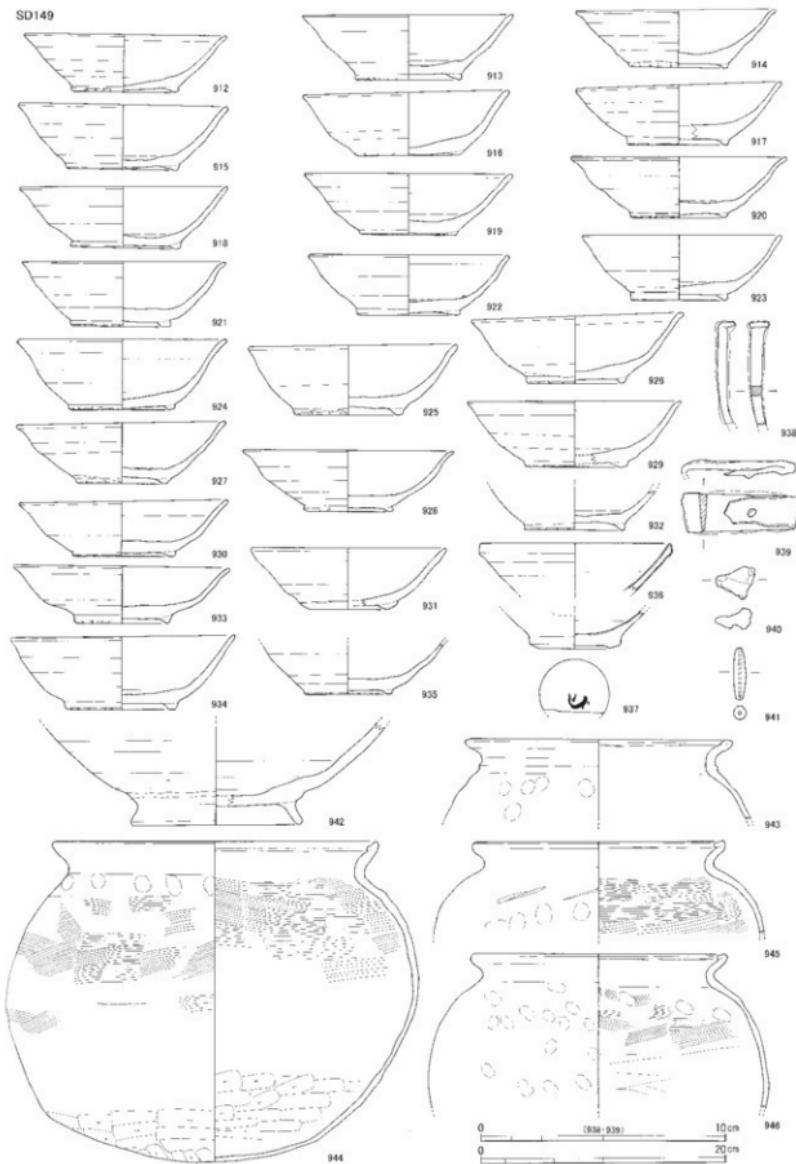
第111図 c地区 出土遺物実測図11 (1 : 4)

はクロコ土師器椀である。口径は11.7cmで比較的小型である。883~887は山茶碗小碗である。883~885は体部に丸みがあり、886・887は直線的である。888・889はクロコ土師器皿である。体部下半にやや丸みを帯びて口縁部が開く。890~900は土師器皿である。平らな底部からやや緩やかに口縁部が立ち上がり器壁はほぼ同じ厚さのものが多い。島貫編年F3期に併行すると考えられる。901~935は山茶碗である。

901は輪花が1箇所残存しており、灰釉が漬け掛けされている。体部は丸くはり、高い高台をもつ。渥美産で藤澤編年第4型式に相当する。902は先端の尖った高い高台をもち、第2~3型式に相当すると考えられる。903は器壁が厚く、体部に丸みがあり、やや高い高台がつき、藤澤編年第4~5型式に相当すると思われる。他の山茶碗は体部が直線的なものが多く、低い高台がつく。藤澤編年第6型式に相当



第112図 c地区 出土遺物実測図12 (1 : 4)



第113図 c地区 出土遺物実測図13 (1 : 4) 938・939は1 : 2

するものが多いと考えられる。936・937は白磁碗である。936は玉縁口縁をもつ。937は削り出し高台をもち、底部外面に墨書きがみられる。938は鉄釘である。頭部を打ち平たくして折り曲げ、面を作り出している。939は元々刀子であったものを古地金として折り曲げ、蓄えていたものであろうか。中央に目釘がある可能性がある。940は鉄滓である。ガラス質のものを包含し、自然科学分析では椀型滓とされている。重さ9.0gである。943～946は土師器甕である。945は口縁端部が折り返され、やや強くヨコナデされる。頭部は緩やかに屈曲し、短い。体部は内外面ともに上半部は横方向のハケが施され、底部付近はケズリが施される。943・944・946の口縁端部は945と同じく折り返されるが、その後のヨコナデが弱い。いずれも伊藤鍋編年仮（A）段階に相当するだろう。

**S D 214** (847・848) 847・848は山茶碗である。847は器壁があつく、やや深めである。848は低い高台がつく。

**S D 230** (852) 852は常滑陶器鉢を転用した円形加工品である。

**S D 232** (849・850) 849は土師器甕である。比較的浅いものである。850は山茶碗である。逆台形の高台がつく。

**S D 235** (851) 851は土師器甕の小片である。口縁端部は内側へ折り返され、丸く肥厚する。

#### e 室町時代の造構出土遺物

**S B 84** (955・956) 955は土師器皿である。956は瀬戸美濃陶器折線小皿である。藤澤良祐氏による瀬戸窯編年の古瀬戸後IV期<sup>10)</sup>に相当すると思われる。

**S A 86** (1236) 1236は鉄滓である。19.4gと大きさのわりに重く、自然科学分析では椀型滓とされている。

**S K 3** (962) 962は土師器小皿である。口径は7.4cmで、浅黄橙色を呈する。伊藤裕偉氏による南伊勢系土師器皿の分類・編年<sup>11)</sup>（以下、伊藤皿編年と略す）のB形態で、IV a～IV b期に併行するとと思われる。

**S K 4** (953・954) 953は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しは幅が狭く、その断面形が鋭利な三角形状を呈する。伊藤鍋編年第4 c段階

に相当する。954は土師器羽釜である。口縁端部は面をもち、水平である。

**S K 63** (947～952) 947～950は南伊勢系の土師器小皿である。口径は7.8cm～9.8cmである。色調は灰白色からにぶい黄橙色である。いずれも伊藤皿編年のB形態でIV a期に併行すると思われる。951は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しの断面形が鋭利な三角形状を呈する。伊藤鍋編年第4 c段階に相当する。952は伊藤皿編年D形態の南伊勢系土師器皿である。

**S D 7** (983～987) 984は山茶碗である。外側へ開く高台がつく。986は繩文土器深鉢で、キザミのない突審がつく。987は不明鉄製品である。扁平な「U」字状のもので、残存長5.2cm、幅1.45cmである。

**S D 8** (991～1001) 991は鉄釘である。993は山茶碗小碗で、994～996は山茶碗である。いずれも低い高台がつき、藤澤編年第6型式に相当するものが多い。997は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。998は南伊勢系土師器鍋で、第4 c段階に相当する。999・1001は常滑陶器鉢で、999は中野編年10～11型式に相当する。

**S D 9** (988～990) 988は伊藤皿編年B形態の南伊勢系土師器皿である。灰白色を呈する。989は鉄製の楔と思われる。長さ5.7cmで、厚い方の端部は面をなしている。990は土師器羽釜である。口縁部は内傾し、口縁端部は内側へ折り返される。口縁部からさほど離れてない位置に短い鶴がつく。

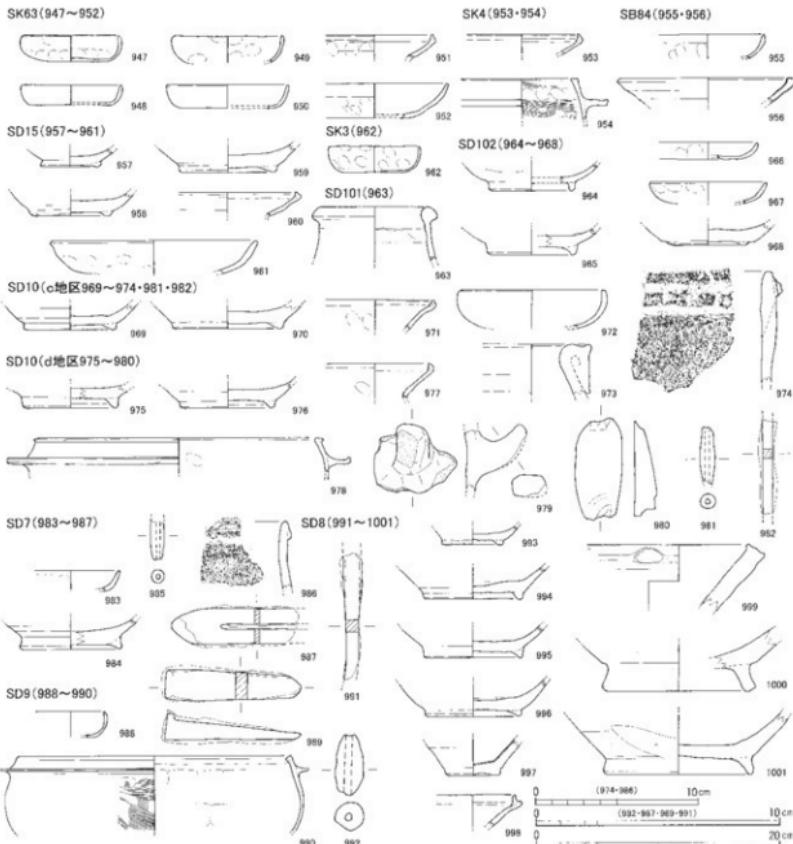
**S D 10 (c地区969～974・981・982)** 969・970は山茶碗である。低く端部の丸い高台がつき、藤澤編年第6型式に相当する。971は土師器鍋である。口縁端部の折り返しの断面が三角形を呈し、伊藤鍋編年第4 b段階に相当する。973は常滑陶器甕で、口縁部が折り返されており、中野編年10型式に相当する。974は繩文土器深鉢で、二枚貝によるD字形のキザミが施された突審文が貼り付けられている。982は鉄釘である。上下端部とともに欠損しており、残存長3.9cmである。

**S D 10 (d地区975～980)** 975・976は山茶碗である。975はやや高い高台をもち、藤澤編年第5型式に相当する。976は扁平な高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。977は南伊勢系土師器鍋で、

第4c段階に相当する。978は土師器羽釜で、口縁端部は外側へ折り返され、面をなす。伊藤鍋編年第4段階に相当するだろう。980は石斧である。長さ8.3cm、幅3.8cmである。

**S D 15 (957~961)** 957は山茶碗小碗、958・959は山茶碗である。いずれも低い逆台形に近い高台をもち、蘿澤編年第6型式に相当すると思われる。960は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しは断面三角形を呈する。伊藤鍋編年第4b段階に相当する。961は土師器皿である。

**S D 20 (c地区1002~1041・1047)** 1002~1004は土師器小皿である。1002・1003は口縁部が緩やかに少し立ち上がる。南伊勢系のもので、伊藤皿編年のA形態IVa期に併行すると思われる。1004は器壁が厚く、平らな底部から屈曲して口縁部が斜め上方にのびるものである。1005は土師器皿で、1004を大きくした形に近いが、口縁部のヨコナデの幅は広い。1006~1014は山茶碗である。1006・1007は端部の尖った高い高台をもち、蘿澤編年第二~三型式に相当すると思われる。1008はやや高めの三角形の高台をも



第114図 c地区 出土遺物実測図14 (1:4) 974・986は1:3、982・987・989・991は1:2

ち、藤澤編年第4～5型式に相当するだろう。1009～1014は低い高台をもち、藤澤編年第5～6型式に相当する。1015は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。1016は瀬戸美濃陶器縁皿で、低い削り出し高台をもつ。全体に鉄釉が施釉されており、内面に大きなトチン痕が3箇所残存しており、高台内に輪トチの痕跡が残っている。1017・1018は青磁碗で、1018には鍋運弁文がある。1019は瀬戸美濃の志野丸皿で、灰白色の釉が施釉されている。小さな削り出し高台をもち、内面にトチン痕が1箇所残る。1020・1022は土師器羽釜である。1020は口縁部が外側へ折り返され面をなす。やや下方に向く短い甥をもつ。1022は器壁が厚く、口縁部はほぼ直立で、口縁部の折り返しではなく、内傾する面をもつ。甥は短く上方へ反る。1021は瀬戸美濃陶器の擂鉢で、鉄釉が施釉されている。1024～1026は土師器鍋である。1024・1025は南伊勢系で、伊藤鍋編年第4a～4b段階に相当する。1026は口縁部が直立に近く、端部は断面三角形になるように折り返されている。鉄鍋模倣形鍋である可能性がある。1027～1032は陶器円形加工品である。1027は瀬戸美濃陶器天目茶碗の底部が転用されている。1028・1029・1031は常滑陶器窯の体部を転用していると思われる。1030は常滑産の甕もしくは壺の体部を転用していると思われる。1032は山茶碗の底部を転用している。1034は常滑陶器鉢である。口縁部はほとんど肥厚せず、端部にくぼみがある。中野編年6型式に相当するだろうか。1035～1037は南伊勢系土師器鍋である。1035は口縁部が内側へ折り返され、弱いヨコナデが施される。体部の肩部は丸みをもつ。伊藤鍋編年仮（A）段階に相当するだろう。1036・1037は口縁部の断面形が三角形を呈し、器壁は薄い。伊藤鍋編年第4c段階に相当する。1038は刀子の茎もしくは鍛造品の古地金であろうか。残存長4.1cmである。1039はもともと平根鐵もしくは刀闘であったものを利用した鍛造品の古地金と思われる。残存長3.9cmである。1040は銅製の笄で、耳搔きと穗先が欠損している。銅部分の内区下地は3連巻と思われる斜め方向の連打によつて魚子地紋が全面に施され、別拵えで作られた花飾りが本体に穿たれた直径0.3cmほどの孔に留めされている。外区には石目地を施している可能性がある

るが、緑錆のため不明である。残存長は15.1cmだが、曲がりを直した場合16.8cm程度に復元される。1041は石帶の巡方である。半分程度の残存であるが、縦2.48cm、横4.20cmと復元され、厚さは0.65cmである。潜り穴が3箇所にあけられていたと思われる。サヌカイト製と思われる。1047は水晶製経軸端である。七角柱形で、軸先端部は若干丸みを帯びている。

**S D 20 (d地区1042～1046)** 1042・1043は山茶碗である。低い三角形の高台がつく。1044は南伊勢系土師器鍋で、第4c段階に相当する。1045は青磁碗である。1046は常滑陶器甕で、口縁部は長く下方へのばされ、その端部は頸部に接しない。中野編年8型式に相当する。

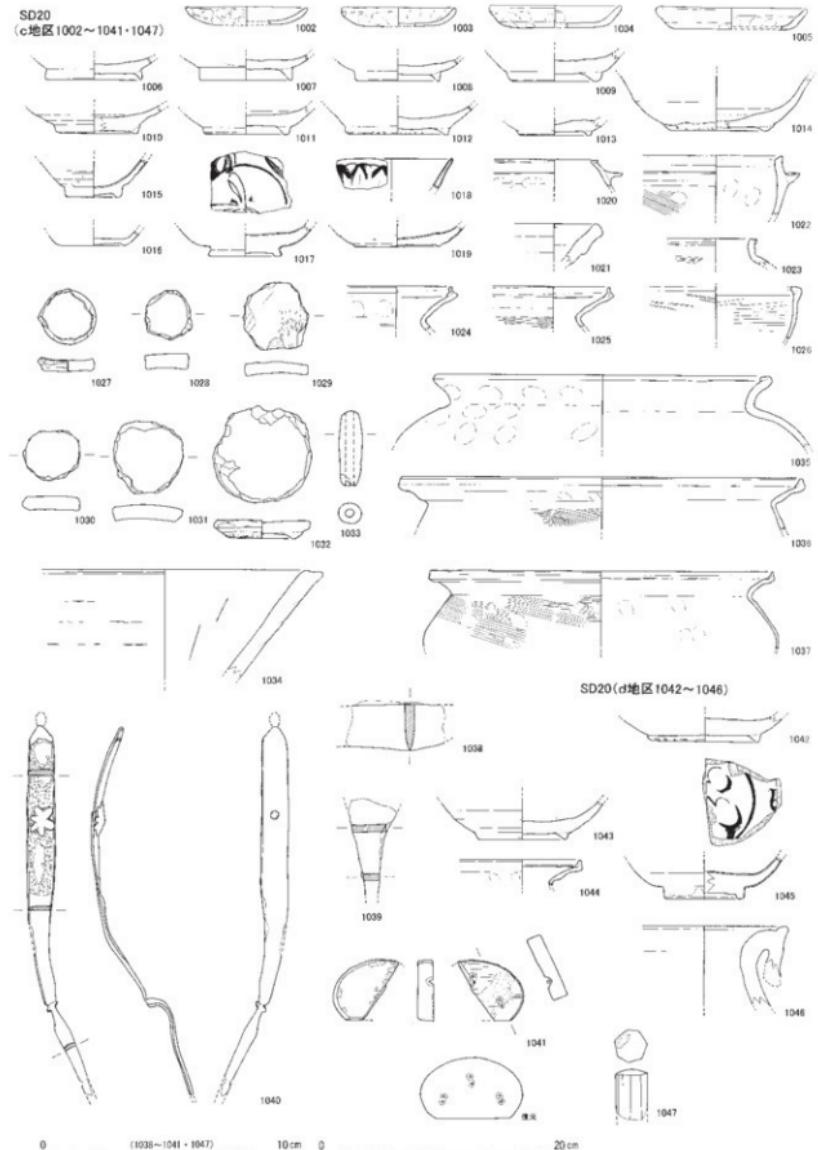
**S D 101 (963)** 963は玉縁口縁の壺である。鉄釉がかけられている。瀬戸美濃產と思われ、祖母懐壺の可能性がある。

**S D 102 (964～968)** 964は灰釉陶器椀である。真下にのびる高台がつく。965・968は山茶碗である。968は非常に低い扁平な高台がつき、底部の器壁は厚い。966・967は南伊勢系の土師器小皿である。966は口縁部の立ち上がりが低く、非常に浅い。伊藤皿編年のA形態である。

#### f 江戸時代以降の遺構出土遺物

**S D 17 (1048)** 1048は土製の人形である。頭部は欠損しているが、高さ2.1cm以上、幅2.3cm、厚さ1.1cmの大きさである。手に笏をもつ天神像だろうか。底部に直径3mmの小孔があり、型作りによつて成形されている。江戸中期以降のものであろう。

**S D 19 (c地区1068～1081)** 1068～1070は山茶碗である。藤澤編年第5～6型式のものである。1071は瀬戸美濃陶器の志野丸皿である。江戸時代の瀬戸・美濃茶編年<sup>15)</sup>の登窯第2小期に相当する。1073は白磁碗である。口縁部を折り返して作った玉縁口縁をもつ。1074は天目茶碗である。登窯第1～3小期に相当するだろうか。1075は常滑陶器鉢である。口縁部はほとんど肥厚しない。1076～1078は円形加工品である。1076・1078は天目茶碗の底部を転用している。1077は肥前系陶器の丸碗を転用していると思われる。1080は直径1.0～1.2cmの鉢玉である。鉄砲玉と思われる。1081は砥石である。片面は剥離しており、スリ面が1面残存するのみで、残



第115図 c地区 出土遺物実測図15 (1 : 4) 1038~1041・1047は1 : 2

存長7.9cm、幅3.8cmのものである。

**S D 19** (d 地区1082～1085) 1082・1083は山茶碗である。藤澤編年第6型式に相当する。1083は底部外面に墨痕が認められる。1084はN字状口縁の常滑陶器甕で、断面は三角形に近い。中野編年9型式に相当する。

**S D 24** (1049・1050) 1049・1050は鉄釘である。1049の頭部は打ち曲げられ、胴部は鋭角に曲がっている。1050は上下端部ともに欠損している。残存長は8.6cm。

**S D 118** (1053～1055) 1053は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、瀬戸窯編年の古瀬戸後IV新に相当するだろう。1054は瀬戸美濃陶器の筒形容器である。体部外面に鉄袖が施釉される。登窯第4～5小期に相当するだろうか。1055は常滑陶器鉢である。口縁端部は上方に丸く突出し、くぼみがある。中野編年12型式に相当する。

**S D 220** (1051・1052・1056～1067) 1051は鉄釘である。頭部を直角に折り曲げた太い角釘で、厚みは太いところで1.0cmある。1052は飾釘と思われる。5弁の花形座金のある可能性がある。1056は山茶碗。1057は龍泉窯系青磁の瓶である。1058は瀬戸美濃陶器の皿である。灰白色の釉が体部内外面に施釉される。1059は瀬戸美濃陶器の志野丸皿である。1060は土師器小皿である。器壁は厚く均一で、平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。島貴編年F 4期に併行すると考えられる。1061は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。登窯第1～2小期に相当するだろうか。1062・1063は円形加工品である。いずれも常滑陶器甕を転用している。1064は南伊勢系土師器鍋で、第4段階に相当する。1065・1066は常滑陶器甕である。1065は単純口縁で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く、内面に回線がめぐる。平安時代のものであろう。1066は口縁部がN字状を呈するもので、中野編年12型式に相当する。1067は常滑陶器鉢である。口縁端部の肥厚は少なく、中野編年7～8型式に相当すると思われる。

### g 道路構造出土遺物

**S D 39** (1086～1095) 1086～1090は土師器小皿である。平らな底部から屈曲して口縁部が斜め上方へ開くものが多く、島貴編年F 2～3期に併行す

ると考えられる。1091・1095は土師器皿である。

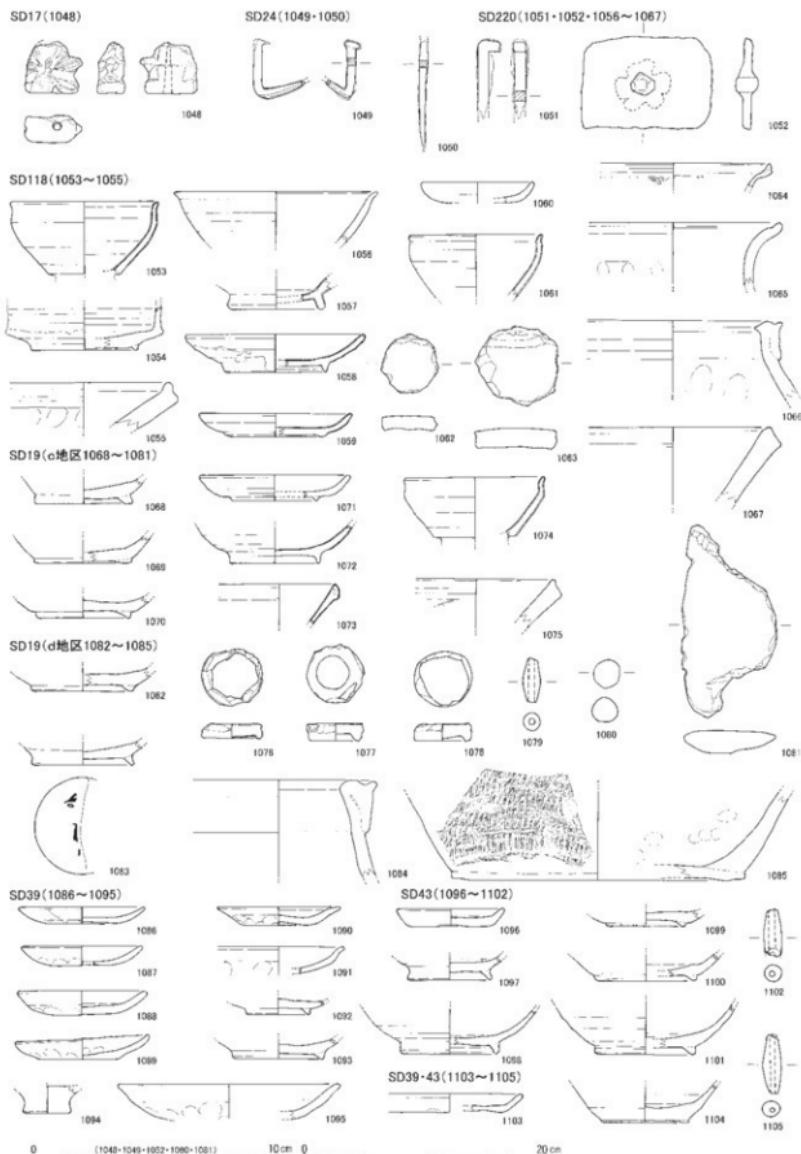
1095は島貴編年F 2～3期に併行すると考えられる。1092は山茶碗の小碗、1093は碗である。低い三角形の高台をもち、藤澤編年第5～6型式に相当する。1094はロクロ土師器台付小皿で、いわゆる柱状高台を持つ。

**S D 43** (1096～1102) 1096は土師器小皿である。平らな底部から屈曲して短い口縁部が開く。島貴編年F 2期新相に併行する。1097・1098は灰釉陶器碗である。1097は高台が体部の底部際につけられ、柄崎・斎藤編年東山72号窯式に相当する。1098はわずかに内側が内彌する高台がつき、柄崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当するだろうか。1099～1101は山茶碗である。低い逆台形に近い高台がつき、藤澤編年第6型式に相当する。

**S D 39・43** (1103～1105) 1103は土師器小皿である。平らな底部から屈曲して口縁が斜め上方に立ち上がる。1104は山茶碗である。非常に扁平な高台がつき、藤澤編年第6型式に相当する。1105は土鍤である。ほぼ完存で、長さ4.8cm、幅1.5cm、重さ7.9gである。

**S D 238** (1132・1133) 1132・1133は山茶碗である。いずれも扁平な高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。

**S D 239** (1106～1113) 1108はロクロ土師器台付皿である。口縁端部は外反する。底部中央は剥離している。1109は灰釉陶器皿である。三日月高台がつき、柄崎・斎藤編年黒雀90号窯式に相当する。1111は白磁碗である。外側に折り返すことにより作られた玉縁口縁をもつ。1112～1119・1123～1125は山茶碗である。1115は尾張産、1123は渥美産と思われる。多くは低い逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当すると思われるが、1119はやや高い三角形の高台をもち、藤澤編年第2～3型式に相当すると思われる。1120は灰釉陶器碗で、外側へ開く高い高台をもち、柄崎・斎藤編年東山72号窯式～百代寺窯式に相当すると思われる。1121・1122・1128～1130は土師器甕である。1128・1129は口縁端部が内側へ折り返され、頭部は比較的強く屈曲している。伊藤鍋編年仮（A）段階に相当するだろう。1130は口縁端部折り返し後のヨコナデは弱いが、頭部の屈



第116図 c地区 出土遺物実測図16 (1 : 4) 1048・1049・1052・1080・1081は1 : 2

曲が弱く、長めであることから、伊藤鍋編年第1段階であると思われる。1126は志摩式製塙土器である。1131は円頭板状鉄製品と思われ、何に利用されたのかは不明である。厚さ0.14cmと薄く、小さな破片である。

**S R 108** (1157~1171) 1157は灰釉陶器椀である。端部が丸く高い高台をもつ。1159は南伊勢系土師器鍋で、第4a段階に相当する。1160は常滑陶器甕である。中野編年11型式に相当する。1161~1166は山茶碗である。1161・1162は藤澤編年第4~6型式に相当する。1167は常滑陶器甕である。中野編年4型式に相当するだろうか。1170は鉄釘だが、縦半分は剥離している。1171は袋状工具の袋部の破片と思われ、先端は欠損している。残存長5.7cm、最大幅3.3cmである。

**S K 33** (1142) 1142は山茶碗である。扁平な高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。

**S K 34** (1141) 1141は灰釉陶器椀である。方形の高台をもち、外方へ開く。内面に重ね焼き痕が認められる。

**波板状凹凸遺構A** (1136~1140) 1136~1140は山茶碗である。いずれも低い高台をもち、藤澤編年第6型式に相当すると思われる。

**波板状凹凸遺構D** (1134・1135) 1134・1135は山茶碗である。1134は低い逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。1135はやや高い高台をもち、藤澤編年第4~5型式に相当するだろう。

**S D 107** (1143~1146) 1143・1144は土師器小皿である。中央がややへこむ底部から緩やかに口縁部が開くもので、島貫編年F3期に併行すると考えられる。1145は山茶碗である。扁平な逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。

**S D 223** (1148~1150) 1148は土師器皿で、口縁部は底部よりも器壁が厚い。1149は山茶碗である。扁平な逆台形の高台がつき、藤澤編年第6型式に相当する。1150は南伊勢系土師器鍋で、仮(A)段階～第1段階のものである。

**S D 110** (1151~1156) 1151~1153は山茶碗である。藤澤編年第5~6型式のものである。1154は土師器皿である。口縁部には2単位のヨコナデが施されており、島貫編年F3期に併行すると考えられ

る。1155は常滑陶器擂鉢である。口縁端部は丸みを帯び、端部内面に2条の凹線がめぐる。1156は染付磁器の碗である。

**S D 119** (1147) 1147は瀬戸美濃陶器の鉢である。口縁端部は内側に沈線が施され、口縁部外面にも段がつけられている。筋軸が施されている。

#### **h 時期不明の遺構出土遺物**

**S D 124** (1172) 1172は土師器皿である。平らな底部から屈曲して口縁部が開く。底部外面にはケズリが施される。

**S D 19・20・80** (1173~1183) **S D 19・20・80**の境界がけからず、一緒に掘削した際に出土したものである。1173は緑釉陶器壺である。非常に小さな高台が貼り付けられている。1174は瀬戸産の染付小碗である。登窯第8小期に相当する。1175は美濃産の陶器皿である。内外面と断面に煤が付着している。瀬戸・美濃窯編年の登窯第3~4小期に併行するだろう。1176は瀬戸産の陶器反り皿である。底部外面にヘラ記号が認められる。灰白色の釉が施釉される。登窯第3小期に相当する。1177・1178は円形加工品である。いずれも常滑陶器鉢の体部を転用している。1182は鉄滓である。重さ113gである。1183は鎌の破片である。残存長5.7cm、幅2.1cmのものである。

#### **i ピット出土遺物**

**D J グリッド** (1184) 1184は山茶碗である。小さな高台がつき、体部は直線的である。藤澤編年第6型式に相当する。

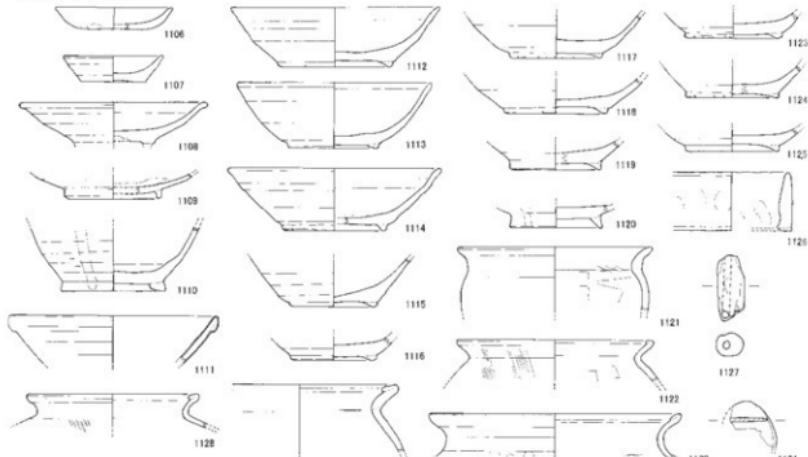
**D N グリッド** (1185) 1185は山茶碗である。外側へ開く逆台形の高台をもち、藤澤編年第5~6型式に相当する。

**D K グリッド** (1186・1187) 1186・1187は山茶碗である。1186は扁平な逆台形をもち、口縁部は外反する。藤澤編年第6型式に相当する。

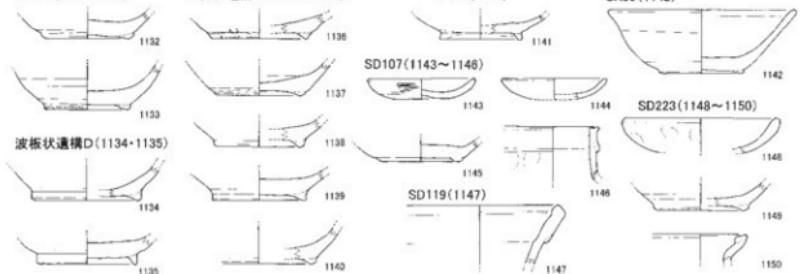
**D T グリッド** (1188~1190) 1188は鉄畿で、長頸平根の三角形磁と思われる。1189は鉄の古地金である。長さ5.1cm、幅2.2cmである。1190は鉄滓で、自然科学分析では楕型滓とされている。重さ48.0gである。

**D O グリッド** (1191~1193) 1191・1193は土師器杯である。1191は器壁は薄く、底部は平らで、口縁部は外反する。底部外面に墨書きがみられる。1193

SD239(1106~1131)



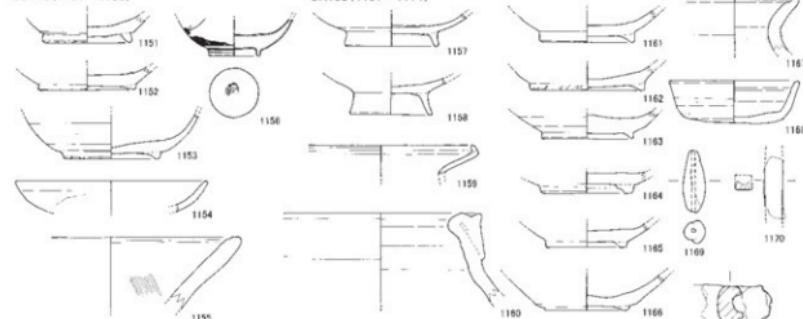
SD238(1132~1133)



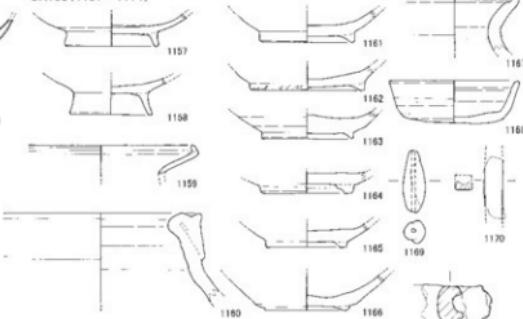
波板状遺構D(1134~1135)



SD110(1151~1156)



SR108(1157~1171)



0

(1131~1170)

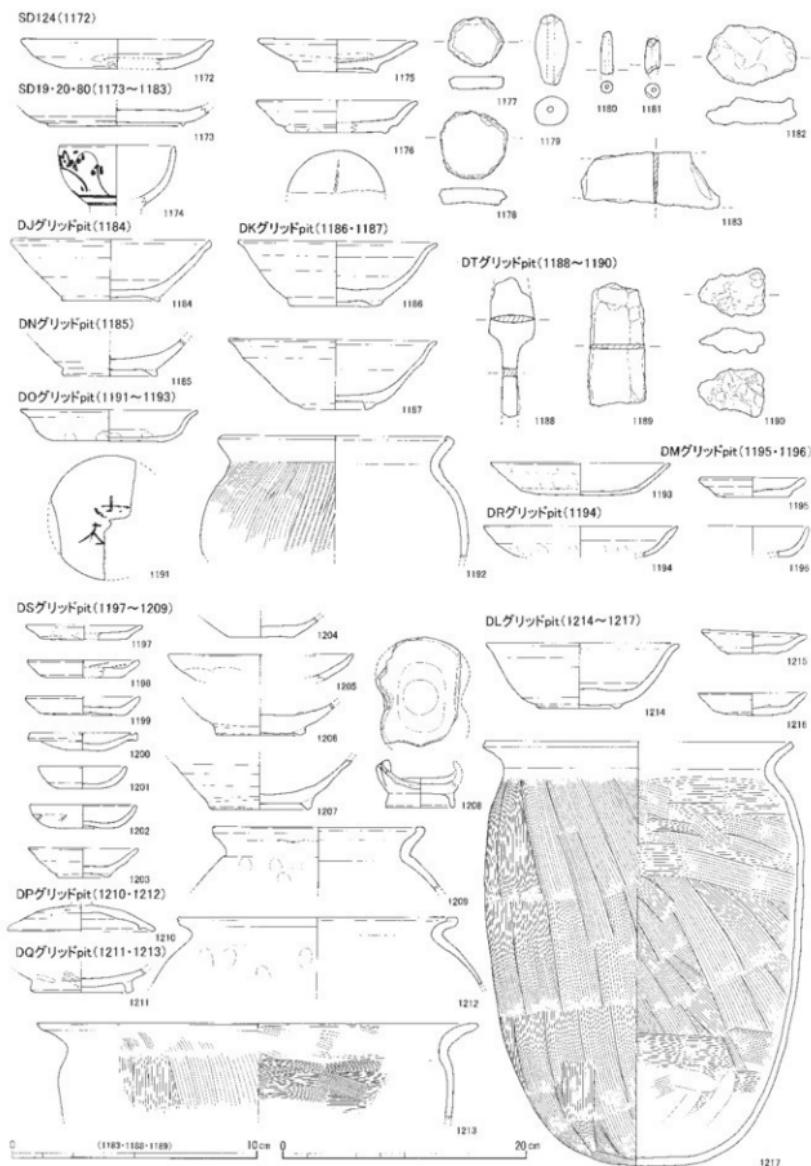
10 cm

0

20 cm

1171

第117図 c地区 出土遺物実測図17 (1:4) 1131・1170は1:2



第118図 c地区 出土遺物実測図18 (1:4) 1183・1188・1189は1:2

は口縁部のヨコナデは弱く、直線的に外方へ開く。

斎宮編年第二期第3～4段階に併行するだろうか。

**D R グリッド** (1194) 1194は土師器皿である。

口縁部は2単位のヨコナデが施される。島貫編年F3期に併行すると思われる。

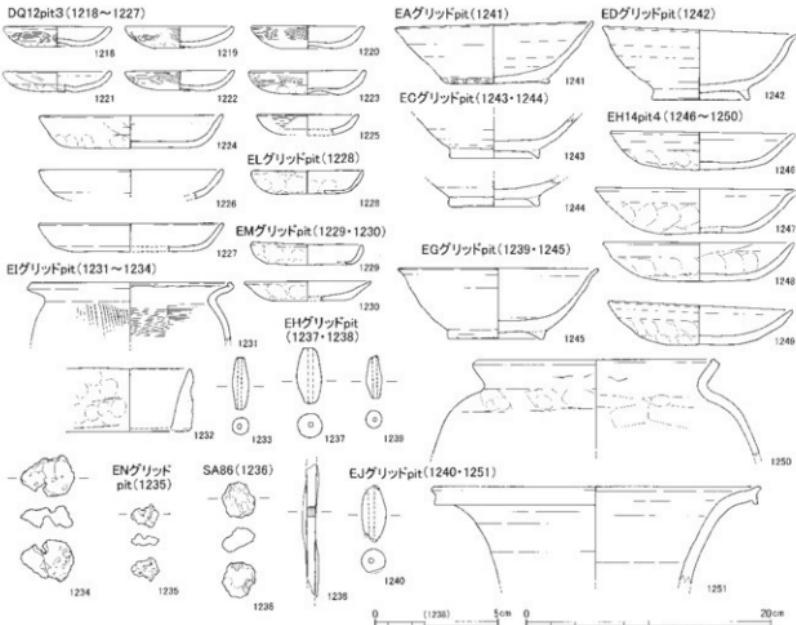
**D M グリッド** (1195・1196) 1195は山茶碗小皿である。口縁部の立ち上がりが低く、全体的に扁平である。藤澤編年第6型式のものであろう。1196は土師器皿である。

**D S グリッド** (1197～1209) 1197～1202は土師器小皿である。1197・1198は底部が厚く、口縁部は屈曲して短く斜め上方に立ち上がる。1199の器壁は均一で、口縁部は短く斜め上方に直線的に開く。島貫編年F2期新相に併行すると思われる。1200はいわゆる「て」の字状口縁小皿である。器壁は全体的に厚めである。口縁部外側は面をなし、口縁端部はつまみ上げられる。島貫編年F1～2期古相に併

行すると思われる。1201・1202は平らな底部から緩やかに口縁部が上方へ立ち上がる。島貫編年F3期に併行すると思われる。1203は山茶碗小皿である。全体的に扁平で、低い高台がつく。藤澤編年第6型式に相当する。1206・1207は山茶碗である。いずれも逆台形の高台がつき、藤澤編年第5～6型式に相当する。1208は灰釉陶器耳皿である。端部が丸く高い高台がつく。1209は土師器甕である。口縁端部は短く内側へ折り返され、頸部は短く屈曲する。

**D P グリッド** (1210・1212) 1210は須恵器杯蓋である。天井部中央のつまみは剥離している。内面の返りは短く、口縁部以下より突出しない。田辺編年TK217型式のものである。1212は土師器甕である。口縁端部は内側へ折り返されたのち、ヨコナデによって面をなしている。

**D Q グリッド** (1211・1213) 1211は灰釉陶器椀である。内側する高台をもち、柄崎・斎藤編年黑



第119図 c地区 出土遺物実測図19 (1:4) 1238は1:2

笹90号窯式のものと思われる。1213は土師器甕である。口縁部は大きく外反し、頸部のくびれは弱い。

**D Q12pit3** (1218～1227) 1218～1223・1225は土師器小皿である。いずれも平らもしくは中央がくぼむ底部から緩やかに口縁部が斜め上方に立ち上がるるもので、島貢編年F 3～4期に併行すると思われる。1224・1226・1227は土師器皿である。いずれも平らな底部から屈曲して口縁部が斜め上方へ開くものである。島貢編年F 4期に併行するだろう。

**D Lグリッド** (1214～1217) 1214は山茶碗である。扁平な逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。1215・1216は山茶碗小皿である。全体的に扁平であり、口縁端部は丸い。これらも第6型式のものであろう。1217は土師器長胴甕である。口縁端部は折り返されることなく、面をなす。体部外面はタテハケ、内面上部はヨコハケ、中ほどは斜めハケが施され、内面底部はナデ調整である。

**E Lグリッド** (1228) 1228は土師器小皿である。口径は9.1cmで、灰白色を呈する。器壁は薄い。南伊勢系のものと思われる。

**E Mグリッド** (1229・1230) 1229・1230は土師器小皿である。1229は器壁が薄く、浅黄橙色を呈する。口径は9.1cmである。南伊勢系のものであろう。1230はやや器壁が厚く、口縁部は直線的にのびる。

**E Iグリッド** (1231～1234) 1231は土師器甕である。口縁端部は内側へ折り返され、外側は面をなす。頸部は強く屈曲する。1234は鉄滓で、自然科学分析では再結合滓とされている。重さは25.0g。

**E Nグリッド** (1235) 1235は鉄滓である。ガラス質のものを包含しており、自然科学分析では楕型滓とされている。重さ2.8gである。

**E Hグリッド** (1237・1238) 1237は土鍤である。長さ4.5cm、幅1.9～2.1cm、重さ14.9gである。1238は鉄釘である。上下端部とともに欠損しており、残存長5.4cmである。

**E H14pit4** (1246～1250) 1246～1249は土師器皿である。平らな底部からやや屈曲して口縁部が開く。島貢編年F 2期頃に併行するだろうか。1250は土師器甕である。口縁端部内面は肥厚する。

**E Gグリッド** (1239・1245) 1239は土鍤である。長さ3.6cm、幅1.3～1.5cm、重さ5.0gである。1245は山茶碗である。三角形の低い高台がつき、藤澤編年第4～5型式のものと思われる。

**E Jグリッド** (1240・1251) 1240は土鍤である。1251は須恵器甕である。猿投窯産のものと思われる。

**E Aグリッド** (1241) 1241は山茶碗である。体部は直線的で、扁平な高台がつく。藤澤編年第6型式に相当する。

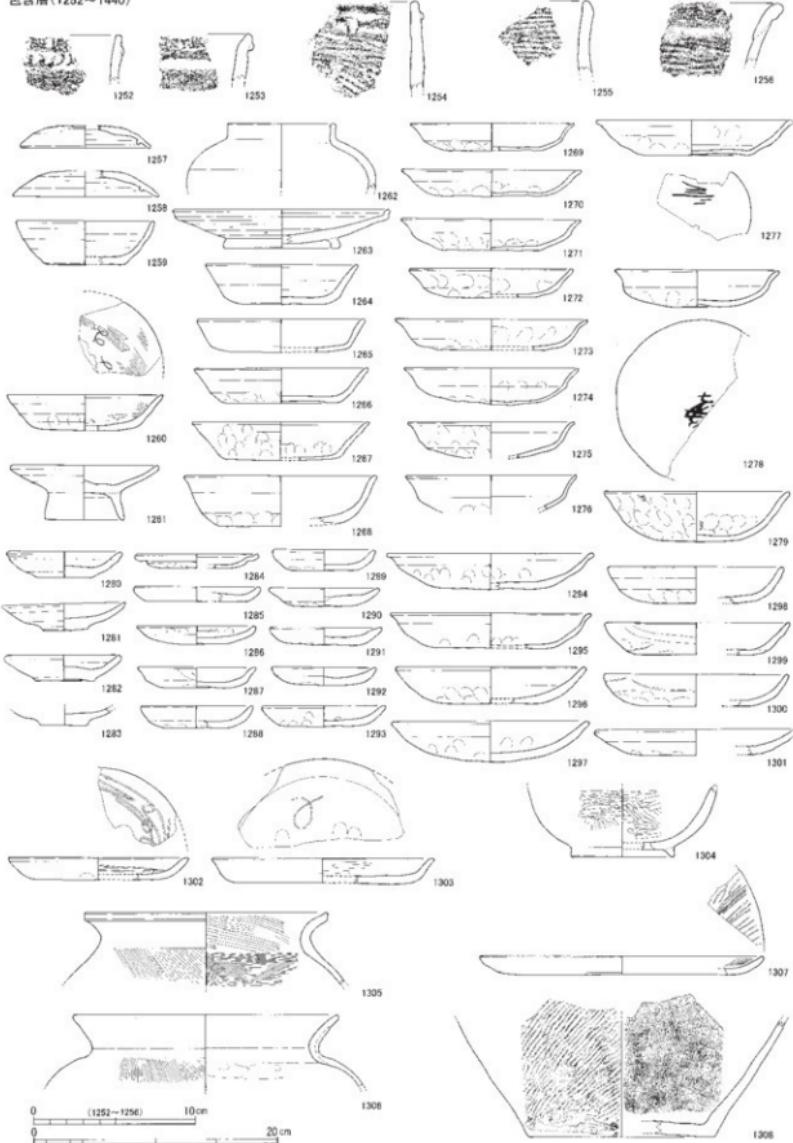
**E Dグリッド** (1242) 1242は山茶碗である。体部は丸みをもち、口縁端部はやや外反する。高台は端部が丸く、やや高い。藤澤編年第3～4型式に相当するだろうか。

**E Cグリッド** (1243・1244) 1243・1244は山茶碗である。1243は藤澤編年第4～5型式、1244は第2～3型式に相当するだろうか。

#### j 遺構外（表土・包含層など）出土遺物

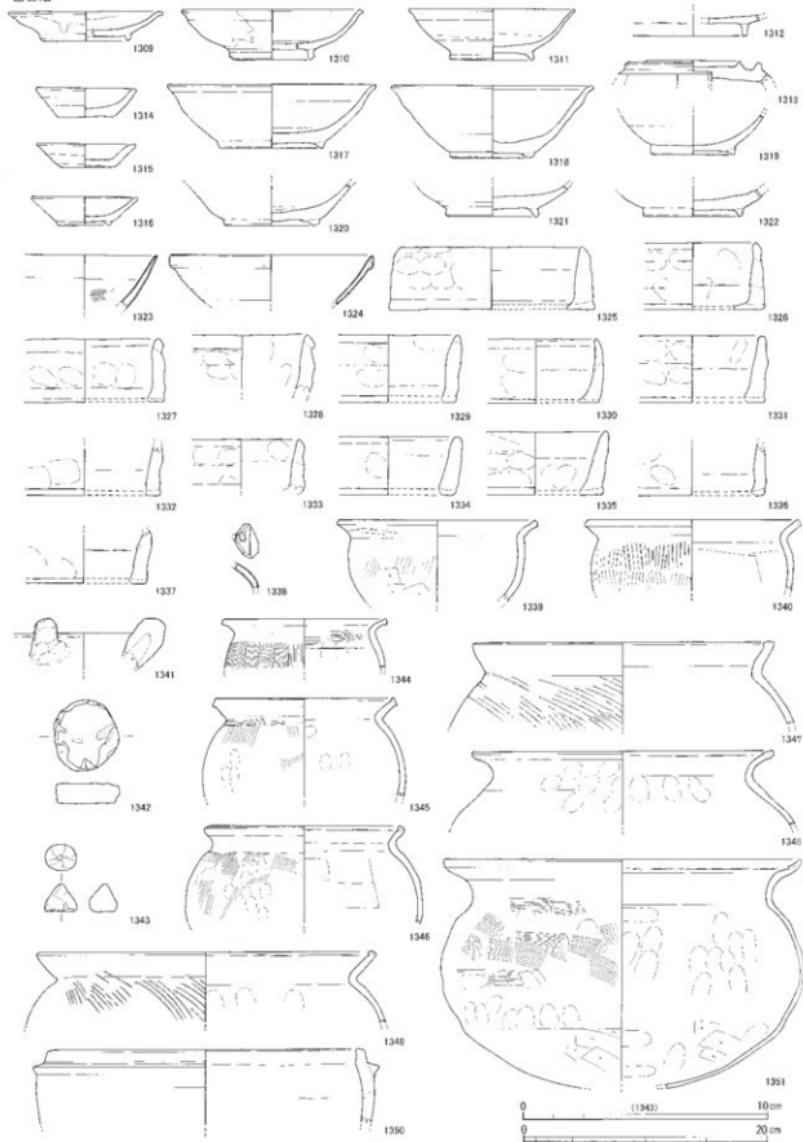
1252～1256は繩文土器深鉢である。1252～1254は突帯がつけられ、それ以下は二枚貝による条痕がみられる。1252はV字形、1254はD字形のキザミが突帯に施される。1257・1258は須恵器杯蓋である。いずれも内面の返りは小さく、口縁端部より突出することはない。田辺編年TK217型式に相当する。1259は須恵器杯身である。底部外面は未調整である。1260は土師器杯である。平らな底部から屈曲して口縁部が開く。口縁端部は丸くおさめられる。内面にはミガキ調整と螺旋状暗文が施される。外面はユビオサエ・ヨコナデ・ナデ調整される。斎宮編年第II期第1～3段階に併行するだろうか。1261はロクロ土師器台付皿である。口径11.9cmと比較的小型で、口縁部はやや内彌して開く。斎宮編年第III期に併行する。1264～1278は土師器杯である。1264～1268は平らな底部から屈曲して口縁部が直線的に開くもので、いずれもヨコナデ・ユビオサエ・ナデ調整される。口縁端部は丸くおさめられる。斎宮編年第II期第1～3段階に併行するだろう。1269～1278は器壁が薄く、底部は平らかやや丸みを帯び、口縁部はヨコナデによって外反するものが多い。1277は墨痕、1278は墨書がみられる。斎宮編年第II期第2～4段階に併行すると思われる。1279は土師器碗である。口縁部外および底部内面は工具ナデ調整される。

包含層(1252~1440)



第120図 c地区 出土遺物実測図20 (1 : 4) 1252~1256は1 : 3

包含層



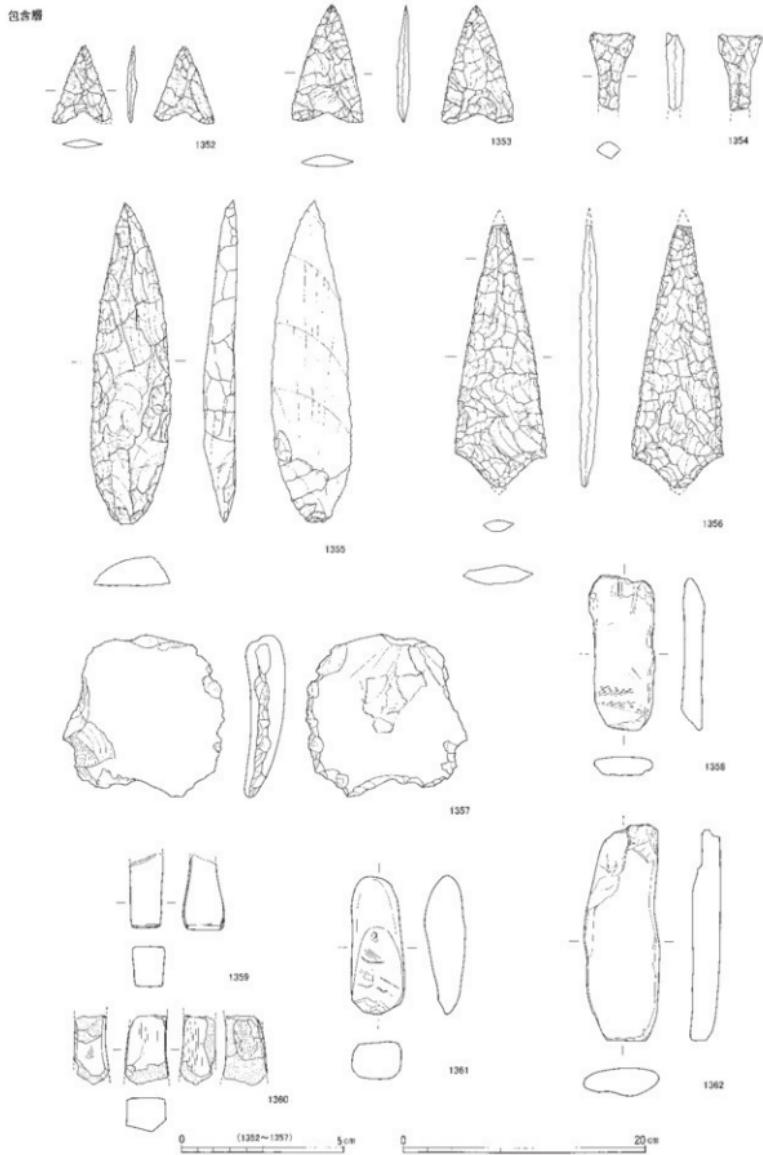
第121図 c地区 出土遺物実測図21 (1:4) 1343は1:2

1280～1283はロクロ土師器小皿である。口縁部は内彌するものと直線的に開くものがある。斎宮編年第Ⅲ期に併行する。1284はいわゆる「て」の字状口縁小皿である。口縁部の屈曲はやや弱く、端部はつまみあげられるほどではない。島貫編年F 2期古相に併行するだろう。1285～1293は土師器小皿である。1285は平たい底部から屈曲して開く口縁部をもつ。島貫編年F 2期新相に併行する。1287・1292は口縁部のヨコナデが強く、口縁部が屈曲するもので、島貫編年F 2期に併行するだろう。1294～1303は土師器皿である。1294・1295は器壁が薄く、口縁端部が外反するもので、斎宮編年第二期第4段階～第Ⅲ期に併行するだろうか。1298～1299は平らな底部からやや屈曲して口縁部が立ち上がるもので、島貫編年F 2～3期に併行する。1302・1303は平らな底部から屈曲して短い口縁部が斜め上方にのびるもので、内面に螺旋状暗文が認められる。1304は黒色土器である。器壁は厚く、幅の広い高台がつく。内面は全体的に黒化処理されているが、外表面は一部黒化処理されているのみである。内外面ともにロクロケズリ後丁寧にヘラミガキ調整される。底部に穿孔がある。1305・1306は土師器甕である。口縁部は外反し、端部に面をなす。1307は土師器皿である。口縁部の立ち上がりは低く、全体に扁平である。内面に放射状暗文が施される。

1309は灰釉陶器皿である。口縁端部は外反し、三日月高台をもつ。橘崎・斎藤編年黒窯90号窯式に相当する。1310・1311は灰釉陶器碗である。1310は口縁端部は外反し、内面がやや内彌する高台をもつ。灰釉は刷毛塗りされる。橘崎・斎藤編年黒窯90号窯式に相当するだろう。1311は口縁部の外反は弱く、端部に面をもち、外側へ開く高台をもつ。内面中央に一方向の仕上げナデがみられる。橘崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当するだろうか。1312は緑釉陶器の椀もしくは皿である。内面がやや内彌する高い角高台をもつ。1338は緑釉陶器の香炉蓋で、透かし孔と陰刻花文が施されている。1313は灰釉陶器円面硯である。脚には4方の透孔があったと思われる。上面には自然釉がかかっている。1314・1315は山茶碗小皿、1316は山茶碗小碗である。いずれも口縁部は直線的で、藤澤編年第5～6型式に相当するだろう。

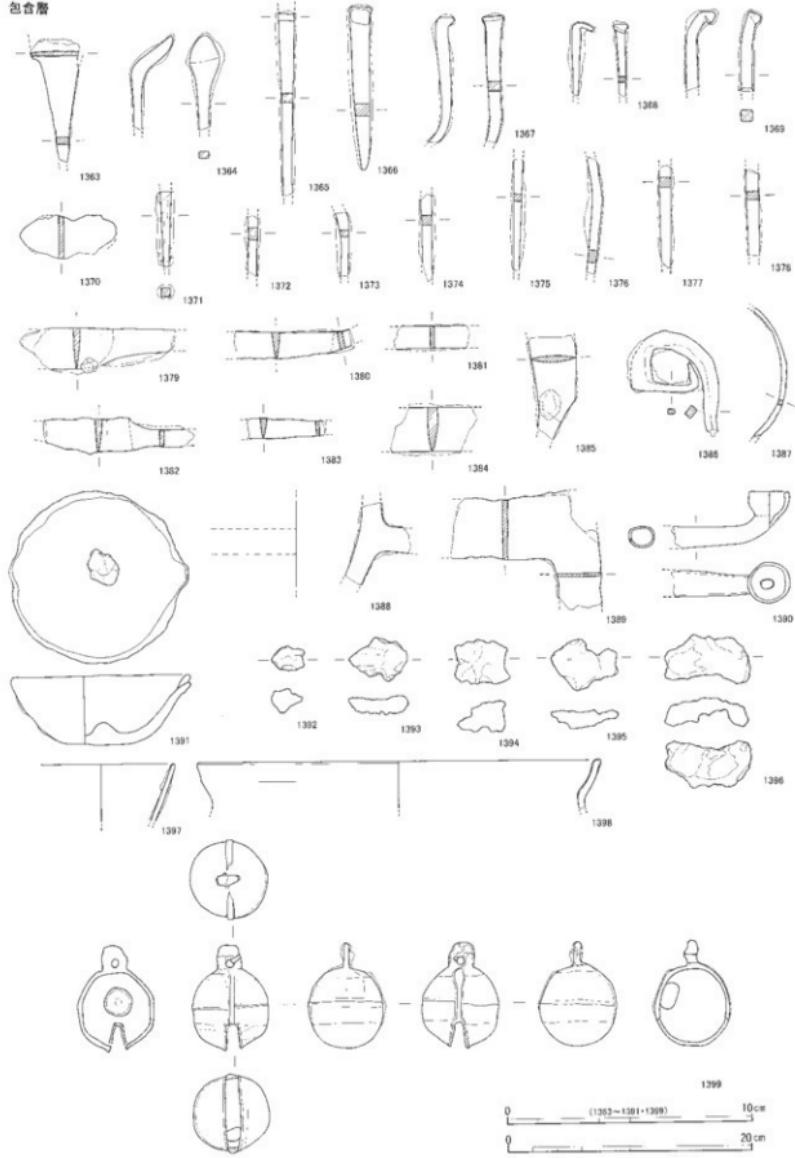
1317～1322は山茶碗である。1317は低い三角形の高台をもち、1318は扁平な逆台形の高台をもつ。藤澤編年第5～6型式のものであろう。1323は白磁碗である。1324は玉縁口縁の白磁碗である。玉縁口縁は折り返すことによって作り出されている。1325～1337は志摩式製塙土器である。1325は口径14.8cmで、内外面ともにユビオサエ・ナデ調整される。底部は剥離している。1341は土師器の不明品である。口縁部に粘土帶を縱方向に貼り付けているようである。1342は円形加工品である。瓦を転用している。1343は不明土製品である。直径1.1cm、高さ1.3cmの円錐形をしている。焼成は非常によく、緻密である。1344～1347・1349は土師器甕である。口縁部は小さく内側へ折り返され、端部は面をなす。1348は土師器鍋で、端部の折り返しの幅が広く、頸部は緩やかに屈曲する。1350は瓦質土器の風炉であるが、火鉢の可能性もある。1351は南伊勢系土師器鍋である。体部は楕円形で、口縁部は幅広く内側へ折り返された後ヨコナデされる。頸部の屈曲は緩やかである。体部外面上半部のハケは5本/cmと細かく、内面にはハケ調整はない。底部内外面はケズリ調整される。伊藤鍋編年第1段階のものである。

1352・1353はサヌカイト製の石礫である。いずれも抉りがあり、回基式のものである。1353は縦長で、縄文時代中期以前のものと思われる。1354は下呂石製の石椎である。先端は欠損しており、全体的に磨耗している。残存長2.35cmである。1355はサヌカイト製の木ノ葉形尖頭器である。長さ9.9cm、幅2.5cm、厚さ1.05cmの大きさである。片面は全体的に細かい剥離が施されているが、裏面は下端の一部のみ剥離が施されている。1356はチャート製の有舌尖頭器である。両側縁が直線的で、先端部が一部欠損している。基部の返しが未発達で、舌部側縁がやや内彌し、逆三角形を呈する。大きさは残存長8.05cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmである。1355・1356とともに縄文時代草創期のものである。1357はサヌカイト製の剥片である。長さ5.0cm、幅4.95cm、厚さ1.14cmの大きさである。1358～1362は砥石である。1358・1362は扁平で、1358は1面、1360は1面と裏面の一部にシリ面がある。1361は断面の一部が欠損しているが、1359・1360はともに断面方形である。1359は2面、



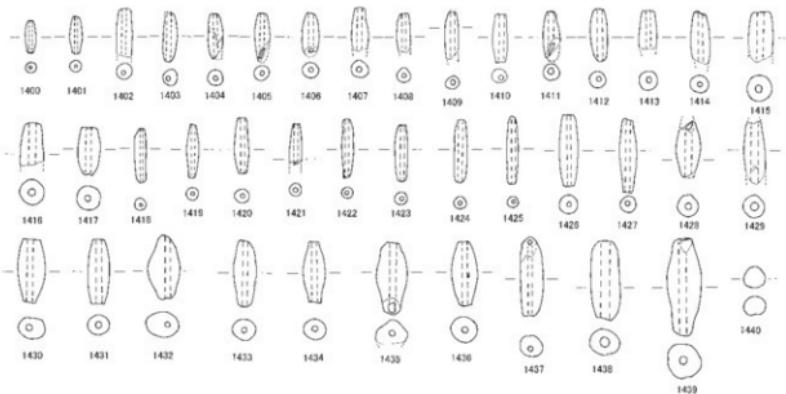
第122図 c地区 出土遺物実測図22 (1 : 4) 1352~1357は2 : 3

包含層

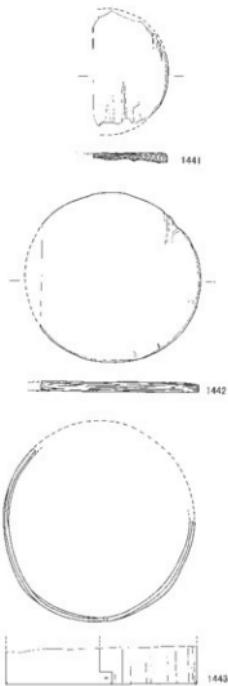


第123図 c地区 出土遺物実測図23 (1 : 4) 1363~1391・1399は1 : 2

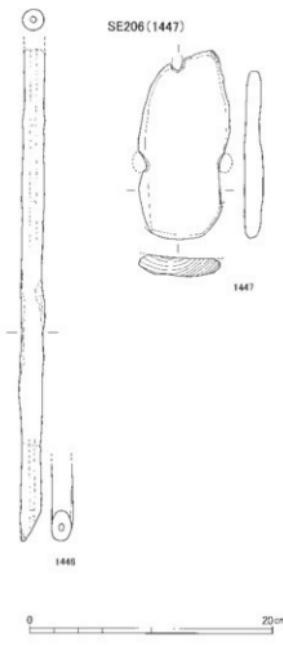
包含層



SE162(1441~1446)



SE206(1447)



第124図 c地区 出土遺物実測図24 (1:4)

1360は4面にスリ面がある。スリ面はよく使われたようで、面が曲線をとっている。

1363は鉄鍔もしくは刀子の間から茎部と思われる。一方は撫閑で、方頭式の可能性がある。1364～1367・1369・1371～1378は鉄釘である。1364の頭部は大きく純角に折り曲げられている。1366は上部が剥離しており、頭部の構造は不明である。1367・1369の頭部は折り曲げられ、上部は面になっている。1371は木質が付着している。1368は鉄製の楔である。1370は鍛造製品の古地金と思われる。1379は鍛造製品の破片である。1380・1381・1383は刀子茎である。1382は刀子である。柄縁装具の圧痕があり、鍤（はばき）である可能性がある。また、柄に鹿角痕のようなものもみられる。1384は刀子の刀身である。1385は鉄鍔で、一方は撫閑である。1386は環状鉄製品で、何に使われたものかは不明である。断面は四角で、場所によって太さが異なる。1387は不明鉄製品である。当初は刀装具と想定したが、目釘孔や鉢脚はいずれも確認できなかった。1388は鉄製の羽釜である。厚さ0.8cm～1.0cmである。1389は建築金具の隅金具であろうか。直角近くに曲がった板状の鉄製品である。1390は煙管である。1391は灯明皿である。注口のついた椀形のもので、内面中央に芯がみられる。1392～1396は鉄津である。1396は自然科学分析では椀形鍛治津とされている。重さ65.0gである。1397・1398は鉄鍋である。1397は端部は丸くおさめられ、厚さは0.4cmと均一である。1398は頭部が屈曲して聞くものである。口径32.8cmと復元される。1399は銅鉢である。幅直径3.1～3.2cm、高さ3.4cmのやや縱長の球形鉢で、半円形の鉢がつく。鉢と鉢口の方向は直角である。紐には一部紐の痕が残る。鉢口は方形で、幅0.3～0.7cmである。腹帶は不明瞭である。中に直径1.1cm、厚さ0.6cmの玉が入っている。

1400～1439は土鍤である。長さが4cm以下で小型のもの、長さ4～6cm程度で、重さが10g以下という細長いもの、長さ5cm以上、重さ10g以上という大型のものに大きくわけられるようである。1440は土玉で穿孔はない。  
(小林美)

### 【註】

1) 田辺昭三1980『須恵器大成』角川書店

- 2) 尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『第1回東海土器研究会資料 須恵器生産の出現から消滅－猿投窯・湖西窯編年の再構築－』東海土器研究会
- 3) 奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』、同1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』ほか。
- 4) 斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区的調査 本文編』
- 5) 伊藤裕偉2000「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貢遺跡出土史料を中心に～」『嶋抜Ⅱ』、同2001「雲出島貢遺跡における古代の土器」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター
- 6) 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 7) 伊藤裕偉1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会、同1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 8) 楠崎彰一・斎藤孝正1981「猿投窯編年の再検討について」『平安時代の土器・陶器』愛知県陶磁資料館、斎藤孝正2000『日本の美術 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』409号 至文堂
- 9) 大川勝宏1993「斎宮の黒色土器・供膳形態を中心にして」『斎宮歴史博物館研究紀要』2
- 10) 稲垣晋也1989「東海道古瓦の系譜（一）－伊賀・伊勢・志摩－」『皇學館大學史料編纂所論集』皇學館大學史料編纂所
- 11) 福田典明2006「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究XX 瓦器焼成の展開』日本中世土器研究会
- 12) 中野晴久1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 13) (財)瀬戸市埋蔵文化財センター編1997『研究紀要』第5輯
- 14) 伊藤裕偉2008「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』三重県
- 15) (財)瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』、同2003『江戸時代の美濃窯』

## VIII 木造赤坂遺跡 d 地区の遺構と遺物

### 1 遺構 (第50~100図)

古墳時代から江戸時代までの遺構を多数確認した。d 地区南東部は昭和30年代に行われた土地改良事業によって大きく削平されており、遺構検出面は一段低くなっている。以下、時代ごとに記述する。

#### a 古墳時代の遺構

堅穴住居 2棟、土坑を検出した。

##### (1) 堅穴住居

**S H902** (第126図) 規模は南北約5.2m、東西4.6m以上で、平面形は方形である。第7次調査では東西方向に延びる溝2条として調査を行ったが、第8次調査の結果、これらの溝が堅穴住居の周溝であることが分かった。床面の深さは約10cm、周溝の深さは約20cmである。須恵器杯蓋や土師器台付甕が出土しており、古墳時代中期～後期頃の遺構と考えられる。

**S H1000** (第127図) 規模は南北約4.4m、東西約3.7m、深さ 6 cmで、平面形は長方形である。東側の隅は平安時代末期の土坑 (S K1028) によつて掘削されている。周溝や貼床、硬化面は確認できなかった。埋土から土師器甕の体部片が出土した。また、直上の包含層から土師器台付甕の台部等が出土しており、これらの出土遺物から古墳時代前期頃の遺構と考えられる。

##### (2) 土坑

**S K521** (第128図) 規模は長径約5.8m、短径約5.4mで、円形の土坑である。深さが11～26cmと浅いため、堅穴住居の可能性もあるが、根拠が薄いことから土坑とした。須恵器蓋杯の破片が出土しており、古墳時代以降の遺構と考えられる。

#### b 飛鳥・奈良時代の遺構

大半が調査区の北側に位置する。堅穴住居を5棟検出したが、いずれも非常に浅く、周溝や貼床は確認できなかった。他に、検出時には平面形が方形を呈するため堅穴住居としていたが、掘削後、床面にピットや不整形な凹凸が多いことから土坑としたものの2基を含め、4基以上の土坑を確認した。

##### (1) 堅穴住居

**S H917** (第129図) 南北约3.3m、東西約5.2mの長方形で、深さは9cmである。北東部に薄く焼土を確認したが、カマドは残っていないかった。また、周溝や貼床は確認できなかった。暗文土師器や土師器甕、宝珠つまみのついた須恵器の杯蓋などが出土したことから、奈良時代の遺構と考えられる。また、縄文土器片や石斧が混入していた。

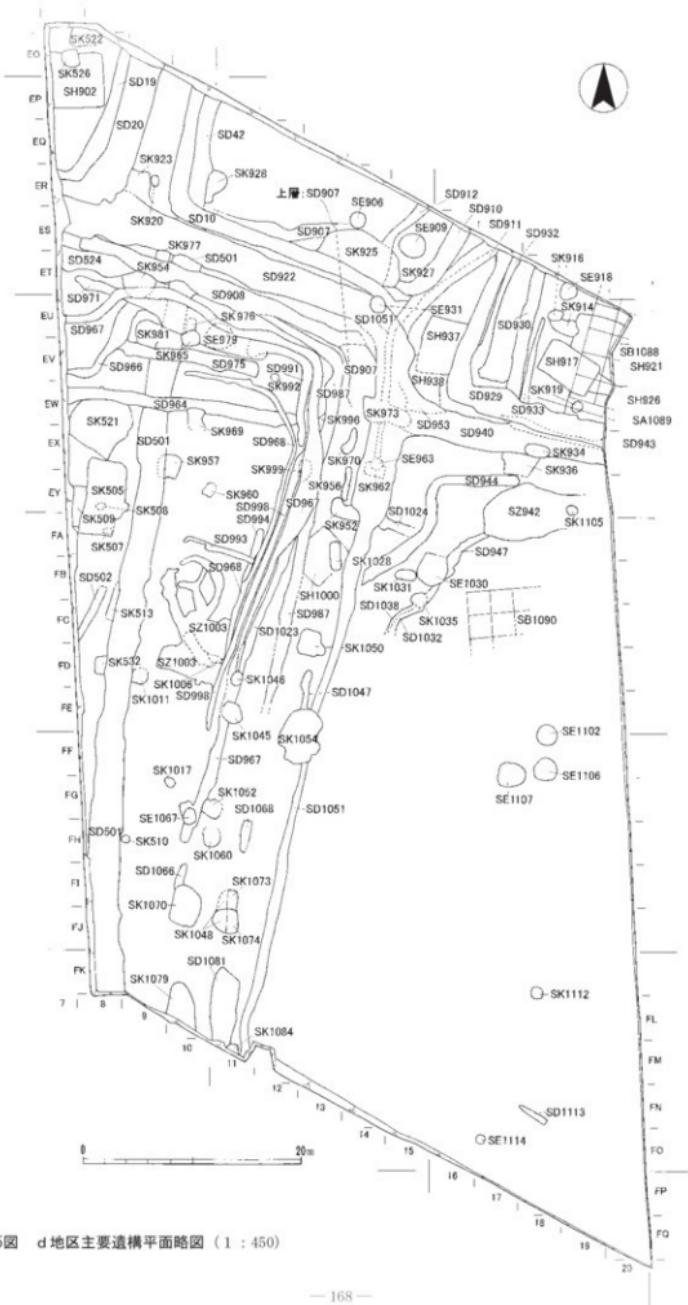
**S H921** (第129図) 東側が調査区外へのびるため全体は不明であるが、南北約5.2m、東西4.3m以上の方形で、深さは11cmである。周溝や貼床は確認できなかった。S H917に先行し、須恵器の杯や壺が出土していることから、飛鳥時代の遺構と考えられる。また、埋土から混入と考えられる白玉が出土している。

**S H926** (第129図) 南側を S D929によって掘削されているため全体は不明であるが、規模は南北2.5m以上、東西3.6m以上、深さ11cmである。北部中央で焼土を検出したが、浅いものであった。周溝や貼床は確認できなかった。須恵器杯や土師器片が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。また、ピットから石蹴が出土した。

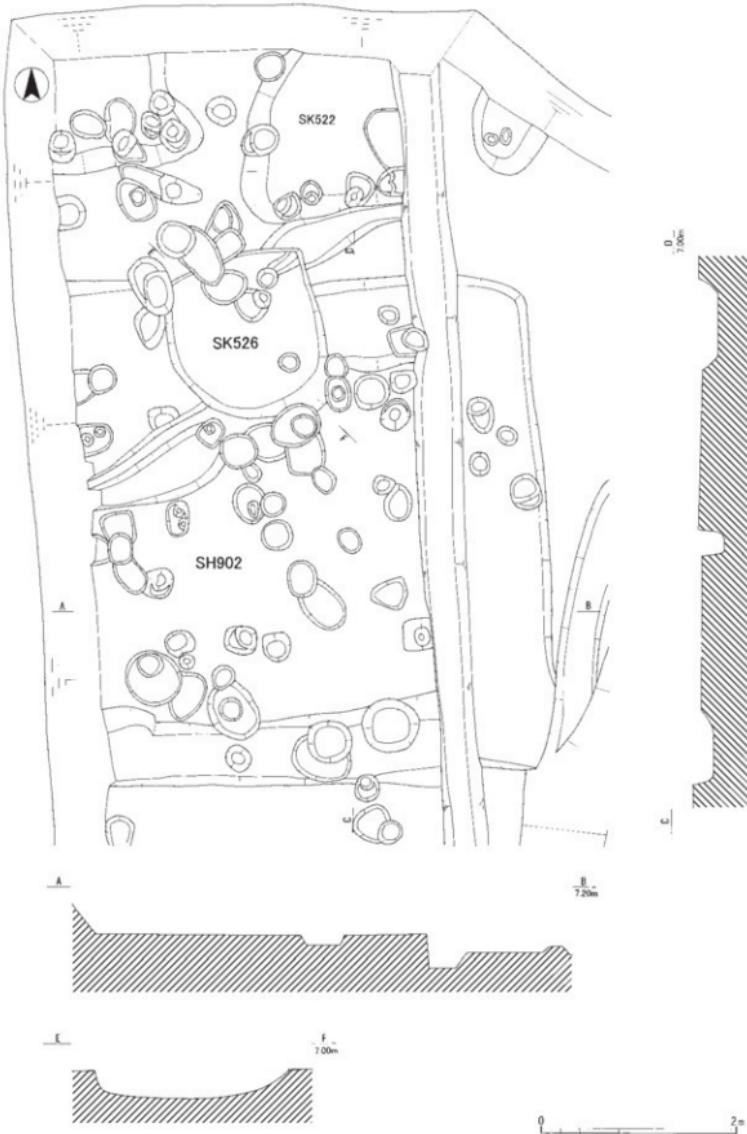
**S H937・S H938** (第130図) 2棟の方形の堅穴住居が重複していた。かなりの部分が他の遺構によって掘削されているため、全体は不明であるが、S H937の規模は南北約4.8m、東西3.5m以上、深さ17cmである。S H938の規模は南北3.0m以上、東西3.5m以上、深さ16cmである。埋土が酷似しており、検出時は S H937の方が先行すると認識していたが、土層断面を観察した結果、S H938の方が先行すると判断した。いずれも出土遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、S H938から土師器甕の小片が出土しており、どちらも奈良時代頃の遺構と考えられる。

##### (2) 土坑

**S K920** (第131図) 検出当初は S K923と同一の堅穴住居の一部と考えて調査を行っていたが、掘削の結果、独立した梢円形の土坑であることが分かつた。



第125図 d地区主要遺構平面略図 (1 : 450)



第126図 d地区 SK526・SH902遺構図 (1 : 50)

た。規模は長径約1.0m、短径約0.6m、深さ8cmである。土師器の皿や甕が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。

**S K923** (第131図) 検出当初は堅穴住居である可能性を考えて調査を行っていたが、床面にビットや不整形な凹凸が多いことから土坑とした。規模は南北2.2m以上、東西2.3m以上、深さ7~30cmである。土師器皿・杯・甕、須恵器片などが出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。

**S K936** (第131図) 北側と南側が溝によって掘削されているため、全体は不明である。規模は南北1.8m以上、東西約3.5m、深さ13cmである。堅穴住居と認識して調査を行ったが、ビットが非常に多い。土師器小片や須恵器片、ビットから須恵器瓶が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。また、埋土を洗浄した際に鉄くずを多数確認したことから、鍛冶との関連が考えられる。ただし、焼土は確認し

ていない。

**S K1017** (第131図) 長径約1.0m、短径約0.8m、深さ40cmの楕円形土坑である。埋土上層に焼土塊が確認された。出土遺物は土師器甕など小片のみで、奈良時代から平安時代の遺構と考えられる。

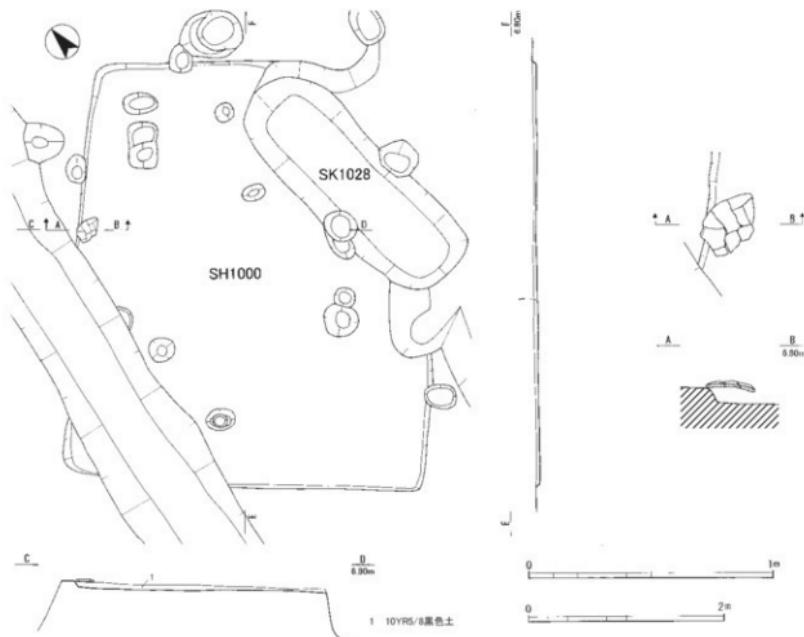
#### c 平安時代前期~後期の遺構

溝や土坑を検出した。調査区の西部から南部に比較的多いようである。

##### (1) 土坑

**S K928** (第131図) 長径2.3m以上、短径1.8m以上、深さ50cmの土坑で、西半はS D42によって掘削されている。底面から多数のビットが確認された。土師器皿や黒色土器など多数の土器が出土しており、平安時代前期~中期頃の遺構と考えられる。

**S K954** 長径約2.9m、短径約2.5m、深さ118cmの円形の深い土坑である。埋土は地山ブロックを多く含む黒色土の單一層であり、一度に埋められた



第127図 d地区 S H1000・SK1028遺構図 (1:50), S H1000遺物出土状況図 (1:20)

後、S D524などの溝が掘削されたと考えられる。土師器甕や須恵器片などが出土している。

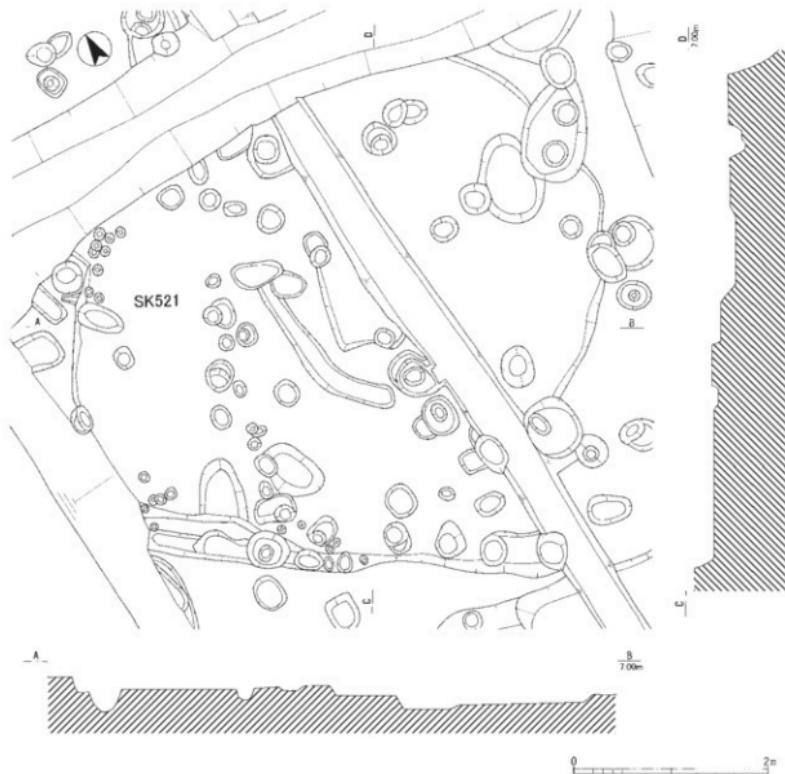
**S K957** 西半がS D501によって掘削されているため、全体は不明だが、長径約2.0m、短径1.0m以上、深さ40cmの土坑である。土師器の杯や皿、須恵器杯蓋など、多数の土器が出土しており、平安時代前期頃の遺構と考えられる。

**S K1060 (第132図)** 北半は擾乱を受けているため、全体は不明であるが、長径約1.7m、短径1.5m以上、深さ27cmの規模である。埋土には焼土が混じる他、底一面にわら灰が広がっていた。灰釉陶器や土師器片、須恵器片などが出土した。

**S K1073 (第132図)** 初め、SK1048として西半を調査したが、土層断面観察により、2つの土坑が重複していることが分かった。このため東半については、北側の古い土坑をSK1073、南側の土坑をSK1074として調査した。SK1073は長径1.8m以上、短径約1.2m、深さ56cmの規模である。ロクロ土師器が多数出土しており、SK1074も多数のロクロ土師器が混入していた。このことから、平安時代後期にロクロ土師器が一括して廃棄されたと考えられる。

## (2) 溝

### 1 区画溝



第128図 d地区 SK521遺構図 (1 : 50)

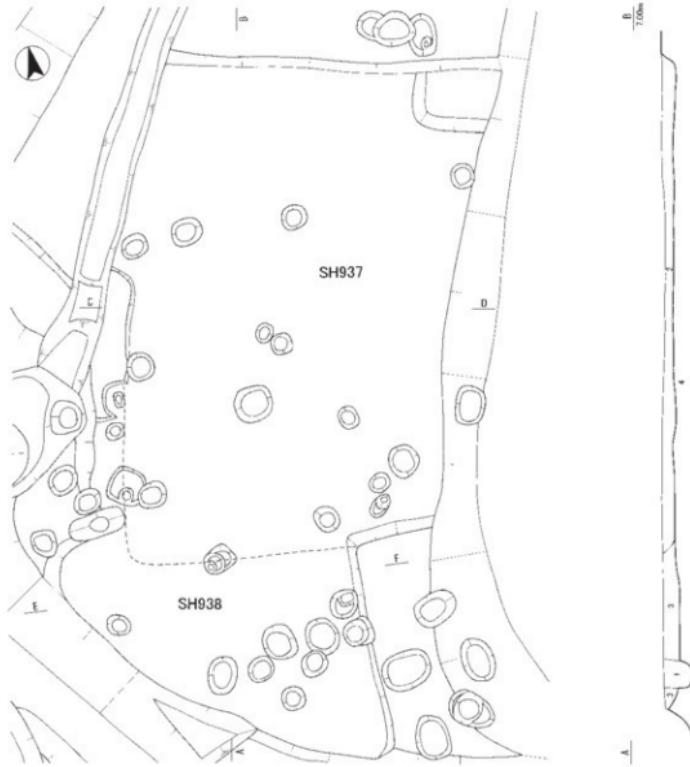
**S D501** (第133図) 幅2.5~2.8m、深さ80~100cm、断面U字形の南北方向の溝である。S D42に重複するように掘削されており、長さは66m以上である。調査区南端部から大量のロクロ土師器の台付皿や皿が出土しており、土器の一括廃棄が行われたと考えられる。他にも土師器、縁袖陶器、灰釉陶器、黒色土器、製塙土器、土鍾など多数の遺物が出土した。北端部はS D922によって掘削されているため詳細は不明であるが、埋土や出土遺物が類似していることから東西方向のS D524に続く可能性もある。

あり、区画溝として機能していたと思われる。出土遺物から平安時代中期から後期頃の遺構と考えられる。

**S D524** 長さ6.5m以上、幅1.4~2.0m、深さ96cmの東西方向の溝である。前述のようにS D501につながる区画溝の可能性がある。ロクロ土師器、灰釉陶器、土師器甕などの遺物が出土しており、S D501と同様平安時代中期~後期頃の遺構と考えられる。また、後述のS D987からも当該期の遺物が多数出土しており、関係があったのかもしれない。



第129図 d地区 SH917・921・926遺構図 (1 : 80)

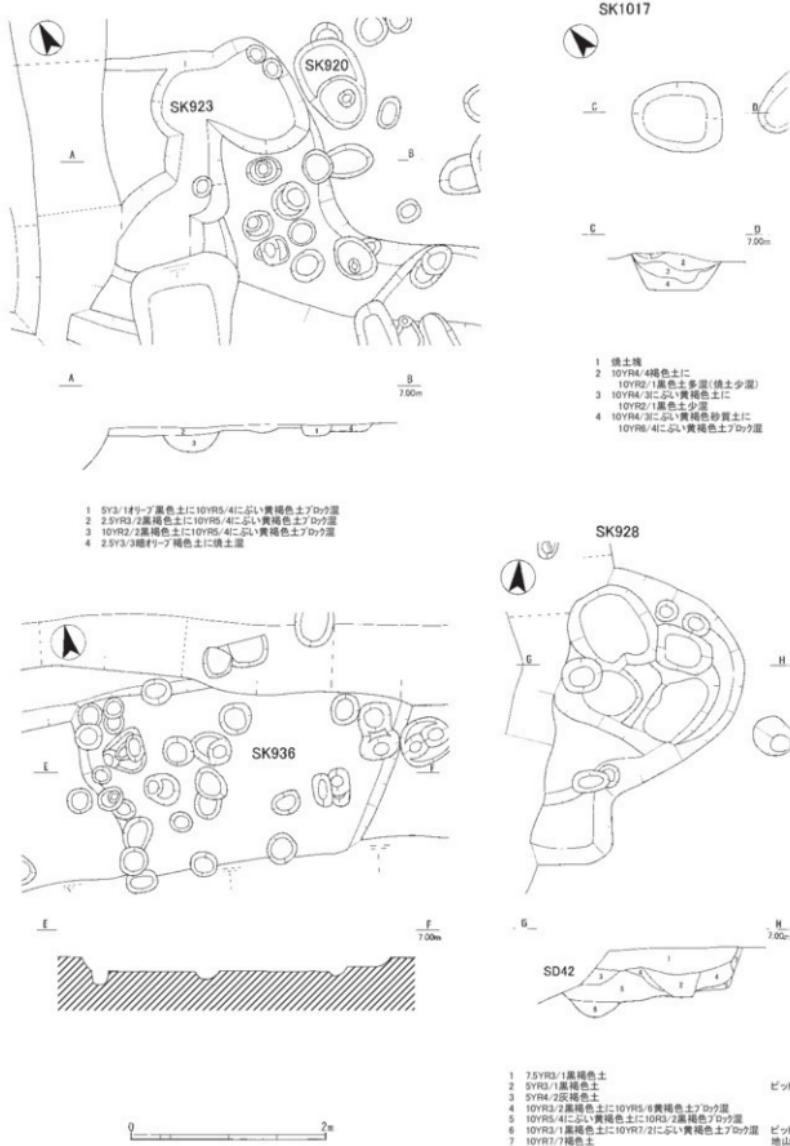


- 1 10YR5/2黒褐色粘質土に  
10YR5/3にふじい黒褐色粘質土ブドウ層 ピット  
 2 10YR2/3黒褐色粘質土に  
10YR4/3にふじい黒褐色粘質土ブドウ層 SH937  
 3 7.5YR2/2黒褐色粘質土に  
10YR4/4褐色粘質土ブドウ層 SH938  
 4 10YH4/3にふじい褐色粘質土 地山



0 2m

第130図 d地区 SH937・938遺構図 (1 : 50)



第131図 d地区 SK920・923・928・936・1017遺構図 (1 : 50)

## 2 その他の溝

**S D 1081** (第133図) 南端は調査区外にのびるが、長さ6.7m以上、幅1.6~2.4m、深さ66cmの規模である。平面形が梢円に近いため、土坑の可能性もある。断面は逆台形に近く、西側は別構造を掘削しているかもしれない。ロクロ土師器や黒色土器、灰釉陶器、青磁片、土師器甕、鉄製品などが出土しており、平安時代後期の遺構と考えられる。

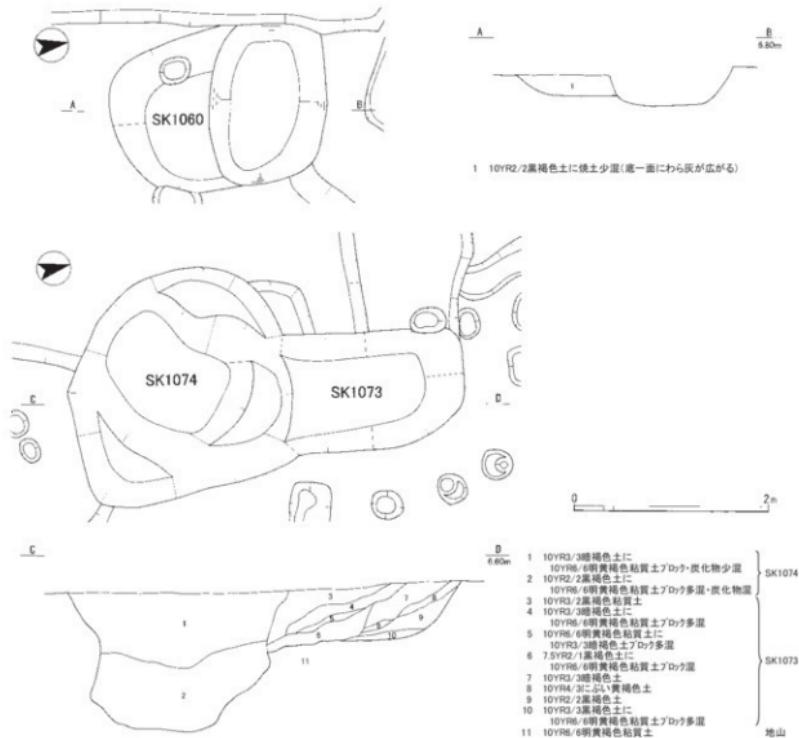
#### d 平安時代後末期～鎌倉時代の遺構

多数の溝のほか、井戸や土坑を検出した。溝は後の室町時代のものより小規模なものが多い。また、出土遺物が最も多い時期である。

#### (1) 挖立柱建物

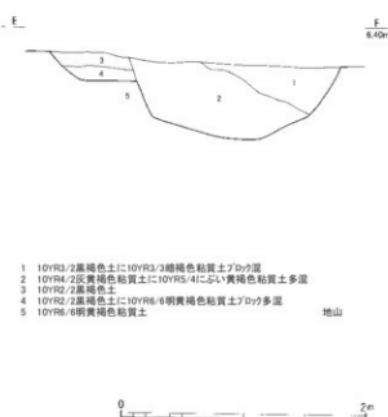
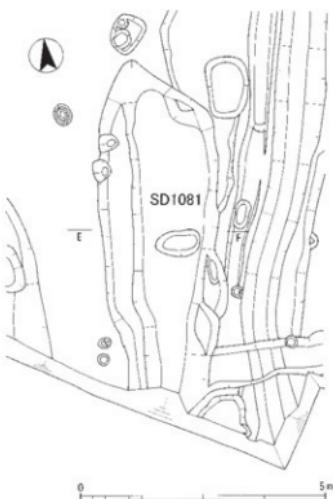
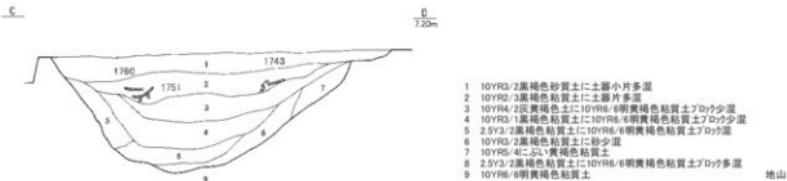
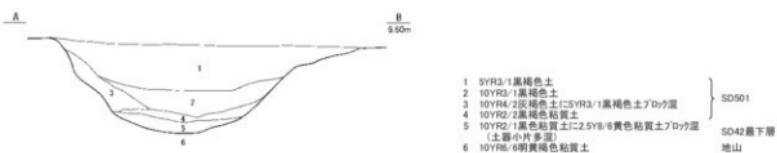
**S B1088** (第134図) 調査区北東隅で検出したため、全体は不明であるが、南北4間以上×東西1間以上の柱柱建物である。柱間は2.1~2.4m、方位はN15°Eである。出土遺物は小片のため図化できなかつたが、土器皿や灰釉陶器、山茶碗、瓦器が出土しており、鎌倉時代末期~室町時代初頭頃の遺構と考えられる。

**S B1090** (第134図) 調査区東部で検出したが、東半部が土地改良事業によって削平されていたため、一部のみの検出となった。2間以上×2間以上の総柱建物と考えられる。柱間は約2.1mである。方位

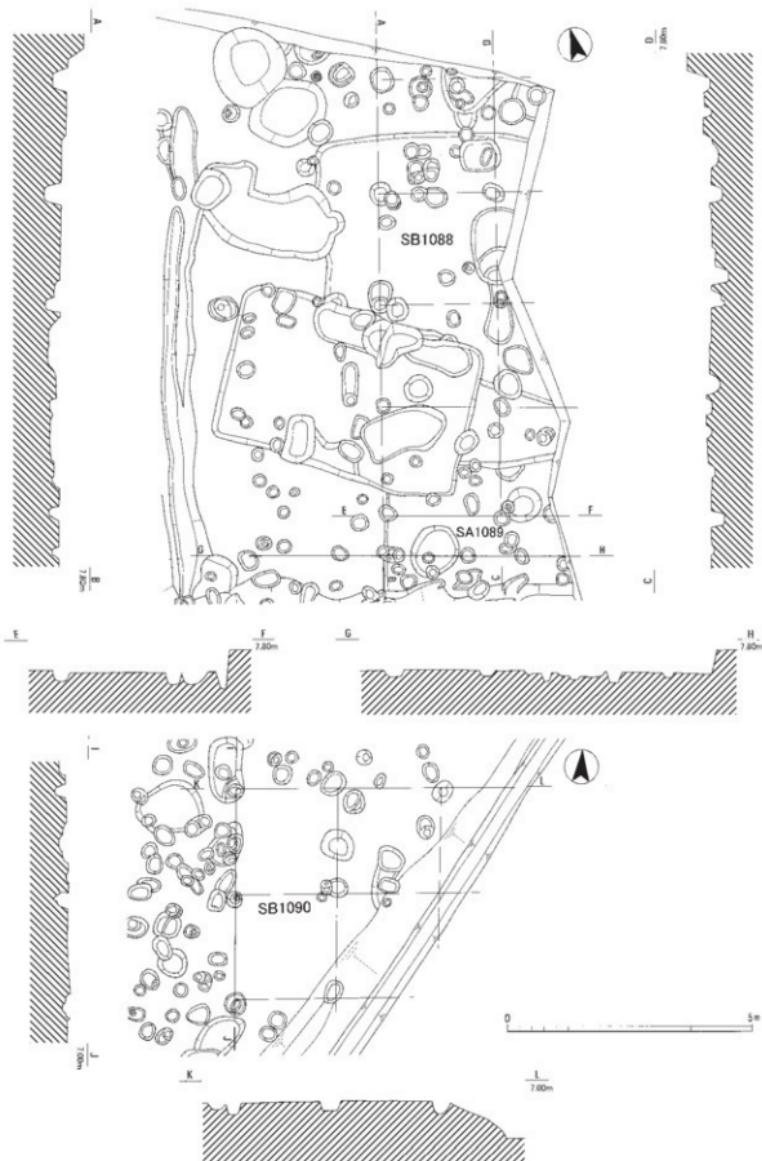


第132図 d地区 SK1060・1073・1074遺構図 (1:50)

SD501



第133図 d地区 SD501土層図 (1 : 40)、SD1081遺構図 (1 : 100)・土層図 (1 : 40) 奈付図4参照



第134図 d 地区 SB1088・1090・SA1089遺構図 (1 : 100)

はE 3° Nで、他の掘立柱建物との差が大きい。出土遺物は小片のみであるため、詳細な時期は不明であるが、鎌倉時代の遺構ではないだろうか。

#### (2) 檻

**S A 1089** (第134図) S B 1088の南側に位置する檻で、3間以上ある。柱間は約1.9mである。方位はE16° Sで、S B 1088の東西方向とほぼ同じである。古い時期の遺物しか出土していないが、鎌倉時代末期～室町時代初頭の掘立柱建物S B 1088と同時期に存在したと考えられる。

#### (3) 土坑

**S K 505** 長さ7.0m以上、幅約3.5m、深さ7～21cmの不整形な土坑である。土師器皿・甕、山茶碗のほか、灰釉陶器、須恵器などが出土した。

**S K 962** S E 963の南側にある長さ約2.0m、幅約1.2m、深さ34cmの長方形の土坑である。S E 963に先行する。山茶碗、土師器、須恵器が出土した。

**S K 973** 長さ約4.5m、幅約2.0m、深さ25cmの土坑である。S D 1051とS D 922、S D 940の合流点に位置する土坑で、S D 922の下から検出された。S D 1051との重複関係は不明である。複数の溝の合流点に位置することから、水の流れが対流してできた落ち込みである可能性もある。山茶碗や土師器片が出土した。

**S K 976** (第135図) 南半部が室町時代のS K 965によって掘削されているため、全体は不明であるが、長さ1.3m以上、幅約0.8m、深さ50cmの土坑である。出土遺物は小片のため図化できなかつたが、山茶碗や土師器皿があり、鎌倉時代の遺構と考えられる。

**S K 981** (第135図) 調査時は東側にあるS D 501によって掘削されているものと認識していたが、出土遺物から重複関係が逆であることが分かつた。このため東半部の形状は不明であるが、長径2.3m以上、短径2.2m以上、深さ43cmの規模である。出土遺物は、図化できなかつたが土師器甕や常滑陶器の甕などがある。

**S K 1028** (第127図) 長径約2.7m、短径約0.9m、深さ50cmの楕円形を呈し、S H 1000に重複する土坑である。土師器皿や灰釉陶器などが出土しており、平安時代末期頃の遺構と考えられる。

**S K 1035** (第135図) 長径約1.8m、短径約1.3m、深さ62cmの土坑である。S D 1032の下から検出した。土師器皿などが出土しており、鎌倉時代後半～室町時代の遺構と考えられる。

**S K 1074** (第132図) 当初、S K 1048として西半を調査したが、土層断面観察により、2つの土坑が重複していることが分かつた。このため東半の先行する土坑をS K 1073、新しい土坑をS K 1074として調査した。S K 1074の規模は長径約2.7m、短径約2.3m、深さ140cmと深い。埋土は大きく2層に分かれ、比較的短期間に埋められたと考えられる。出土遺物の大半はロクロ土師器台付皿や黒色土器であるが、下層から山茶碗が出土している。したがつて、S K 1073に捨てられた平安時代の土器が鎌倉時代に再度埋められた、もしくは流れ込んだと考えられる。

#### (4) 井戸

**S E 906** (第136図) 直径約1.5mの円形の平面形をした深さ276cmの井戸である。土師器の皿・小皿が出土しており、鎌倉時代末期頃の遺構と考えられる。

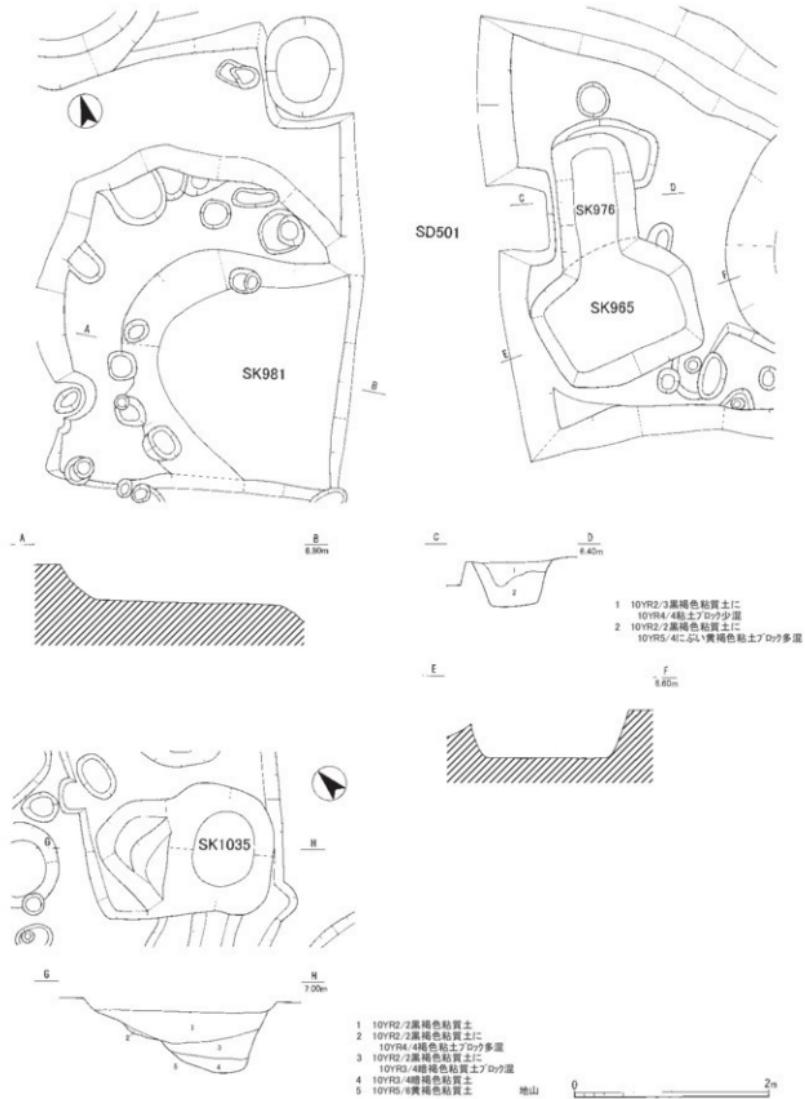
**S E 918** (第136図) 調査区北端で検出した。長径約1.6m、短径約1.5m、深さ186cmの井戸である。山茶碗や土師器鍋、須恵器が出土した。

**S E 931** (第136図) S D 922の北側の肩部に位置する井戸で、S D 922に先行する。長径約1.6m、短径約1.4m、深さ200cmの規模である。山茶碗や土師器片、曲物底板などの木製品が出土した。

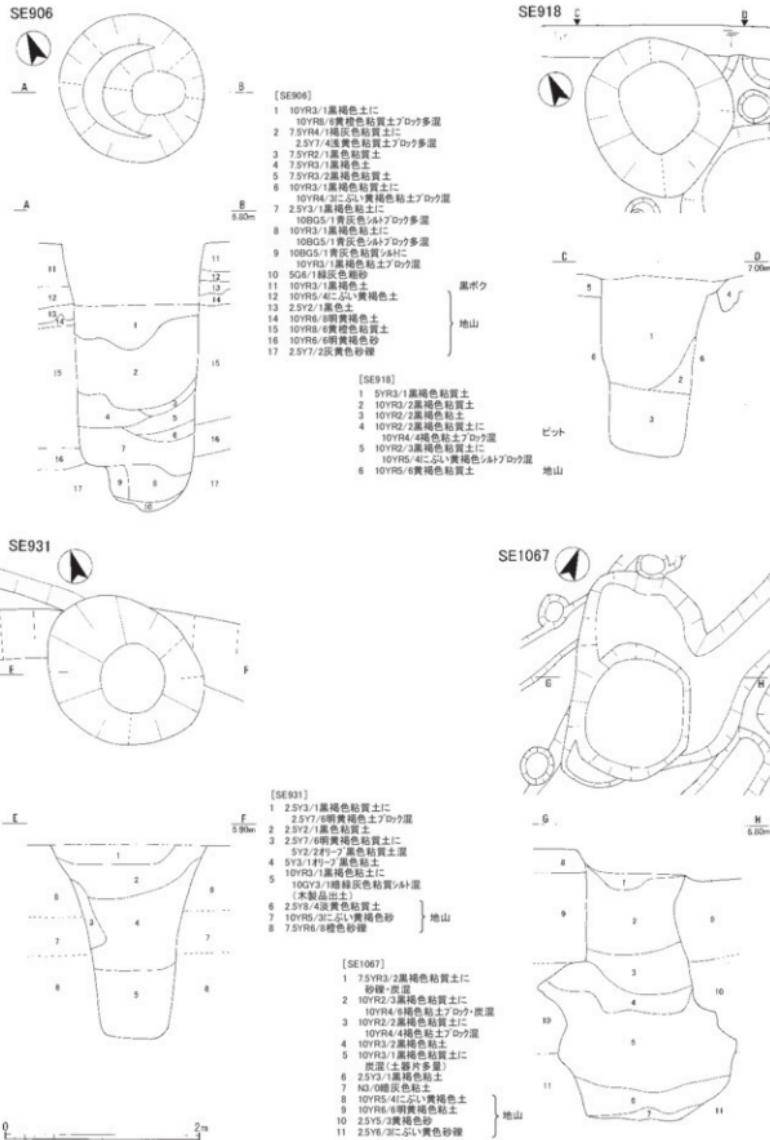
**S E 963** S D 922の溝底中央に位置し、S D 1051の中央を切るように掘削されている。長径約1.2m、短径約1.1mの井戸で、S D 922の底から深さ103cmで砂層の底を検出した。山茶碗や土師器皿が出土しており、鎌倉時代後半～末頃と考えられる。

**S E 1067** (第136図) 長径約1.3m、短径約1.2m、深さ250cmの井戸である。検出当初は、長径約2.3m、短径約1.2mの土坑と認識して半蔵したところ、南側に井戸があることが分かつた。山茶碗、土師器皿、陶器片などが出土したほか、曲物底板などの木製品が出土した。

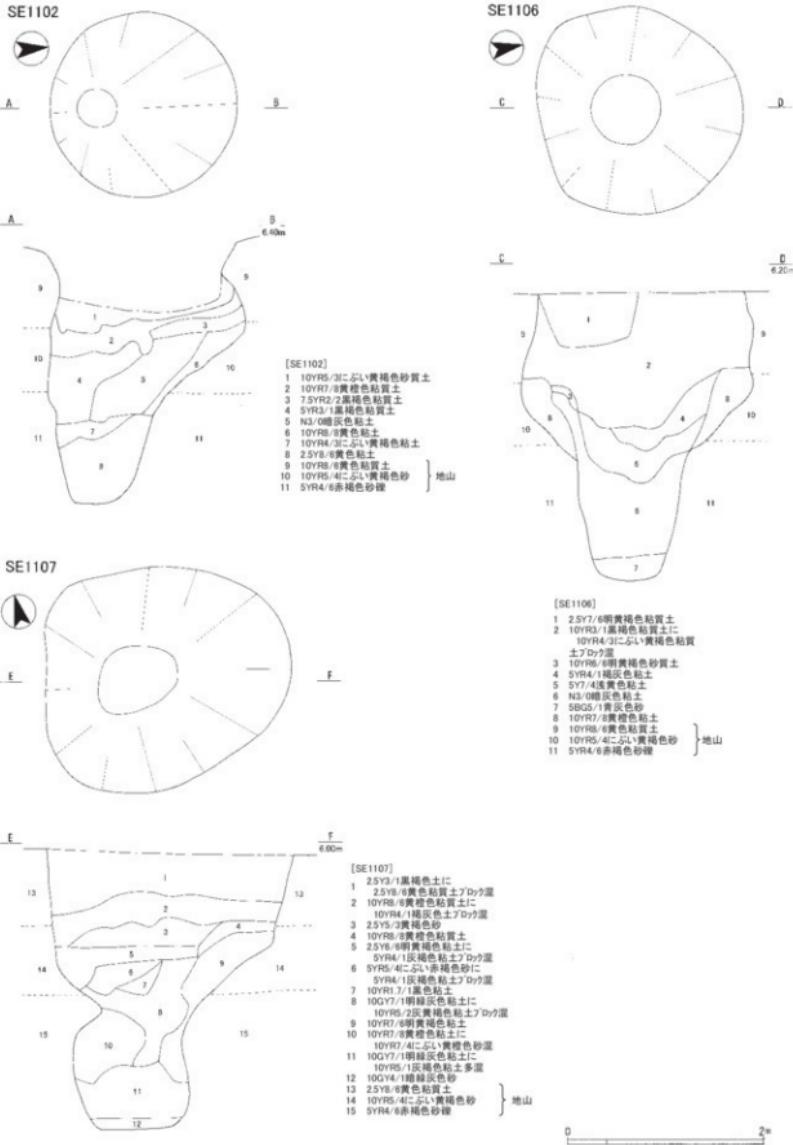
**S E 1102** (第137図) 直径約1.9m、深さ256cmの井戸である。深さ約50cmのところで砂層を確認したため、この深さが底と認識していたが、断ち割り



第135図 d地区 SK965・976・981・1035遺構図 (1 : 50)



第136図 d地区 SE906・918・931・1067遺構図 (1 : 50)



第137図 d地区 SE1102・1106・1107遺構図 (1 : 50)

の結果、井戸であることが分かった。土層観察から地山と酷似した土と黒褐色粘質土を用いて一気に埋めたようである。山茶碗や土師器皿・鍋などが出土しており、鎌倉時代末期～室町時代の遺構と考えられる。

**S E 1106** (第137図) 検出当初は直径約2.1mの半円形を平面にもつ遺構と認識していたが、南半分は地山と酷似した土を一気に埋めていることが分かり、円形の井戸であることが分かった。深さは294cmである。土師器皿・鍋、山茶碗などが出土し、鎌倉時代末期～室町時代初頭頃の遺構と考えられる。

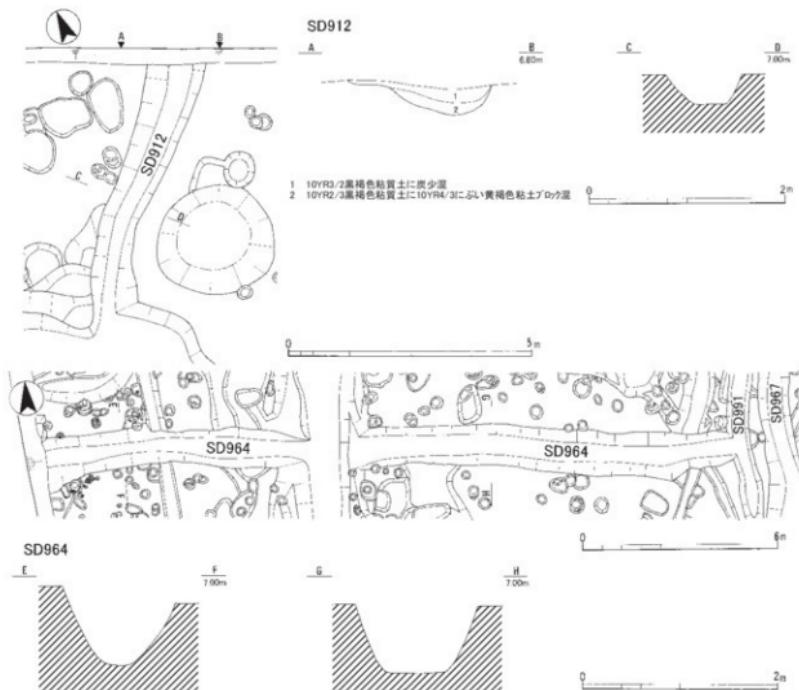
**S E 1107** (第137図) 長径約2.5m、短径約2.3m、深さ284cmの井戸である。深さ約1mで砂層を検出したが、その下は粘土層が続く。山茶碗や常滑陶器、土師器皿などが出土した。

### (5) 溝・区画溝

**S D 908** S D922の南側に位置する東西方向の溝で、S D907の下から検出した。長さ28m以上、幅1.2～2.0m、深さ30～80cmの規模である。東端がやや北側へ曲がる。土師器皿・杯・甕、灰釉陶器、山茶碗、青磁などが出土しており、平安時代末期～鎌倉時代前期頃の遺構と考えられる。

**S D 911** 長さ10.5m以上、幅約2.1m、深さ約100cmの南北方向の溝である。南端はS D922によつて掘削されている。S D911の下層に細く深い溝があり、当初同一遺構と認識していたが、調査区南端まで続くため、別の遺構であると判断した (S D1051)。土師器皿・鍋、山茶碗、黒色土器などが出土しており、鎌倉時代前半頃の遺構と考えられる。

**S D 912** (第138図) 長さ5.0m以上、幅約1.1



第138図 d地区 S D912遺構図 (1:100)・土層図・断面図 (1:50)、S D964遺構図 (1:150)・断面図 (1:50)

m、深さ31cmの比較的小規模な南北方向の溝である。検出時は南端がS K925を掘削していると判断していたが、土層断面の観察の結果、S D912がS K925によって掘削されていることが分かった。このため、出土遺物にはS K925のものと思われる土師器鍋も含まれているが、遺構の時期は、鎌倉時代前半頃と考えられる。

**S D930** 長さ12.0m以上、幅約1.2m、深さ27cmの南北方向の溝である。断面形はV字形に近い。南端はS D929によって掘削されており、その先へは続かない。土師器皿・羽釜・山茶碗などが出土地おり、鎌倉時代後半から室町時代前半頃の遺構と考えられる。

**S D932** 長さ11.0m以上、幅約1.2m、深さ22cmの比較的小規模な南北方向の溝である。南端は東へ曲がっているようで、時期が不明確であるため根拠は薄いが、後述するS D943へつながる可能性もある。後にS D929によって掘削しなおされている。小片のため図化できなかったが、山茶碗の小片が出土地した。

**S D933** 長さ10.0m以上、幅約0.6m、深さ10cmの小規模な南北方向の溝である。西側に平行するS D929によって南端の一部を掘削されている。小片のため図化できなかったが、土師器皿が出土地おり、鎌倉時代後半頃の遺構と考えられる。

**S D943** 大部分がS D929とS D940によって掘削されているため、不明な点が多いが、長さ9.8m以上、幅0.9m以上、深さ56cmの東西方向の溝である。出土遺物は須恵器片のみで、他の遺構との重複関係から鎌倉時代以前の遺構と考えられる。前述したように、S D932とつながり区画溝であった可能性もある。

**S D947** (第148図) 長さ4.5m以上、幅約0.6m、深さ9cmの浅い溝である。北端はS Z942、南端はS E1030によって掘削されており、南側に位置するS D1038と同一遺構である可能性がある。山茶碗や土師器皿が出土地おり、鎌倉時代後半～室町時代の遺構と考えられる。

**S D964** (第138図) 長さ21.0m以上、幅約1.3m、深さ66cmの東西方向の溝である。断面形は逆台形で、比較的深い。東端はS D991によって掘削され

れており、その先へは続かない。土師器や山茶碗、灰釉陶器、須恵器などが出土した。

**S D968** 調査区中央部にある細い溝群の西側に位置する溝である。全長約40mで、東西に約10mのびた東端から南へ緩やかに曲がる。幅は約0.5mで、深さは東西方向22cm、南北方向33cmである。小片のため図化できなかったが、山茶碗や土師器小片が出土地した。

**S D987** 幅約1.1m、深さ62cmの細い区画溝である。東西に7.5mほどのびた東端で、約110度の角度で南に曲がる。東西方向のところはS D908によって掘削されており、西端は不明である。出土遺物はロクロ土師器や灰釉陶器など平安時代後期の遺物が多い。位置関係からS D524と関係があった可能性がある。

**S D991** 調査区中央部にある細い溝群のひとつで、L字状に曲がる比較的短い区画溝である。規模は全長約13m、幅約0.8m、深さ18～49cmである。北端部はS D971を掘削した下層から検出された。土師器鍋・羽釜・皿、山茶碗などが出土しており、鎌倉時代後半～室町時代前半の遺構と考えられる。

**S D994** 調査区中央部にある細い溝群の中でも西側に位置する南北方向の溝である。長さ約6.2m、深さ41cmで、幅は北半部が約0.7m、南半部は約0.4mである。南半部はS D968に重複する。山茶碗が出土地おり、鎌倉時代前半頃の遺構と考えられる。

**S D998** 調査区中央部にある南北方向の溝群のなかのひとつである。長さ約28.2m、幅約0.6m、深さ18cmの南北方向にのびる浅い溝である。北端部はS D967によって掘削されている。周辺には時期差があるものの同規模の溝が同一方向にのびている。土師器小片や山茶碗片が出土地していることから、平安時代末期頃の遺構と考えられる。

**S D1023** 調査区中央部の細い溝群のひとつで、S D967に先行する溝である。北端と南端がS D967によって掘削されている。長さ約18.0m、幅0.6～1.0m、深さ22cmである。小片のため図化できなかったが、山茶碗や土師器羽釜・皿などが出土した。

**S D1038** (第148図) 長さ3.7m以上、幅約0.5m、深さ11cmの小規模な溝である。S D1032の下層から検出された。北端はS E1030によって掘削され

ているが、さらに北側に位置するS D947と同一遺構の可能性がある。土師器の小皿や鍋が出土しており、鎌倉時代後半～室町時代の遺構と考えられる。

**S D1051** 調査区北端から南端まで続く南北方向の溝である。当初 S D911下層として調査していたが、調査区南端まで続くため、別遺構と位置づけた。規模は長さ60.0m以上、幅0.5～1.1m、深さ55cmで、断面形はV字か逆台形である。出土遺物は山茶碗が大半で、土師器の甕や皿のほか瓦などもあり、鎌倉時代前半頃の遺構と考えられる。

#### (6) 不明遺構

**S Z1003** 調査区中央部に位置する不整形な遺構である。調査時は複数の溝や落ち込みからなる遺構と認識していたが、埋土が酷似していることから、ここでは一つの性格不明遺構として報告する。山茶碗や土師器皿、須恵器などが多数出土しており、擾乱である可能性も否定できないが、鎌倉時代以降の所産であろう。S Z1003の下からはS K1006・1007・1009・1015が検出された。

#### e 室町時代の遺構

本調査区の中で、最も遺構の多い時期であり、調

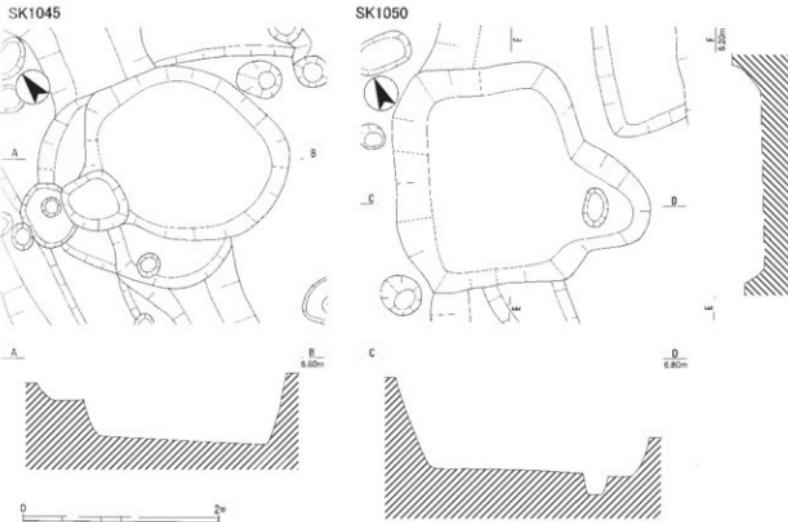
査区の北半部に集中する。4ヶ所の区画溝を確認し、他にも多数の溝や井戸、土坑などを検出した。

#### (1) 土坑

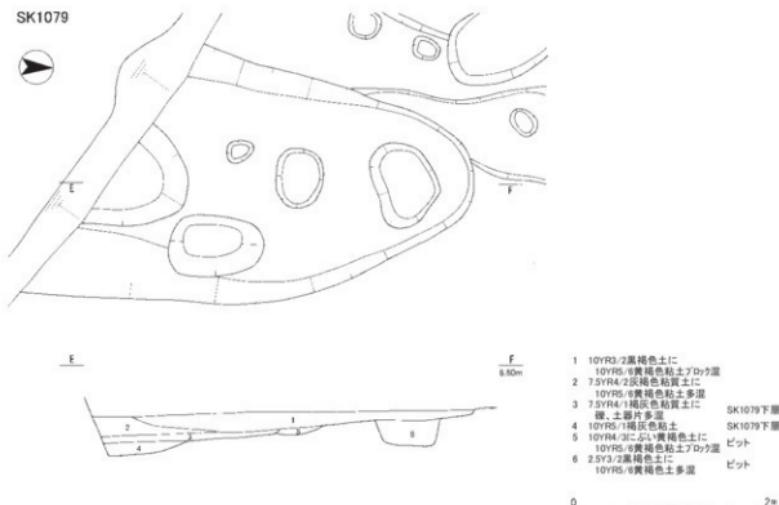
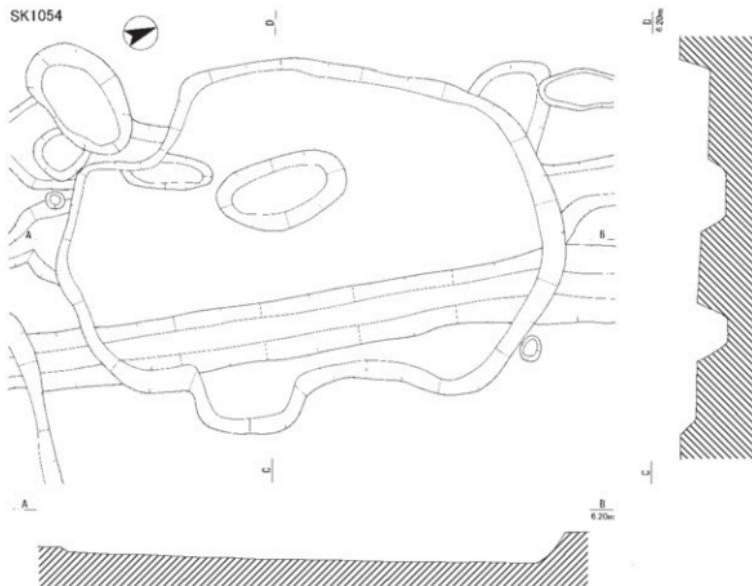
**S K913** S D20に重複し、S D19に先行する土坑である。この2条の溝の重複関係を調べるために行った断面観察から検出された遺構である。記録をとっていないため、詳細は不明であるが、規模は長径4.8m以上、短径1.4m以上である。山茶碗や土師器片が出土しているが、溝との重複関係から室町時代頃の遺構と考えられる。

**S K925・927** 調査区北部中央にある区画地に位置する遺構で、二つの土坑が重複していることが分かった。先行するものがS K927であるが、大部分がS K925によって掘削されている。規模はS K925が長径約6.7m、短径約3.5m、深さ62cmで、S K927は長径3.5m以上、短径1.2m以上、深さ47cm以上である。出土遺物からS K925は室町時代後期、S K927は室町時代前期の遺構と考えられる。

**S K965** (第135図) 長径約1.7m、短径約1.3m、深さ50cmの方形土坑で、S K976に重複する。山茶碗や土師器皿などが出土しており、室町時代の



第139図 d地区 S K1045・1050遺構図 (1 : 50)



第140図 d地区 SK1054・1079遺構図 (1:50)

遺構と思われる。

**S K 1045** (第139図) 長径約2.6m、短径約2.2m、深さ17~75cmの楕円形土坑である。S D 967やS D 1023に重複する。山茶碗や土師器鍋・皿、陶器などが出土した。室町時代後期の遺構と考えられる。

**S K 1050** (第139図) 長径約2.2m、短径約1.9m、深さ93cmの深い方形土坑である。土師器羽釜が出土しており、室町時代前期の遺構と考えられる。

**S K 1054** (第140図) 長径約5.2m、短径約3.8m、深さ32cmの大きな土坑である。S D 1047・1051に重複する。土師器皿・鍋・羽釜、鉄製品などが出土した。

**S K 1079** (第140図) 調査区南端に位置するため、全体は不明であるが長径3.5m以上、短径2.7m、深さ8~42cmの土坑である。下層には直径5~10cm大の礫とともに、山茶碗や土師器羽釜の破片が多量に含まれていた。上層からは土師器鍋や綠釉陶器、灰釉陶器も出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

## (2) 井戸

**S E 909** (第141図) 長径約2.4m、短径約2.2m、深さ316cmの井戸である。曲物や井戸側材は出土していないが、上層の断面観察から、深さ約2.5mのところで井戸側材の腐植痕跡と思われる土が確認された(6層)。山茶碗や土師器皿・培壟、常滑陶器甕などが出土地おり、室町時代の遺構と考えられる。

**S E 979** (第141図) 長径約2.6m、短径約2.5m、深さ268cmの井戸である。S D 967・971を掘削した下層から検出した。埋土の状況から比較的の時間をかけて埋没したようである。土師器皿・鍋や山茶碗、常滑陶器甕などが出土地おり、室町時代の遺構と考えられる。

**S E 1030** (第142図) 長径約2.9m、短径約2.8m、深さ328cmの井戸である。埋土には直径15~20cm大の礫が多量に含まれていたが、石組みではなく、廐棄時に投げ入れたものと考えられる。また、埋土の状況から一気に埋められたようである。信楽陶器甕や土師器甕・鍋・皿などが出土地。室町時代前期の遺構と考えられる。

**S E 1114** (第142図) 長径約0.9m、短径約0.8m、深さ260cmの井戸である。室町時代の他の井戸

と比べると小規模な井戸である。深さ約40cm以下から直径20cm大の礫を多く含む砂礫層を検出した。この礫の間に挟まるように土師器羽釜や鍋の破片が多数出土した。断ち割り調査を行ったところ、底面が南側へ偏っていたため、深さ186cmまでしか断面実測することができなかつたが、全掘した結果、深さが約260cmであることが分かった。出土遺物から室町時代後半頃の遺構と考えられる。

## (3) 溝

### 1 区画溝 (第143~147図)

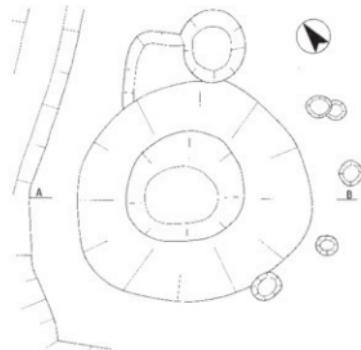
d地区で確認された区画溝は調査区の北半部に位置する。区画地はS D 19・20、S D 10・910、S D 929、S D 922から形成される4つが確認された。いずれの区画溝も室町時代の遺構と考えられるが、出土遺物は山茶碗を中心とする鎌倉時代のものが主体であることから、鎌倉時代から区画地はあったと考えられる。なお、c地区につながる区画溝については、c地区的章を参照されたい。

**S D 910** S D 10 (c地区参照)とともに区画地を形成する区画溝である。南北方向に約7.3mのびた南端で約110度の角度で西へ曲がる。ただし、西端はS K 925などの土坑によって掘削されており、S D 10も東端がやや南へ曲がっていることから、S D 10とS D 910の接点はない。南北方向の規模は幅約1.6m、深さ60cmで、東西方向は幅約0.8m、深さ25cmと南北のほうが規模が大きい。出土遺物の多くは山茶碗であるが、土師器甕・鍋・羽釜・皿、土錐などが出土しており、室町時代後期の遺構と考えられる。

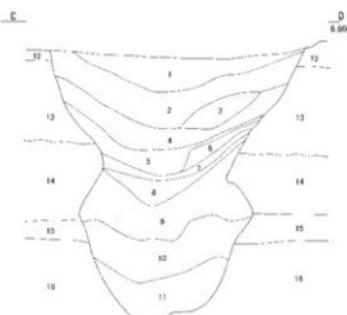
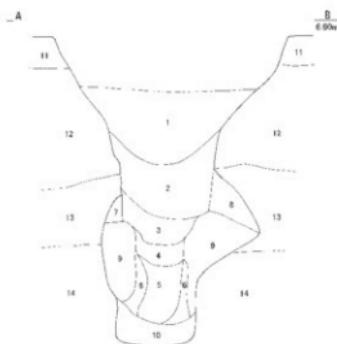
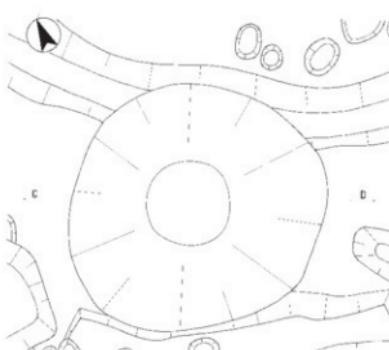
**S D 922** 調査区内で最も大きな区画溝で、幅約3.3m、深さ約90cmの規模である。東西に約31.5mのびた東端で、南へ約95度の角度で曲がる。しかし、南北には長さ約17.0mしかのびず、その先は前述したS D 1051がさらに南へのびるだけである。

出土遺物は山茶碗が主体であるが、土師器鍋・皿、瀬戸美濃陶器、常滑陶器、白磁、土錐、紡錘車、五輪塔、刀子など多数の遺物が出土しており、室町時代だけでなく江戸時代の遺物も数点含まれる。しかし、最下層からは山茶碗や黒色土器など鎌倉時代前半以前の遺物のみが出土している。したがって、鎌倉時代に掘削が開始され、室町時代から戦国時代にかけて機能し、江戸時代に埋没したと考えられる。

SE909



SE979



- 1 10YR3/1 黒褐色土に10YR8/6黄橙色粘質土ブロック多混  
2 7.5YR4/1 黄褐色粘質土に10YR8/6黄橙色粘質土ブロック多混  
3 2.5YR4/1 黄褐色粘土に10YR8/6黄橙色粘質土ブロック多混  
4 5YR4/1 黄褐色粘土  
5 SPB3/1 黄褐色粘土  
6 7.5YR8/0 黄褐色粘土  
7 2.5YR8/4 淡黄色砂  
8 2.5YR8/4 淡黄色砂  
9 10BG5/1 黄褐色粘土  
10 SPB3/1 淡黄色砂  
11 10YR3/1 黑褐色土  
12 10YR8/6 黄褐色粘土  
13 10YR8/6 黄褐色砂  
14 2.5YR8/2 淡黄色砂

地山(黒ボク)  
地山

- 1 10YR3/2 黑褐色土に裸、土器混  
2 7.5YR3/2 黑褐色粘質土に10YR5/4にぶい黄褐色粘質土ブロック・裸混  
3 7.5YR3/2 黑褐色粘質土に裸混  
4 2.5YR4/1 黄褐色粘土に10YR8/4にぶい黄褐色粘土ブロック混  
5 10YR8/4にぶい黄褐色粘土  
6 10YR3/1 黑褐色粘質土と10YR4/3にぶい黄褐色粘土の互層  
7 10YR3/2 黑褐色土に炭化物混  
8 2.5YR8/4 淡黄色砂  
9 10YR2/2 黑褐色粘土と2.5YR/4淡黄色粘土の互層  
10 M3/0 暗灰色粘土に2.5GY8/1灰白色粘土ブロック混  
11 M2/0 黑褐色粘土  
12 10YR2/1 黑褐色  
13 10YR8/6 黄褐色粘土  
14 10YR5/3にぶい黄褐色砂  
15 5YR4/4にぶい赤褐色砂  
16 7.5YR8/8 黄褐色砂

地山(黒ボク)  
地山

0 2m

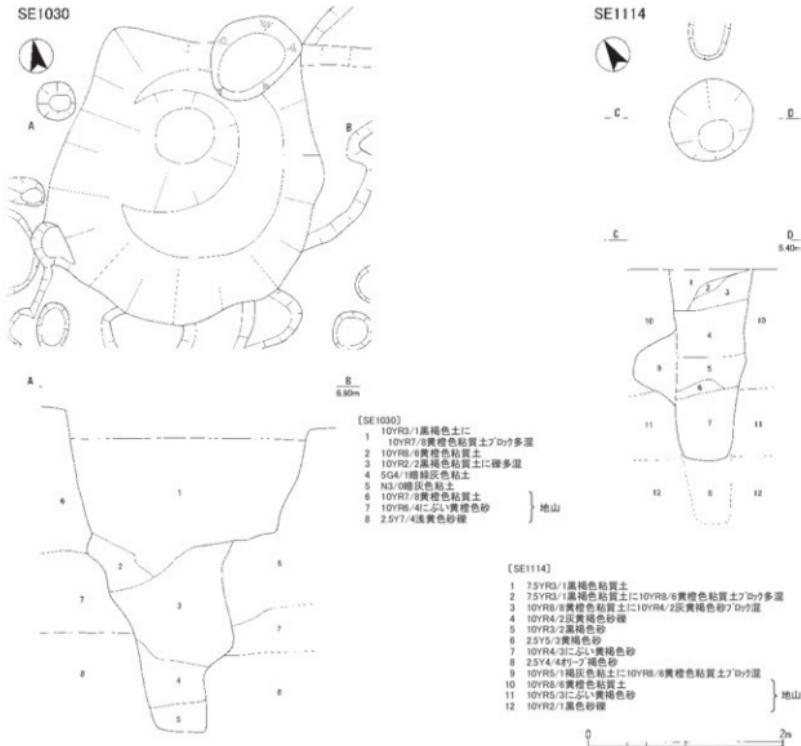
第141図 d地区 SE909・979遺構図 (1 : 50)

**S D 929** 調査区北東部に位置する区画溝である。南北に約13.5mのびた南端で、東へほぼ直角に曲がる。また、南北方向の部分は鎌倉時代の溝 S D 932 とほぼ同一箇所を掘削している。規模は幅1.6~2.7m、深さ約60cmで、南北方向と東西方向で大差はない。断面形状はU字形を呈する。山茶碗や土師器鍋・羽釜などが出土した。

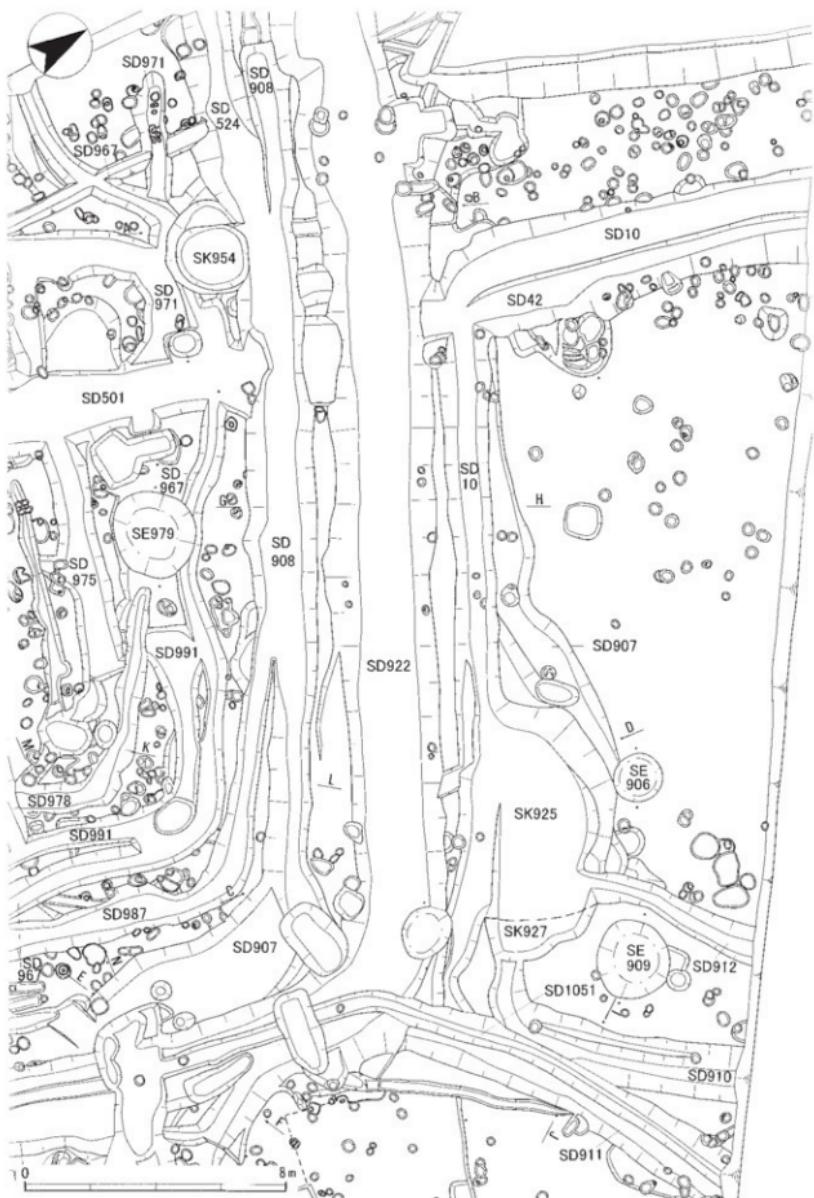
**S D 940** S D 929の南側に位置する東西方向の溝である。長さ18.0m以上、幅約2.8m、深さ約80cmで、断面形状はU字形を呈する。最下層からは山茶碗や須恵器など鎌倉時代以前の遺物のみが出土しているが、それより上層からは常滑陶器の甕など室町時代の遺物が出土したことから、少なくとも鎌倉

時代と室町時代の2度掘削されたと考えられる。また、西端はS D 922によって掘削されており、それより西側へは続かず、S D 929によって形成されている区画と関係がある可能性がある。

**S D 967** 調査区中央部に位置する溝群の中で最も新しい溝で、多数の遺構に重複する区画溝である。東西方向に約25.0mのびた東端で南に曲がり、さらに約45.5mのびる。幅は約0.8mとほぼ均一であるが、深さは東西方向で約53cm、南北方向で13~37cmと東西方向のほうが深い。出土遺物は山茶碗やロクロ土師器など鎌倉時代以前の遺物が主体をしめるが、常滑陶器甕や瀬戸美濃陶器甕、土師器鍋・羽釜などもあり、室町時代後期の遺構と考えられる。



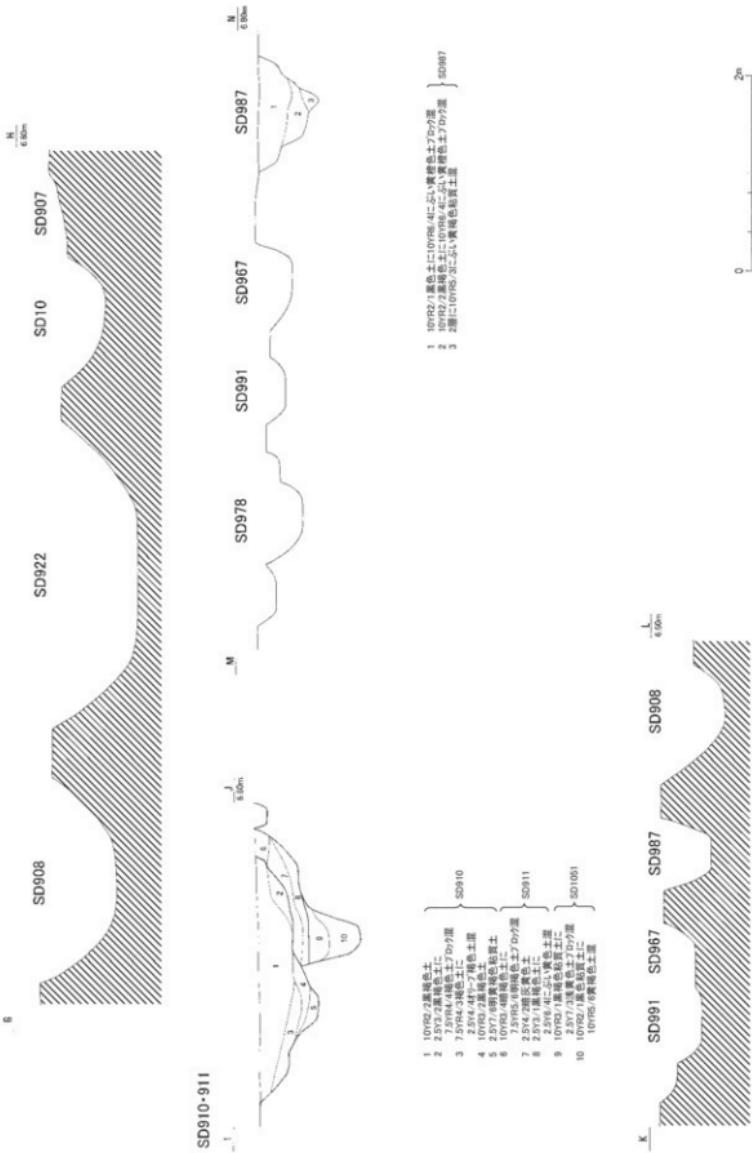
第142図 d地区 SE1030・1114遺構図 (1 : 50)



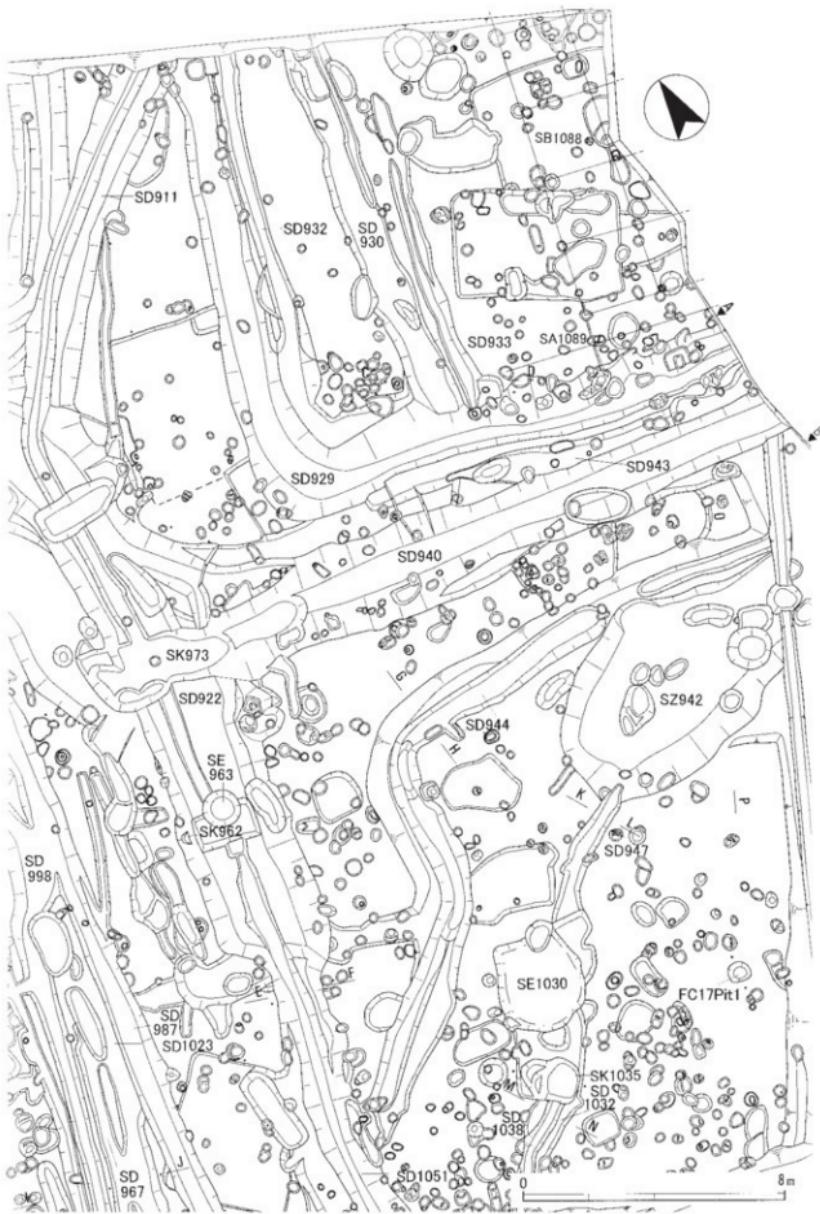
第143図 d地区 北部溝造構図 (1:150)



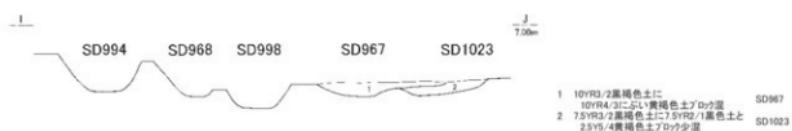
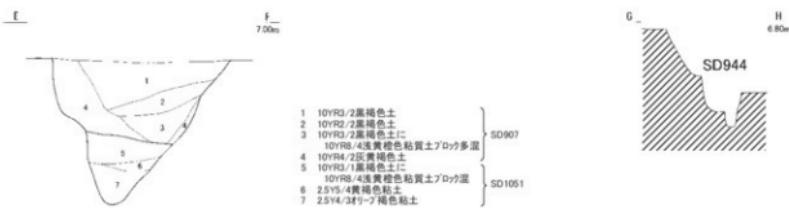
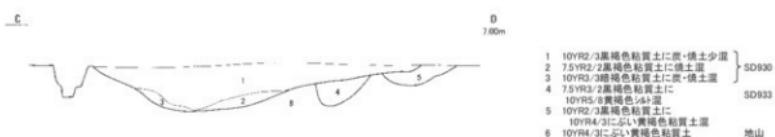
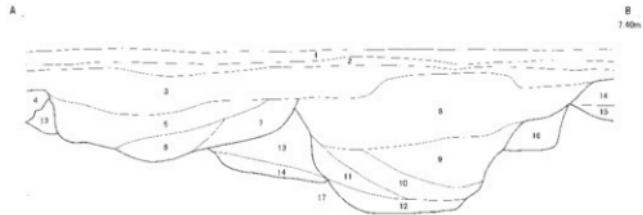
第144図 d 地区 北部溝土層図① (1 : 50) 参照



第145図 d地区 北部溝土層図② (1:50) ※第143図参照



第146図 d地区 北東部溝造構図 (1 : 150)



第147図 d地区 北東部溝土層図・断面図（1:40）※第146図参照

## 2 その他の溝

**S D 944** S D940の南側に位置する溝である。この溝付近は遺構の検出が不明瞭であったため、一段下げる再検出を行っている。S D944は東西方向に約12.6mのびた西端で南に曲がるが、平面形がいびつであり、規模も幅約1.0m、深さ約25cmと小規模であることから区画溝であると断言できない。出土遺物は小片のため図化できなかったが、山茶碗や土師器羽釜・鍋などがある。

**S D 953** S D922とS D940をつなぐように掘削された溝である。長さ約4.0m、幅約1.4m、深さ44cmで小規模な溝である。山茶碗や常滑陶器の甕など、鎌倉時代の遺物しか出土していないが、S D922やS D940との関係から室町時代から江戸時代の遺構と考えられる。

**S D 1032 (第148図)** 長さ約6.2m、幅0.8~2.1m、深さ14cmの浅い遺構である。北半部の幅の広い部分は溝ではなく、落ち込み状の別遺構であるかもしない。この遺構の下層からSK1035やSD1038が検出された。土師器皿・甕・鍋、常滑陶器鉢などが出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

### (4) 落ち込み遺構

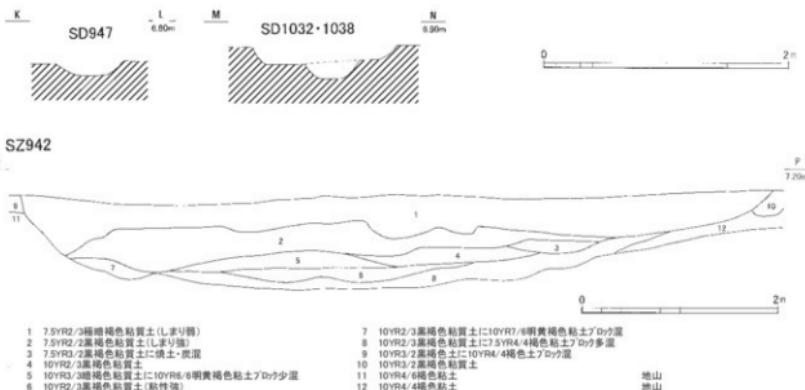
**S Z 942 (第148図)** 調査区東部で検出した長径8.8m以上、短径約5.2m、深さ46cmの落ち込み状遺構である。この遺構の周辺は遺構の検出が不明瞭

であったため、一段下げる再検出を行っている。そのため、実際は平面図よりもさらに大きな落ち込みであった可能性が高い。土層断面の観察から焼土や炭を含む層もあり、自然堆積した遺構ではないと思われる。出土遺物は山茶碗や土師器皿など鎌倉時代の遺物が主体であるが、瀬戸美濃陶器、常滑陶器窓、土師器茶釜なども出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

## f 江戸時代の遺構

### (1) 溝

**S D 907 (第143図)** 調査区北側に広がる東西方向の溝で、S D922をはじめ、東西方向のS D10やS D908、S K925、S K927などの多数の遺構に重複する溝である。長さ約44.5m、幅2.5~5.4m、深さ10~60cmと場所によって規模には差があり、多数の遺構が埋没した後にできた崖地に堆積したものと考えられる。出土遺物は鎌倉時代の土師器皿や山茶碗が大半であるが、土師器鍋・羽釜、常滑陶器窓・鉢・甕、瀬戸美濃陶器、青磁、灰釉陶器、土鍤、瓦、五輪塔、温石、砥石、銅製の切羽台など多数の遺物が出土している。また溝の南肩部からは土師器皿や山茶碗が重なって出土した。江戸時代に埋没したと考えられるSD922よりも新しいことから、江戸時代の遺構と考えられる。



第148図 d地区 S D947・1032・1038断面図 (1:40)、S Z942土層図 (1:50) 奈第146図参照

## 2 遺物 (1448~2818)

### a 古墳時代の遺構出土遺物

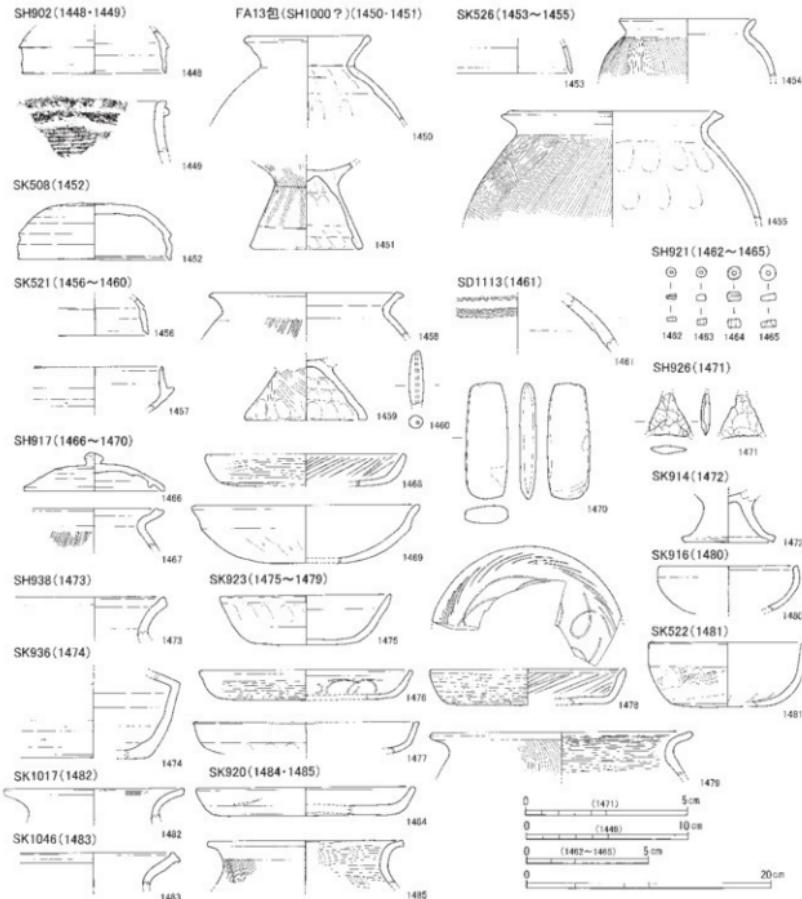
**S H902 (1448・1449)** 1448は須恵器杯蓋である。天井部は丸く、天井部と口縁部とをわける稜はやや甘く、口縁端部は面をなす。田辺昭三氏による陶邑窯須恵器編年<sup>13)</sup>（以下、田辺編年と略す）のTK23～TK47型式に相当する。1449は縄文土器深

鉢である。貼付突帯があり、それ以下は二枚貝による条痕がある。

### F A13包含層 (SH1000か) (1450・1451)

1450は土師器蓋である。口縁部は直線的で、端部は肥厚する。体部外面はナデ調整、内面はユビオサエ調整が施される。1451は土師器台付甕の台部である。端部は内面に折り返される。

**S K508 (1452)** 1452は須恵器杯蓋である。天



第149図 d地区 出土遺物実測図1 (1:4) 1449は1:3、1462～1465は1:2、1471は2:3

井部と口縁部とをわける棱は不明瞭で、回線状になっている。口縁端部には沈線のような段が巡る。口径は12.4cmである。田辺編年MT15～TK10型式に相当するだろうか。

**S K521** (1456～1460) 1456は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部とをわける棱は突出せず、沈線が巡る程度である。口縁端部は面をもつ。田辺編年MT15～TK10型式に相当するだろうか。1457は須恵器杯身である。立ち上がりはやや内傾する程度である。1458・1459は土師器台付甕である。1458は口縁端部に明瞭な肥厚した面をもち、口縁部はほぼ直線的にのびる。赤塚次郎氏による分類<sup>3)</sup>（以下、赤塚分類と略す）のD類新段階に相当する。1459の台部は端部の折り返しではなく、内側に少し肥厚する程度である。

**S K526** (1453～1455) 1453は須恵器杯蓋である。口縁端部は不明瞭な棱がつく。1454・1455は土師器台付甕である。1455は口縁端部に明瞭な肥厚した面をもち、口縁部はほぼ直線的にのびる。赤塚分類のD類新段階に相当する。

**S D1113** (1461) 1461は弥生土器壺の体部片である。肩部と思われ、波状文が4条巡る。波状文より下は工具ナデが施される。

#### b 飛鳥・奈良時代の遺構出土遺物

**S H917** (1466～1470) 1466は須恵器杯蓋である。天井部に宝珠つまみがつき、内面のかえりは小さく、口縁端部より突出することはない。田辺編年TK217型式に相当する。1467は土師器台付甕である。口縁端部に明瞭な肥厚した面をもち、口縁部はほぼ直線的にのびる。赤塚分類のD類新段階に相当する。1468は土師器杯である。平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がる。外面はミガキ調整され、内面には放射状暗文が施される。1469は土師器碗である。底部は丸く、口縁部はヨコナデにより外反する。外面はケズリ後ナデ調整される。1470は石斧である。長さ9.4cm、幅3.5cmである。

**S H921** (1462～1465) 1462～1465は白玉である。直径4～6.5mm、高さ2～7mmで、1mm程度の孔があけられる。いずれも断面は台形に近い。

**S H926** (1471) 1471は石礫である。基部は直線的で、平基式である。先端部は欠損しているが、

残存長1.3cm、幅1.1cmである。

**S H938** (1473) 1473は土師器甕である。口縁部は外反し、端部内面に回線が巡る。

**S K522** (1481) 1481は土師器碗である。外面上はユビオサエ後タテハケを施し、さらにナデ調整を行っている。内面には工具痕がみられる。

**S K914** (1472) 1472は土師器台付甕の脚部である。脚部は外反して、内外面ともにナデ・ヨコナデ調整される。

**S K916** (1480) 1480は土師器碗である。内外面ともにヨコナデ・ナデ調整される。棱線はほとんどなく、口縁部は内傾する。

**S K920** (1484・1485) 1484は土師器皿である。平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がる。内面はナデ調整、底部外面はケズリが施される。斎宮跡出土土器の編年<sup>3)</sup>（以下、斎宮編年と略す）の第Ⅰ期第2～3段階に併行するだろうか。

**S K923** (1475～1479) 1475・1478は土師器杯である。1475は器高が高く、外面上は幅広くヨコナデされ、ユビオサエ・ナデ調整される。1478は浅く、平らな底部から屈曲して口縁部が上方に立ち上がるものである。外面はミガキが丁寧に施され、内面には放射状暗文と螺旋状暗文が施される。いずれも斎宮編年第Ⅰ期第2～3段階に併行するだろうか。1476・1477は土師器皿である。1476は外面にミガキ調整、内面に螺旋状暗文が施される。これらも同時期のものであろう。

**S K936** (1474) 1474は須恵器瓶の体部小片で、肩部はするどく屈曲する。平城宮の土器の大別の平城宮II<sup>4)</sup>に併行すると考えられる。

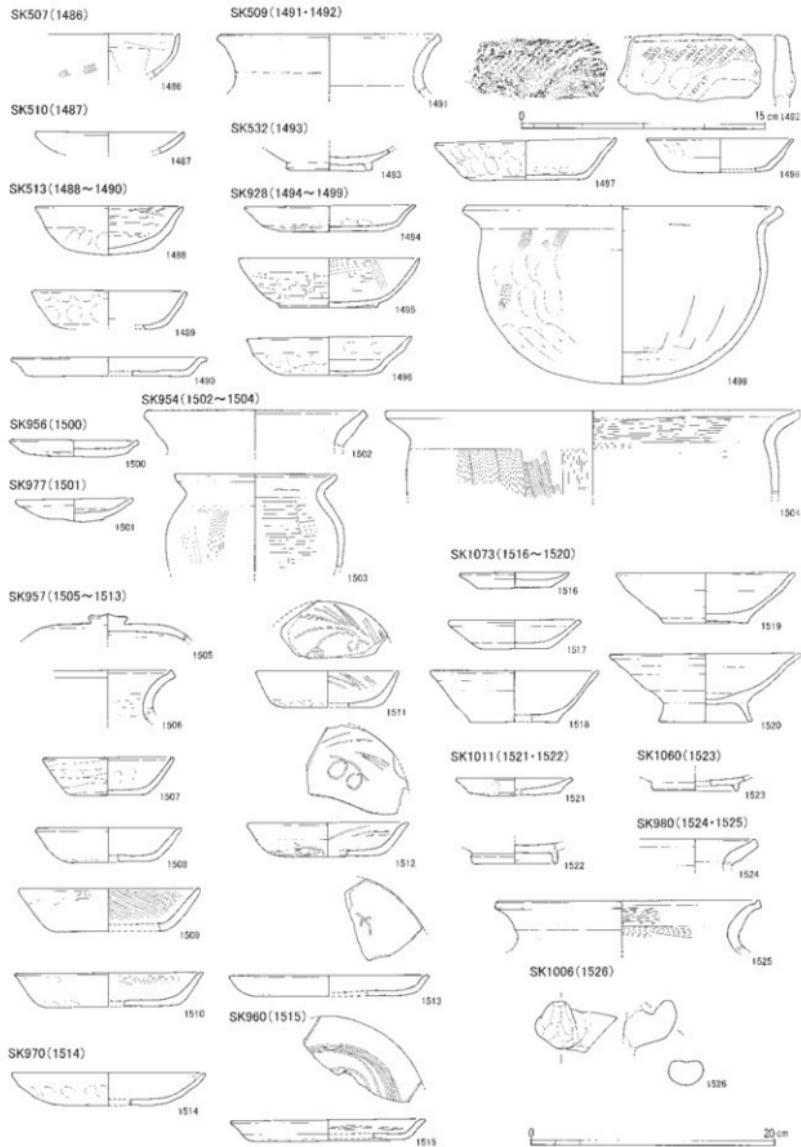
**S K1017** (1482) 1482は土師器甕である。口縁部は外反して大きく開く。内面はハケ後ヨコナデされる。

**S K1046** (1483) 1483は土師器甕である。口縁端部は両側に扯張される。

#### c 平安時代前期～後期の遺構出土遺物

**S K507** (1486) 1486は土師器杯小片である。外面上はハケ調整され、内面には工具痕がみられる。

**S K509** (1491・1492) 1491は土師器甕である。口縁部はゆるく外反する。1492は繩文土器深鉢である。貼付け隆帯が施され、その上から右上がりの縄



第150図 d地区 出土遺物実測図2 (1:4) 1492は1:3

文が施される。縄文時代中期のものと思われる。

**S K 510** (1487) 1487はクロ土師器皿である。斎宮編年第III期に併行する。

**S K 513** (1488～1490) 1488・1489は土師器杯である。1488は器壁が厚く、椀に近い。内面はミガキが施され、外面はナデ・ユビオサエ調整される。1489は平らな底部から屈曲して口縁部が開くもので、外面はユビオサエ後ナデ調整される。1490は土師器皿で、口縁端部は強く外反する。内外面ともにナデ調整される。

**S K 532** (1493) 1493は灰釉陶器皿である。やや外側へ開く高台をもち、内端で接地する。橘崎彰一・斎藤孝正氏による猿投窯灰釉陶器編年<sup>5)</sup>（以下、橘崎・斎藤編年と略す）の折戸53号窯式に相当するだろうか。

**S K 928** (1494～1499) 1494・1496～1498は土師器杯である。1494は平らな底部からやや緩やかに口縁部が開く。底部内外面はユビオサエ後ナデ調整される。1496～1498は平らな底部から屈曲して口縁部が開く。いずれも斎宮編年第II期第3～4段階に併行すると想われる。1495は黒色土器椀である。器高は4.0cmと低く、扁平である。外面はケズリが施され、内面はミガキ調整される。扁平な高台がつく。大川勝宏氏による斎宮跡出土の黒色土器編年<sup>6)</sup>（以下、大川編年と略す）の平安時代III～IV期に併行するだろうか。

1499は土師器甕である。体部は半球形で、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は内側へ肥厚する。底部外面はケズリが施され、内面は工具ナデ調整される。

**S K 954** (1502～1504) 1502～1504は土師器甕である。1502・1504は口縁端部に面をもち、頸部の屈曲は少ないものである。

**S K 956** (1500) 1500は土師器小皿である。比較的厚く平らな底部から短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。伊藤裕偉氏による雲出島貴遺跡出土土器の編年<sup>7)</sup>（以下、島貴編年と略す）のF2期に併行するだろう。

**S K 957** (1505～1513) 1505は須恵器蓋である。天井部中央に扁平なつまみがつく。1507～1512は土師器杯である。いずれも口縁部は直線的である。1507のみ外面にケズリが施される。1509は内外面に、1510は内面のみ、1512は外面のみにヘラミガキが施

される。1511・1512は放射状暗文及び螺旋状暗文がみられる。斎宮編年第II期第1～2段階に併行するだろうか。1513は土師器皿である。内面に螺旋状暗文がみられる。

**S K 960** (1515) 1515は土師器皿である。平らな底部から屈曲して、口縁部が立ち上がり、やや外反する。内面には螺旋状暗文がみられる。斎宮編年第I期第3段階～第II期第1段階頃に併行するだろうか。

**S K 970** (1514) 1514は土師器皿である。全体的に断面弧状を呈し、口縁端部はやや弱い面をもつ。島貴編年F2期に併行する。

**S K 977** (1501) 1501はクロ土師器小皿である。口縁端部の外反はほとんどなく、直線的にのびる。斎宮編年第III期に併行する。

**S K 980** (1524・1525) 1524・1525は土師器甕である。いずれも口縁部外面に面をもち、1525は内面にヨコハケが施される。

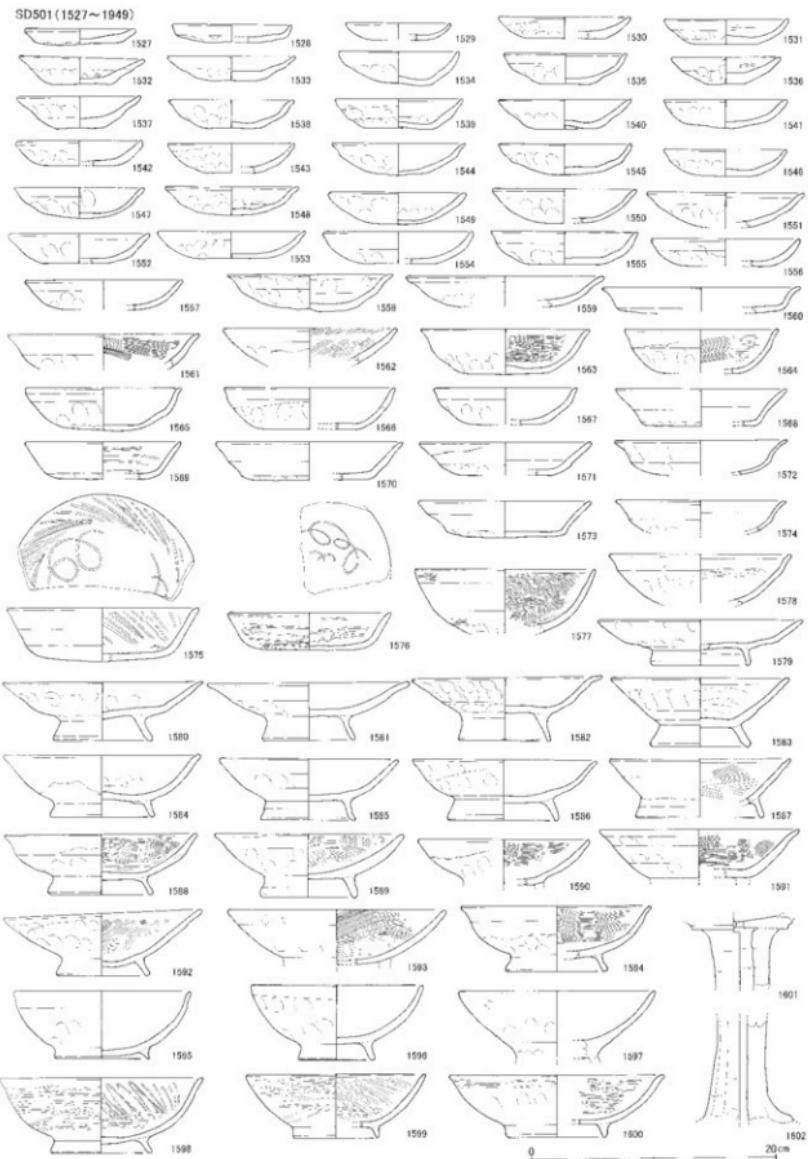
**S K 1006** (1526) 1526は土師器把手である。断面形は上面がややへこんだ楕円形に近い。

**S K 1011** (1521・1522) 1521は土師器小皿である。平らな底部から短い口縁部がつくりだされたもので、島貴編年F1期～2期古相に併行すると考えられる。1522は灰釉陶器椀である。内擣する三日月高台をもち、黒竜90号窯式に相当する。

**S K 1060** (1523) 1523は灰釉陶器椀である。低くやや内擣する高台をもつ。

**S K 1073** (1516～1520) すべてクロ土師器である。1516・1517は小皿で、1516は非常に浅く、1517は直線的にのびる口縁をもつ。1518・1519は皿、1520は台付皿で、いずれもやや深めのものである。斎宮編年第III期第1段階に併行すると考えられる。

**S D 501** (1527～1548) 1527～1548は土師器小皿である。1527は平らな底部から屈曲して口縁部が開くもので、島貴編年F2期に併行する。1528は短い口縁部が強く屈曲して作り出されるもので、島貴編年F1期に併行する。1531～1540は平らな底部から屈曲して直線的、あるいは内擣する口縁部がのびるやや深めの小皿である。内外面の調整はユビオサエ・ナデのものが大半だが、内面に工具ナデ調整されるものもある。島貴編年F1～2期に併行する。



第151図 d地区 出土遺物実測図3 (1:4)

1542は器壁が厚く、口縁端部に面をもつ。1543～1548はほぼ丸底で、全体の断面が弧状を呈するもので、口縁部がヨコナデにより外反するものもある。島貴編年F 1期に併行するだろうか。

1549～1562は土師器皿である。1549～1551は丸底のもので、島貴編年F 2期に併行する。1552～1557は平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、島貴編年F 3期に併行すると思われる。1560は平らな底部から口縁部が強く屈曲、外反してのびる。

1563～1576は土師器杯である。1563～1567は口縁部が内彎し、椀に近い形状をしており、1563・1564は内面にハケ調整される。1568～1576は平らな底部から屈曲して口縁部が直線的にのびるが、外反するものもある。1568・1570は斎宮編年第二期第1～2段階に併行すると思われる。1569・1576はミガキ調整され、1575には放射状暗文と螺旋状暗文、1576には螺旋状暗文がみられる。いずれも口縁端部は丸くおさめられる。斎宮編年第二期第1～3段階頃に併行するだろうか。1572・1574は器壁が薄く、口縁部は強く外反する。斎宮編年第二期第3～4段階に併行する。

1577・1578・1594～1596は土師器椀で、1594～1596には高台がつく。

1579～1593は台付皿である。口縁部が椀状に内彎するものと、直線的にのびるものがあり、外方へ開く台部をもつ。皿部のユビオサエが顕著なものが多く、1587～1593の内面はハケ調整される。斎宮編年第三期に併行する。

1597～1600は黒色土器椀である。1597はロクロを使って成形された黒色土器で、珍しいものである。高台が剥離している。1598～1600は内外面ともに丁寧なミガキが施され、ケズリはみられない。

1601はロクロ土師器の高杯で、脚部の断面は円形を呈する。1602は土師器高杯の脚部で、ケズリによつて面取りされている。

1603～1609は土師器台付小皿である。1603はやや深い皿部のものであるが、大半は扁平な浅い皿部をもつ。台部は外へ開く高いもので、斎宮編年第三期に併行する。

1610～1622はロクロ土師器台付小皿である。皿部は非常に扁平で、ほとんど立ち上がらないものもある

る。口径は10cm前後のものが多いが、中には12cm台のものもある。斎宮編年第三期に併行する。

1623～1632はいわゆる柱状高台をもつロクロ土師器小皿である。斎宮編年第三期第2～3段階に併行すると思われる。

1633～1687はロクロ土師器小皿である。口径は8.0～11.4cmのものがあり、9.5～10cm台のものが多い。1633～1643は口縁部が内彎するもので、そのうち1633～1641は底部から一度屈曲をもって口縁部が開く。口縁端部に向かって器壁が薄くなるものが多い。斎宮編年第三期第2段階に併行するだろうか。1641は非常に扁平な小皿である。1645～1678は口縁部がほぼ直線的に開くもので、口縁端部が肥厚するものもある。1680～1687は口縁端部が外反するものである。

1688～1733・1735はロクロ土師器皿である。1688～1691は口径が11.6～11.8cmで小型だが、1691はやや深めのものである。1692～1711は口径12.3～13.8cmの中型のもので、1692・1693のように深めのものもある。また1712～1725は口径14.0～16.6cmの大型のものである。いずれも口縁端部が外反するものは少なく、直線的に開くものが大半を占める。1729は内面に「×」の線刻があり、1730は底部に焼成前穿孔がある。

1734・1736・1738・1743～1785はロクロ土師器台付皿である。口径が14.4～15.5cm程度の中型のものは、皿部がやや深めで、15.6cm以上の大型のものは皿部がやや浅めのものが多い。いずれも口縁部が直線的に開くものが大半で、内彎するものや口縁端部が外反するものは少ない。斎宮編年第三期第1～2段階に併行するものが多いと思われる。

1737は台付椀である。腰が丸みを帯び、口縁部が内彎している以外は、台付皿と類似する。

1739～1742はロクロ土師器鉢で、1739は底部に焼成前穿孔があり、1740には幅の狭い高台がつく。1741・1742の口縁端部は外側へ肥厚している。

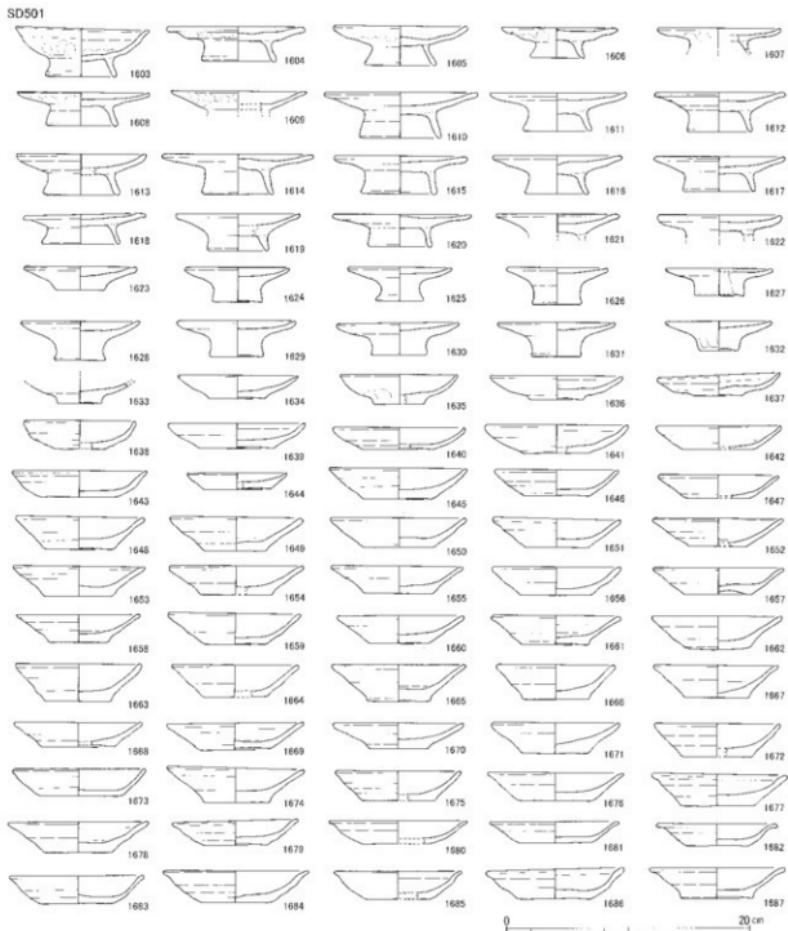
1786は深手の台付椀である。内面にハケ調整されており、糸切り痕はナデによって消されているが、おそらくロクロによって成形されていると思われる。

1787・1788は須恵器杯蓋である。1787は口径が14.0cmと大きく、陶邑編年MT15型式に相当する。1788は内面に返りをもち、陶邑編年TK217型式に

相当する。

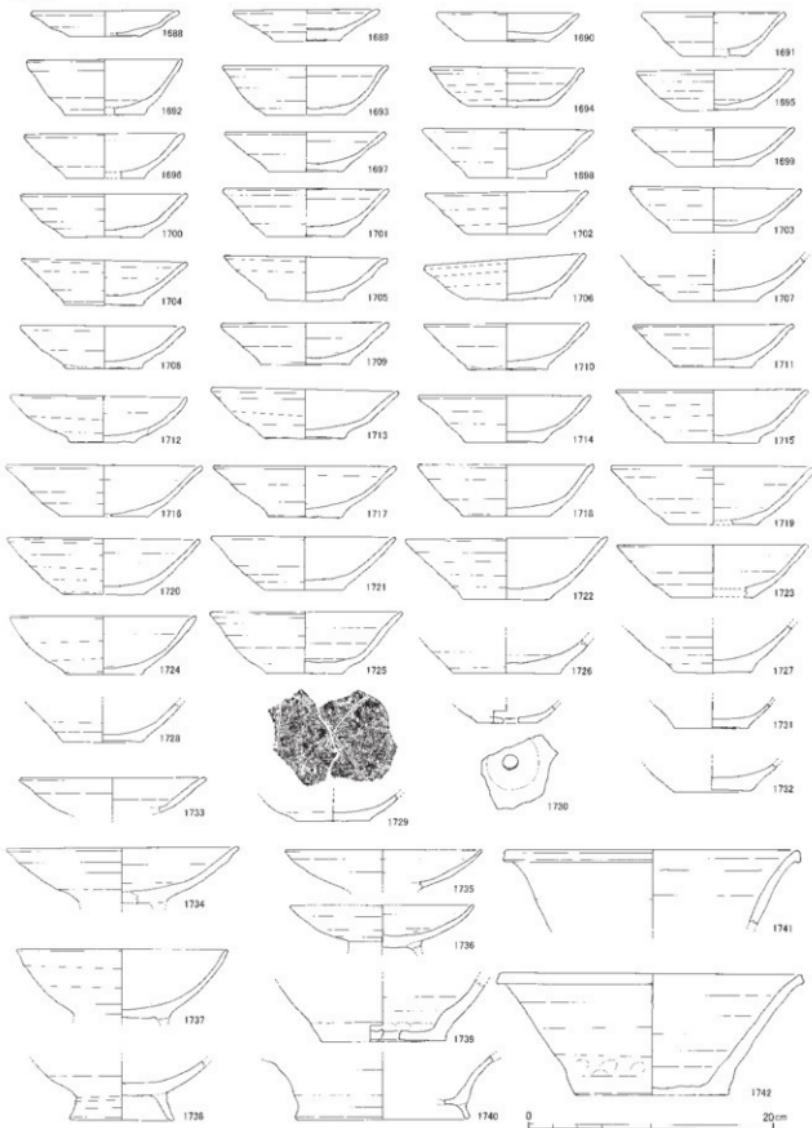
1789は須恵器提瓶の体部を転用した鏡である。外  
面にはカキメ、内面には菊花状らしき当具痕が認め  
られる。内面の磨耗は頗著で、内面から両側面にか  
けて朱墨が付着している。1790は赤褐色の金属成分  
が融着している口縁部の小破片で、取鍋（とりべ）  
ではないかと思われる。

1791～1817は緑釉陶器の楕皿類である。小皿  
(1791・1792) や小椀 (1793～1796)、皿 (1797) も  
あるが、大半は楕である。いずれも貼付け高台で、  
その内側に段を持つもの (1792・1793・1795・1811  
～1813) や端部が丸みを帯びる低いもの (1808)、  
幅が狭く高いもの (1797～1805など) がある。幅が  
狭く高い高台には、端部が外側へ張り出すもの



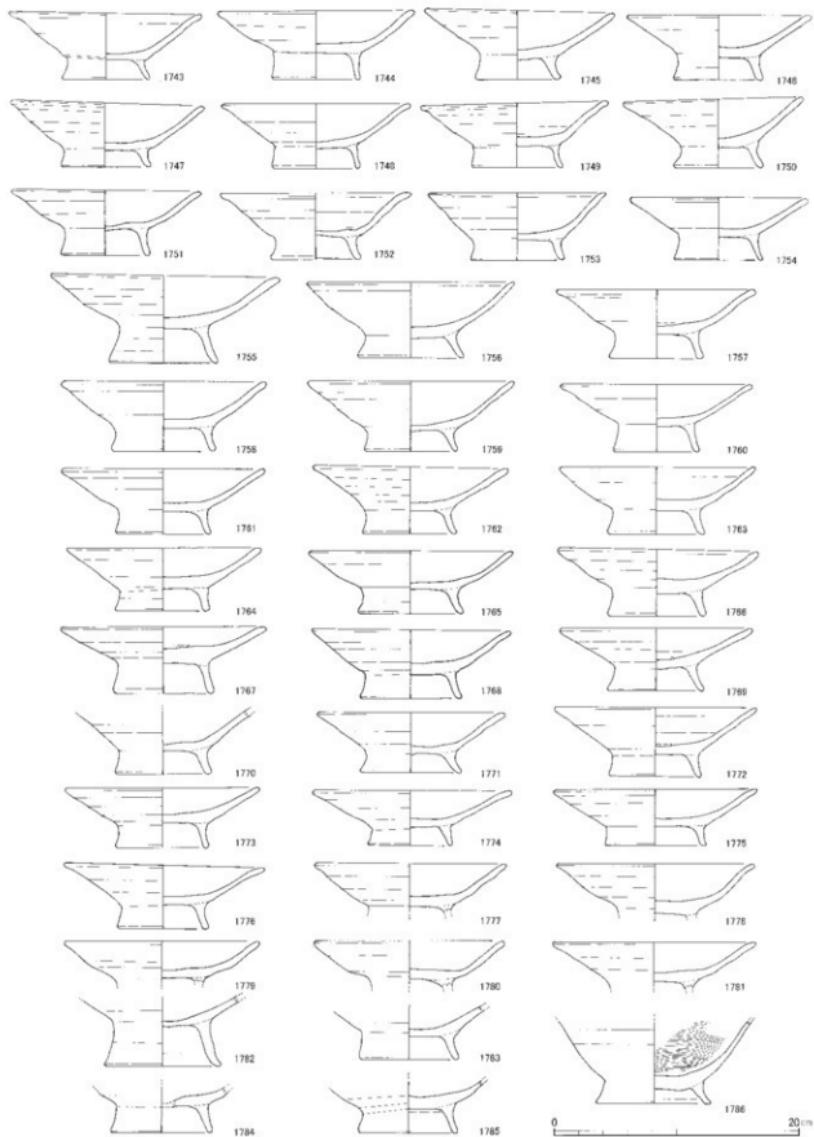
第152図 d地区 出土遺物実測図4 (1:4)

SD501



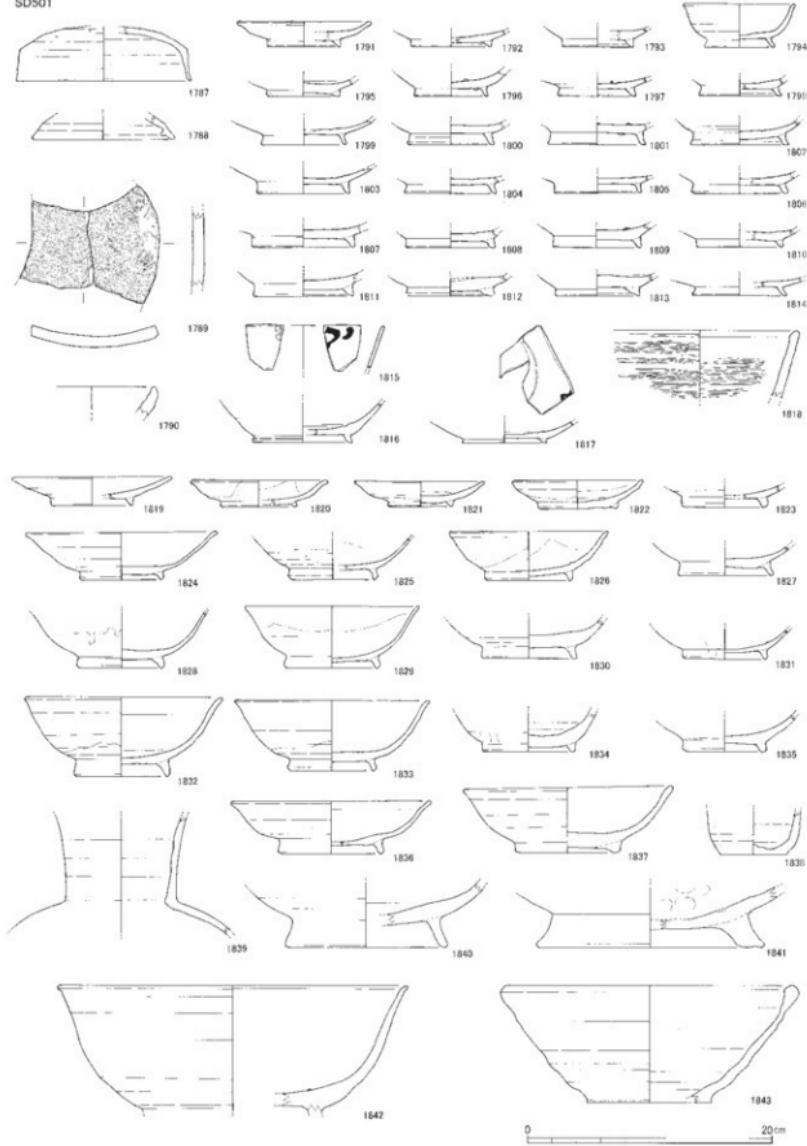
第153図 d地区 出土遺物実測図5 (1 : 4)

SD501

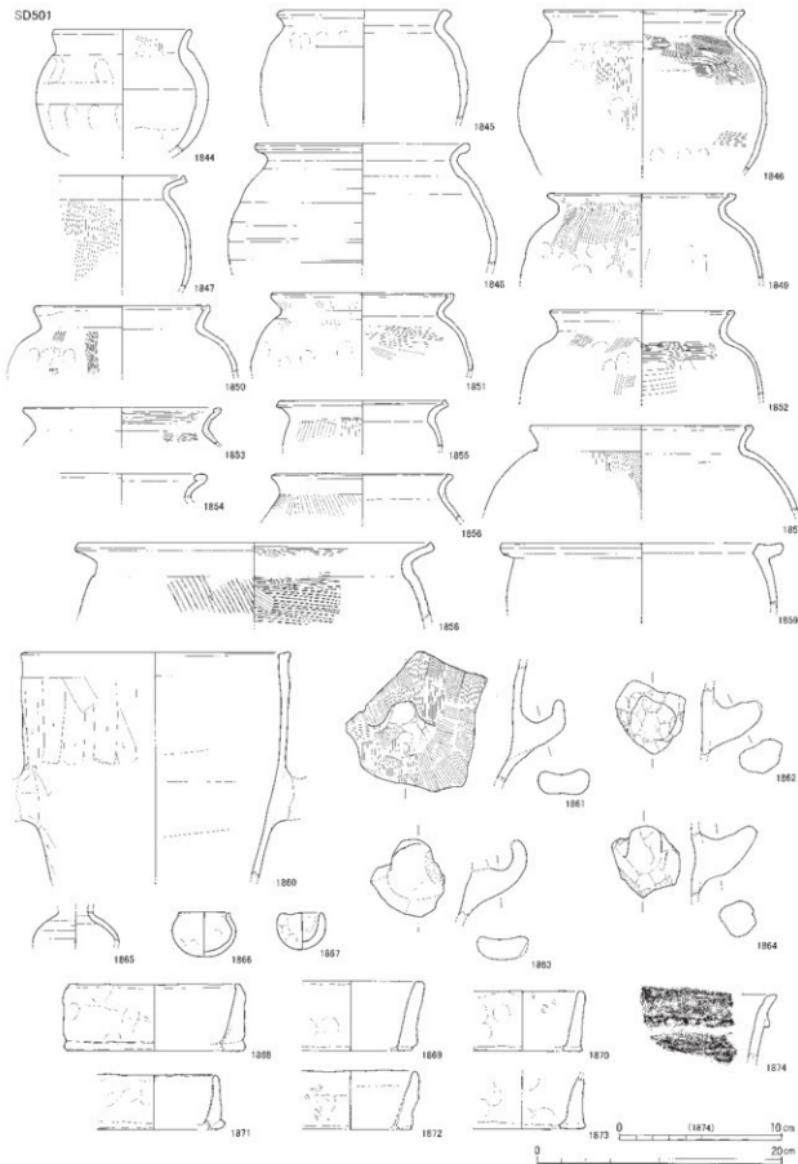


第154図 d地区 出土遺物実測図6 (1:4)

SD501



第155図 d地区 出土遺物実測図7 (1:4)



第156図 d地区 出土遺物実測図8 (1:4) 1874は1:3

(1800~1802など)もある。1791は三角形の高台をもち、輪花が1ヶ所残る。口縁端部はやや肥厚する。1815は輪花と緑彩が施された椀の口縁部である。1817は淡緑色の白っぽい釉が施され、内面に緑彩がみられる。1818は灰釉陶器素地の鉢で、内外面に磨きが施されている。焼成は堅緻で、灰白色を呈する。

1819~1822は灰釉陶器皿である。1819は口縁部が直線的に開き、三角形の高台をもつ。1820は体部下半で屈曲があり、口縁端部は外反し、三日月高台をもつ。1821は口縁部が緩やかに立ち上がり、灰釉は漬け掛けされる。高台は逆台形に近い。1822は口縁端部が内側へ屈曲し、高台は体部の下端につく。灰釉は漬け掛けされる。1820~1822はいずれも横崎・斎藤編年東山72号窯式に相当する。

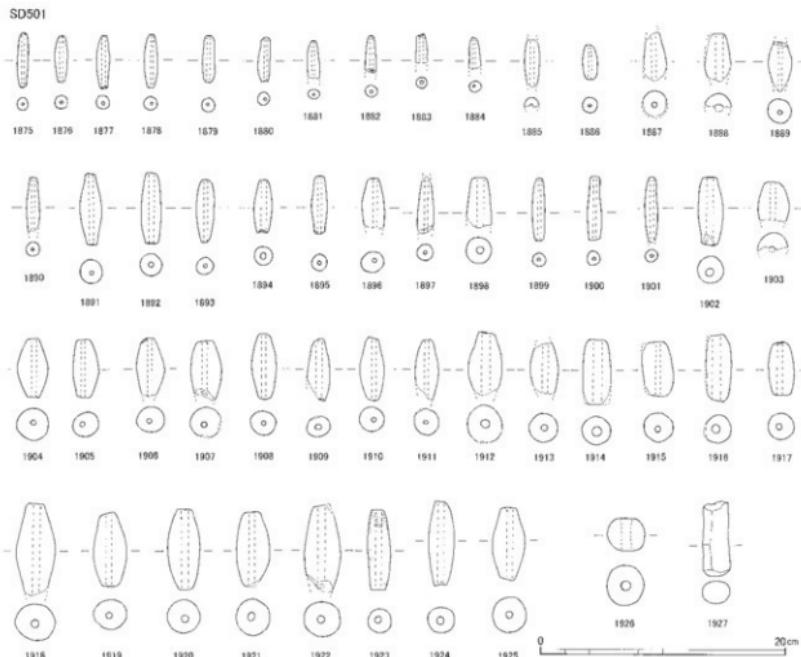
1823~1831・1836は灰釉陶器椀である。1824・1825は三日月高台をもち、1825は体部下半にロクロ

ケズリが施される。黒旗90号窯式2型式に相当する。1826は灰釉が漬け掛けされ、内面がやや内彌する高台をもつ。折戸53号窯式に相当する。1828・1829はやや内彌し、端部の丸い高台がつき、1829は灰釉が漬け掛けされる。折戸53号窯式に相当すると思われる。

1832・1833は灰釉陶器深碗である。いずれも灰釉は漬け掛けされ、口縁端部はやや外反する。端部が内彌する高い高台をもち、東山72号窯式に相当するだろうか。

1837は低い逆台形の高台をもつ山茶碗である。ほぼ完形に近いが、SD501から他に山茶碗は出土しておらず、調査中に切り合いを間違えた遺構からの混入と考えられる。

1840・1842は灰釉陶器鉢である。1840は幅が狭く高さが2cm以上の高い高台をもつ。1842は体部下半



第157図 d地区 出土遺物実測図9 (1:4)

の丸みが強く、口縁端部は外反する。

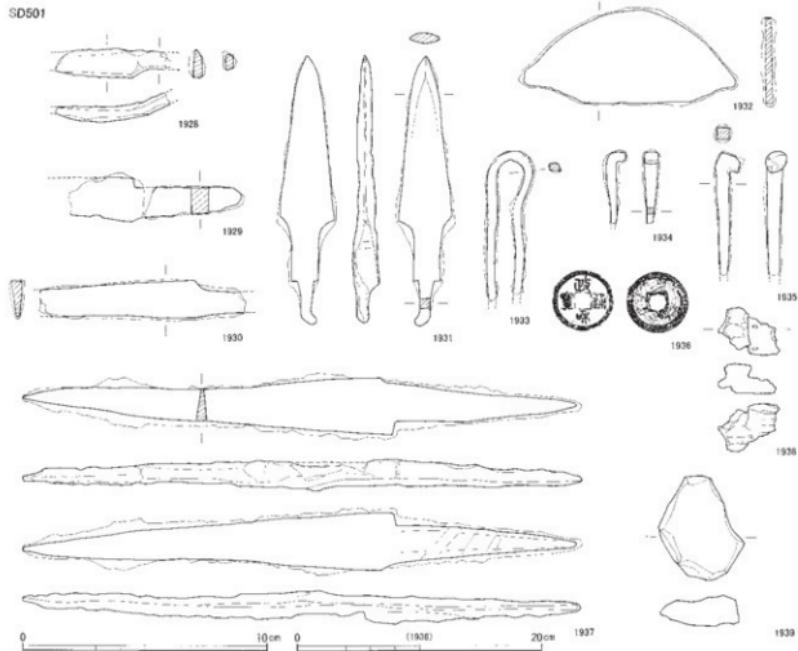
1843は籠窯産と思われる須恵器鉢で、口縁部は大きく肥厚する。

1844～1859は土師器甕である。1844は小型の甕で、器壁の厚い球形の体部をもつ。1845は口縁部から体部にかけて器壁の厚い甕である。1848の口縁端部は丸く肥厚し、体部に不明瞭な凹線がほぼ均等な間隔で数条認められる。他の甕とは製作技法が明らかに異なる。1846・1849～1852・1857は口縁端部を内側へ折り返し、上面に面をなすもので、新田洋氏による「伊勢型鍋」編年<sup>8)</sup>（以下、新田編年と略す）の平安IV～I期に併行する。1858は口縁端部が内側へ肥厚し、外側に面をなすもので、新田編年平安II～III期に併行する。1859は清郷型の甕である。1865～1867はミニチュア土器で、1865・1866は壺、1867は椀である。壺は器壁が薄く椀は厚い。1868～1873は

志摩式製塙土器である。1868は口径13.7cm、器高5.4cmの大きさである。1874は縄文土器深鉢である。突帶が貼り付けられ、それ以下はナデ調整される。

1875～1925は土鍤である。重さ20g未満のものが大半だが、1918や1922のように50g以上のものもある。1926は土玉である。直径2.7～3.3cmで、重さは26.0gである。1927は土製品で、土馬の脚部である可能性もある。

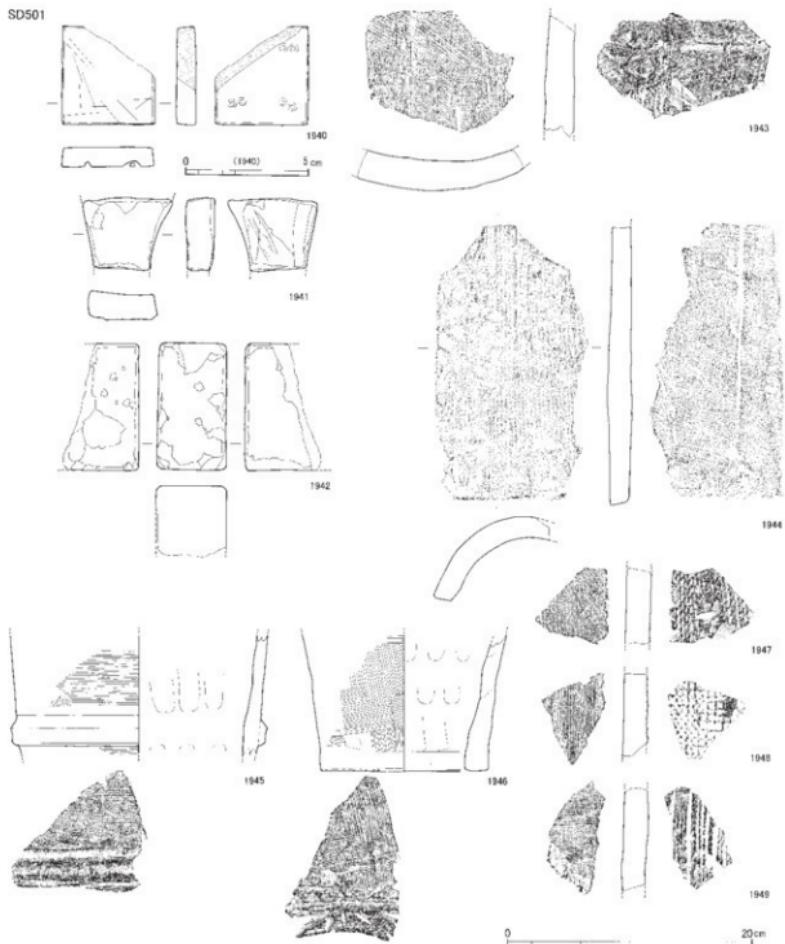
1928は槍鉋と思われる。片刃のもので、残存長4.7cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmである。1929・1930は刀子である。1931は鉄鏃で、中世のものであろうか。刃部の上端部に鏃がみられる。残存長11.0cm、幅2.2cmである。1932は火打金で、もともと鎌であったものを転用していると思われる。焼けた痕跡はなく、長さ9.0cm、幅4.0cm、厚さ0.3cmの板状のものである。1933はピンセット状鐵製品で、受け壺金具未製



第158図 d地区 出土遺物実測図10 (1 : 2) 1938は1 : 4

品もしくは、再利用鉄である可能性がある。太さ0.3～0.4cmのものである。1934・1935は鉄釘である。いずれも頭部は打ち平たくされることなく、折り曲げられており、1935は端部が剥離している。1936は北宋の政和通宝で、篆書のものである。政和通宝は1111年に初鋤された。孔が星形孔銭である。1937は

小刀である。鞘、柄とともに鹿角状織維痕があり、茎からは銅が検出されていることから、鹿角だけではなく銅関連の金属製の刀装具がついていたものと思われる。長さ22.8cm、幅2.3cmである。1938は輪の羽口の破片である。内面にはスマキ痕がみられ、外面には粉殻痕がある。1939は鉄滓で、もとは鉄鍋の可



第159図 d地区 出土遺物実測図11 (1:4) 1940は1:2

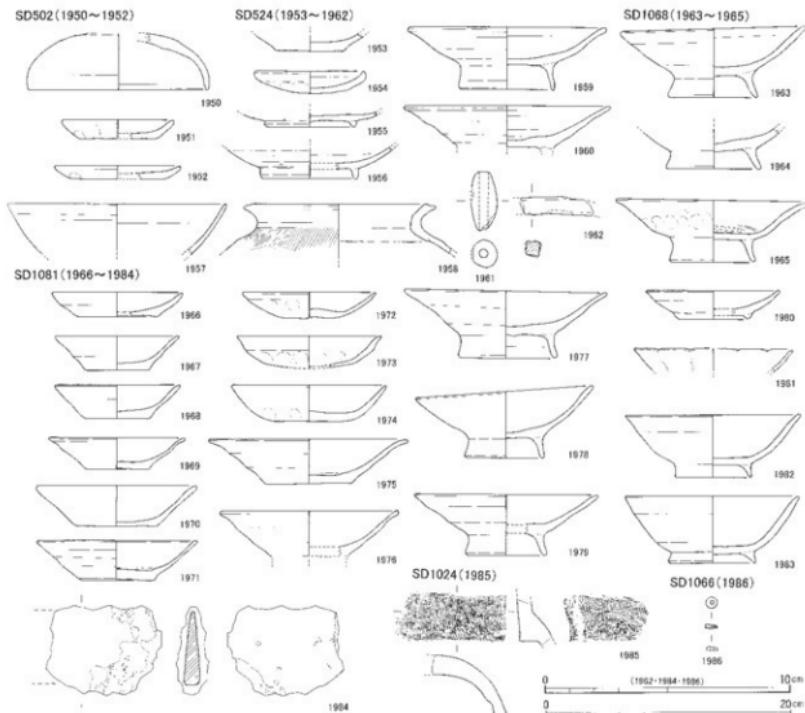
能性がある。自然科学分析では楔型溝とされている。重さ25.2 gである。

1940は石帶である。長さ4.0cm、幅3.8cm、厚さ0.8 cmの逆方で、裏面の四隅に装着用の潜り穴が設けられていたと思われる。1941は砾石である。ほぼ4面の全面がスリ面で、使用の結果、曲面になっている。1942は不明石製品である。長さ10.4cm、幅5.7cm×6.2cm程度の直方体で、角は研磨されている。1943・1944・1947～1949は瓦である。1944は丸瓦で、外面に繩目タタキが施され、内面には布目圧痕がみられる。1945・1946は円筒埴輪である。1945の外側はタテハケ後B種もしくはC種ヨコハケで、内面はユビオサエ・ナデ調整される。突帯は断面が低い台形である。1946は外側はタテハケ後B種ヨコハケで、内

面はユビオサエ・ナデ調整される。基底部はケズリが施される。ともに川西宏幸氏による円筒埴輪編年<sup>9)</sup>の3～4期に相当するだろうか。

**S D 502 (1950～1952)** 1950は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部をわける稜は全くなく、口縁端部にはわずかに稜がある。田辺編年T K43型式～TK209型式に相当するだろう。1951・1952は土師器小皿である。1951は平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がるものであり、島賀編年F 2期に併行する。1952は口縁部の立ち上がりが低く、扁平なもので、島賀編年F 1期に併行するだろう。

**S D 524 (1953～1962)** 1953・1957はロクロ土師器皿である。1954は土師器小皿である。底部は丸く、全体の断面は弧状を呈し、口縁端部もやや強く



第160図 d地区 出土遺物実測図12 (1:4) 1962・1984・1986は1:2

内彎する。1955・1956は灰釉陶器碗である。1955は低い高台、1956はわざかに内面が内彎する高台をもつ。いずれも橋崎・斎藤編年黒雀9号窯式に相当するだろうか。1959・1960はクロ土師器台付皿である。1959の口縁端部はやや外反するものであるが、1960は直線的に開く。1962は縫である。残存長3.0cmで、全体は不明である。

**S D 1024 (1985)** 玉縁式丸瓦の小片である。

**S D 1066 (1986)** 白玉で、混入と考えられる。

**S D 1068 (1963～1965)** 1963・1964はクロ土師器台付皿である。口縁部は直線的に開き、斎宮編年第III期第1段階に併行するだろうか。1965は土師器台付皿である。口縁部は外反する。外面はコビオサエ、内面はハケ後ナデ調整される。1963・1964と同時期のものであろう。

**S D 1081 (1966～1984)** 1966～1969はクロ土師器小皿である。1966は口縁部が内彎するが、他はほぼ直線的に開くものである。いずれもやや深めで、器高は2.0～2.8cmである。1970・1971・1975はクロ土師器皿である。1970・1971は口縁部が直線的に開き、斎宮編年第III期第1段階に併行すると思われる。1975は口縁部が外反するものである。1972・1973は土師器皿である。いずれも丸底で全体としては断面弧状を呈し、島貫編年F 2期に併行するだろう。1976～1979はクロ土師器台付皿である。口縁部はほぼ直線的に開くもので、斎宮編年第III期第1段階に併行すると思われる。1980は灰釉陶器皿である。口縁部は緩やかに立ち上がり、低く端部の丸い高台がつく。橋崎・斎藤編年黒雀9号窯式～折戸53号窯式に相当する。1981は越州窯系青磁の杯で、口縁端部の切り込みと、体部外面の沈線風の凹みによって輪花が表現されている。小破片のため、口径や輪花の数は不明である。1982・1983は黒色土器碗である。1983は内外面のミガキがなく、ナデ調整である。いずれも器高は高く、三角形の高い高台をもち、大川編年平安時代V期に相当する。1984は刀身片をリサイクルした鉄滓と思われる。自然科学分析では椀型滓とされている。重さは32.0g。

#### d 平安時代後末期～鎌倉時代の

遺構出土遺物

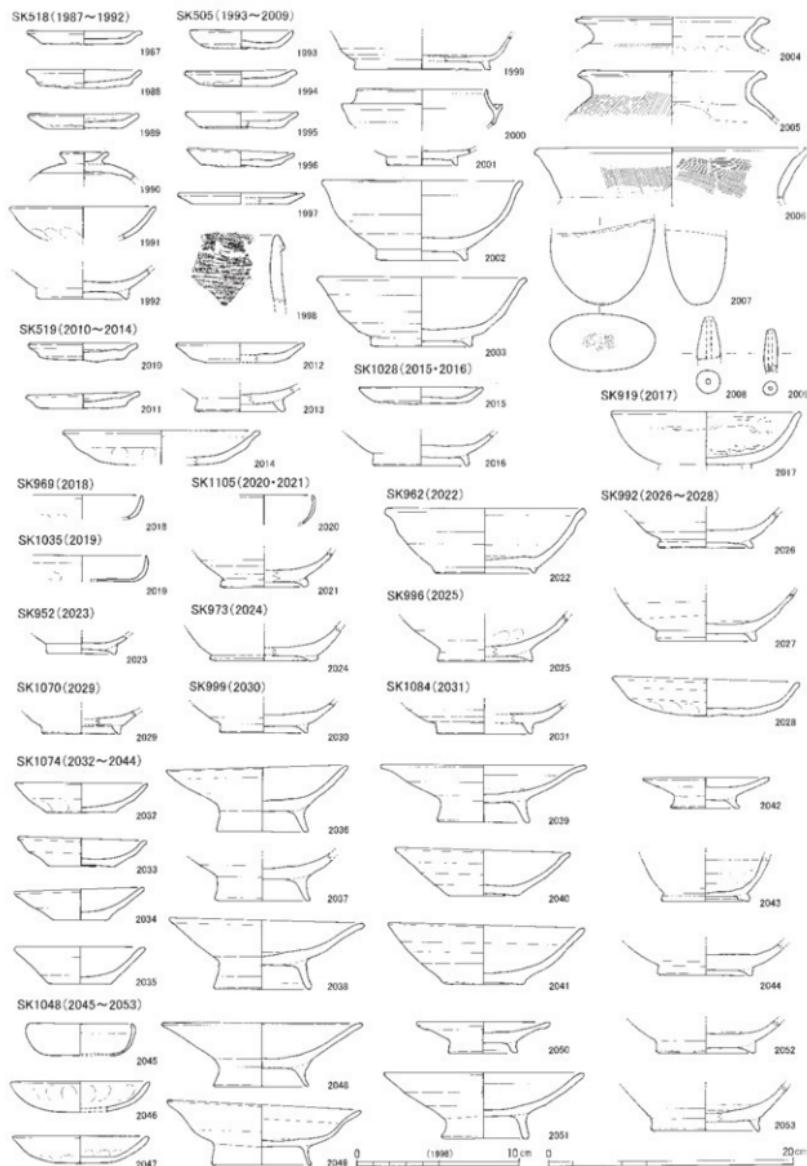
**S K 505 (1993～2009)** 1993～1997は土師器小皿である。1993はややへこむ底部から緩やかに口縁部が立ち上がるもので、ヨコナデは弱い。島貫編年F 4期に併行する。1994～1997は平らな底部から屈曲して口縁部が少し立ち上がるもので、全体的には扁平なものである。島貫編年F 2～3期に併行するだろうか。1998は繩文土器深鉢である。口縁端部付近に突審が貼り付けられ、それ以下は二枚貝による条痕がみられる。1999・2000は須恵器杯身である。1999は体部下半にやや丸みをもち、方形の高台をもつ。田辺編年MT21型式に相当する。2000は立ち上がりが内傾し、端部に不明瞭な棱がある。2001は灰釉陶器皿と思われる。端部が丸く高い高台をもつ。2002は灰釉陶器碗、2003は山茶碗である。比較的高い高台をもち、体部下半は丸みをもつ。藤澤良祐氏による山茶碗編年<sup>100</sup>（以下、藤澤編年と略す）の第2～3型式に相当する。2004・2005は土師器台付皿である。口縁部の屈曲はなく直線的で、端部に明瞭な面をもつ。赤塚分類D類に相当する。

**S K 518 (1987～1989)** 1987～1989は土師器小皿である。いずれも平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がるもので、島貫編年F 2期に併行するだろう。1992は山茶碗で、三角形に近い高台をもち、藤澤編年第2～3型式に相当すると思われる。

**S K 519 (2010～2014)** 2010・2011は土師器小皿である。平らな底部から屈曲して短い口縁部が作り出されるもので、島貫編年F 2期に併行するだろう。2012はクロ土師器小皿である。口縁部は直線的に開くもので、立ち上がりは低い。島貫編年F 2期に併行する。2013は灰釉陶器碗である。藤澤編年第2型式に相当すると思われる。2014は土師器皿である。平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸く肥厚する。島貫編年F 3期に併行するだろうか。

**S K 919 (2017)** 2017は黒色土器碗である。器壁は厚く、やや器高が低い。高台は剥離している。内外面にミガキが施される。

**S K 952 (2023)** 2023は山茶碗である。幅の広い三角形の高台をもつ小碗で、藤澤編年第3型式に相当するだろう。



第161図 d地区 出土遺物実測図13 (1 : 4) 1998は1 : 3

**S K 962** (2022) 2022は山茶碗である。体部は直線的で、口縁部外面はくぼみがあり、低い三角形の高台をもつ。藤澤編年第6型式に相当する。

**S K 969** (2018) 2018は器壁が薄い土師器皿である。伊藤裕偉氏による南伊勢系土師器皿の分類・編年<sup>10)</sup>(以下、伊藤皿編年と略す)のB形態II a～II b期に併行する。

**S K 973** (2024) 2024は山茶碗である。扁平な逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当するだろう。

**S K 992** (2026～2028) 2026・2027は山茶碗である。2027はやや高さのある方形の高台をもち、藤澤編年第2～3型式に相当するだろう。2028は土師器杯で、斎宮編年第III期第1段階に併行すると思われる。

**S K 996** (2025) 2025は山茶碗である。外へ大きく聞く扁平な三角形の高台をもち、藤澤編年第3型式に相当するだろうか。

**S K 999** (2030) 2030は灰釉陶器碗である。三角形のやや高い高台をもち、藤澤編年第2型式に相当すると思われる。

**S K 1028** (2015・2016) 2015は土師器小皿である。口縁部の立ち上がりは低く、全体的に扁平である。2016は灰釉陶器碗である。端部が丸く高い高台をもち、崎橋・斎藤編年の百代寺窯式に相当すると思われる。

**S K 1035** (2019) 2019は南伊勢系土師器皿で、伊藤皿編年のB形態II b～III a期に併行する。

**S K 1048** (2045～2053) 2045は南伊勢系土師器皿である。口径8.4cmで、灰白色を呈する。伊藤皿編年B形態第IV a期に併行する室町時代の遺物であるが、1点のみの出土であるため混入と思われる。2048・2051はロクロ土師器の台付皿、2050は台付小皿である。2049は土師器台付皿で、体部下半に丸みをもち、口縁部は外反する。いずれの台付皿も斎宮編年第III期に併行するであろう。2052・2053は山茶碗である。いずれもやや高い高台をもち、藤澤編年第3～4型式に相当するだろうか。

**S K 1070** (2029) 2029は灰釉陶器碗である。外反するやや高い高台をもち、藤澤編年第2型式に相当すると思われる。

**S K 1074** (2032～2044) 2032～2042はロクロ土師器である。2032～2035は小皿で、2032・2033は体部中ほどに段をもち、やや内彌するが、2034・2035は直線的に聞く口縁をもつ。2036～2039は台付皿で、2038・2039は口縁部がわずかに外反する。2040・2041は皿である。2042は台付小皿で、低く端部が外側へ拡張する高台をもつ。いずれも斎宮編年第III期に併行すると思われる。2043は灰釉陶器瓶である。2044は山茶碗である。逆台形の高台をもち、藤澤編年第5型式に相当するだろうか。

**S K 1084** (2031) 2031は灰釉陶器碗である。三角形の高い高台をもち、藤澤編年第2型式に相当すると思われる。

**S K 1105** (2020・2021) 2020は南伊勢系土師器皿で、伊藤皿編年のB形態II b～III a期に併行する。2021は灰釉陶器碗で、高台はやや内彌している。

**S E 906** (2054～2056) 2054・2055は土師器小皿である。立ち上がりが少なく、伊藤皿編年のA形態である。2056は立ち上がりが比較的高い南伊勢系土師器皿である。伊藤皿編年のB形態で、II b期に併行するものであろうか。

**S E 918** (2057) 2057は山茶碗である。非常に扁平な逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。

**S E 931** (2058・2059) 2058・2059は山茶碗である。いずれも低い高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。

**S E 931木製品** (2818) 2818は曲物の底板である。直径24.0cmと復元される。穿孔が2個1対で2ヶ所残存しているが、そのうち1個は未貫通である。材質はヒノキ科アスナロ属である。

**S E 963** (2063) 2063は山茶碗である。やや高めの三角形の高台をもち、体部下半にはわずかに丸みをもつ。藤澤編年第5型式に相当すると思われる。

**S E 1067** (2065) 2065は山茶碗である。端部が尖る高い高台をもち、藤澤編年第4～5型式に相当するだろう。

**S E 1067木製品** (2815～2817) 2815・2816は曲物の底板である。2815は直径18.8cmで、ヒノキ科アスナロ属の材質である。2816は直径19.3cmで、材質はヒノキである。2817は曲物の側板である。樹皮

による緊縛がみられる。材質はヒノキ科アスナロ属である。

**S E 1102** (2060～2062) 2060～2062は南伊勢系B形態の土師器皿である。口径は9.6～10.8cmで、伊藤編年III b～IV b期に併行すると思われる。

**S E 1106** (2064) 2064は土師器鍋である。口縁部の内側への折り返しは幅広く、折り返し端部は肥厚する。伊藤裕偉氏による中世南伊勢系土師器鍋編年<sup>12</sup>（以下、伊藤鍋編年と略す）の第3段階に相当する。

**S E 1107** (2066～2068) 2066は土師器小皿である。やや厚い平らな底部から短く薄い口縁部が作り出されたもので、島貫編年F 2期に併行するだろう。2067は山茶碗である。やや高めの逆台形の高台をもち、藤澤編年第5型式に相当するだろう。2068は常滑陶器の鉢である。口縁部は単純口縁である。中野晴久氏による常滑陶器編年<sup>13</sup>（以下、中野編年と略す）の7～8型式に相当するだろう。

**S D 908** (2074～2095) 2074～2078は土師器小皿である。いずれも器壁はやや厚く、平らな底部から短い口縁部が作り出されるもので、島貫編年F 2期に併行するだろう。2081～2086は土師器皿である。いずれも平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がるものの、島貫編年F 2期に併行するだろう。2087・2088は土師器杯である。斎宮編年第II期第1～2段階に併行すると思われる。2090・2092は山茶碗である。2090は体部下半に丸みがあり、高めの高台をもつ。藤澤編年第3～4型式に相当するだろうか。2091は灰釉陶器椀である。高台がわずかに内樽し、柄崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当するだろう。2093は土師器甕である。頸部は鋭く屈曲し、口縁端部はつまみあげられている。2094は灰釉陶器瓶である。

**S D 911** (2096～2111) 2096～2098は土師器小皿である。いずれも器壁はやや厚く、口縁部の立ち上がりの低い扁平なもので、島貫編年F 3期に併行すると思われる。2099・2100は山茶碗小皿である。いずれも器高が低く、扁平なもので、藤澤編年第6～7型式に相当するだろうか。2101は南伊勢系土師器鍋である。口縁部の折り返し後のヨコナデは弱く、伊藤鍋編年仮（A）～第1段階に相当すると思われ

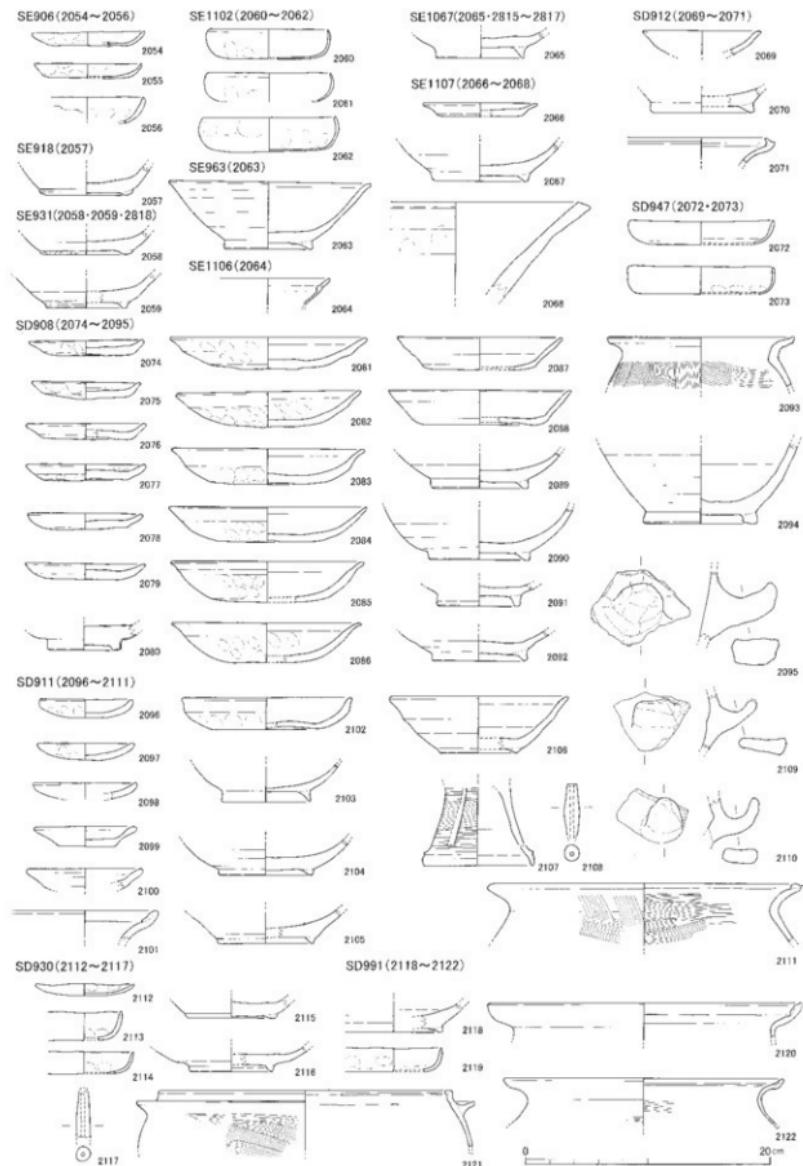
る。2102は土師器皿である。やや凹む底部から口縁部が立ち上がるもので、口縁端部のヨコナデは強く、島貫編年F 5期に併行する。混入であろうか。2103は灰釉陶器椀である。端部が尖る高い高台をもち、柄崎・斎藤編年東山72号窯式～百代寺窯式に相当するだろう。2104～2106は山茶碗である。2104は藤澤編年第4型式、2105は第3～4型式、2106は第5～6型式に相当する。2107は須恵器高杯の脚部片である。2109・2110は土師器把手である。2109は断面が非常に扁平なものである。2111は土師器鍋である。口縁端部はわずかに内側へ折り返されている。

**S D 912** (2069～2071) 2069はロクロ土師器小皿である。2070は山茶碗である。やや高めの逆台形の高台をもち、藤澤編年第5型式に相当する。2071は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しが断面三角形を呈し、伊藤鍋編年4 b段階に相当し、混入と思われる。

**S D 930** (2112～2117) 2112は土師器小皿である。口縁部の立ち上がりがほとんどない南伊勢系A形態のもので、口径8.0cmである。2113・2114は南伊勢系土師器皿で、伊藤皿編年のB形態II b～III a期に併行するものであろう。2115は山茶碗で、非常に扁平な高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。2116は灰釉陶器皿で、端部の丸い低い高台をもつ。

**S D 947** (2072・2073) 2072・2073は南伊勢系土師器皿である。口径はいずれも11.6cmで、伊藤皿編年B形態III a～III b期に併行する。

**S D 964** (2129～2157) 2129～2138は土師器小皿である。いずれも器壁の厚い平らな底部から短い口縁部が屈曲して立ち上がるものの、島貫編年F 2期に併行すると思われる。2139～2146はロクロ土師器小皿である。口縁下半部にやや丸みをもつものが多い。2148・2149は土師器皿である。全体の断面は弧状を呈し、口縁部のヨコナデが強く外面がへこむ。島貫編年F 2期に併行すると思われる。2154～2156は灰釉陶器と山茶碗である。2155は高い高台をもち、体部下半に丸みがある。2155は藤澤編年第2型式に、2156は第3型式に相当すると思われる。2157は土師器甕で、頸部の屈曲は緩やかで、端部はつまみあげられる。



第162図 d地区 出土遺物実測図14 (1 : 4)

**S D 987** (2158~2180) 2158は土師器小皿で、器壁の厚い平らな底部から短い口縁部が屈曲して立ち上がるるもので、島貴編年F 2期に併行すると思われる。2159・2160は土師器皿で、全体の断面は弧状を呈し、口縁部のヨコナデは弱いものである。2161~2163はロクロ土師器皿である。口縁部は直線的に開くものである。2164~2169・2171~2174はロクロ土師器台付皿である。2164は台部が剥離している。全て口縁部と台部とともに直線的に開くものである。2170はロクロ土師器台付小皿である。口縁部の立ち上がりはほとんどなく、扁平である。ロクロ土師器はいずれも斎宮編年第III期に併行すると思われる。2175は灰釉陶器皿である。灰釉は漬け掛けで、小さめの高台がつき、口縁部は外反する。橘崎・斎藤編年折戸53号窯式に相当すると思われる。2176は須恵器杯身である。立ち上がりは内傾し、端部内面に棱をもつ。田辺編年MT15型式に相当すると思われる。2177は黒色土器碗である。器壁は厚く、内面はミガキが丁寧に施されるが、外表面はユビオサエ・ナデ調整である。2178・2180は土師器甕、2179は台付甕である。2178・2180は器壁が厚く、頸部は屈曲がほとんどないものである。2180は体部外面にケズリが施される。

**S D 991** (2118~2122) 2118は山茶碗である。逆台形の低い高台をもつ。藤澤編年第6型式に相当するであろう。2119は南伊勢系土師器皿である。伊藤皿編年のB形態でII b~III a期に併行するものであろう。2120・2122は南伊勢系土師器鍋である。口縁部の折り返しは幅広く、その後のヨコナデは強い。頸部の屈曲は比較的緩やかである。伊藤鍋編年第1~2段階に相当するだろうか。2121は土師器羽釜である。口縁端部は内側へ折り返され、上面に面をなす。伊藤鍋編年第1~2段階に相当するだろうか。

**S D 994** (2123) 2123は山茶碗である。方形の高台をもち、藤澤編年第5型式に相当するだろうか。  
**S D 998** (2124) 2124はいわゆる「て」の字状口縁をもつ土師器小皿である。島貴編年F 2期に併行するであろう。

**S D 1038** (2125) 2125は南伊勢系土師器小皿で、口径は8.2cmである。

**S D 1051** (2181~2189) 2181は山茶碗小皿である。2182~2188は山茶碗である。逆台形もしくは

扁平な三角形の高台をもつ。2187・2188は体部下半が直線的で、藤澤編年第5型式に相当すると思われる。2189は鉄鋳で、鎌の茎を折りたたんだものであろうか。重さ59.0gと重い。

**S Z 1003** (2190~2196) 2190は土師器小皿で、南伊勢系A形態のものである。口径は7.9cm。2191は山茶碗である。比較的高い高台をもち、藤澤編年第4~5型式に相当すると思われる。2192は須恵器杯蓋、2193は須恵器杯身である。いずれも田辺編年T K 10型式~T K 43型式に相当すると思われる。

#### e 室町時代の遺構出土遺物

**S K 913** (2197・2198) 2197・2198は山茶碗である。2197はやや高く外側へ開く高台をもつ。2198は高台が剥離しているが、藤澤編年第4型式に相当すると思われる。

**S K 925** (2199~2206) 2199は土師器小皿で、口径7.2cmである。2200・2201は山茶碗である。2201は小さな高台をもち、藤澤編年第6~7型式に相当する。2202~2204は南伊勢系土師器鍋である。いずれも口縁端部の折り返しが断面三角形で、伊藤鍋編年第4段階に相当する。2205は常滑陶器の鉢である。口縁端部は両側にやや拡張し、端面はへこむ。2206は鉄釘である。残存長4.5cmで頭部は欠損している。

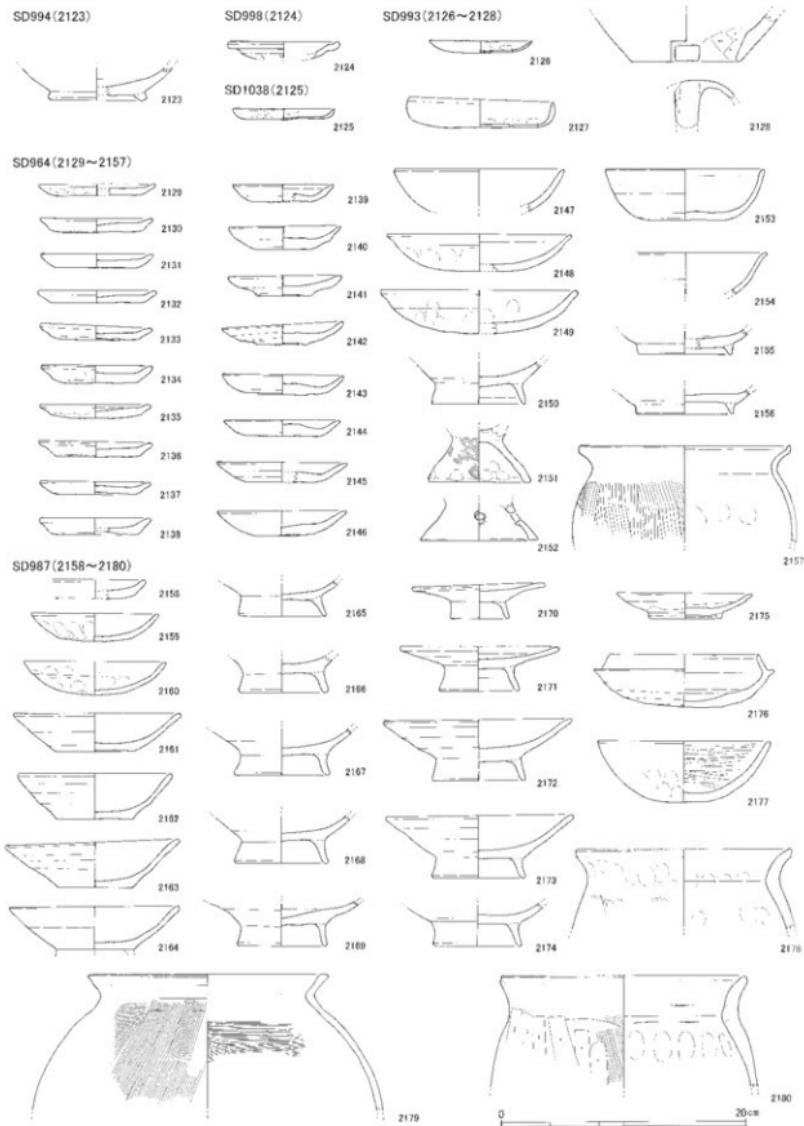
**S K 927** (2207) 2207は山茶碗である。非常に扁平な逆台形の高台をもち、底径は6.4cmと小さめである。藤澤編年第7型式に相当するだろう。

**S K 934** (2208・2209・2242) 2208は灰釉陶器碗である。高台は体部下端側に付けられており、橘崎・斎藤編年東山72号窯式に相当する。2209は山茶碗である。扁平な高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。2242は鉄滓で、もとは刀の間から茎部とみられている。自然科学分析では椀型滓とされている。重さ11.4gである。

**S K 965** (2210・2211) 2210・2211は山茶碗である。藤澤編年第5~6型式に相当する。

**S K 1031** (2213) 2213は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部は内側へ幅広く折り返され、伊藤鍋編年第3 b段階に相当する。

**S K 1045** (2214・2215) 2214は山茶碗である。底部際に高台が貼り付けられ、藤澤編年第6型式に相当する。2215は南伊勢系土師器鍋である。口縁端



第163図 d地区 出土遺物実測図15 (1 : 4)

部は内側へ幅広く折り返され、伊藤鍋編年第3 b段階に相当する。

**S K 1050** (2212) 2212は土師器羽釜である。口縁端部は内側へ折り返され、端部は面をなす。

**S K 1052** (2216) 2216は南伊勢系土師器皿で、口径は12.0cmである。伊藤皿編年のB形態でIII a～III b期に併行すると思われる。

**S K 1054** (2230～2239・2243) 2230～2235は南伊勢系土師器皿で、口径は10.0～12.4cmである。伊藤皿編年のB形態でIII a～III b期に併行すると思われる。2236～2238は南伊勢系土師器鍋である。2236・2237は口縁端部の折り返しの下半が肥厚しており、2236は伊藤鍋編年第3 b段階、2237は第3 a段階に相当するだろうか。2239は土師器羽釜である。口縁端部は外外面に肥厚され、口縁部はやや内傾する。伊藤鍋編年第3段階に相当するだろう。2243は刀子や鉗片、鉄釘などの融着個体と思われる。自然科学分析では楕型滓とされている。重さは47.0g。

**S K 1079** (2218～2224・2240) 2218～2221は山茶碗である。やや高めの逆台形の高台や扁平な高台をもち、蘿澤編年第5～6型式に相当する。2222は灰釉陶器瓶である。2223は綠釉陶器鉢である。高い方形の高台をもち、体部下半は丸みをもつ。2224は土師器羽釜である。鍔はほぼ水平で、口縁端部は外側へ折り返される。伊藤鍋編年第4段階に相当するだろう。2240は土鍤である。

**S K 1079下層** (2225～2229・2241) 2225～

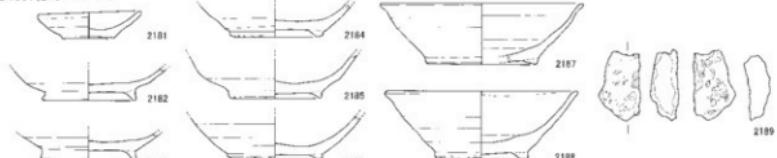
2228は山茶碗である。低めの高台をもち、蘿澤編年第5～6型式に相当する。2229は土師器羽釜である。口縁端部は外側へ折り返される。伊藤鍋編年第4段階に相当するだろう。2241は鉢物のリサイクル滓と思われる。自然科学分析では楕型滓とされている。重さ90.5gと比較的重い。

**S K 1112** (2217) 2217は南伊勢系土師器鍋である。口縁部は幅広く内側へ折り返されており、伊藤編年第3 b段階に相当する。

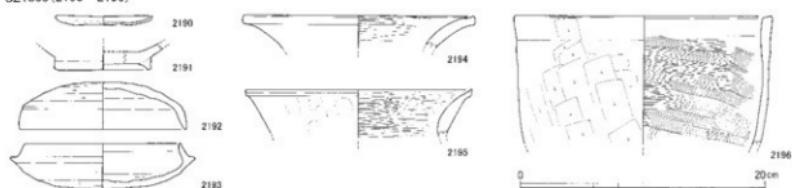
**S E 909** (2251～2258) 2251は灰釉陶器椀である。幅が狭く高い高台をもつ。横崎・斎藤編年の東山72号窯式に相当するだろう。2252～2254は山茶碗である。2253・2254は非常に扁平な高台をもち、蘿澤編年第6段階に相当すると思われる。2255は土師器皿である。器壁は厚く、平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、口縁部のヨコナゲが強いもので、島貫編年F 4期に併行する。2256は土師器杯で、口縁端部は肥厚し、内面に稜がある。外表面はミガキが施され、内面には放射状暗文がみられる。2257は常滑陶器の甕である。口縁部の折り返しは頸部に接触し、断面三角形を呈する。中野編年II型式に相当するだろう。2258は南伊勢系土師器焼物である。口縁端部の折り返しは断面三角形を呈し、伊藤鍋編年第4段階に相当する。

**S E 979** (2244～2250) 2244・2245は土師器皿

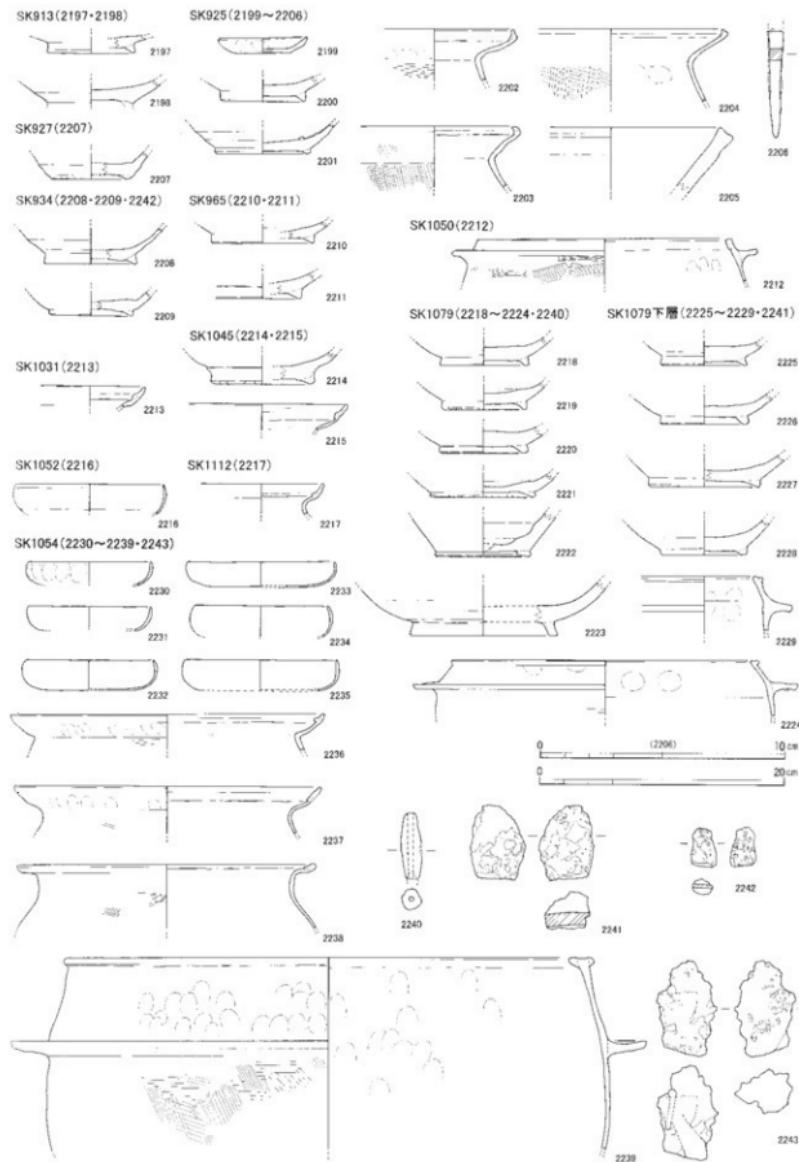
SD1051(2181～2189)



SZ1003(2190～2196)



第164図 d地区 出土遺物実測図16 (1:4)



第165図 d地区 出土遺物実測図17 (1:4) 2206は1:2

である。比較的器壁は厚く、口縁部の立ち上がりは低い。2246・2247は山茶碗である。低い高台をもち、藤澤編年第6型式に相当する。2249は南伊勢系土師器鍋である。口縁部の折り返しは幅広く、伊藤鍋編年第3 b段階に相当する。2250は常滑陶器の鉢である。口縁端部は内外面に拡張しており、中野編年10型式に相当するだろう。

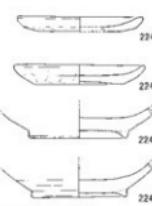
**S E 1030 (2259・2260)** 2259は信楽陶器鉢である。口縁端部は丸く、外側へ肥厚する。2260は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しは幅広く、その後のヨコナデは強い。

**S E 1114 (2261～2264)** 2261は南伊勢系土師

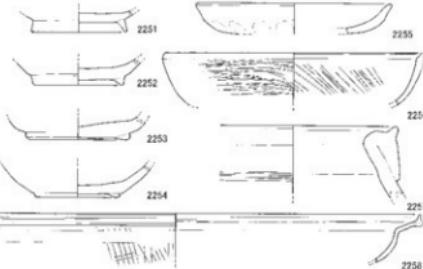
器鍋である。口縁端部の折り返しの断面は三角形を呈する。2262～2264は土師器羽釜である。いずれも口縁端部は外側へ肥厚され、ほぼ水平な鈎をもつ。鍋・羽釜ともに伊藤鍋編年第4段階に相当する。

**S D 910 (2272～2281)** 2272は南伊勢系土師器皿で、口径は8.0cm、浅黄橙色を呈する。伊藤皿編年のB形態でIV a期に相当する。2273・2274は比較的器壁の厚い土師器皿である。2275～2278は山茶碗である。2275は体部が直線的で、口縁部はやや外反し、扁平な高台をもつ。藤澤編年第6型式に相当する。2279は土師器羽釜である。口縁端部は外側へ幅広く折り返される。伊藤鍋編年第4段階に相当する。

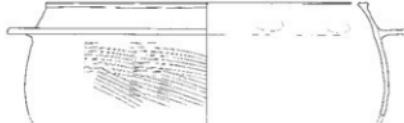
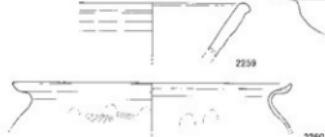
SE979(2244～2250)



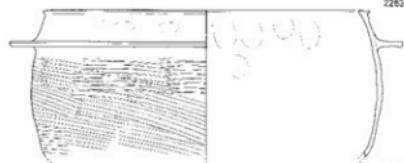
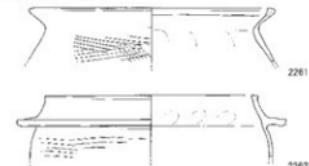
SE909(2251～2258)



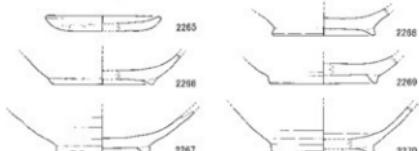
SE1030(2259・2260)



SE1114(2261～2264)



SZ942(2265～2271)



0 20 cm

第166図 d地区 出土遺物実測図18 (1 : 4)

2280は南伊勢系土師器鍋である。口縁端部の折り返しの断面は三角形を呈し、第4段階に相当する。

**S D 922** (2282~2354) 2282・2284・2285は土師器小皿である。いずれも平らな底部から短い口縁部が作り出されるもので、島賀編年F 2期に併行すると思われる。2283は山茶碗小皿である。器高が低く、扁平である。2286は土師器皿である。平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上るもので、島賀編年F 4期に併行すると思われる。2287は土師器杯である。口縁部のヨコナデが強く、斎宮編年第二期第1~3段階に併行する。2288・2289は南伊勢系土師器皿である。2290は灰釉陶器桟である。三日月高台をもち、横崎・斎宮編年黒雀90号窓式に相当する。2291~2316・2322~2327は山茶碗である。このうち、2291~2295・2299~2301・2304・2313は一括して出土した。多くが低い逆台形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当すると思われる。2296には「十」の墨書きがみられる。2295・2296・2299・2301・2310・2311・2324~2327は渥美産で、2323は尾張産である。多くの低い逆台形から三角形の高台をもち、藤澤編年第五~6型式に相当するが、2314は幅が狭く高い高台をもち、第2~3型式に相当するだろう。2317は山茶碗小碗、2318~2321は山茶碗小皿である。いずれも器高は低めで、2321には「十」の墨書きがみられる。

2328は瀬戸美濃陶器の平碗である。藤澤良祐氏による瀬戸窯編年<sup>11)</sup>の古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ期に相当するだろうか。2330・2331・2336は常滑陶器鉢である。2330は外側へ拡張し、2331・2336は単純口縁である。2331・2336は中野編年7~8型式に相当するだろう。2332は山茶碗の窓で焼かれた鉢で、藤澤編年第三型式に相当する。2333~2335は常滑陶器の窓である。2333・2334は口縁部の折り返しが頭部に接しておらず、中野編年8型式に相当する。2335は口縁部の折り返しが頭部に接しており、中野編年10~11型式に相当するだろうか。2337~2342は南伊勢系土師器鍋である。2337は口縁部の折り返しが幅広く、伊藤鍋編年第3 b段階に相当するが、他は折り返しの断面が三角形を呈し、第4 c~4 d段階に相当する。2343~2345は土師器羽釜である。2343は口縁端部が外側に折り返され、第3~4段階に相当する。2346

は五輪塔の水輪である。中位にある最大径は18.5cm、高さ14.8cmである。2347は刀子の先である。鞘の木質が付着している。残存長4.4cm、幅1.7cmである。2349~2353は土鍤である。2349~2351は細長く、2352・2353は中位が膨らむものである。2354は土製の紡錘車である。直径3.6~3.7cmで、孔径0.55cmである。

**S D 929** (2355~2363) 2355は土師器杯である。底部から口縁部の立ち上がりは比較的緩やかで、口縁端部はやや外反する。2356~2360は山茶碗である。2356は高い高台がつき、藤澤編年第二~3型式に相当すると思われる。2358~2360は非常に扁平な高台をもち、第6型式に相当する。2362は南伊勢系土師器鍋で、伊藤鍋編年第一段階に相当する。2363は土師器羽釜である。

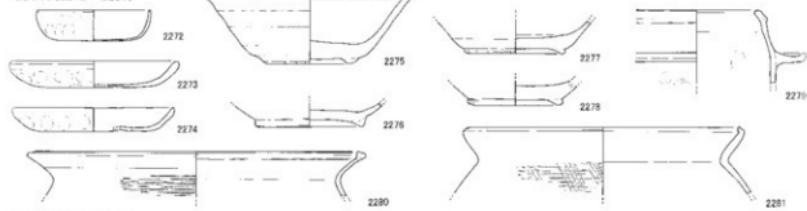
**S D 940上層** (2364~2374) 2364はロクロ土師器小皿である。口縁部の立ち上がりは低く、扁平なものである。2365は山茶碗小皿、2366は山茶碗小碗である。2367~2370は山茶碗である。2368・2369は三角形のやや高い高台をもち、藤澤編年第四~5型式に相当するだろう。2370は扁平な方形の高台をもち、第6型式に相当する。2371は常滑陶器の窓で、口縁部の折り返しの断面が三角形に近く、中野編年10型式に相当するだろう。2372は常滑陶器の鉢で、口縁部は単純なものである。

**S D 940下層** (2375~2379) 2375~2379は山茶碗である。2375は端部が丸く高い高台をもち、藤澤編年第二~3型式に相当すると思われる。2376~2379は扁平な高台をもち、第6型式に相当する。

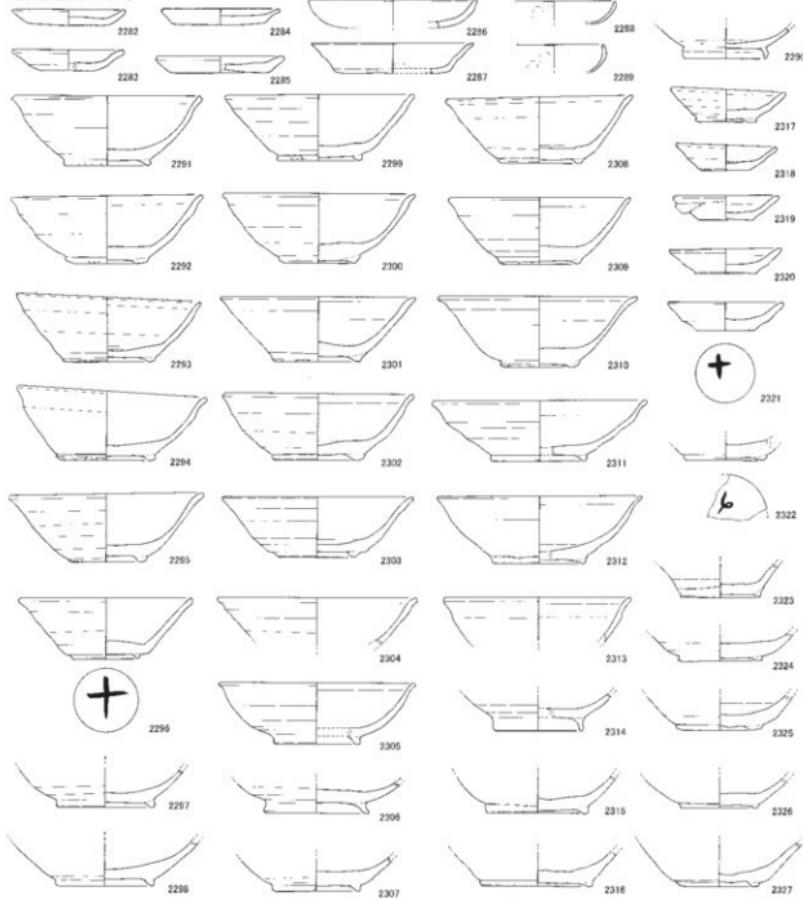
**S D 953** (2391・2392) 2391・2392は山茶碗である。やや高い方形の高台をもち、藤澤編年第四~5型式に相当すると思われる。

**S D 966** (2393~2401) 2393~2395は南伊勢系土師器皿である。2395は口径が13.6cmと大きい。2396~2398は山茶碗である。2397は渥美産で、低い逆台形の高台をもち、藤澤編年第六型式に相当する。2398は三角形の高台をもち第5~6型式に相当するだろう。2399・2401は南伊勢系土師器鍋で、口縁部の折り返しが幅広く、伊藤鍋編年第三段階に相当する。2400はロクロ土師器の耳皿である。いわゆる柱状高台をもつ。

SD910(2272~2281)



SD922(2282~2354)

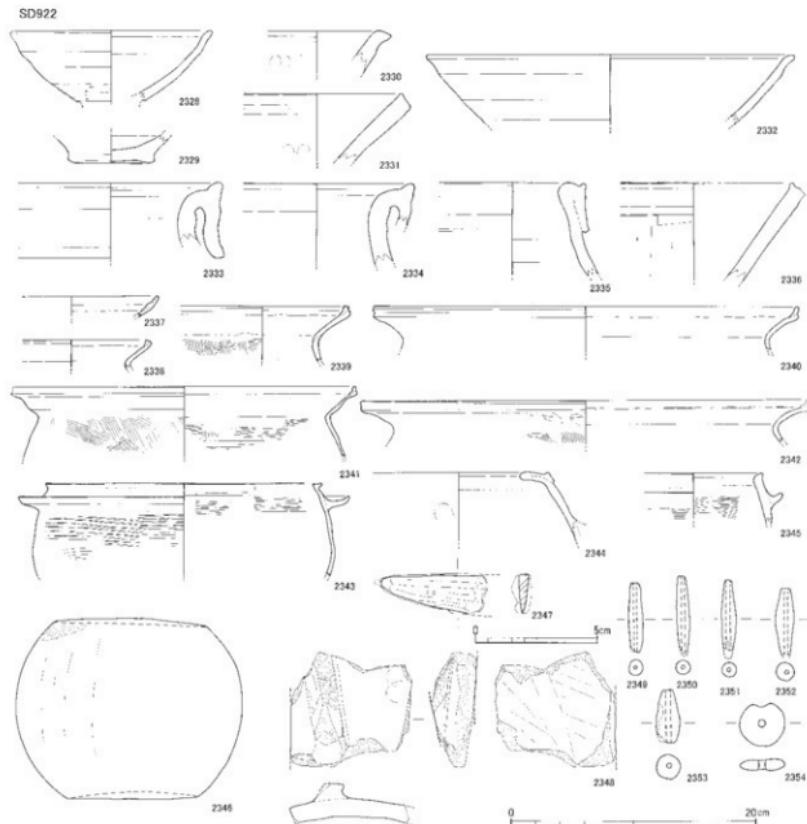


第167図 d地区 出土遺物実測図19 (1 : 4)

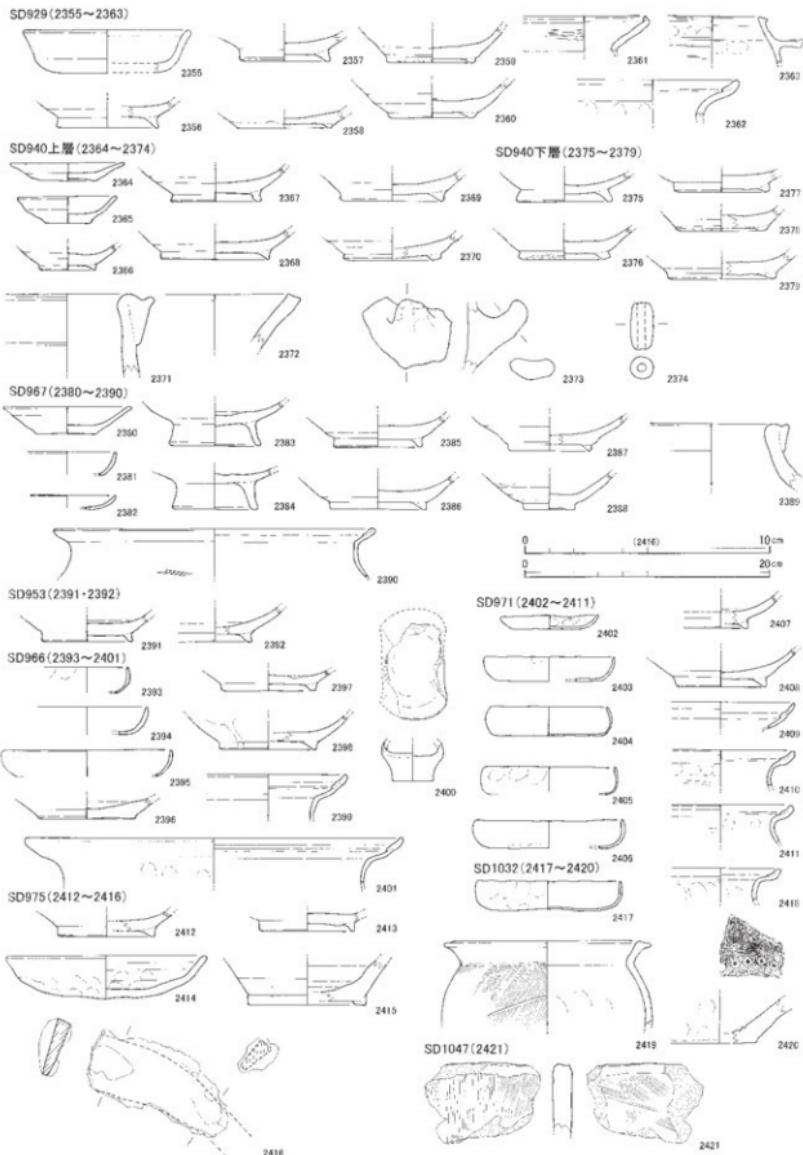
**S D 967** (2380～2390) 2380はロクロ土師器小皿である。2381は南伊勢系土師器皿、2382は南伊勢系土師器小皿である。2382は口縁部の立ち上がりが低く、扁平なものである。2383・2384はロクロ土師器台付皿である。2385～2387は山茶碗である。やや高めの高台をもち、藤澤編年第4～5型式に相当するだろう。2388は瀬戸美濃陶器で、底部のみであるため不確実だが、平碗の可能性がある。2389は常滑陶器甕で、中野編年9型式に相当する。2390は南伊勢系土師器鍋で、口縁端部の折り返しは幅広く、その後のヨコナデは強い。

**S D 971** (2402～2411) 2402～2406は南伊勢系土師器で、2402は小皿、2403～2406は皿である。土師器皿は灰白色を呈し、2403～2405は口径9.5～10.7cm、2406は11.9cmである。伊藤皿編年III b～IV a期に併行するだろうか。2407・2408は山茶碗である。藤澤編年第5～6型式に相当する。2409～2411は南伊勢系土師器鍋である。2409は伊藤鍋編年第3 b段階、2410・2411は第2段階に相当する。

**S D 975** (2412～2416) 2412・2413は山茶碗である。三角形の高台をもち、藤澤編年第3～4段階に相当すると思われる。2414は土師器皿である。丸



第168図 d地区 出土遺物実測図20 (1:4) 2347は1:2



第169図 d地区 出土遺物実測図21 (1:4) 2416は1:2

底で、全体の断面は弧状を呈し、島貫編年F 2期に併行するだろうか。2416は鉄で、鎌を転用したものと思われる。火打金として利用されたと思われる。残存長6.4cm、幅2.8cmである。

**S D 993** (2126～2128) 2126は南伊勢系土師器小皿である。口径は8.3cmで、伊藤皿編年のA形態である。2127は南伊勢系B形態の土師器皿で、口径11.6cmである。III a～III b期に併行するものであろう。2128は土師器瓶である。底部に2つの孔をもつものである。

**S D 1032** (2417～2420) 2417は南伊勢系土師器皿で、口径11.5cmである。灰白色を呈し、伊藤皿編年のB形態でIII b期に相当する。2418は南伊勢系土師器鍋である。伊藤鍋編年第2～3段階に相当するものだろうか。2420は常滑陶器鉢である。底部と体部の細曲部内面に竹管で施文されたようなものがみられる。

**S D 1047** (2421) 2421は埴輪片と思われるが、移動式竈の可能性もある。内外面ともにハケ調整される。

**S Z 942** (2265～2271) 2265は土師器小皿である。器壁は厚く、平らな底部からわざかに口縁部が立ち上がる。2266～2270は山茶碗である。藤澤編年第5～6型式に相当する。2271は土師器把手である。断面は扁平な長方形に近い。

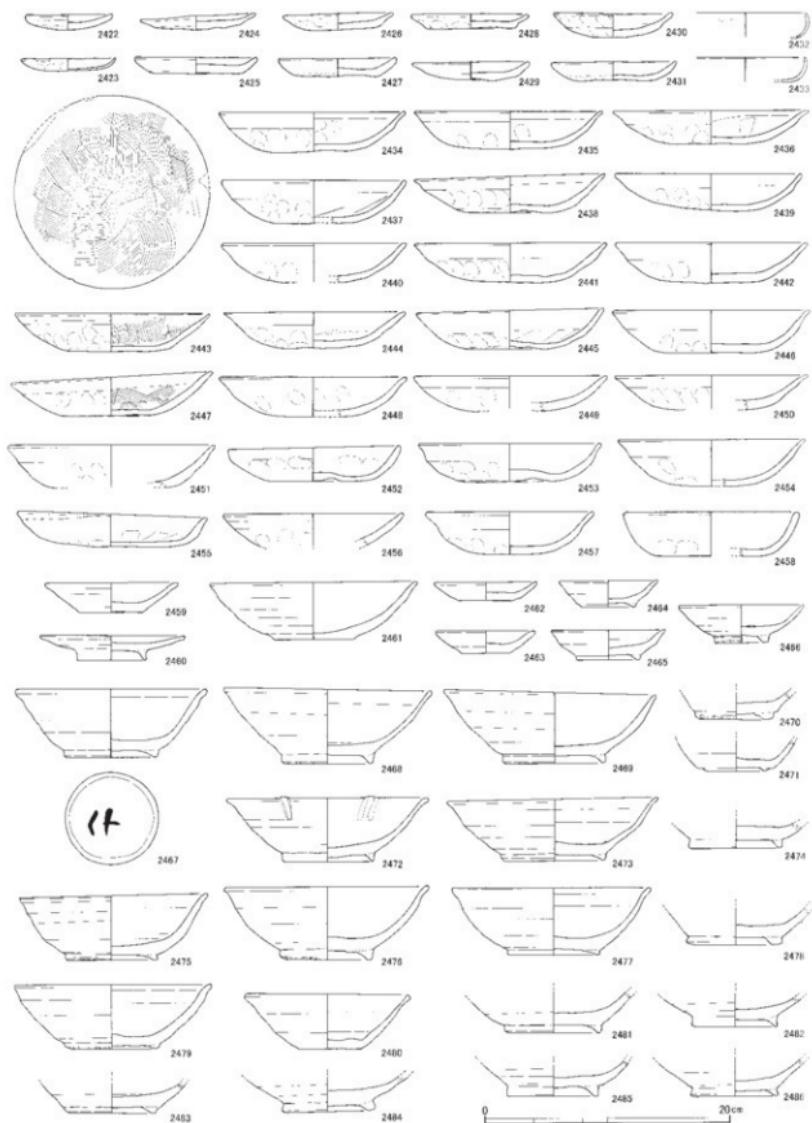
#### f 江戸時代の遺構出土遺物

**S D 907** (2422～2519) 2422～2431は土師器小皿である。2423は器壁が薄く、扁平で南伊勢系A形態のものである。2424～2428は平らな底部から短い口縁部が屈曲して立ち上がるるもので、島貫編年F 2期に併行すると思われる。2432・2433は南伊勢系B形態の土師器皿である。2434～2456は土師器皿である。このうち2434～2438・2443・2447は一括して出土した。2443・2447は内面にハケが施される。平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がるものが多く、口縁部のヨコナデにより棱がある。島貫編年F 2～3期に併行するだろう。2457・2458は土師器杯である。2459はロクロ土師器小皿で、口縁部が直線的に開くものである。2460はロクロ土師器の台付小皿で、高台は低く、皿部は扁平なものである。2461はロクロ土師器皿で、口縁部は丸みをもち、端部はやや外

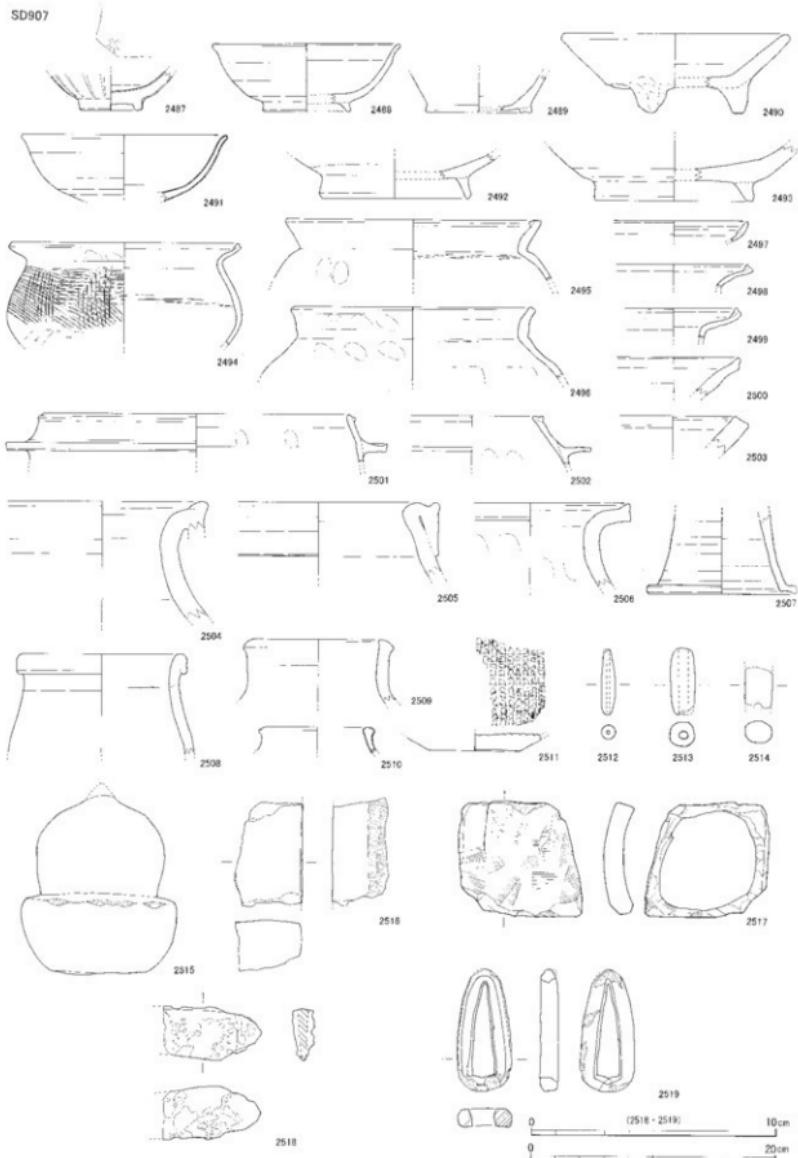
反する。2462・2463は山茶碗小皿、2464～2466は山茶碗小碗である。いずれも器高は低く、扁平なものである。2467～2486は山茶碗である。2467は体部が直線的で、口縁部は外反し、扁平な逆台形の高台をもつ。底部外面に「什」にみえる墨書きがみられる。藤澤編年第5～6型式に相当する。2468は三角形の高台をもち、藤澤編年第3～4型式に相当する。尾張産と思われる。2471・2480は底径4.8～5.2cmと小さく、尾張産のもので藤澤編年第7型式に相当する。2472は1ヶ所の輪花が残存しており、三角形の高台をもつ。藤澤編年第4～5型式に相当するだろう。2478は扁平な方形の高台をもち、渥美産で、藤澤編年第6型式に相当する。

2487・2491は青磁碗である。2487には蓮蓬弁文が施されている。2488は灰釉陶器碗で、柄崎・斎藤編年東山72号室式～百代寺室式に相当するだろう。2489は灰釉陶器瓶である。2490は常滑陶器の鉢で、3方の脚をもつと思われる。口縁部は直線的で端部はやや丸くおさめられている。2492は灰釉陶器鉢である。幅が狭く高い高台をもつ。2494・2497～2499は南伊勢系土師器鍋である。2494は口縁端部が折り返され、断面が三角形を呈する。体部は扁平で、頸部は比較的強く屈曲する。2497は伊藤鍋編年第3段階、2494・2498・2499は第4段階に相当する。2501・2502は土師器羽釜である。いずれも口縁端部は外面に折り返され、水平な跨をもつ。伊藤鍋編年第4段階に相当する。2503は常滑陶器の鉢で、口縁端部はわずかに内外面へ拡張されるが、ほぼ単純口縁である。中野編年7～8型式に相当する。2504～2506は常滑陶器の壺である。2504は中野編年第8型式、2505は10～11型式、2506は4～5型式に相当すると思われる。2507は瀬戸美濃陶器で、外面に鉄軸が施され、根来形瓶子の可能性がある。2508・2509は常滑陶器の壺と思われる。2508は口縁端部が折り返されるが、2509は外面に拡張されるのみである。2510は瀬戸美濃陶器で、壺と思われる。2511は瀬戸美濃陶器の鉢である。2514は不明土製品である。断面は2.2cm×1.7cmの楕円形で、欠損した端部に孔の痕跡がみられる。2515は五輪塔の空風輪である。頂部が欠損しているが、残高14.7cm、最大径12.7cmである。2516は砥石である。2面が欠損しており、

SD907(2422~2519)



第170図 d地区 出土遺物実測図22 (1 : 4)



第171図 d地区 出土遺物実測図23 (1 : 4) 2518・2519は1 : 2

他の2面はスリ面として利用されている。2517は石製品で、石鍋を温石に転用したもの。外面に縦方向の耳の痕跡がある。2518は刀子茎のリサイクル漆と思われる。自然科学分析では桟型漆とされており、重さは12.2gである。2519は青銅製の刀装具で切羽台と思われる。上下端部内側に責金詰代がある。長さ5.0cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ22.2gである。

#### g ピット出土遺物

**E P グリッド** (2520・2521) 2520は須恵器杯身である。立ち上がりはほぼ直立しており、端部には面をもつ。田辺編年TK47型式に相当するだろう。2521は灰釉陶器椀である。方形の高台をもつ。

**E Q グリッド** (2522～2524) 2522は土師器小皿である。口縁部外面はヨコナデにより直立気味で、島貫編年F2期に併行すると思われる。2523は土師器台付甕で、赤塚分類D類のものである。2524は土師器皿で、底部外面はケズリが施され、内面には放射状暗文と螺旋状暗文が丁寧に施されている。底部から口縁部の立ち上がりは比較的緩やかで、島貫編年E期古相、斎宮編年第I期第2～3段階に併行すると思われる。

**E S 12pit 1** (2525) 2525は土師器椀形高杯である。杯部外面はケズリが施され、脚部は外反氣味に開く。

**E T グリッド** (2526～2528) 2527は山茶碗である。扁平な方形の高台をもち、藤澤編年第6型式に相当するだろう。2528は鉄釘であるが、鍛の可能性もある。頭部と下端部ともに欠損しており、残存長5.7cmである。

**E V 19pit 4** (2529～2532) 2529・2530は須恵器杯身である。いずれも立ち上がりは高く、やや内傾し、端部の稜は鋭い。田辺編年TK23型式～TK47型式に相当すると思われる。2532は土師器台付甕の台部である。端部の折り返しはない。

**E V グリッド** (2533～2536) 2534は南伊勢系A形態の土師器小皿である。口径7.8cmで、扁平なものである。2535は土師器皿である。平らな底部から緩やかに口縁部が立ち上がるもので、島貫編年F3期に併行するだろう。2536は縄文土器深鉢である。キザミのない突帯が貼り付けられ、内面には沈線がある。外面の突帯以下はケズリが施される。

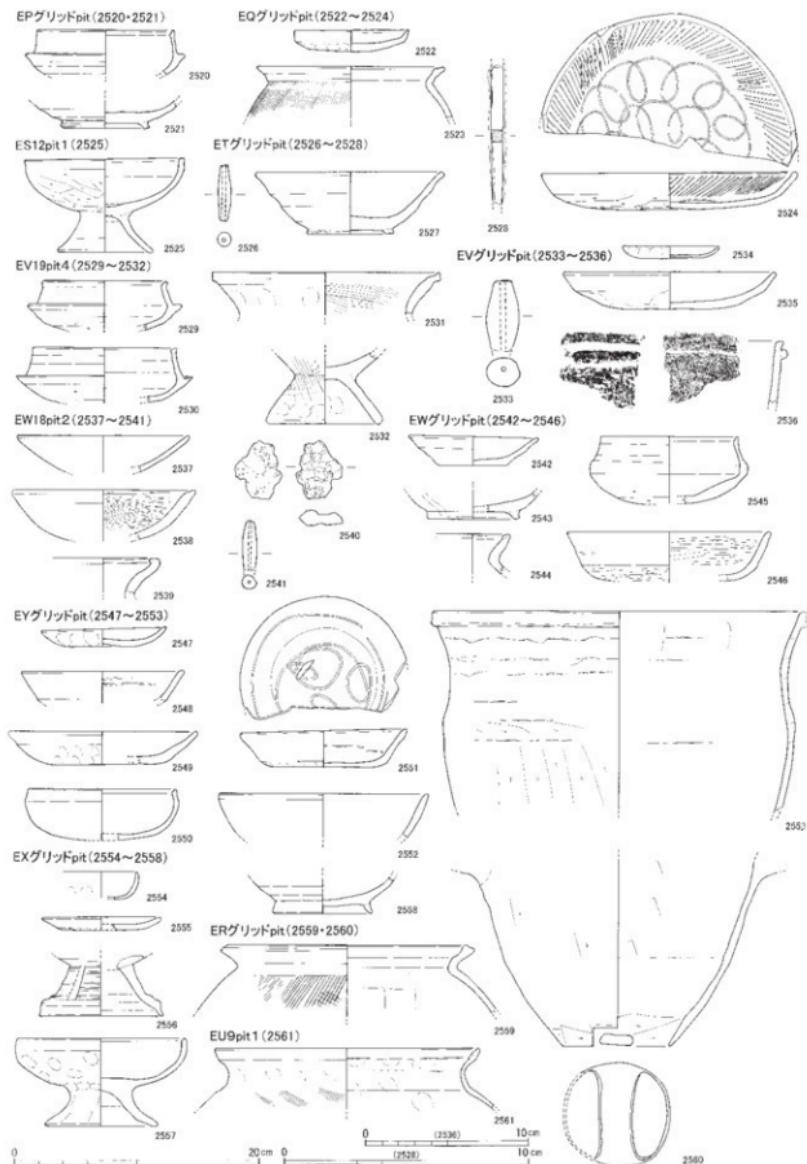
**E W 18pit 2** (2537～2541) 2538は黒色土器椀で、器壁は厚く、内面のみ丁寧な磨きが施される。口縁端部は内傾する面をもつ。大川編年平安時代V期に併行するだろうか。2539は土師器甕である。口縁端部は内側に折り返され、上部に面をなす。新田編年IV～I期に相当する。2540は鉄滓で、自然科学分析では流動漆とされており、あまり数は多くない。重さ24.9gである。

**E W グリッド** (2542～2546) 2542はロクロ土師器小皿である。口縁部は直線的に開くもので、斎宮編年第三期に併行する。2543は山茶碗である。方形の高台をもち、藤澤編年第5～6型式に相当する。2545は須恵器短頸甕である。口縁部から体部への屈曲はほとんどない。2546は土師器杯である。器壁はやや厚く、内外面ともにミガキが施される。

**E Y グリッド** (2547～2553) 2547は土師器小皿である。島貫編年F3期に併行する。2548は土師器杯である。内面にミガキが施される。2549は土師器皿である。口縁部は直線的で、底部から屈曲して立ち上がる。2550は土師器椀で、口縁部は内脣し、内傾する端部をもつ。斎宮編年第一期第1～2段階に併行するだろうか。2551・2552は土師器杯である。2551は内面に螺旋状暗文がみられる。斎宮編年第二期第1～3段階に併行すると思われる。2553は縄文土器深鉢である。キザミのない突帯が貼り付けられる。内面と頸部外面はナデ調整、体部外面はケズリが施される。

**E X グリッド** (2554～2558) 2554は南伊勢系B形態の土師器皿で、灰白色を呈する。2555は土師器小皿である。口縁部の立ち上がりはほとんどなく、扁平なものである。2556は須恵器短脚高杯の脚部である。外面にはカキメが施され、長方形の透孔が少なくとも2ヶ所残存する。2557は土師器椀形高杯である。杯部は比較的扁平で、内外面ともにユビオサエ・ナデ調整される。脚部外面は工具ナデされる。2558は灰釉陶器椀である。幅が狭く高い高台が体部下端につき、柄崎・斎藤編年東山72号窯式に相当する。

**E R グリッド** (2559・2560) 2559は土師器台付甕で、赤塚分類D類に相当する。2560は土師器甕である。底部に2つの孔をもつものである。



第172図 d地区 出土遺物実測図24 (1:4) 2536は1:3、2528は1:2

**E U 9 pit 1** (2561) 2561は南伊勢系土器  
鍋である。伊藤鍋編年第3段階に相当する。

**F A 14pit 1** (2563) 2563は山茶碗である。  
三角形の高い高台をもち、藤澤編年第2～3型式に  
相当すると思われる。

**F B グリッド** (2569～2572) 2570は土器器皿  
である。平らな底部から屈曲して外反する口縁部が  
立ち上がる。2572は土器器台付甕である。赤塚分類  
D類に相当する。

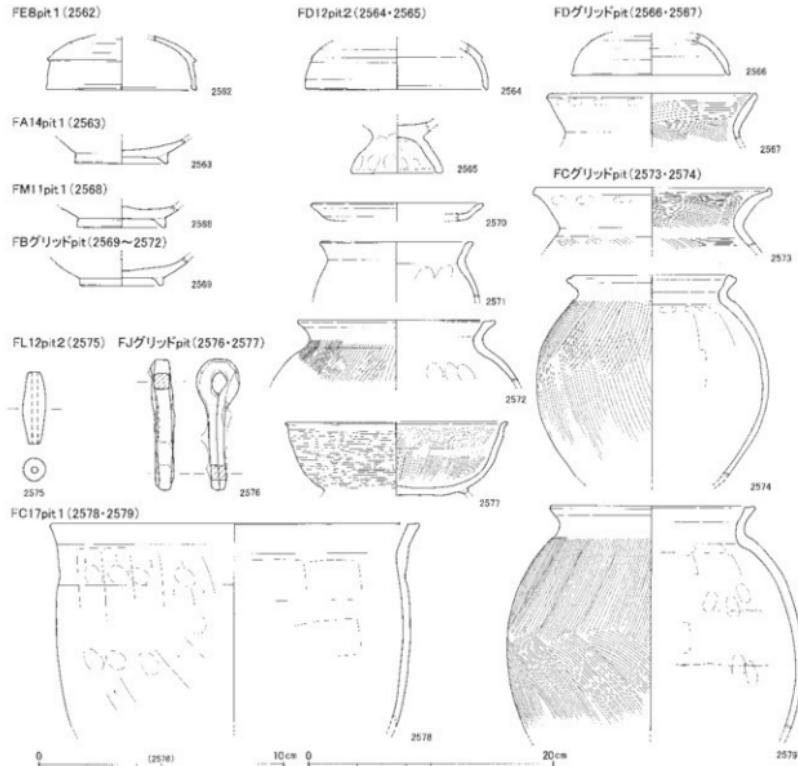
**F C 17pit 1** (2578・2579) 2578は土器器瓶  
である。体部外面はケズリ、内面は工具ナデ調整さ  
れる。2579は台付甕で、赤塚分類D類に相当するが、

長胴化が著しい。

**F C グリッド** (2573・2574) 2573は土器器甕、  
2574は土器器台付甕である。2574は赤塚分類D類に  
相当する。

**F D 12pit 2** (2564・2565) 2564は須恵器杯  
蓋である。天井部と口縁部の境にある稜は甘く、口  
縁部は内彎し、端部の稜は不明瞭である。田辺編年  
MT 15型式～TK 10型式に相当する。2565は土器器  
台付甕の台部である。比較的小型で、端部の折り返  
しはない。

**F D グリッド** (2566・2567) 2566は須恵器杯  
蓋である。天井部と口縁部の境には稜はなく、口縁



第173図 d地区 出土遺物実測図25 (1 : 4) 2576は1 : 2

端部は丸くおさめられている。田辺編年TK209～TK217型式に相当する。

**F E 8pit1** (2562) 2562は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境にある稜は突出し、口縁端部は面をもつ。田辺編年TK23型式～TK47型式に相当する。

**F J グリッド** (2576・2577) 2576は建築金具の受け臺金具と思われる。1本の棒状製品を折り曲げ、直線的部分は2本をあわせているが、打ち平たくしているため、全体的な太さは0.6cmとほぼ同じである。残存長5.3cmである。2577は土師器椀である。外面は横方向のミガキが丁寧に施され、内面はヨコナデ後2段の放射状暗文が施される。

**F M11pit1** (2568) 2568は山茶碗である。端部の尖る高台をもち、藤澤編年第2～4型式に相当すると思われる。

**F L 12pit2** (2575) 2575は土鍤である。長さ5.8cm、幅1.9×1.8cmで、重さ19.9gである。

#### **h 遺構外(表土・包含層など)** 出土遺物

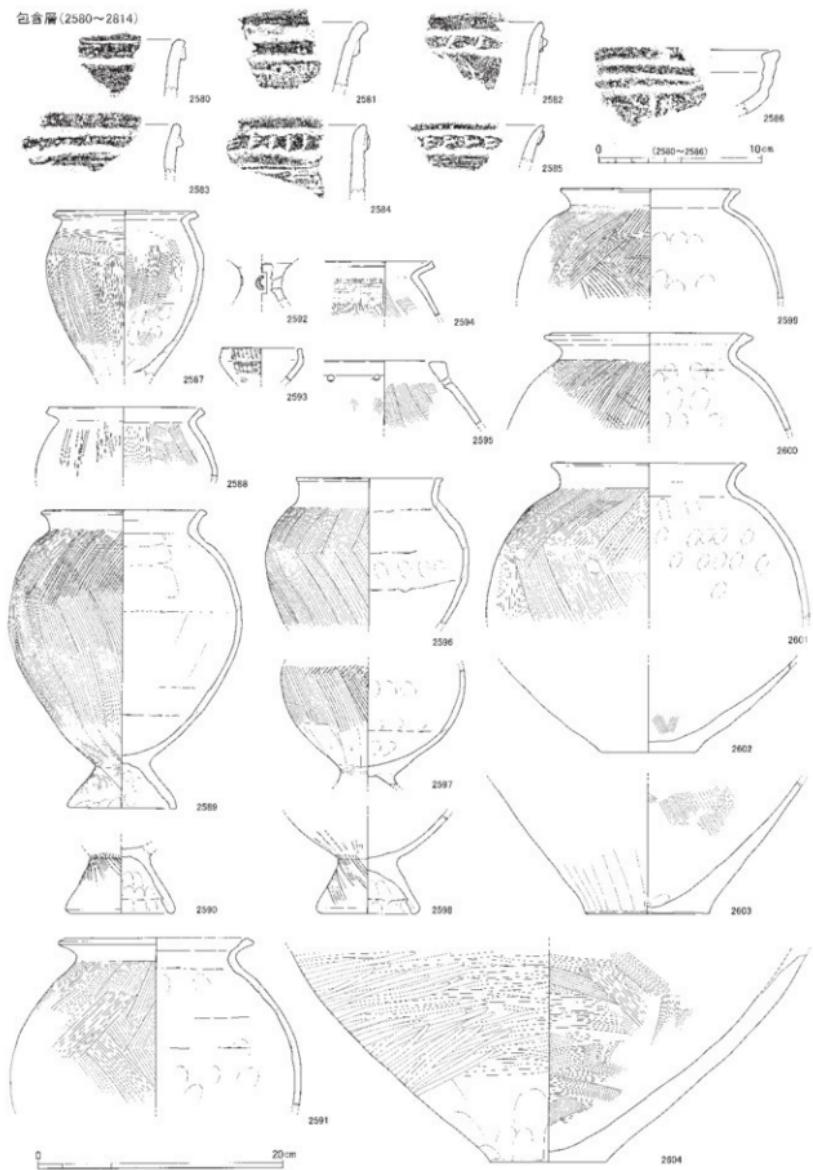
2580～2585は繩文土器深鉢である。2580・2581・2583はキザミのない突帯が貼り付けられ、2580・2583は突帯以下に二枚貝による条痕が施される。2582・2584・2585はD字のキザミが施された突帯が貼り付けられ、2584・2585は突帯以下に二枚貝による条痕が施される。2586は繩文土器の鉢である。口縁部に3条の凹線状のものがみられ、浅鉢である可能性がある。2587・2588・2594は弥生土器甕である。いずれも口縁部が「く」の字に屈曲する。2587は上村安生氏による弥生土器編年<sup>10</sup>(以下、上村編年と略す)のIV型式に相当する。2592は弥生土器高杯と思われ、三日月形の透孔が4方にあけられている。2593は受口状口縁甕で、凹線はない。上村編年III型式に相当する。2595は弥生土器無頸甕である。焼成前透孔が2ヶ所残存する。内外面ともにハケ調整である。2604は弥生土器甕である。外面は横方向のミガキが施され、内面はハケ調整される。2589～2591・2597～2601は土師器台付甕である。大半が赤塚分類D類に相当する。

2605～2608は須恵器杯蓋である。2605は口径10.0cmと小型で、田辺編年TK208型式～TK23型式に相当する。2606～2608は口径14.8～16.0cmと大型で、

MT15型式～TK10型式に相当する。2609～2612は須恵器杯身である。2609・2610は立ち上がりが高く、端部に面をもち、田辺編年TK47型式に相当する。2611は立ち上がりの端部が丸くおさめられており、TK10型式～TK43型式に相当するだろう。2612は立ち上がりが低く、部は深いものである。2613は須恵器有蓋高杯である。2614・2616は須恵器甕で、古墳時代のものである。2616は体部中央に波状文が施され、下半にタタキがみられる。2618は土師器把手付鍋である。体部外面上半部はハケ後ナデ調整、下半部はケズリが施される。2619・2620は土師器甕である。いずれも頸部の屈曲は弱く、口径の大きなものである。古墳時代のものであろう。

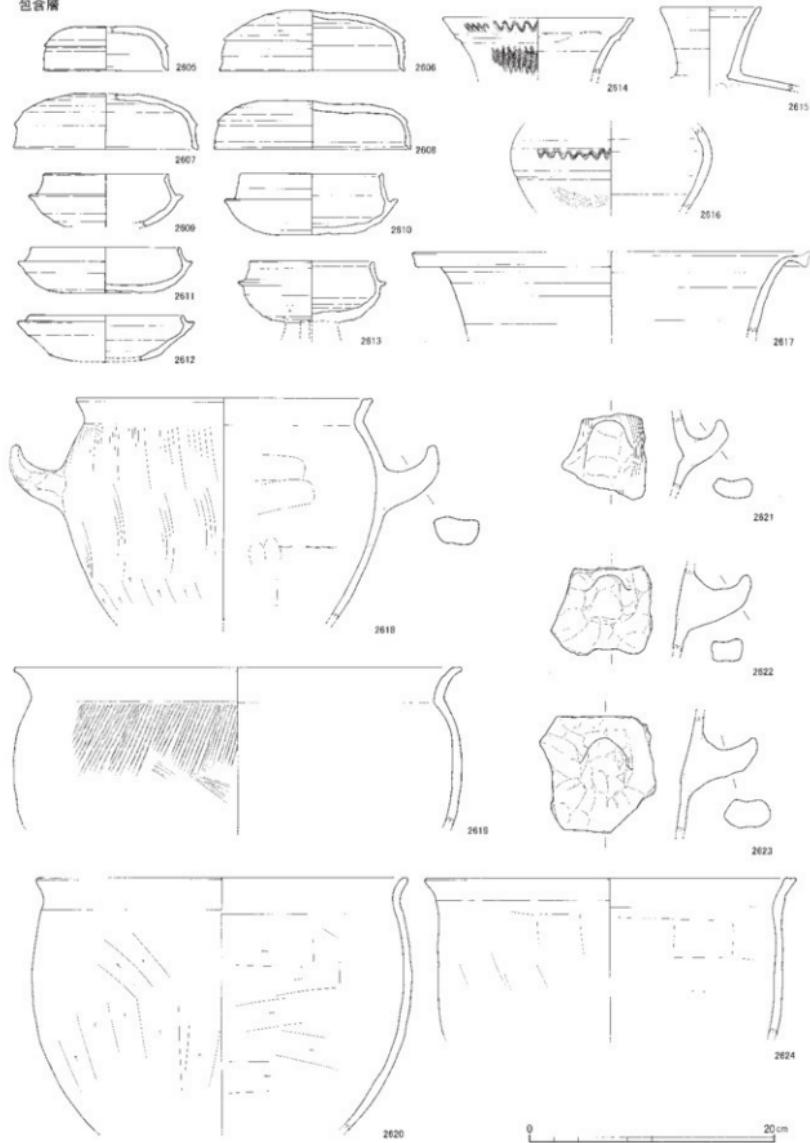
2625～2629・2631は土師器杯である。2625は口径10.0cmで小型のものである。2627・2629は口縁部が直線的に開くやや深めのもので、斎宮編年II期第1～2段階に併行するものであろうか。2630は土師器皿である。口縁部は底部から屈曲して開くもので、深めのものである。内面に螺旋状暗文が施される。2632～2634は黒色土器椀である。いずれも内外面にミガキが施され、2634は高い高台をもつ。2634は大川編年平安時代V期に相当するだろう。2635・2636は土師器椀で、いずれも高台をもつ。2637は縄釉陶器の椀もしくは皿である。方形の貼付け高台をもつ。2638～2640は灰釉陶器で、2639・2640は椀である。2640は三角形の高台をもち、橋崎・斎藤編年東山72号窯式～百代寺窯式に相当すると思われる。2641は古代の須恵器甕で、体部下半のケズリはみられない。2642～2648は古代の土師器甕である。2643・2645～2648は口縁端部が内側へ折り返されており、上面に面をもつものが多い。2648は球形の体部をもち、底部内外面にはケズリが施される。新田編年IV～I期に相当する。2649は志摩式製塙土器である。口径は13.7cmである。2650は土師器甕で、体部外面上全体的にケズリが施される。2624・2651・2652は土師器甕で、2651・2652は、底部に半円形の2つの孔をもつものである。

2653～2683は土師器小皿である。2653～2672・2675～2677は平らな底部から短い口縁部が屈曲して立ち上がるるもので、島貴編年F2期頃に併行するとと思われる。2672は内面にハケ調整される。2673は口

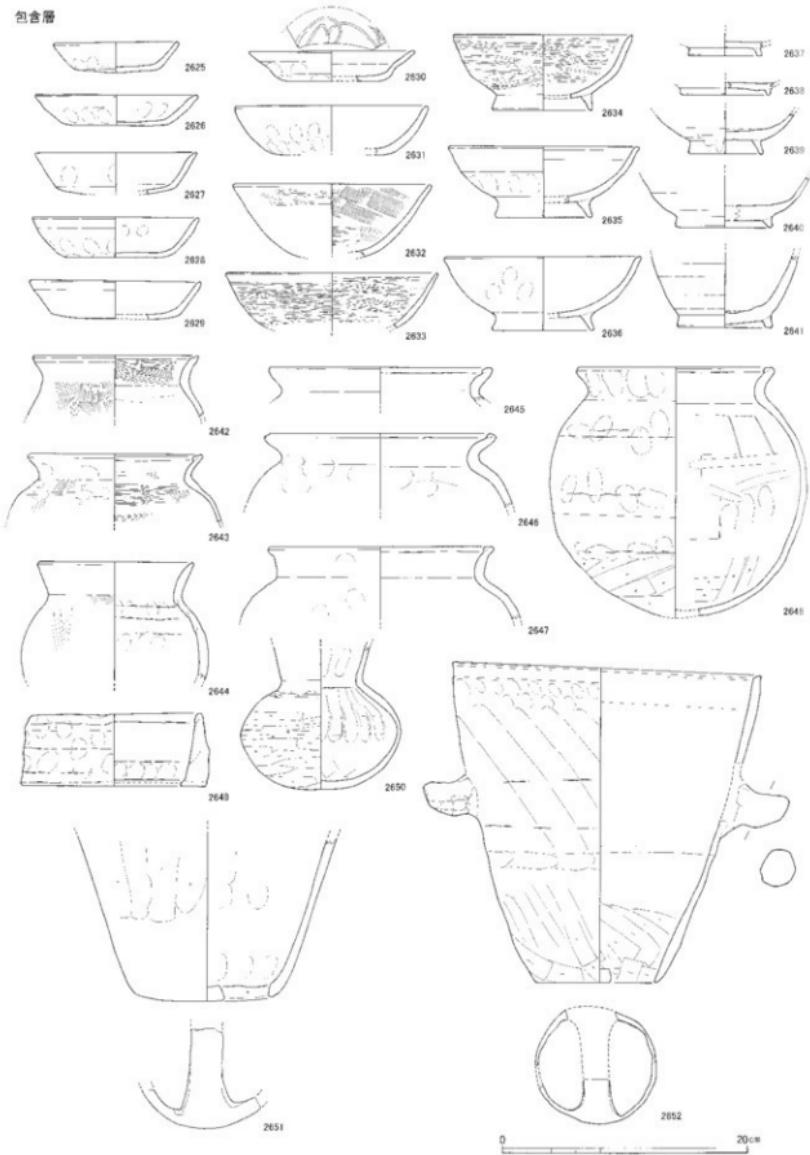


第174図 d地区 出土遺物実測図26 (1 : 4) 2580~2586は1 : 3

包含層



第175図 d地区 出土遺物実測図27 (1 : 4)

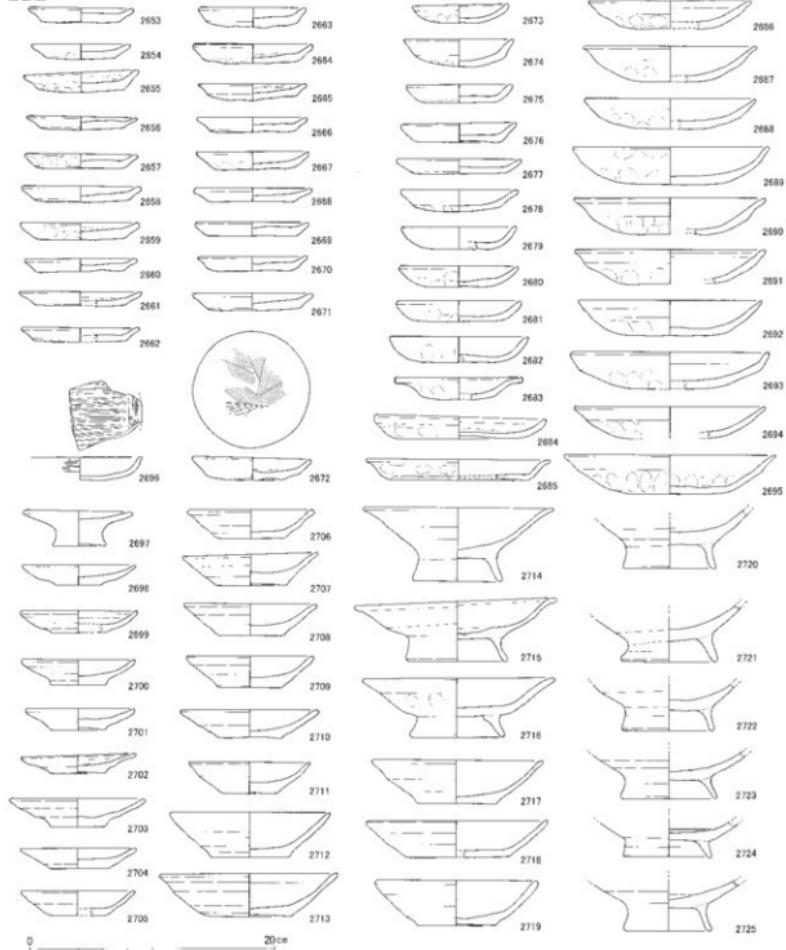


第176図 d地区 出土遺物実測図28 (1 : 4)

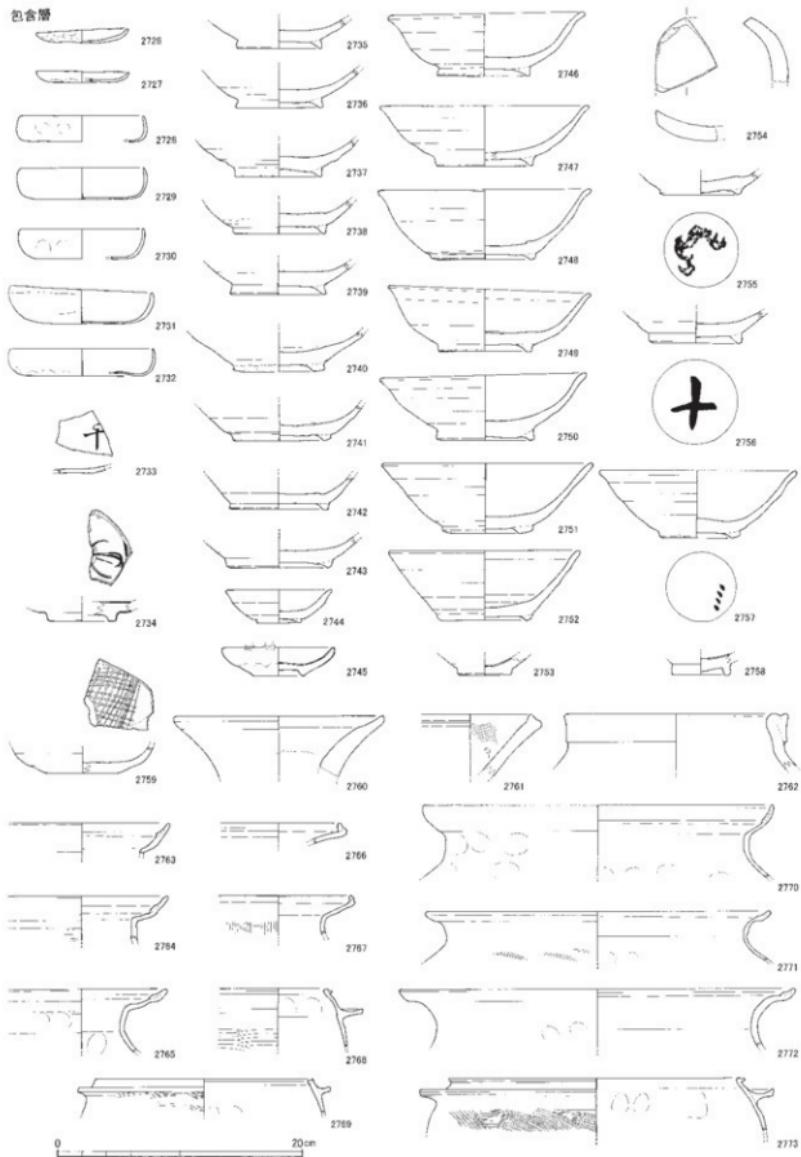
径7.8cmと小型で島貫編年F4期、2674は丸底でやや深めのもので、F1～2期に併行するだろう。2679～2682は平らもしくはややへこむ底部から緩やかに口縁部が立ち上がるるもので、島貫編年F3～4期に併行する。2683は口縁部が強く外反し、比較的

器壁の厚いものである。2684～2695は土師器皿である。2685は平らな底部に強く外反する口縁部がつくものである。2686～2695はほぼ平らな底部から口縁部が立ち上がるもので、口縁部のヨコナデが強いものが多い。島貫編年F2～3期に併行するだろう。

#### 包含層



第177図 d地区 出土遺物実測図29 (1:4)



第178図 d地区 出土遺物実測図30 (1 : 4)



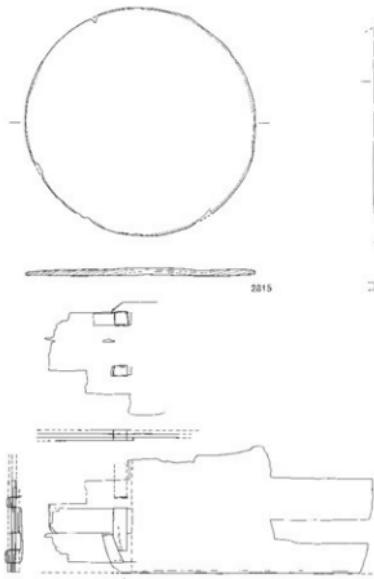
第179図 d地区 出土遺物実測図31 (1:4) 2798~2801・2806は1:2

2696は瓦器皿である。内面のミガキは特に丁寧に施されている。2697はいわゆる柱状高台をもつクロ土師器台付小皿である。2698～2711はロクロ土師器小皿である。2698～2703は底部から一度屈曲して口縁部が開くもので、このうち2698～2700は口縁部が内彎する。2704～2711は口縁部が内彎もしくは直線的に開くものでやや深めのものが多い。ロクロ土師器小皿はいずれも島貴編年F 2～3期に併行するだろう。2712・2713・2717～2719はロクロ土師器皿である。いずれも口縁部が直線的に開くもので、口縁端部が肥厚するものもある。2714・2715・2720～2725はロクロ土師器台付皿である。2715の体部は丸みをもち、口縁端部は外反する。2716は非ロクロ成形の土師器台付皿である。

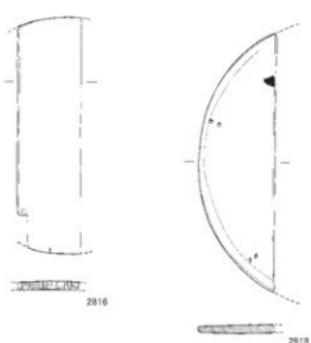
2726・2727は南伊勢系土師器小皿である。2728～2732は南伊勢系土師器皿である。2728～2730は口径10.0cmで、灰白色を呈し、伊豫皿編年III b～IV a期に相当すると思われる。2731・2732は口径11.4～

11.6cmで、浅黄橙色を呈し、II b～III a期に併行するだろう。2733も南伊勢系土師器皿と思われるが、墨書がみられる。2734は青磁碗である。2735～2744・2746～2752・2755～2757は山茶碗である。2735・2736は体部下半に丸みがあり、やや高めの高台をもつ。藤澤編年第2～3型式に相当するだろう。2746・2747は体部に丸みがあり、口縁部は外反する。三角形の高台をもち、第3～4型式に相当する。2751・2752は体部が直線的で、扁平な台形の高台をもち、第5～6型式に相当する。2755・2757には墨痕、2756には「十」の墨書がみられる。2754は灰釉陶器の風字硯で、内面に墨痕が認められる。2745は陶器の灯明皿である。2753・2758は瀬戸美濃陶器の天目茶碗、2759は鉢である。2761は常滑陶器の鉢である。口縁端部はわずかに内外面へ拡張され、中野編年7～8型式に相当するだろう。2762は常滑陶器の甕である。口縁部の折り返しは完全に頸部に接しており、断面が三角形を呈する。中野編年10～11型式

SE1067(2815～2817)



SE931(2818)



0 20cm

第180図 d地区 出土遺物実測図32 (1:4)

に相当するだろうか。2763～2767・2770～2772は南伊勢系土師器鍋である。2763～2765は口縁部の折り返しが幅広く、頸部が屈曲しており、伊藤鍋編年第3段階に相当する。2766・2767は折り返しの断面が三角形を呈し、第4段階に相当する。2772はやや器壁が厚く頸部が緩やかで、第1段階に相当すると思われる。2768・2769・2773は土師器羽釜である。2768・2773は口縁端部が外側へ折り返され、伊藤鍋編年第3～4段階に相当する。

2775～2792は土鍤である。2775の端部にはヘラ切りによる面がある。2776にはひも痕がみられる。2776～2784は細長く小型のもので、2785～2791は太さが1.4～2.4cmの中型のもの、2792は太さ3.9～4.0cm、重さ90.4gの大型のものである。2794～2797は不明土製品である。2794は面取りが少なくとも6面に行われており、線刻がみられる。底部は平らに仕上げられているが、上方は欠損しており、全体形は不明である。2795は把手のようなものに先に椀状のようなものがついており、一見、匙形土製品のように見えるが、椀状の部分は削離しているようである。2796は長さ7.1cm以上、直径2.3cmの柱状の土製品である。上端は直径1.7cm程度の孔、下端は直径0.5cmが途中まで設けられている。2797は長さ4.8cm以上、直径2.1～2.3cmの柱状のもので、土馬の脚部である可能性もある。2798は鉄製品で、農耕具の柄と鉄器部分を責める口金と思われる。一边が約0.5cmの断面方形の棒を輪にし、接合部分は打ち平たくして他と厚さがあまり変わらないように仕上げている。2799・2800は不明鉄製品である。2799は太さ0.3cmで、断面は四角形である。2800は長さ3.6cm、幅2.6cmで、断面は屈曲している。2801は雁股鎌の頭部を利用したリサイクル津と思われる。自然科学分析では再結合津とされている。重さは11.6gである。2802～2804・2807～2809は砥石である。2802は1ヶ所の孔が設けられており、4面がスリ面として利用されている。2803・2804・2808は完形ではないが台形を呈していたようであり、断面は長方形である。2807はほぼ全面がスリ面として利用されており、特に側面は曲面をなすほど繰り返し利用されていたようである。2805は不明石製品で、椀形を呈する。ほぼ全体的に赤い。2806は石製の紡錘車である。直径

4.9cm、厚さ1.2cmである。孔の周囲内外面に放射状の線刻と六角形および多角形を意識したと思われる線刻が施されている。2810は磨製石斧である。長さ11.4cm、幅5.7cm、重さ381.8gである。2811は五輪塔の空風輪の部分である。頂部と火輪以下は欠損している。最大径11.9cm、残高16.7cmである。2812・2813は丸瓦である。いずれも内面は布目痕が残り、外表面は繩目タタキ調整である。2814は五輪塔の火輪である。幅16.9×16.4cm、高さ10.2cmで、上部に直径4.5cmの孔が設けられている。  
(小林美)

#### 【註】

- 1) 田辺昭三1980『須恵器大成』角川書店
- 2) 赤塚次郎1990「V考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 3) 斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区的調査 本文編』
- 4) 古代の土器研究会編1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』、同1993『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成Ⅱ』、同1994『古代の土器Ⅲ 都城の土器集成Ⅲ』、奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(奈良国立文化財研究所学報第26編)
- 5) 桥崎彰一・斎藤孝正1981「猿投窯編年の再検討について」『平安時代の土器・陶器』愛知県陶磁資料館、斎藤孝正2000『日本の美術 越州窑青磁と緑釉・灰釉陶器』409号 至文堂
- 6) 大川勝宏1993「斎宮の黒色土器一供膳形態を中心につけて」『斎宮歴史博物館研究紀要』2
- 7) 伊藤裕偉2000「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貢遺跡出土史料を中心に～」『嶋抜Ⅱ』、同2001「雲出島貢遺跡における古代の土器」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター
- 8) 新田洋1985「平安時代～中世における煮炊用具一「伊勢型鍋」一に関する若干の観察」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会
- 9) 川西宏幸1988「円筒埴輪總論」『古墳時代政治史序説』培文房
- 10) 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 11) 伊藤裕偉2008「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』三重県
- 12) 伊藤裕偉1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会、同1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学

フォーラム

- 13) 中野晴久1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 14) (財)瀬戸市埋蔵文化財センター編1997『研究紀要』
- 15) 上村安生2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社



## 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告 115-29

一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う  
木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡  
発掘調査報告

《第1分冊》

発行年月 2012（平成24）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 伊藤印刷株式会社

---